兵庫県文化財調査報告　第429冊

朝来市

上工山古墳群
内高山古墳群

― 一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ ―

2012(平成24)年３月

兵庫県教育委員会

朝来市

上工山古墳群
内高山古墳群

― 一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ ―

2012（平成24）年３月

兵庫県教育委員会

遺跡遠景（南東から）

遺跡遠景（東から）

遺跡遠景（東から）

遺跡遠景（北東から）

遺跡遠景（西から）

遺跡遠景（北西から）

遺跡遠景（北東から）

遺跡遠景（南東から）

遺跡遠景（東から）

遺跡遠景（南東から）

遺跡遠景（南西から）

遺跡遠景（東から）

内高山東古墳群遠景（南東から）

内高山東古墳群遠景（西側内高山西古墳群から）

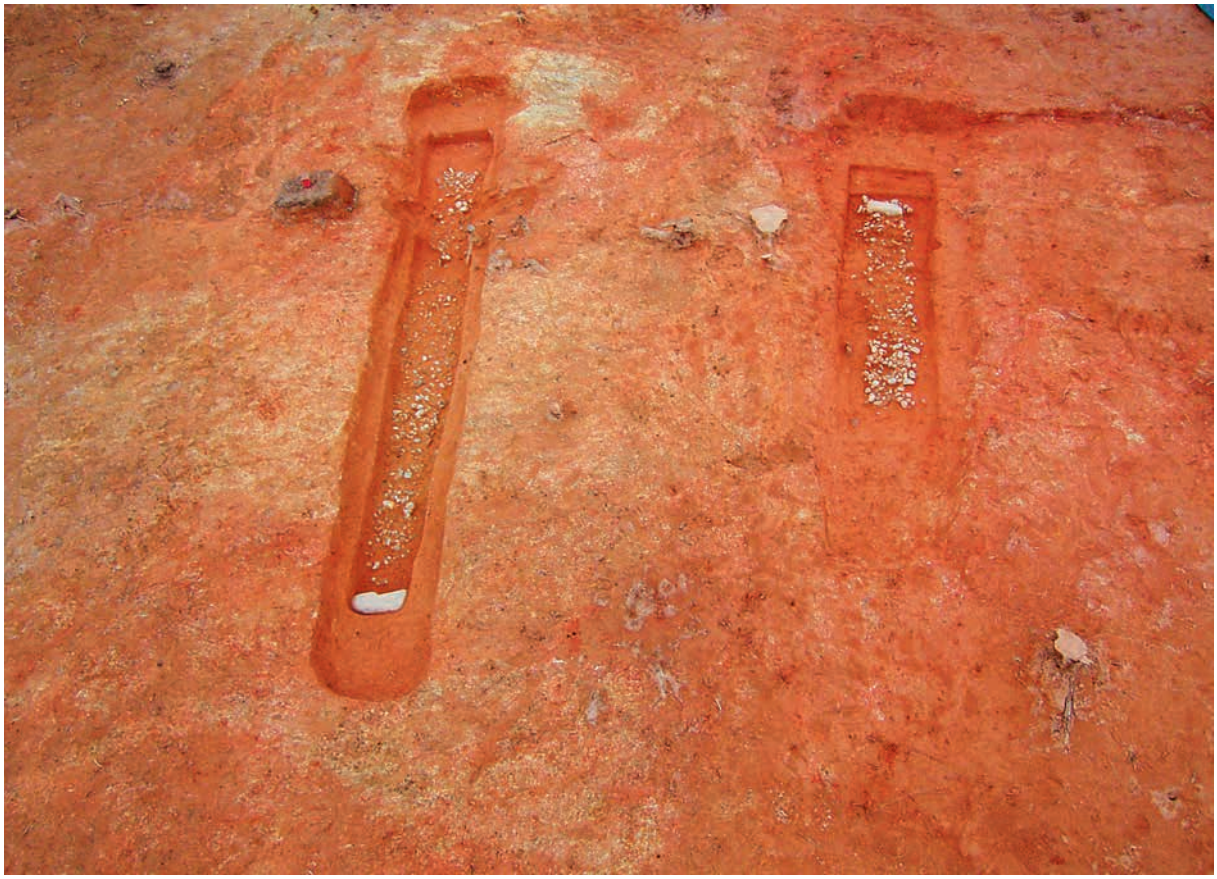
遺跡遠景（北西から）

遺跡遠景（北から）

上エ山古墳群　A支群 1 号墳全景

上エ山古墳群　C支群 2 ～ 4 号墳全景

内高山東１号墳　第１・２主体部（北から）



内高山西７号墳　第１・２主体部（南東から）

上エ山古墳群　出土土器

上エ山古墳群C支群 2 号墳　出土土器

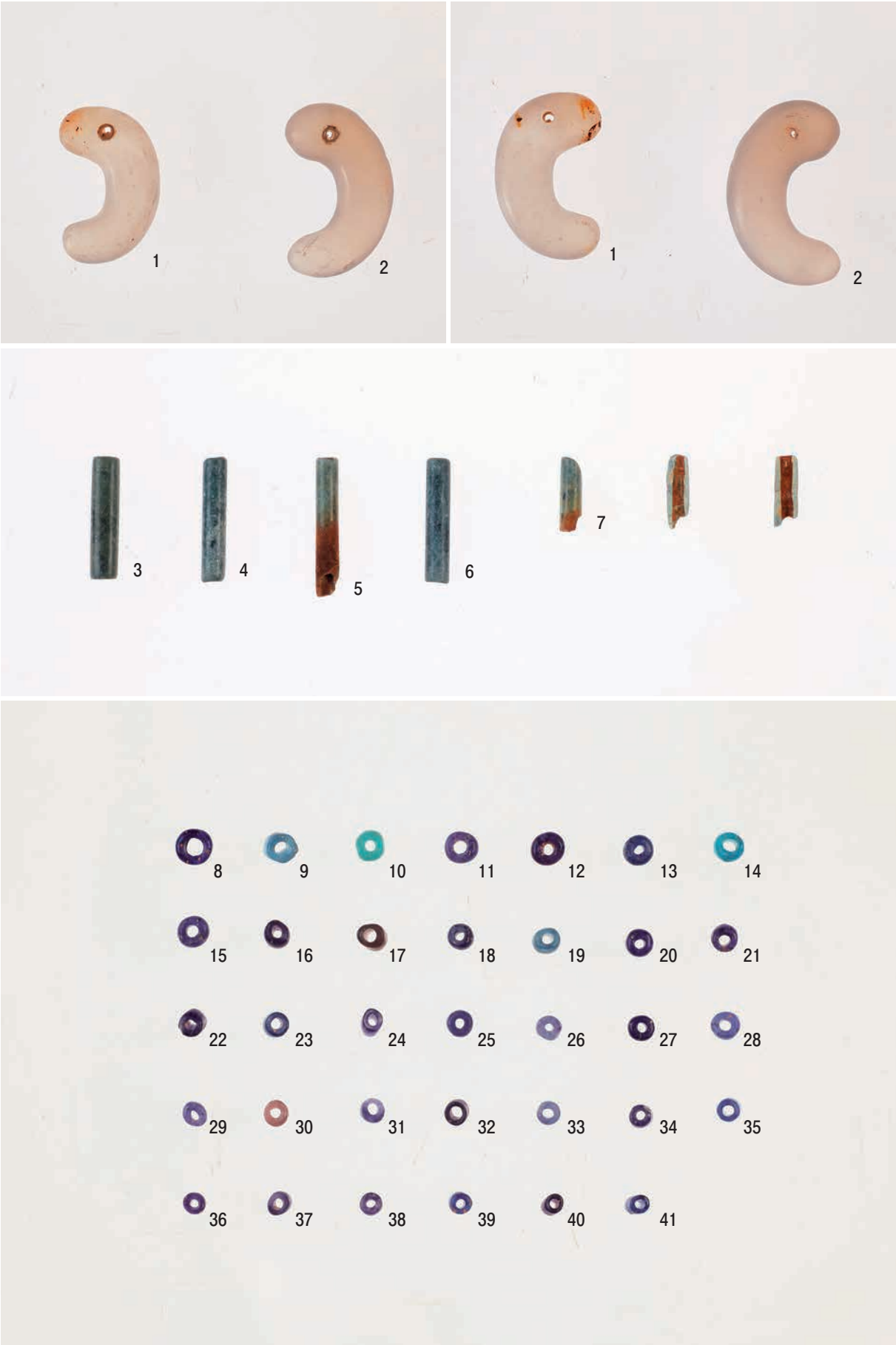
上エ山古墳群C支群 3 号墳　出土土器

上エ山古墳群C支群 4 号墳　出土土器

内高山東１号墳　第１・２主体部出土遺物

内高山東１号墳　第１主体部出土土器

内高山東１号墳　第２主体部出土玉類



内高山東 1 号墳　第 2 主体部出土玉類

内高山東１号墳　第１主体部出土鉄器

内高山東１号墳　第２主体部出土鉄器

例　言

1．本書は朝来市和田山町枚田（ひらた）に所在する上エ山古墳群・内高山西古墳群・内高山東古墳群・上エ山遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所が計画・施工する一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴うものである。

3．分布調査は平成12・13年度に、確認調査は平成14・15年度に、本発掘調査は平成17・18年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査を担当した。

4．本発掘調査は、平成17年度は渡辺　昇・山上雅弘・長濱誠司が、平成18年度は渡辺　昇・長濱誠司が担当した。

5．調査で使用した方位は国土座標第Ⅴ系を使用し、水準は国土交通省設定の２級基準点ならびに３級基準点を使用した。

6．基準点の測量ならびに平面図の図化は㈱アコード・㈱パスコ神戸営業所に委託して実施した。遺物出土状態や土層断面図は調査員・調査補助員が実測した。

7．遺構写真は調査担当者が撮影した。写真図版１の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。それ以外の空中写真は㈱アコード・㈱パスコ神戸営業所に委託して撮影したものである。

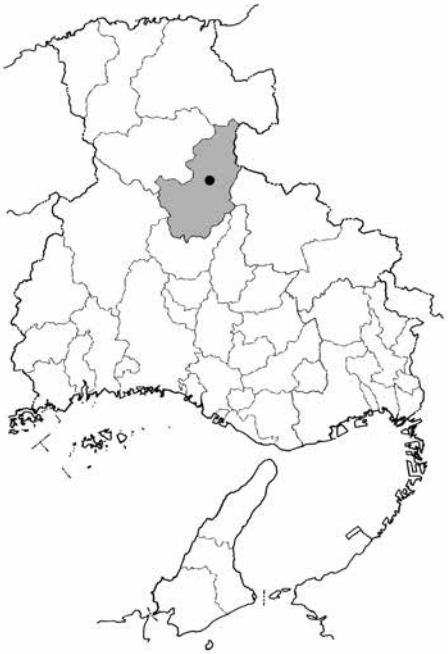
8．整理作業は、平成22・23年度の２ヵ年に渡って兵庫県立考古博物館で行った。

9．執筆は本文目次の通りで、編集は友久伸子・佐伯純子の協力を得て渡辺が行った。

10．本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中１-１-１）ならびに兵庫県立考古博物館魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-１）に保管している。ご活用ください。

11．発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご教示を得ました。感謝致します。（敬称略・順不同）

朝来市教育委員会・枚田地区・
田端　基・中島雄二・山根実生子



第１図　朝来市と遺跡の位置

本文目次

例言

Ⅰ　はじめに（渡辺）
　1．調査に至る経緯と経過……1
　2．分布調査・確認調査の経過と結果……1
　3．平成17年度本発掘調査の経過……2
　4．平成18年度本発掘調査の経過……2
　5．整理作業の経過……4
Ⅱ　位置と環境（渡辺）……5
Ⅲ　上エ山古墳群（渡辺）
　1．上エ山古墳群の位置・概要……13
　2．A支群（１区）の調査……17
　3．C支群（２・３区）の調査……23
　4．小結……43
Ⅳ　上エ山遺跡（長濱）
　1．概要……46
　2．調査結果……46
　3．小結……51
Ⅴ　内高山東古墳群（渡辺）
　1．内高山東１号墳……52
　2．内高山東２号墳……66
　3．小結……68
Ⅵ　内高山西古墳群（長濱）
　1．概要……69
　2．調査結果……69
　3．小結……92
Ⅶ　おわりに（渡辺）……94

本文挿図目次

第１図　朝来市と遺跡の位置
第２図　周辺の遺跡
第３図　周辺の古墳群
第４図　調査遺跡分布図
第５図　調査区配置図
第６図　上エ山古墳群Ｃ支群１号墳地形測量図
第７図　上エ山古墳群Ａ支群地形測量図･遺構配置図
第８図　上エ山古墳群Ａ支群１･２号墳平面図･掘割り土層図
第９図　上エ山古墳群Ａ支群１号墳主体部実測図
第10図　上エ山古墳群Ａ支群２号墳石棺実測図（１）
第11図　上エ山古墳群Ａ支群２号墳石棺実測図（２）
第12図　上エ山古墳群Ｃ支群２～４号墳地形測量図
　　２号墳土層断面図
第13図　上エ山古墳群Ｃ支群２号墳横穴式石室実測図
第14図　上エ山古墳群Ｃ支群２号墳
　　横穴式石室堀り方実測図　遺物出土状態図
第15図　上エ山古墳群Ｃ支群２号墳出土土器実測図
第16図　上エ山古墳群Ｃ支群２号墳出土土器拓本
第17図　上エ山古墳群Ｃ支群３号墳土層断面図
第18図　上エ山古墳群Ｃ支群３号墳石室平面図
第19図　上エ山古墳群Ｃ支群３号墳石室実測図
第20図　上エ山古墳群Ｃ支群３号墳出土土器実測図
第21図　上エ山古墳群Ｃ支群３号墳出土土器（９）拓本
第22図　上エ山古墳群Ｃ支群４号墳土層断面図
第23図　上エ山古墳群Ｃ支群４号墳石室平面図･断面図
第24図　上エ山古墳群Ｃ支群４号墳石室実測図
第25図　上エ山古墳群Ｃ支群４号墳出土土器実測図
第26図　上エ山古墳群Ｃ支群４号墳出土土器(23)拓本
第27図　上エ山古墳群Ｃ支群４号墳出土鉄製品実測図
第28図　上エ山古墳群Ｃ支群６号墳地形測量図･配置図
第29図　上エ山古墳群Ｃ支群６号墳石室平面図･断面図
第30図　上エ山古墳群Ｃ支群６号墳石室実測図
第31図　上エ山古墳群Ｃ支群６号墳出土土器実測図
第32図　上エ山古墳群出土土器実測図
第33図　上エ山遺跡調査前地形測量図
第34図　上エ山遺跡平面図
第35図　上エ山遺跡SB01･SA01実測図
第36図　上エ山遺跡土坑･溝実測図
第37図　上エ山遺跡出土土器実測図
第38図　内高山東古墳群調査前地形測量図･断面図
第39図　内高山東古墳群遺構実測図
第40図　内高山東古墳群１号墳第１・２主体実測図
第41図　内高山東古墳群１号墳第１主体遺物出土状態図
第42図　内高山東古墳群１号墳第２主体遺物出土状態図
第43図　内高山東古墳群１号墳第３主体実測図
第44図　内高山東古墳群１号墳第１主体出土土器実測図
第45図　内高山東古墳群１号墳第１主体出土土器拓本
第46図　内高山東古墳群１号墳第１主体出土鉄器実測図（１）
第47図　内高山東古墳群１号墳第１主体出土鉄器実測図（２）
第48図　内高山東古墳群１号墳第２主体出土鉄器実測図（１）
第49図　内高山東古墳群１号墳第２主体出土鉄器実測図（２）
第50図　内高山東古墳群１号墳第２主体出土玉類実測図
第51図　内高山東古墳群２号墳出土土器実測図
第52図　内高山東古墳群２号墳･土坑群実測図
第53図　内高山西古墳群調査前地形測量図
第54図　内高山西古墳群遺構配置図
第55図　内高山西古墳群１号墳実測図
第56図　内高山西古墳群２号墳実測図
第57図　内高山西古墳群３号墳実測図
第58図　内高山西古墳群４号墳実測図
第59図　内高山西古墳群５号墳実測図
第60図　内高山西古墳群７号墳地形測量図
第61図　内高山西古墳群７号墳土層断面図
第62図　内高山西古墳群７号墳主体部１
第63図　内高山西古墳群７号墳主体部２
第64図　内高山西古墳群８号墳実測図
第65図　内高山西古墳群９号墳実測図
第66図　内高山西古墳群その他土坑実測図
第67図　内高山西古墳群出土遺物実測図
第68図　上エ山古墳群Ｃ支群横穴式石室平面図

巻頭図版目次

巻頭図版１　遺跡遠景
巻頭図版２　遺跡遠景
巻頭図版３　遺跡遠景
巻頭図版４　遺跡遠景
巻頭図版５　遺跡遠景
巻頭図版６　遺跡遠景
巻頭図版７　内高山東古墳群遠景
巻頭図版８　遺跡遠景
巻頭図版９　上エ山古墳群Ａ支群１号墳全景
　　上エ山古墳群Ｃ支群２～４号墳全景
巻頭図版10　内高山東１号墳第１・２主体部
　　内高山西７号墳第１・２主体部
巻頭図版11　上エ山古墳群出土土器
巻頭図版12　上エ山古墳群出土土器
巻頭図版13　内高山東１号墳出土遺物
巻頭図版14　内高山東１号墳出土土器･玉類
巻頭図版15　内高山東１号墳第２主体部出土玉類
巻頭図版16　内高山東１号墳第１・２主体部出土鉄器

写真図版目次

写真図版１	上エ山古墳群他　周辺空中写真			
写真図版２	上エ山古墳群	Ａ支群	上	； 全景
			下	； １号墳全景
写真図版３	上エ山古墳群	Ｃ支群	上	； １号墳全景
			下	； ２～４号墳全景
写真図版４	上エ山古墳群	Ｃ支群２号墳	上	； 石室堆積状況
			中	； 石室床面
			下	； 石室西壁
写真図版５	上エ山古墳群	Ｃ支群２号墳	上	； 遺物出土状態
			下	； 石室奥壁
写真図版６	上エ山古墳群	Ｃ支群３号墳	上左	； ３・４号墳調査前
			上右	； 石室堆積状況
			下	； 石室床面
写真図版７	上エ山古墳群	Ｃ支群３号墳	上	； 石室東壁
			下	； 石室西壁
写真図版８	上エ山古墳群	Ｃ支群４号墳	上	； 横穴式石室
			下	； 石室床面遺物出土状態
写真図版９	上エ山古墳群	Ｃ支群４号墳	上	； 石室床面遺物出土状態
			中	； 石室奥壁
			下	； 石室西壁
写真図版10	上エ山古墳群	Ｃ支群４号墳	上	； 石棺蓋除去後
			下	； 墳丘断割り
写真図版11	上エ山古墳群	Ｃ支群６号墳	上	； 全景
			下	； 墳丘土層断面
写真図版12	上エ山古墳群	Ｃ支群６号墳	上	； 石室奥壁
			下	； 石室南壁
写真図版13	内高山東古墳群	１号墳	第１主体	
写真図版14	内高山西古墳群	１号墳	上左	； 全景
			上右	； 墳頂部付近土層断面
			中上	； 主体部
			中中	； 主体部北半礫検出状況
			中下	； 主体部断面
			下	； 主体部完掘状況
写真図版15	内高山西古墳群	７号墳	上	； 主体部
			下	； 主体部１
写真図版16	内高山西古墳群		左	； １号墳棺内出土角礫顕微鏡写真
			右	； 出土土器
			下	； １号墳棺内出土角礫
写真図版17	上エ山古墳群		上	； Ａ支群調査区全景
			下	； Ｃ支群調査区全景
写真図版18	上エ山古墳群	Ａ支群１号墳	上左	； 周溝断面
			上右	； 周溝全景
			中	； 石棺検出状況
			下	； 石棺断面
写真図版19	上エ山古墳群	Ａ支群１号墳	上	； 石棺
		Ａ支群２号墳	下	； 石棺蓋
写真図版20	上エ山古墳群	Ａ支群２号墳	上	； 石棺蓋
			下	； 石棺
写真図版21	上エ山古墳群	Ａ支群２号墳	上	； 石棺
			中右	； 石棺南壁

		A支群３号墳	下
写真図版22	上エ山古墳群	C支群２号墳	上　；　調査前
			下　；　石室奥壁
写真図版23	上エ山古墳群	C支群３号墳	石室床面遺物出土状態
写真図版24	上エ山古墳群	C支群３号墳	上左；　石室開口部遺物出土状態
			上右；　石室奥壁
			下　；　石室奥壁
写真図版25	上エ山古墳群	C支群３号墳	上　；　墳丘断割り
			下左；　石室全景
			中右；　３・４号墳間堆積状況
			下右；　４号墳西側堆積状況
写真図版26	上エ山古墳群	C支群４号墳	上　；　全景
			中　；　閉塞石の状況
			下　；　遺物出土状態
写真図版27	上エ山古墳群	C支群４号墳	上　；　石室東壁
			中　；　開口部遺物出土状態
			下　；　石棺
写真図版28	上エ山古墳群		上　；　調査風景
			中左；　礫群
			中右；　５号墳
			下　；　尾根上の古墳（D支群）
写真図版29	上エ山古墳群	C支群６号墳	上　；　閉塞状況
			中上左；　南側列石
			中上右；　東側集石
			中下；　石室墓壙
			下　；　調査風景
写真図版30	上エ山古墳群	C支群２号墳	出土土器
写真図版31	上エ山古墳群	C支群３号墳	出土土器
写真図版32	上エ山古墳群	C支群４号墳	出土土器
写真図版33	上エ山古墳群	C支群４号墳	出土土器
写真図版34	上エ山古墳群	C支群3･4号墳	出土土器
写真図版35	上エ山古墳群	C支群4･6号墳	出土土器
写真図版36	上エ山古墳群	C支群４号墳	出土鉄製品
写真図版37	上エ山遺跡		全景
写真図版38	上エ山遺跡		上　；　遺跡遠景
			中　；　調査前
			下　；　全景
写真図版39	上エ山遺跡		上　；　掘立柱建物跡・溝
			中上；　SD01断面
			下左；　SK03断面
			下右；　SK04断面
写真図版40	上エ山遺跡		上　；　調査風景
			下　；　出土土器
写真図版41	内高山東古墳群		上　；　遠景
			下　；　調査区全景
写真図版42	内高山東古墳群		上　；　調査区全景
			中左；　№１・２間アゼ
			中右；　№４アゼ
			下左；　調査区西壁
			下右；　調査風景
写真図版43	内高山東古墳群	１号墳	上　；　全景
			下左；　溝断面
			下右；　第３主体棺断面

写真図版44	内高山東古墳群	1号墳	上 ；	第3主体検出状況
			下 ；	第3主体
写真図版45	内高山東古墳群	1号墳	上 ；	第3主体
			下 ；	調査風景
写真図版46	内高山東古墳群	1号墳	上左；	第1・2主体墓壙断面
			上右；	第1・2主体棺検出状況
			中 ；	第1・2主体墓壙
			下左；	第1・2主体断面
			下右；	調査風景
写真図版47	内高山東古墳群	1号墳	；	第1・2主体
写真図版48	内高山東古墳群	1号墳	上 ；	第2主体
			中 ；	第2主体西側棺上鉄鏃群
			下左；	第2主体棺内西鉄鏃出土状態
			下右；	第2主体棺内鉄刀出土状態
写真図版49	内高山東古墳群	1号墳	上 ；	第2主体
			下 ；	第2主体棺内中央遺物出土状態
写真図版50	内高山東古墳群	1号墳	上左；	第1主体
			上右；	第1主体断面
			上下右；	第1主体棺上遺物
			中 ；	第1主体北側遺物出土状態
			下左；	第1主体北側遺物出土状態
			下右；	調査風景
写真図版51	内高山東古墳群	1号墳	上 ；	第1主体北側遺物出土状態
			中左；	第1主体木口穴断面
			中右；	第1主体鉄刀出土状態
		2号墳	下左；	ST01断面
			下右；	ST01
写真図版52	内高山東古墳群	2号墳	上 ；	ST02
		土坑群	中上左；	南側土坑群
			中上右；	SK01
			中下左；	SK02断面
			中下右；	SK01・02
			下 ；	SK03・04
写真図版53	内高山東古墳群	1号墳	上 ；	第1・2主体出土遺物集合
			下 ；	第1主体出土土器（1）
写真図版54	内高山東古墳群	1号墳	第1主体出土土器（2）	
写真図版55	内高山東古墳群	1号墳	第1主体出土鉄器（1）	
写真図版56	内高山東古墳群	1号墳	第1主体出土鉄器（2）	
写真図版57	内高山東古墳群	1号墳	第1主体出土鉄器（3）	
写真図版58	内高山東古墳群	1号墳	第2主体出土鉄器（1）	
写真図版59	内高山東古墳群	1号墳	第2主体出土鉄器（2）	
写真図版60	内高山東古墳群	1号墳	第2主体出土鉄器（3）	
写真図版61	内高山西古墳群		調査前全景	
写真図版62	内高山西古墳群		上 ；	調査前遠景
			下 ；	調査前の状況
写真図版63	内高山西古墳群		上 ；	1～5号墳
			中 ；	5～8号墳
			下 ；	7～9号墳
写真図版64	内高山西古墳群	2号墳	上 ；	主体部全景
			中 ；	主体部断面
			下 ；	主体部
写真図版65	内高山西古墳群		上 ；	3・4号墳全景
		3号墳	中 ；	主体部1・2

		下 ；	主体部１
写真図版66	内高山西古墳群	３号墳	上 ； 主体部１断面
			中 ； 主体部２
			下 ； 主体部２断面
写真図版67	内高山西古墳群	４号墳	上 ； 全景
			中 ； 主体部
			下 ； 主体部断面
写真図版68	内高山西古墳群	５号墳	上 ； 全景
			中 ； 主体部１
			下 ； 主体部１鉄器出土状況
写真図版69	内高山西古墳群	５号墳	上左； 主体部１枕石?検出状況
			上右； 主体部１鉄器出土状況
			中上； 主体部１断面
			中下； 主体部１断割断面
			下 ； 主体部１・２完掘状況
写真図版70	内高山西古墳群	５号墳	上 ； 主体部２
			中上； 主体部３
			中下左； 主体部２断面
			中下右； 主体部３断面
			下 ； 調査風景
写真図版71	内高山西古墳群	７号墳	上 ； 全景
			中上； 遠景
			中下左； ５～７号墳区画溝断面
			中下右； 墳丘裾部断面
			下 ； 墳頂部付近土層断面
写真図版72	内高山西古墳群	７号墳	上 ； 主体部１断面
			中上； 主体部１東半
			中下； 主体部１断割断面
			下左； 主体部１礫床除去後
			下右； 主体部１完掘状況
写真図版73	内高山西古墳群	７号墳	上 ； 主体部２
			中 ； 主体部２西半
			下左； 主体部２西側木口穴断面
			下右； 主体部２鉄器出土状況
写真図版74	内高山西古墳群	７号墳	上 ； 主体部２断面
			中上； 主体部２断割断面
			中下； 主体部２完掘状況
			下 ； 調査風景
写真図版75	内高山西古墳群	８号墳	上 ； 全景
			中 ； 主体部
			下 ； 主体部断面
写真図版76	内高山西古墳群	９号墳	上 ； 全景
			中上； 主体部
			中下； 主体部断面
			下 ； 区画溝断面
写真図版77	内高山西古墳群	土坑	上 ； SK02平面・断面
			中上； SK03平面・断面
			中中； SK04平面・断面
			中下； SK05断面
			下 ； 調査風景
写真図版78	内高山西古墳群		出土鉄器

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯と経過

近畿地方の基幹道整備の一貫として高規格道路の北近畿自動車道が計画された。その１つとして国道483号豊岡自動車道が建設省（途中から組織改編によって国土交通省）近畿地方建設局によって計画された。近畿自動車道舞鶴若狭自動車道春日インターから分岐し旧春日町・氷上町・青垣町を通り、兵庫県道路公社の遠阪トンネルを利用して丹波から但馬へ抜ける。旧山東町から和田山町へ向かい播但連絡道路と合流する。さらに北進し、養父町・八鹿町・日高町を通って豊岡市まで計画されている。南側から順次工事計画も進められ、丹波地域を春日和田山道路Ⅰとして施工されている。春日七日市遺跡をはじめ市辺遺跡・中佐治古墳群・田ノ口遺跡など多数の遺跡が調査されている。引き続き但馬地域は和田山インターまでを春日和田山道路Ⅱとして調査が行われた。史跡として保存整備された茶すり山古墳をはじめ粟鹿遺跡・柿坪遺跡・加都遺跡などの遺跡が調査されている。

さらに北進部分は和田山八鹿道路として計画された。平成12・13年度の２カ年に渡って兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所によって調査を実施した。その結果を基に平成14・15年度に確認調査を実施し、今回調査を行った遺跡は確認された。

２．分布調査・確認調査の経過と結果

開発計画時点では周知の埋蔵文化財包蔵地の位置などの照会に答え、計画路線が確定した段階で、国土交通省から依頼があり、平成13年３月28・29日の両日分布調査を実施した。調査は和田山ICから養父ICまで（朝来市和田山町･養父市）を対象とし、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　別府洋二･山田清朝・藤田　淳・尾野幸雄・小川弦太・上田健太郎・荒木孝治が担当した。その結果、17カ所の地点で遺跡存在の可能性が求められた。ただ、和田山町芳賀野地域だけ立ち入りが出来なかったことから未調査になっていた。解決した翌月の平成13年度４月24日に分布調査を実施したが、遺跡は確認されなかった。調査は、別府洋二・平田博幸・尾野幸雄・服部　寛の埋蔵文化財調査事務所職員が担当した。

確認調査は平成14年度から行われた。調査は平成15年１月20日～３月14日に埋蔵文化財調査事務所吉識雅仁が担当した。確認調査可能な地域である和田山IC西側の水田部分（№１・２地点）と和田山町法道寺から養父市畑の範囲（№12～17地点）を対象とした。その結果、加都遺跡の広がりが確認された（加都遺跡Ⅲとして別編で報告書刊行）以外の遺跡は認められなかった。

未調査であった№３～11地点と養父地域の№７地点以東の確認調査は平成15年度に実施した。平成15年10月７日～12月17日に埋蔵文化財調査事務所　藤田　淳・仁尾一人が担当した。その結果、今回報告の３古墳群と上エ山遺跡が確認された。それ以外の和田山町域では遺跡は確認されなかった。養父町域では、井垣城が確認されている。

写真１　確認調査風景

３．平成17年度本発掘調査の経過

17年度は加都遺跡と内高山西古墳群の本発掘調査を実施した。加都遺跡C地区の本発掘調査を10月６日（木）からはじめ、調査中に内高山西古墳群の伐採を国土交通省で実施頂くよう協議した。11月８日（火）に現地で調査範囲を確定し、伐採木などの片付けを行い、測量委託した㈱アコードによる杭打設と調査前空中写真の準備に入る。10日（木）に空中写真撮影を行い、調査用の杭打ちを行う。調査道具類を現地に運び、調査前の検測を行う。11日（金）から人力掘削を開始する。尾根筋と古墳ごとに直交する方向にアゼを設定し掘り下げる。尾根の高い方の９号墳（調査時１号墳）から下に向かって実施する。22日（火）に７号墳で狭長な平行する２基の木棺を検出する。順次、主体部を検出し、写真撮影・実測作業を行う。12月９日（金）には５～９号墳の全景写真撮影を行う。翌週から全体の清掃と個別遺構の実測し、15日（木）に空中写真撮影する。その後、主体部の断ち割り作業・実測・補足作業を継続するが、大雪のため作業中断する。積雪のため現地までアクセスすることが出来ず、20日（火）の中間検査も現地確認は加都遺跡だけとし、内高山西古墳群は書類検査となった。３号墳第２主体の図化作業を残していたが、大雪警報も発令され道路閉鎖されていたことから、年内の調査を諦め、12月27日（火）に現場事務所を片付け埋蔵文化財調査事務所に引き上げる。年明けは阿万バイパスに伴う南あわじ市九蔵遺跡に１月６日から従事していたが、寒波が過ぎた１月16日（月）から３日間、残っていた３号墳の作業を行い、調査終了する。

調査の組織

調査主体	兵庫県教育委員会	
調査事務	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	
	所　長	平岡憲昭
	総務課	若生晃彦・丸野真衣
	企画調整班	輔老拓治・柏原正民
	調査第１班	吉田　昇
調査担当	調査第１班	渡辺　昇・山上雅弘・長濱誠司
	調査参加者	山本亮司・松井利可子・森本文子・前田陽子・中島由美

写真２　調査風景

４．平成18年度本発掘調査の経過

18年度は上エ山古墳群・上エ山遺跡・内高山東古墳群の本発掘調査を行う。11月２日（木）に入札を行い、翌週の９日（木）に現地立会を行う。調査対象地は山林で雑木林となっていた。上エ山古墳群を３区に分け、他の２遺跡と合わせた５地区で調査範囲を縄張りし調査区を確定する。伐採作業は国土交通省で担当頂いた。調査担当者は上エ山古墳群調査着手段階では姫路市豆腐町遺跡の調査を担当していた。現場計画が詰まっていたことから、調査が本格化するまでは２遺跡平行作業となった。13日（月）から１名が常駐し器材・荷物の一部を搬入し、監督員詰所を使用する。地元挨拶を行い、調査杭打設などの調査準備を行う。伐採終了した上エ山２・３区の調査範囲を確定する。17日（金）に調査前の地形

測量のための空中撮影を行う。豆腐町遺跡の調査終了し、残りの器財など運び２名体制になる。21日（火）から調査を開始する。上エ山古墳群３区から着手した。今回の調査は人力掘削に限られている。５号墳は古墳でないことが明らかになる。27日（月）からは上エ山古墳群２区も遅れて調査着手し、人力掘削を始める。内高山東古墳群の調査杭を打設し、調査準備に入る。上エ山古墳群２・３区全体を清掃し30日に全景写真・空中写真撮影する。12月１日から内高山東古墳群を、11日から上エ山古墳群１区・上エ山遺跡の人力掘削を始める。２・３区の横穴式石室の掘り下げ・実測作業を平行する。18日（月）～22日（金）に内高山東１号墳主体部調査する。26日（火）に最後の空中写真を撮影するとともに全景写真撮影する。年末年始を挟むため、27日にシート養生など行い年末の調査を終了する。年始は１月９日（火）から再開し、おもに石室実測や主体部断ち割り作業を行う。18日に中間検査を受け、20日（土）に朝来市埋蔵文化財センター（古代あさご館）で遺物を並べ遺跡説明会を開催する。翌週は石室実測などの補足作業を行い、26日に器材・出土遺物などを埋蔵文化財調査事務所・魚住分館に、一部器財と事務所用品を次の現場である姫路市市之郷遺跡へ搬入し、調査終了する。

調査の組織

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

	所　長	平岡憲昭
	総務課	若生晃彦・丸野真衣
	企画調整班	池田正男・柏原正民
	調査第１班	吉田　昇
調査担当	調査第１班	渡辺　昇・長濱誠司
	調査参加者	櫻井雅子・山本亮司・森本文子・奥田智子・中島由美

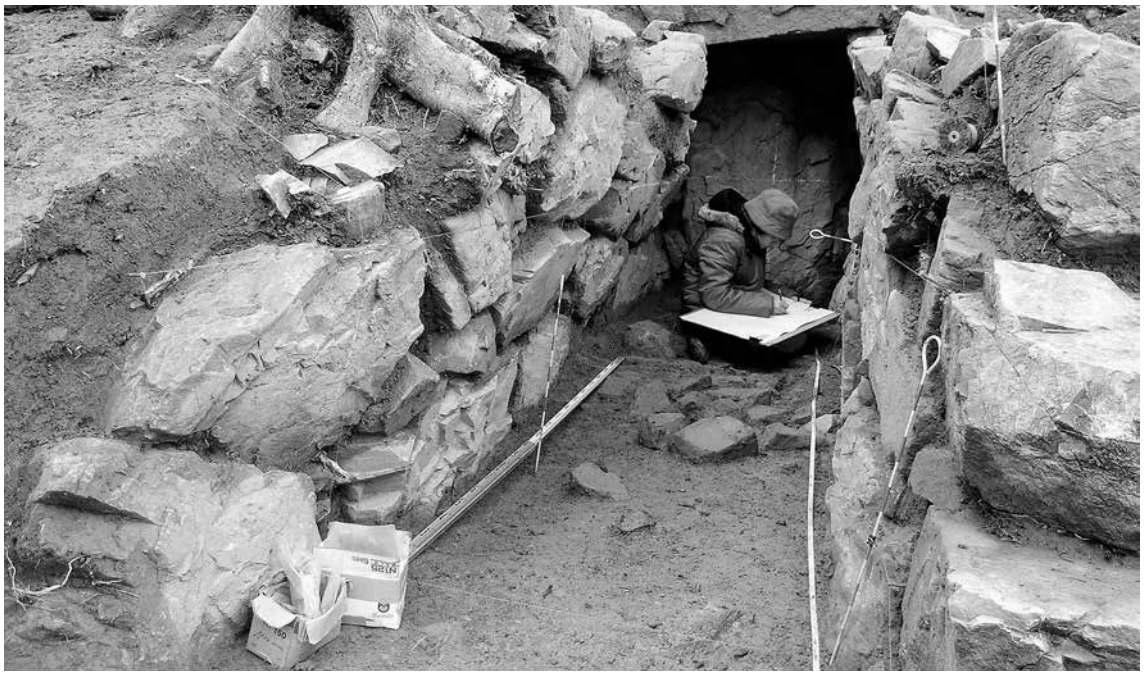


写真３　調査風景

５．整理作業の経過

整理作業は水洗いなど一部現地調査事務所で実施したが、本格的には平成22年度から２カ年かけて実施した。平成22年度には実測作業と金属器の保存処理までを、平成23年度にはそれ以降報告書刊行までを兵庫県立考古博物館で実施した。

調査の組織

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県立考古博物館

平成22年度

館　長　　石野博信

総務課　　前川浩子・川原聡介

整理保存課　村上泰樹・篠宮　正（契約事務）　岡田章一・山本　誠（工程管理）

調査担当　　渡辺　昇

嘱託員　　前山三枝子・増田麻子・佐伯純子・加藤裕美

保存処理担当　岡本一秀

嘱託員　　長濱重美・桂　昭子・浜脇多規子

平成23年度

館　長　　石野博信

総務課　　前川浩子・川原聡介

整理保存課　村上泰樹・篠宮　正（契約事務）　山本　誠・深江英憲（工程管理）

調査担当　　渡辺　昇・長濱誠司

嘱託員　　友久伸子・佐伯純子・榎　真菜美

写真４　整理作業風景

Ⅱ　位置と環境

上エ山古墳群・上エ山遺跡・内高山東古墳群・内高山西古墳群は朝来市和田山町枚田に所在する古墳群・遺跡である。円山川中流域に位置し、和田山中心地の南東に広がるいわゆる加都田圃は比較的広い水田域となっており、南但馬で有数の水田である。その水田を東側に見る大倉部山塊に築かれた古墳群・遺跡である。円山川河口である豊岡市津居山から40㎞上流になり、標高は85～90ｍの円山川周辺水田部から比高差60～80ｍの尾根上にある古墳群である。現況は山林となっていた。

平成17年４月に朝来郡４町は合併して生まれた朝来市は兵庫県北部の但馬の南側に位置する地方都市である。北西を養父市と、北東を豊岡市、東を京都府福知山市、南東を丹波市、南を神崎郡神河町、南西を宍粟市と接している。旧国で言うと、東から南東は丹波国と真南から南西は播磨国と接していることになる。和田山中心地で国道・線路ともに合流しているように原始古代においても交通の要衝で合流部であった。丹波方面からは国道９号・山陰本線が繋がっており、古代山陰道が遠阪峠を越えて但馬に入ってくる。播磨からは国道312号・播但線が通り、古代但馬道があった地域で、加都遺跡の以前の調査で古代但馬道が調査されている。上エ山古墳群周辺は古墳が多く築造されている地域で、播但連絡道路ならびに北近畿豊岡自動車道に伴う調査で多くの遺跡が調査されている。

旧石器時代の遺跡は但馬では高原地帯で確認されている。杉ケ沢遺跡や神鍋遺跡がその代表である。縄文時代の遺跡も同様の地形のところに営まれ、後期から低地にも遺跡が広がりはじめる。豊岡市では長谷貝塚・中谷遺跡などで貝塚も確認されている。朝来市では余り良好な資料に恵まれていない。加都遺跡宮ケ田地区で前期の深鉢がピットから出土しているのは遺構出土例として希少である。加都遺跡では少量ながら後晩期の土器も出土している。石器が採集されているものやムクノ木遺跡・高瀬遺跡などで土器が出土している程度である。対岸に位置する片引遺跡では突帯文土器が出土しているが、弥生前期の土器と共伴している。

弥生時代前期になっても遺跡数に変化はない。片引遺跡・ムクノ木遺跡・高瀬遺跡などで土器が採集され、石器も採集されている。片引遺跡の木製壺は彩色文様を施した逸品である。土器もまとまって出土しており、Ⅱ様式に変化する土器群である。ムクノ木遺跡も中期前半まで続く遺跡である。安井遺跡・寺内遺跡では環状石斧が出土している。中期になると山東町に遺跡が多く見られるようになる。分銅形

写真５　杉ヶ沢遺跡縄文土器

写真６　片引遺跡出土木器

和田山町駅北
和田山町車谷
和田山駅前
和田山町和田山
和田山町柳原
和田山町玉置
和田山町枚田
和田山町枚田岡
和田山町立ノ原
和田山町法興寺
和田山町市御堂
和田山町久留引
和田山町加都
和田山町筒江
和田山町栄町
山町安井
ゴルフ場
山東カン
金梨山
和田山町竹田
桜ケ丘
朝
1000m

第２図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡一覧表（１）

	遺跡名	遺跡番号	遺跡の所在地	遺跡の時代・種類
1	**上エ山古墳群**	730725 他	朝来市和田山町枚田字上エ山	古墳
2	**上エ山遺跡**	730768	朝来市和田山町枚田字上エ山	古代～中世集落
3	**内高山東古墳群**	730745 他	朝来市和田山町枚田字内高山	古墳
4	**内高山西古墳群**	730748 他	朝来市和田山町枚田字内高山	古墳
5	土田塚が谷古墳	730153	朝来市和田山町土田字塚が谷	古墳
6	池田古墳	730001他	朝来市和田山町平野字イケダ	古墳
7	城の山古墳	730220	朝来市和田山町東谷字城山	古墳
8	城の山裏古墳群	730292	朝来市和田山町東谷字城山	古墳
9	恵谷遺跡	730646	朝来市和田山町東谷字恵谷	古墳時代散布地
10	宮ノ本遺跡（細田地区）	730753	朝来市和田山町東谷	古墳～平安集落
11	西山古墳群	730294 他	朝来市和田山町東谷字西山	古墳
12	枚田城跡	730413	朝来市和田山町枚田字城山	中世城館跡
13	法興寺跡	730318	朝来市和田山町法興寺字堂ノ前	奈良寺院跡
14	比治向山古墳群	730539 他	朝来市和田山町比治字向山	古墳
15	イノオク古墳群	730531 他	朝来市和田山町市御堂字イノオク	古墳
16	日向遺跡	730551 他	朝来市和田山町比治字日向	
17	長者谷古墳群	730523他	朝来市和田山町市御堂字長者谷	古墳
18	長者谷遺跡	730530	朝来市和田山町市御堂字長者谷	
19	市御堂城跡	730414	朝来市和田山町市御堂字城山	中世城館跡
20	加都遺跡（宮ヶ田地区）	730751	朝来市和田山町加都字宮ヶ田他	弥生～平安時代
21	加都遺跡（伊豫田地区）	730613	朝来市和田山町加都字伊豫田	弥生時代集落
22	片引遺跡	730291	朝来市和田山町筒江字片引	弥生時代散布地
23	筒江中山古墳群	730240 他	朝来市和田山町筒江字中山	古墳
24	筒江中山墳墓群	730632	朝来市和田山町筒江字中山	古墳
25	筒江梶原古墳群・Ａ遺跡	730268 他	朝来市和田山町筒江字梶原	古墳・中世城館跡
26	比治城跡	730415	朝来市和田山町比治字東山	中世城館跡
27	大師山古墳群	740042 他	朝来市山東町楽音寺字上山	古墳
28	北山遺跡	740085	朝来市山東町楽音寺字上山	中世散布地
29	楽音寺北山古墳	740724	朝来市山東町楽音寺字上山	古墳
30	梶原遺跡	740696	朝来市山東町楽音寺字梶原	古墳・奈良集落
31	大月北山１号墳	740094	朝来市山東町大月字北山	古墳
32	茶すり山古墳	国史36	朝来市和田山町筒江	古墳
33	筒江大垣遺跡	730611	朝来市和田山町筒江字大垣	古墳時代散布地
34	筒江中山Ⅱ遺跡	730612	朝来市和田山町筒江字桜ノ木	古墳時代散布地
35	長尾古墳群	730320 他	朝来市和田山町筒江字長尾	古墳
36	筒江古墳群	730202 他	朝来市和田山町筒江字相山他	古墳
37	中山遺跡	730290	朝来市和田山町筒江字中山	古墳時代集落
38	筒江城跡	730319	朝来市和田山町筒江字城ヤブ	中世城跡
39	城ヤブ古墳群	730213	朝来市和田山町筒江字城ヤブ他	古墳
40	加都城跡	730575	朝来市和田山町加都字氷り坂	中世城跡
41	加都遺跡(焼御堂･岡ノ森地区)	730614	朝来市和田山町加都字焼御堂、岡ノ森	弥生～中世集落
42	加都遺跡（桜地区）	730750	朝来市和田山町加都字桜	平安･中世集落･墓
43	加都Ⅰ散布地	730608	朝来市和田山町加都字院ノ馬場他	散布地
44	加都散布地	730484	朝来市和田山町加都	弥生時代散布地
45	加都車塚古墳	730218	朝来市和田山町加都字才ノ木	古墳
46	加都王塚古墳	730219	朝来市和田山町加都字宮越	古墳
47	加都神社裏古墳群	730583 他	朝来市和田山町加都字上山	古墳
48	連願寺古墳	730557	朝来市和田山町加都字連願寺	古墳
49	上山古墳	730558	朝来市和田山町加都字上山	古墳
50	古代但馬道	730752	朝来市和田山町加都	奈良・平安時代

第２表　周辺の遺跡一覧表（２）

	遺跡名	遺跡番号	遺跡の所在地	遺跡の時代・種類
51	梅田東古墳群	730649 他	朝来市和田山町加都字向山	古墳
52	安井城跡	730343	朝来市和田山町加都字向山	中世城館跡
53	安井天満宮遺跡	730344	朝来市和田山町安井字向畑	中世城館跡
54	梅田古墳群	730345 他	朝来市和田山町加都字向山	古墳
55	安井遺跡	730334	朝来市和田山町安井字庄ノ内	弥生～平安集落
56	前期太田垣氏居館跡	730644	朝来市和田山町安井字前田他	中世城館跡
57	竹田城跡周辺遺跡	730340	朝来市和田山町竹田字古城山他	中世城館跡
58	観音寺山砦跡	730341	朝来市和田山町竹田字古城山	中世城館跡
59	竹田城跡	国史35	朝来市和田山町竹田字古城山	近世城跡
60	竹田城下町遺跡	730421	朝来市和田山町竹田字城山ノ下他	中・近世城館跡
61	竹田城下町関連遺跡	730423	朝来市和田山町竹田字小森山	中世寺院跡
62	迫間古墳群	740530 他	朝来市山東町迫間字金梨山	古墳
63	池ノ端古墳群	740545 他	朝来市山東町迫間字竹ヶ下他	古墳
64	押坂古墳群	740267 他	朝来市山東町喜多垣字宮ノ奥	古墳

土製品が出土した仲田遺跡や古墳時代にかけての拠点集落となる柿坪遺跡が知られている。また、後期になると高地性集落で二重環濠を有する大盛山遺跡や玉つくりを行っている宮ノ本遺跡が生活をはじめる。加都遺跡では遺物は前期から見られ、中期に土坑・溝があり、後期に竪穴住居跡・土坑・溝が検出されている。竪穴住居跡は１棟だけで遺跡が大きくなるのは古墳時代でも中期以降である。後期後半になると墳墓も確認されている。加都遺跡東側の丘陵上の筒江中山遺跡で木棺墓・土器棺墓が対岸の梅田東墳墓群で木棺墓が、山東町粟鹿遺跡では周溝墓が調査されている。このような墳墓は古墳時代中期まで続く。

古墳時代前期には階段状の古墳以外に若水A11号墳が首長墓として最初に築かれ、続いて城の山古墳・筒江中山23号墳そして但馬最大の古墳である池田古墳が５世紀初頭に但馬の王墓として構築される。それから茶すり山古墳・船宮古墳そして岡田古墳群に引き継がれる。小規模な前方後円墳は加都遺跡周辺に見られる。南側丘陵上に埴輪を有する加都王塚・加都車塚古墳が築かれるが、加都遺跡と同時期であり、遺跡（居住域）と墓（墓域）の関係がある。その後７世紀中ごろにかけて周辺の丘陵上や山麓部に多くの古墳が築かれるが、１地域に集中することなく分散していく。和田山町域では南側の長尾古墳で頭椎太刀が出土し、城ヤブ１号墳は大型石室である。大型石室は和田山町域でも分散しており、南西

写真７　池田古墳

写真８　加都遺跡

第３図　周辺の古墳群

第３表　周辺の古墳地名表

1	池ヶ谷１号墳	36	広六林古墳群	71	水谷古墳	106	城ノ越古墳群
2	三月野古墳群	37	奥山古墳群	72	江谷古墳群	107	東南山古墳群
3	大塚古墳群	38	大谷古墳群	73	石部神社古墳	108	寺山古墳群
4	ねずみ塚古墳	39	随泉寺谷古墳群	74	内高山西古墳群	109	宮ノ谷古墳群
5	堀畑２号墳	40	西ヶ谷古墳群	75	内高山東古墳群	110	大将軍古墳群
6	上山古墳	41	春日古墳	76	上エ山古墳群	111	北大工山古墳群
7	北峠古墳群	42	上山古墳群	77	梅田東古墳群	112	大工山古墳群
8	南峠古墳群	43	イズクミ古墳	78	梅田古墳群	113	矢谷古墳群
9	堀畑１号墳	44	マエダニ古墳	79	向山古墳群	114	庵山古墳
10	尻木谷古墳群	45	市場古墳群	80	市条寺古墳群	115	押坂古墳群
11	ユウ山古墳群	46	オンザ古墳	81	段山古墳群	116	又木谷古墳群
12	寺ノ奥古墳群	47	寺内オタケ山古墳	82	臼谷古墳群	117	喜多垣古墳群
13	御所森古墳	48	秋葉山古墳群	83	日尻尾池古墳群	118	柿坪中山古墳群
14	高田八幡社古墳	49	林垣古墳群	84	清水ヶ谷古墳群	119	越田段古墳群
15	亀が首古墳	50	土田古墳群	85	古城山古墳群	120	三保向山古墳群
16	野林古墳群	51	椿ノ森古墳	86	久世田１号墳	121	山根古墳群
17	塚の坪古墳	52	東見寺古墳	87	加都車塚古墳	122	山根畑中古墳群
18	西垣古墳群	53	観音山古墳群	88	加都王塚古墳	123	打田２号墳
19	梅が迫古墳群	54	土田塚が谷古墳	89	加都神社裏古墳群	124	森向山古墳群
20	宮内イサワ谷古墳群	55	池田古墳	90	上山古墳	125	打田古墳
21	中山古墳群	56	城の山古墳	91	連願寺古墳	126	池ノ端古墳群
22	宮ウシロ古墳群	57	城の山裏古墳群	92	城ヤブ古墳群	127	迫間古墳群
23	丸山古墳	58	西山古墳群	93	イノオク古墳群	128	静ヶ瀬古墳群
24	宮ノ山古墳群	59	寺谷古墳	94	比治向山古墳群	129	カクシ谷古墳群
25	千石塚古墳	60	大盛山古墳群	95	長者谷古墳群	130	北屋敷古墳
26	シメガ谷古墳	61	小丸山古墳	96	筒江中山古墳群	131	奥屋敷古墳
27	投山古墳群	62	更杵古墳	97	筒江梶原古墳群	132	宮谷古墳群
28	岡投山古墳	63	長塚古墳	98	茶すり山古墳	133	本谷古墳群
29	上地古墳	64	岡田古墳群	99	筒江古墳群	134	木之内古墳
30	東林古墳群	65	胄塚古墳	100	長尾古墳群	135	ミゾ谷古墳群
31	高瀬吉竹古墳	66	野村１号墳	101	大月北山古墳群	136	ビシャモン谷古墳群
32	高瀬家の上古墳	67	西地古墳群	102	楽音寺北山１号墳	137	澤大谷古墳群
33	高瀬東谷古墳	68	門在古墳群	103	大師山古墳群	138	上山田古墳群
34	宮田古墳群	69	柳原古墳群	104	ハス子古墳群	139	山内キタヤマ古墳
35	高田大谷古墳群	70	ブロ山田古墳	105	大月向山古墳群	140	山内古墳群

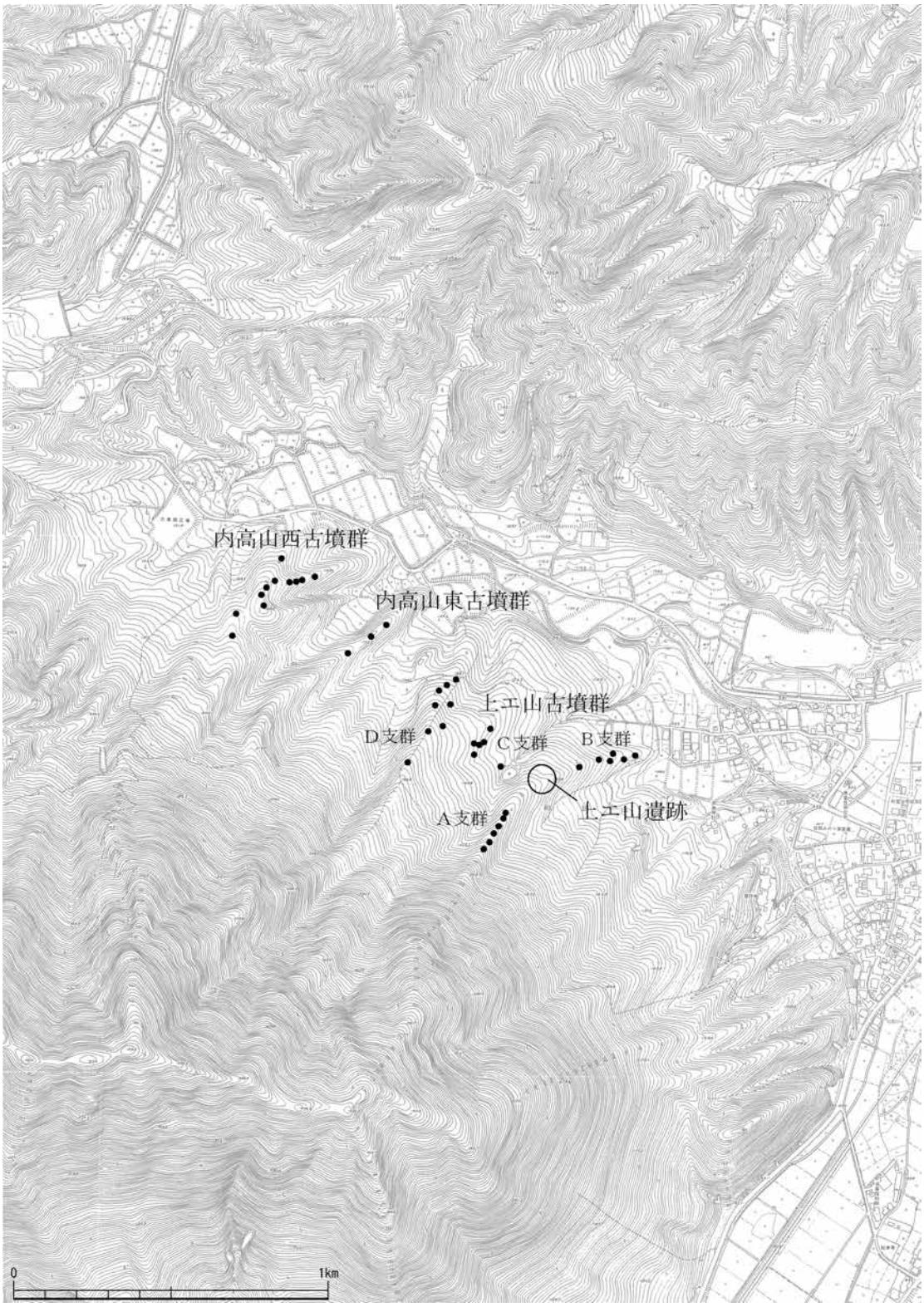
部の久世田１号墳、中央部の寺谷古墳、北側の春日古墳が存在する。後期に古墳が集中するのは大藪古墳群で代表されるように中心は北に移動している。

古墳時代の集落として代表的な遺跡が柿坪遺跡である。大型の独立棟持柱建物を検出し、豪族居館を想定する。出土遺物にも角杯があり特殊な大型集落である。加都遺跡も中期以降に栄えた集落で調査面積も広いこともあるが100棟を越える竪穴住居跡を確認している。粟鹿遺跡も同様な大集落である。筒江浦石遺跡は前期の粘土採掘坑を検出した遺跡である。加都遺跡の東側筒江山麓には片引遺跡が存在する。竪穴住居跡などの明瞭な遺構は検出されていないが、土器は大量に出土しており、また磨滅もしていないので、隣接して集落が広がっているものと思われる。向いの中山丘陵にかけて、加都遺跡より古い時期に中心を有し、中期まで継続しない集落が存在している。同様な遺跡が城の山古墳東側に位置する恵谷遺跡である。１ヶ所の確認調査だけしか実施されていないので、確実ではないが地形なども含めて片引遺跡と似た遺跡である。恵谷遺跡の北側平地には宮ノ本遺跡がある。玉つくりを行っている集落である。加都遺跡・柿坪遺跡の大集落とは異なる性格の集落と思われる。

奈良時代になると国府・国分寺は北但馬に営造される。朝来市では朝来町立脇廃寺が最初に建立された寺院で次いで加都遺跡北東の法興寺遺跡にも建立される。朝来市域では古代官道の調査例が多く山陰道の確定に近づいている。従来は現在の国道９号沿いのルートが一般的とされていたが、山東町柴遺跡・粟鹿遺跡、和田山町加都遺跡・筒江大垣遺跡の調査結果から宝珠峠を越えるルートが有力視されはじめている。その結果、郡衙推定地も加都遺跡南側に求める意見が提出されている。加都遺跡では大規模に道路遺構が検出されている。それが分岐し東側の宝珠峠を向いており、その道筋にある筒江大垣遺跡で墨書土器・木簡・緑釉陶器が出土したことが傍証となっている。ただ、山間の梶原遺跡でも古代銭貨が出土するなど不明瞭な点もまだある。山陰道は北に延び高田駅家に至っている。和田山町高田では、この時期の遺構が検出され駅家の可能性が高まっている。

周辺の中世集落は余り知られていなかったが、加都遺跡・粟鹿遺跡などの調査で新しい資料が加わった。市条寺では経塚も調査され、最近の調査で資料は増大した。片引遺跡でも僅かに遺構が検出されている。それまでは竹田城跡で代表される山城が朝来市を代表する中世の遺跡であった。国指定竹田城跡は石垣を有する日本を代表する山城で、周辺に加都城跡・比冶城跡・市御堂城跡・枚田城跡・安井城跡などがある。この時期の経済基盤である鉱山は近世近代にかけて朝来市では重要な遺跡である。生野銀山・明延鉱山は特に著名で、鋳鉄橋なども近代化遺産として注目されている。

写真９　竹田城跡



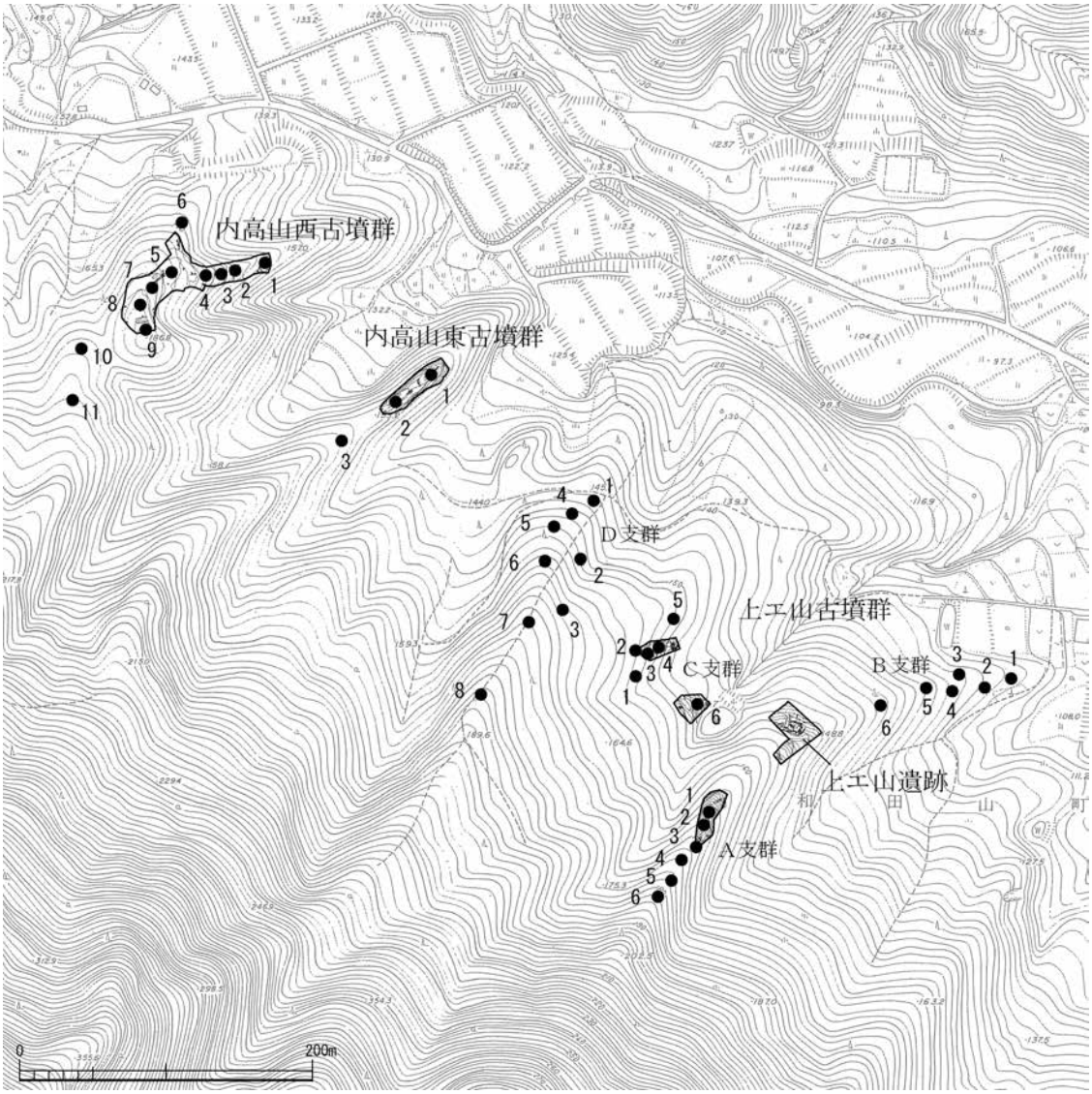
第４図　調査遺跡分布図

Ⅲ　上エ山古墳群

（1）上エ山古墳群の位置・概要

大倉部山から派生してきた支尾根ならびにその山腹に営まれた古墳群である。北西方向にある支尾根上に内高山古墳群が存在している。逆の南東部には枚田城跡が築かれている。標高110m～180mの範囲に存在する。朝来市和田山町枚田（ひらた）字上エ山に所在する古墳群であるが、尾根２本とその山腹に渡って古墳が認められる。そのことから４つの支群に分けて古墳群を位置付けたい。調査区外の古墳も含めて報告する。

尾根は３本あり、その中の東側尾根上方の標高160m～180mに位置する尾根上をＡ支群とする。Ａ支群の尾根は１号墳から下は緩斜面となり、さらに上エ山遺跡として調査した平坦面に続く。この部分には古墳は認められない。平坦面から尾根は東に向きを変えて延びている。Ａ支群に比べると斜面は緩や



第５図　調査区配置図

写真10　A支群の古墳（左：４号墳、右：６号墳）

かである。この部分をＢ支群とし、標高120～142mに位置する。ここには後期の横穴式石室を主体部とする円墳が築かれている。Ａ支群の西側の尾根は痩せ尾根で古墳は確認されない。この尾根は途中でなくなり、Ａ支群とＤ支群の間の谷地形となる。この山腹から谷部にかけてがＣ支群で横穴式石室を主体部とする古墳であり、今回４基の古墳を調査した。西端の尾根は幅広く、先で２股に分かれている。尾根上から山腹にかけてがＤ支群で、やはり後期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。以上４支群に細分する。

４つの支群のうち、Ａ支群だけ前期に遡る時代の異なる古墳群である。標高160m～180mの高い位置に所在している。尾根幅も狭く墳丘も低い。現状では６基の古墳を確認したが、さらに上方にも平坦部はあり、古墳は増えるかもしれない。下から１号墳・２号墳と付けた、１・２号墳を本発掘調査し、今回報告するものである。１・２号墳の裾の掘り割りは深く下げられていた。３号墳は今回墳裾のみ調査したが、明瞭な裾部を削り出していなかった。ただ墳丘は比較的明瞭で径７ｍを測る。４号墳は径11m、高さ３ｍとさらに規模が大きく、中央に箱式石棺が露出している。長さ2.3m、幅0.5mを測る。５号墳は長さ６ｍの平坦面で、墳丘は明確でない。さらに古くなるかもしれない。６号墳は長さ15mの大きな

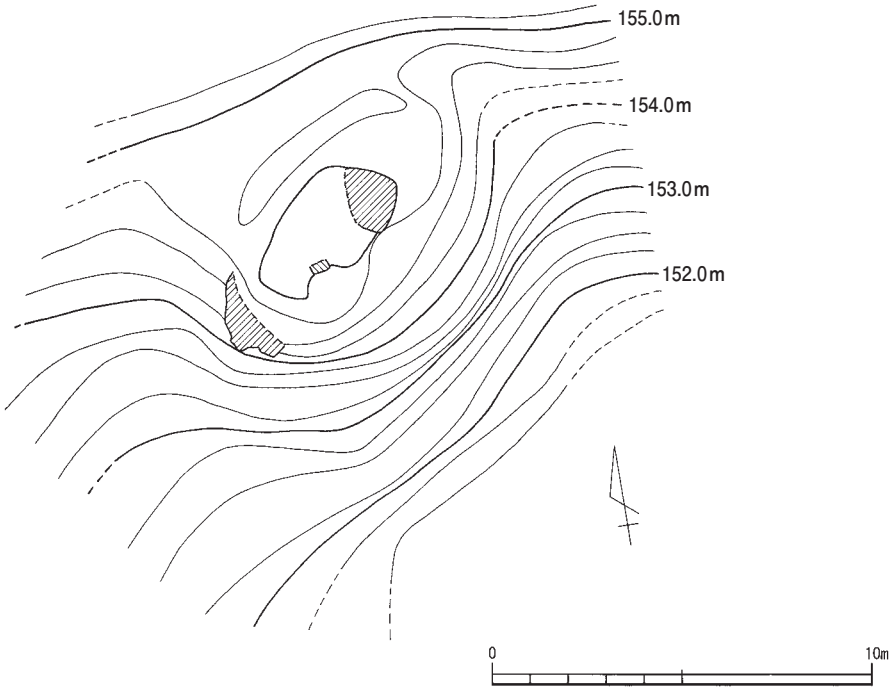
写真11　B支群の古墳（左：１号墳、右：５号墳）

平坦面で、眺望が優れている。１・２号墳からは平地は見えるが円山川は見えにくい。それに対して６号墳からは一望でき視界が広がっている。

Ｂ支群は６基認められ、すべて墳丘はしっかりしている。径10～12m、高さ３m前後とＣ支群より規模大きく、先行して構築されたかと思われる。２号墳は中央が窪んでおり盗掘や石材採取された可能性が高い。すべて横穴式石室を主体部としており、石材が確認されるが、開口しているものはない。Ｂ支群南東の尾根にも平坦面があり石材も認められる。古墳と断定出来なかったが、可能性は残される。

Ｃ支群は今回４基を調査したもので、調査区外に２基の古墳が存在する。１号墳は地形変換線に位置しており、Ｃ支群で最も規模が大きい。径９m前後で高さ２m近くの墳丘がある。横穴式石室であろうと思われ、石材も露出している。今回地形測量のみ実施した。２～４号墳は調査を実施した古墳で山腹に築かれ、墳裾が重複している。１号墳と２号墳は裾部で８m離れている。５号墳は調査区外で４号墳から北東に８m近く離れている。規模の小さな古墳であろう。６号墳も調査した古墳で谷部に位置している。開墾時に削平され、周辺には石垣も積まれている。並んでマウンドがあったが、古墳でなく石材が積まれていた。現状では単独で所在するが、他にも存在していたかもしれない。

Ｄ支群は８基確認している。緩やかな尾根上に６基、東側山腹に２基存在する。５号墳以外はすべて横穴式石室である。１号墳は先端にあり北側が多少急斜面になる。天井石が２石あり、長さ4.0m、幅1.25m、高さ1.15mの無袖の横穴式石室である。２号墳は山腹にある墳丘明瞭な古墳で、径11m、高さ３mを測る。最も規模の大きな石室で長さ７m前後になろうかと思われる。石室は埋没し天井石は３石露出している。３号墳は２号墳上方の山腹にあり、石室が開口している。長さ4.7m、幅0.7mの無袖の石室。墳丘は径９m、高さ2.5mである。４号墳は尾根上ではあるが、１号墳とは少し離れている。径11m、高さ２mの墳丘で、石材が３石露出している。石室は５m余りの長さになりそうである。５号墳は尾根筋ではあるが見晴らしの良い頂部になっており、石材が長さ2.2m、幅0.55mに組まれているよう



第６図　上エ山古墳群 Ｃ支群 １号墳地形測量図

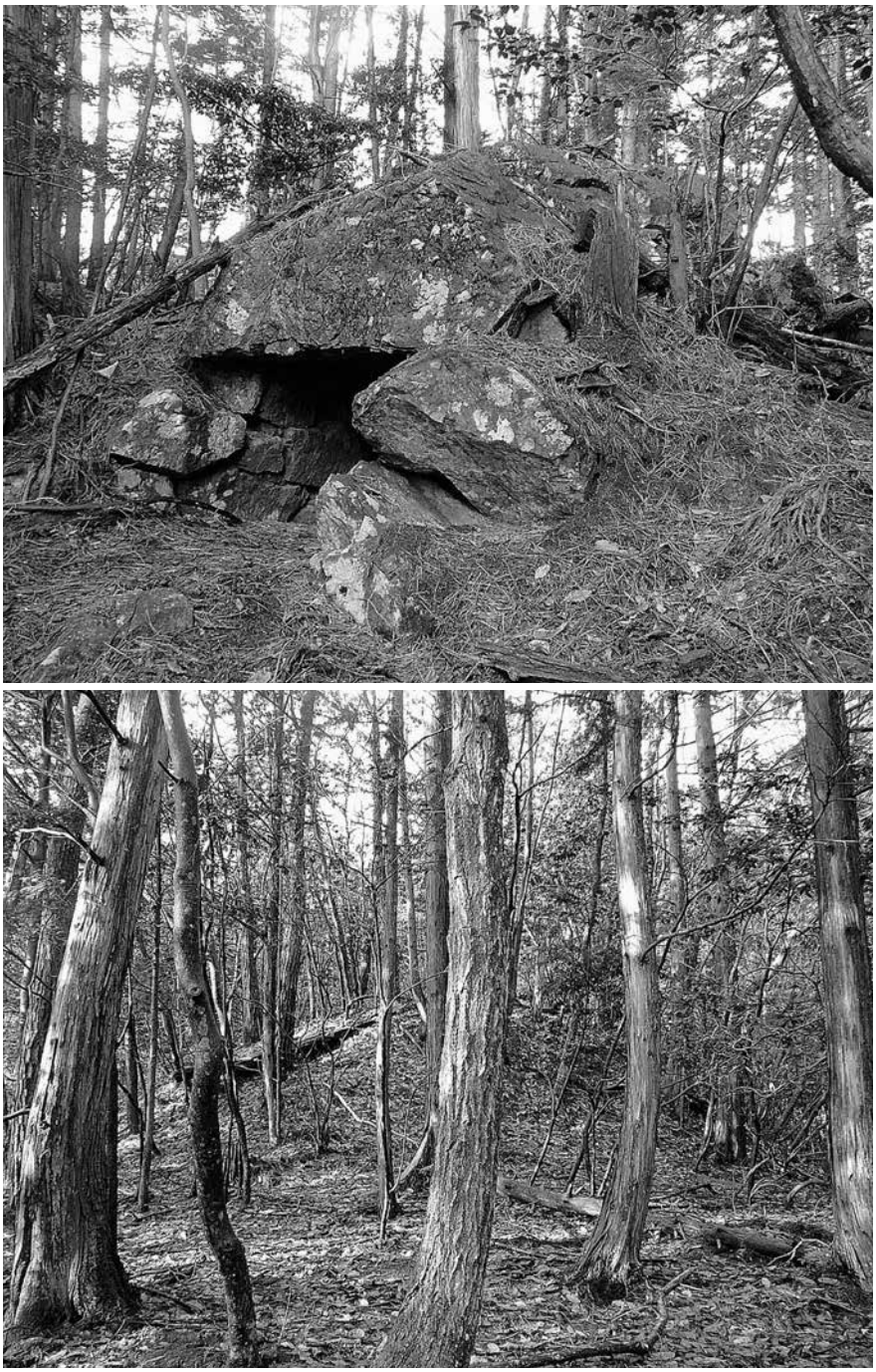


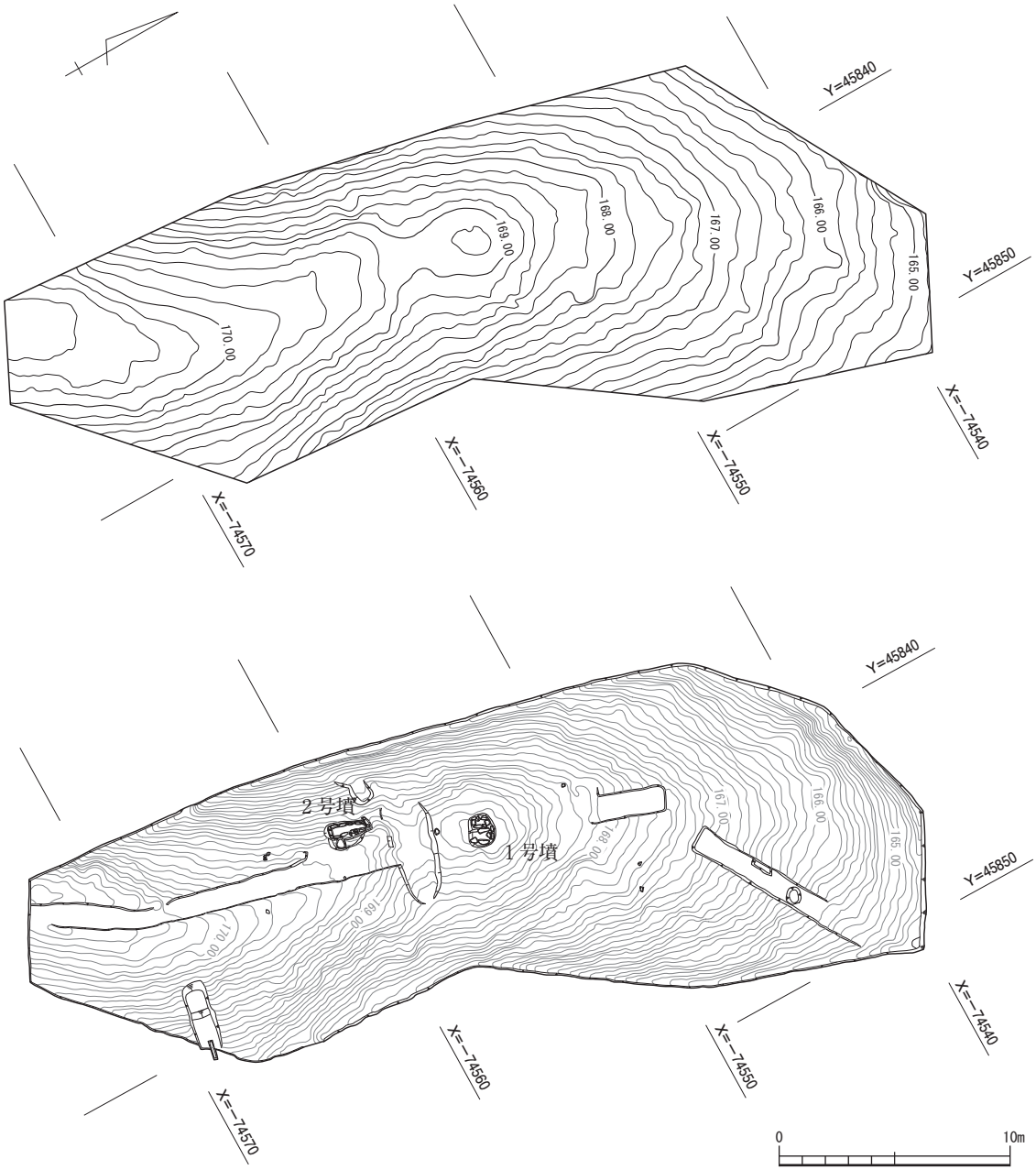
写真12　D支群の古墳（上：３号墳、下：５号墳）

に並ぶ。板状でないことが不安材料であるが、石棺の可能性がある。墳丘も長さ15mあり、時代の異なる古墳であろうか。６号墳・７号墳は石室が開口している尾根上に立地する古墳である。６号墳は径11m、高さ2.5mの墳丘で、石室は長さ6.0m、幅0.8mを測る。石材５石以上あり、天井石は大形で２石か。７号墳は径９m、高さ２mの墳丘で、石室は長さ6.5m、幅0.9mを測る。８号墳は石材が認められ、径10m前後の墳丘である。８号墳の東側に平面イチジク形の炭窯が存在し、石組も認められる。D支群の横穴式石室は幅が通常の大きさで、C支群に先行して構築されたと思われる。ただ、８号墳は新しく、C支群と同時期かもしれない。

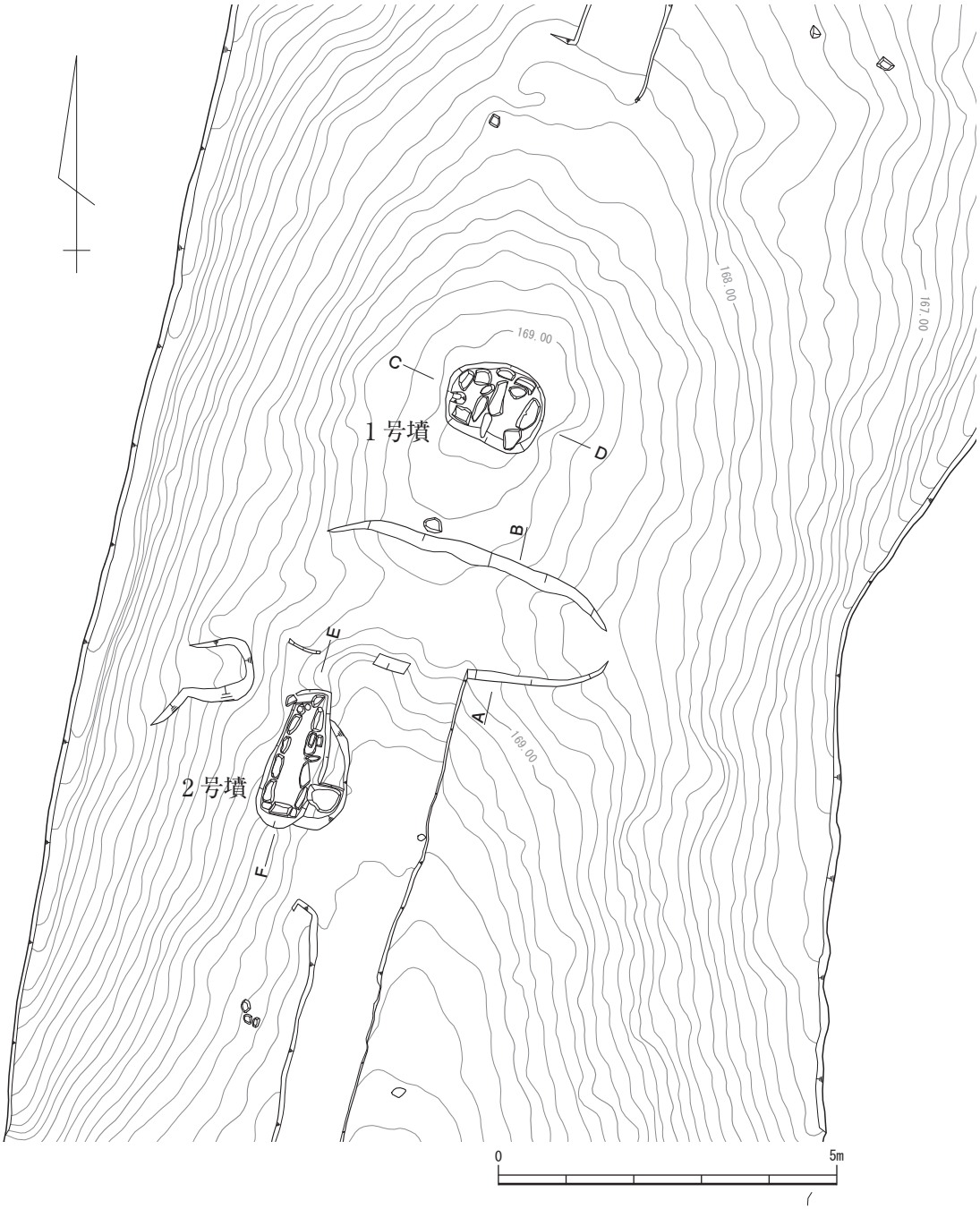
（２） Ａ支群の調査

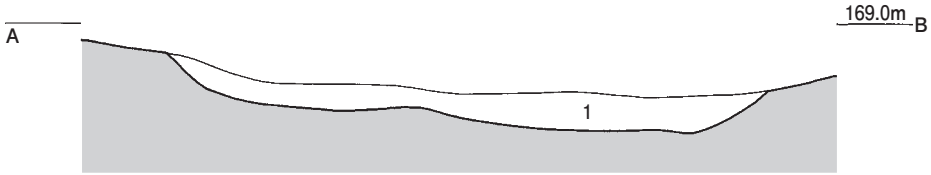
南から北側に延びる尾根上の３基の古墳を調査した。３号墳は墳裾だけで、明確な掘り割りは存在しなかった。痩せ尾根で平地を見渡すことが出来る。

１号墳と２号墳との間には明瞭な掘り割りが認められたが、墳丘は明らかに出来なかった。掘り割りは幅1.5m、深さ最大0.3mを測る。底は丸くなっている。１号墳は標高169m前後に位置し、調査前から箱式石棺が露出していた。２基の箱式石棺が並存している。東側の１号棺は南北方向に主軸を持ち、長さ0.6m、幅0.35m、高さ0.25mである。蓋石は残っておらず、副葬品は出土していない。西側の２号棺も南北方向に主軸を有し、長さ0.45m、幅0.2m、高さ0.2mを測る。やはり、蓋石はなく副葬品も保有していなかった。



第７図　上エ山古墳群 A支群 地形測量図・遺構配置図

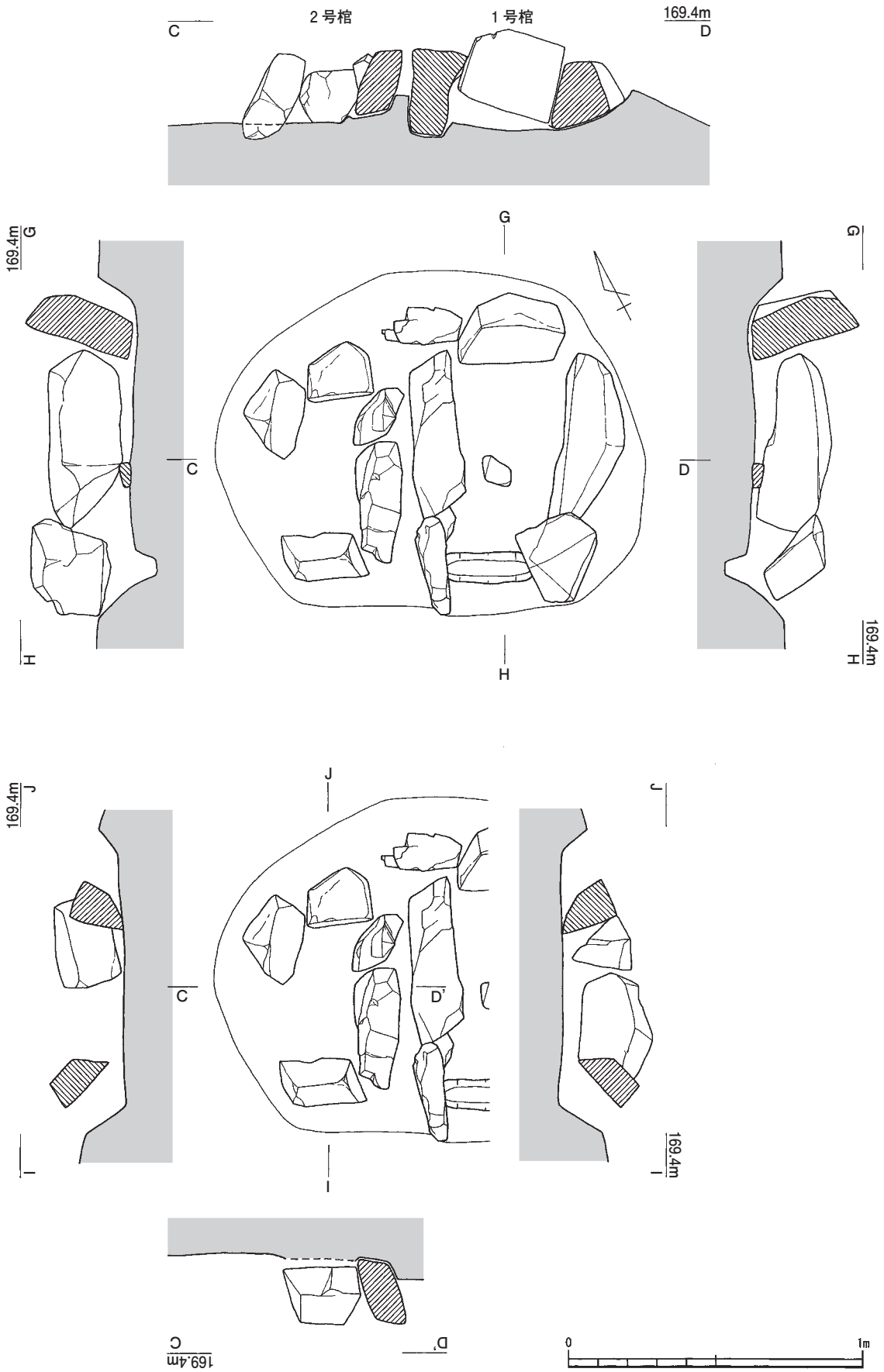




1．5YR6/6　橙　シルト～シルト質極細砂　風化細礫多く含む

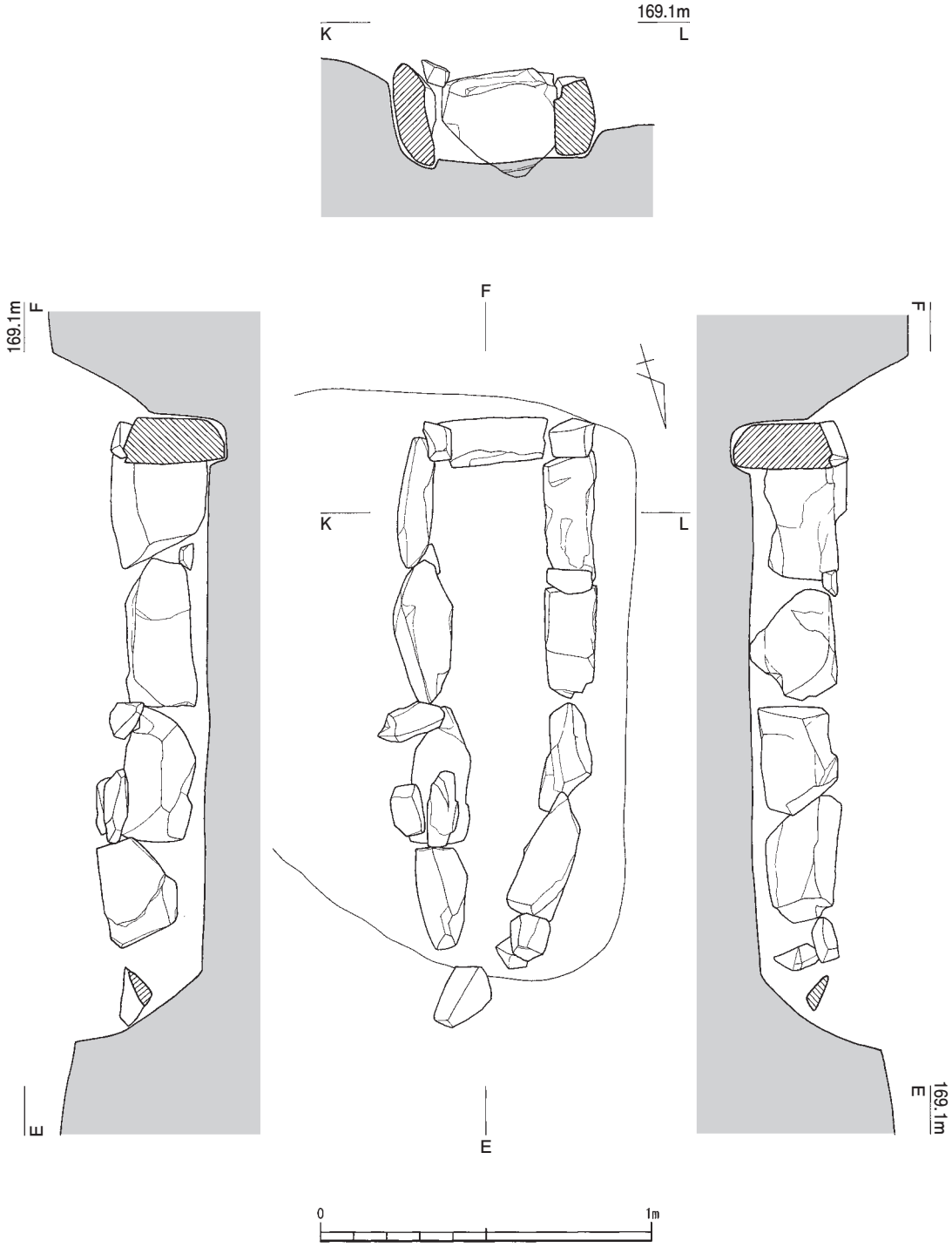
0　1m

第8図　上工山古墳群 A支群 1・2号墳平面図・掘割り土層図

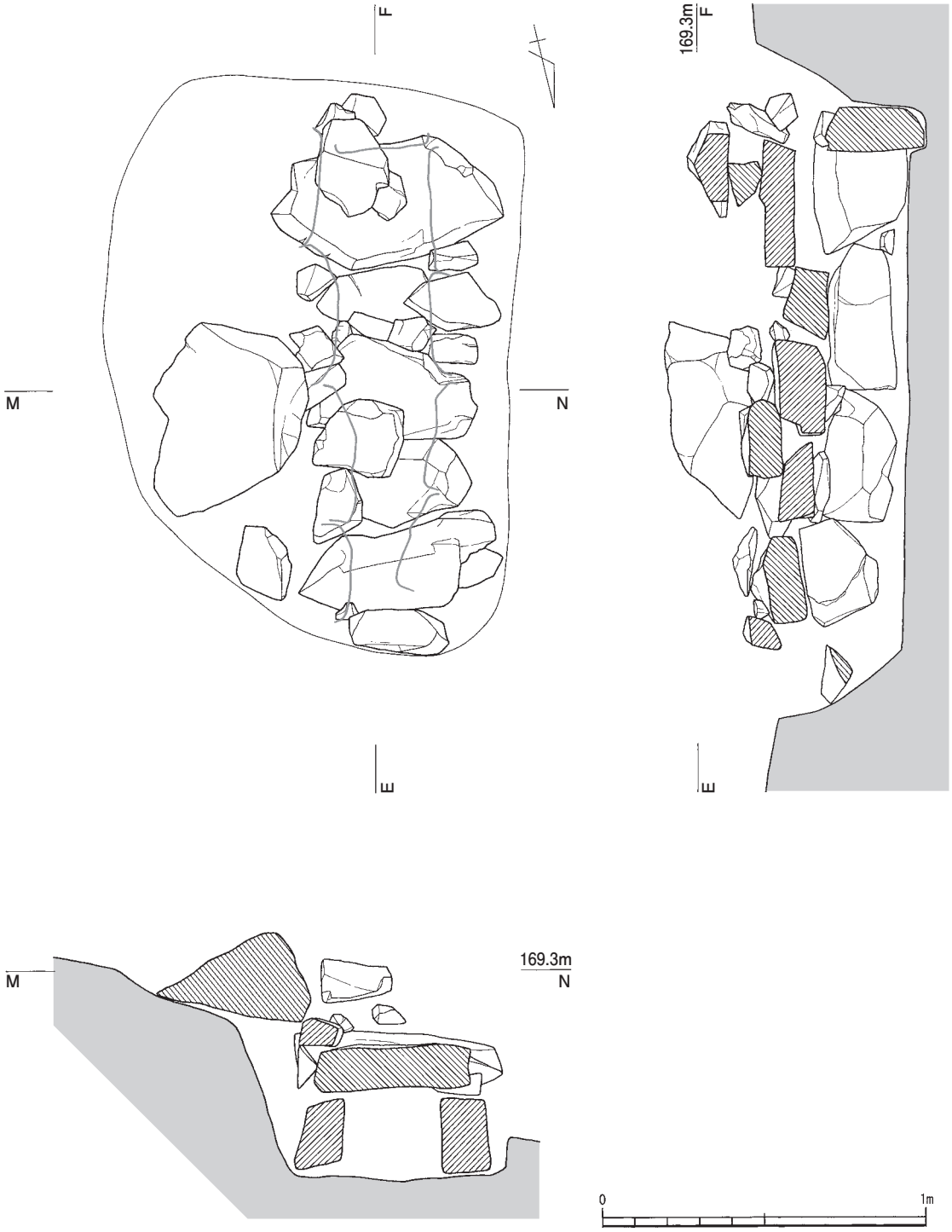


第 9 図　上工山古墳群 A支群 1 号墳主体部実測図

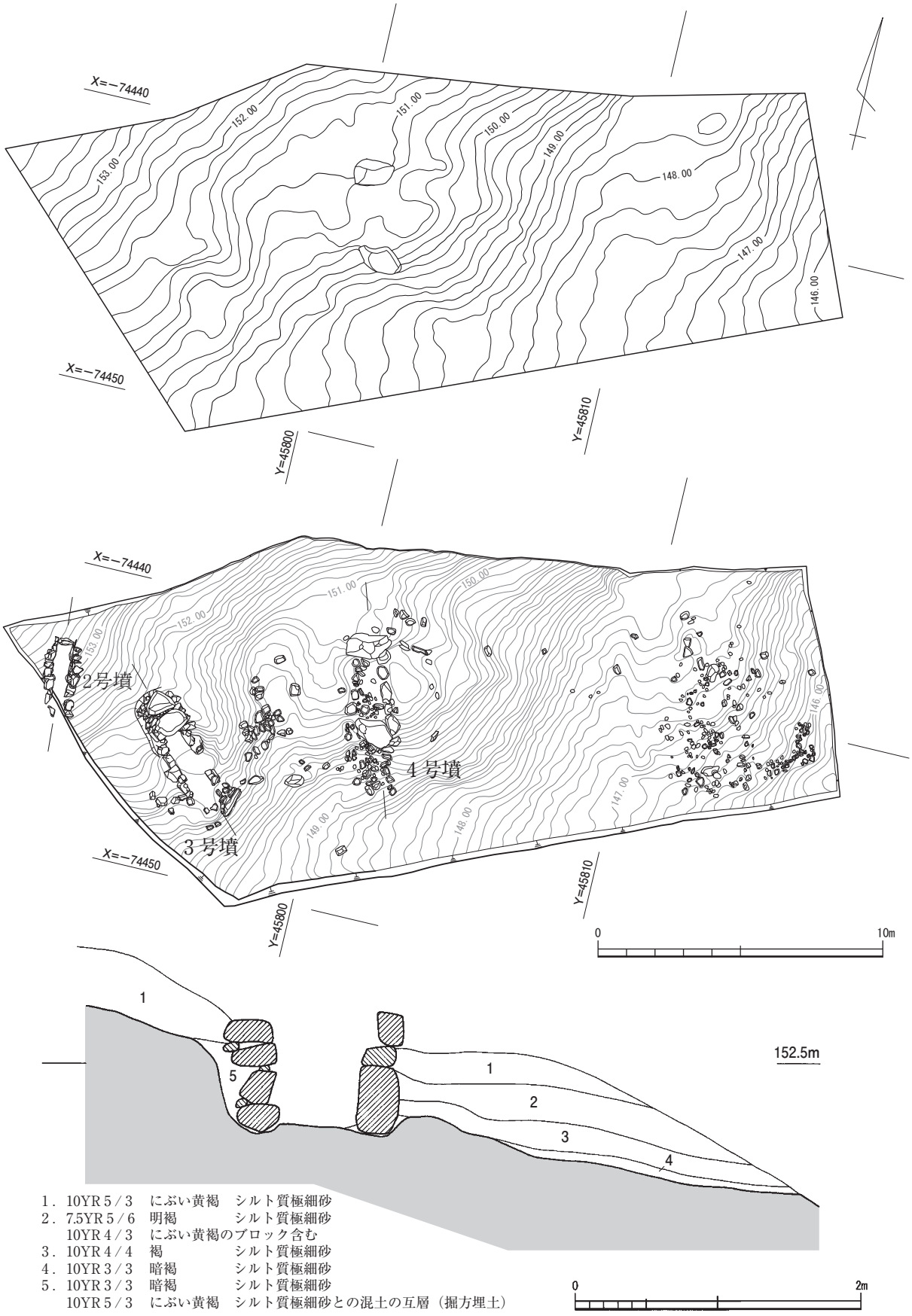
２号墳は１号墳の南側に接して築かれているが、尾根筋を西側にずれて構築されている。墳丘ならびに墳裾は明確ではない。主体部は箱式石棺で主軸は尾根筋である南北方向である。墓壙は長さ1.7m、幅1.0m以上の不定方形で深さ0.5mを測る。その中に内法で南辺３m、北辺0.2m、長さ1.5mの石棺を築いている。南辺の幅が広いので南が頭位と思われる。南側にだけ小口穴を設けている。



第10図　上エ山古墳群 A支群 ２号墳石棺実測図（１）



第11図　上エ山古墳群 A支群 2号墳石棺実測図（2）



1．10YR 5／3　にぶい黄褐　シルト質極細砂
2．7.5YR 5／6　明褐　シルト質極細砂
　10YR 4／3　にぶい黄褐のブロック含む
3．10YR 4／4　褐　シルト質極細砂
4．10YR 3／3　暗褐　シルト質極細砂
5．10YR 3／3　暗褐　シルト質極細砂
　10YR 5／3　にぶい黄褐　シルト質極細砂との混土の互層（掘方埋土）

第12図　上エ山古墳群 C支群 2～4号墳地形測量図・2号墳土層断面図

（３）Ｃ支群の調査

２号墳

外形

調査前では全く墳丘は確認されなかった。調査前の地形測量では等高線に全く変化がなく、古墳の可能性は考えていなかった。

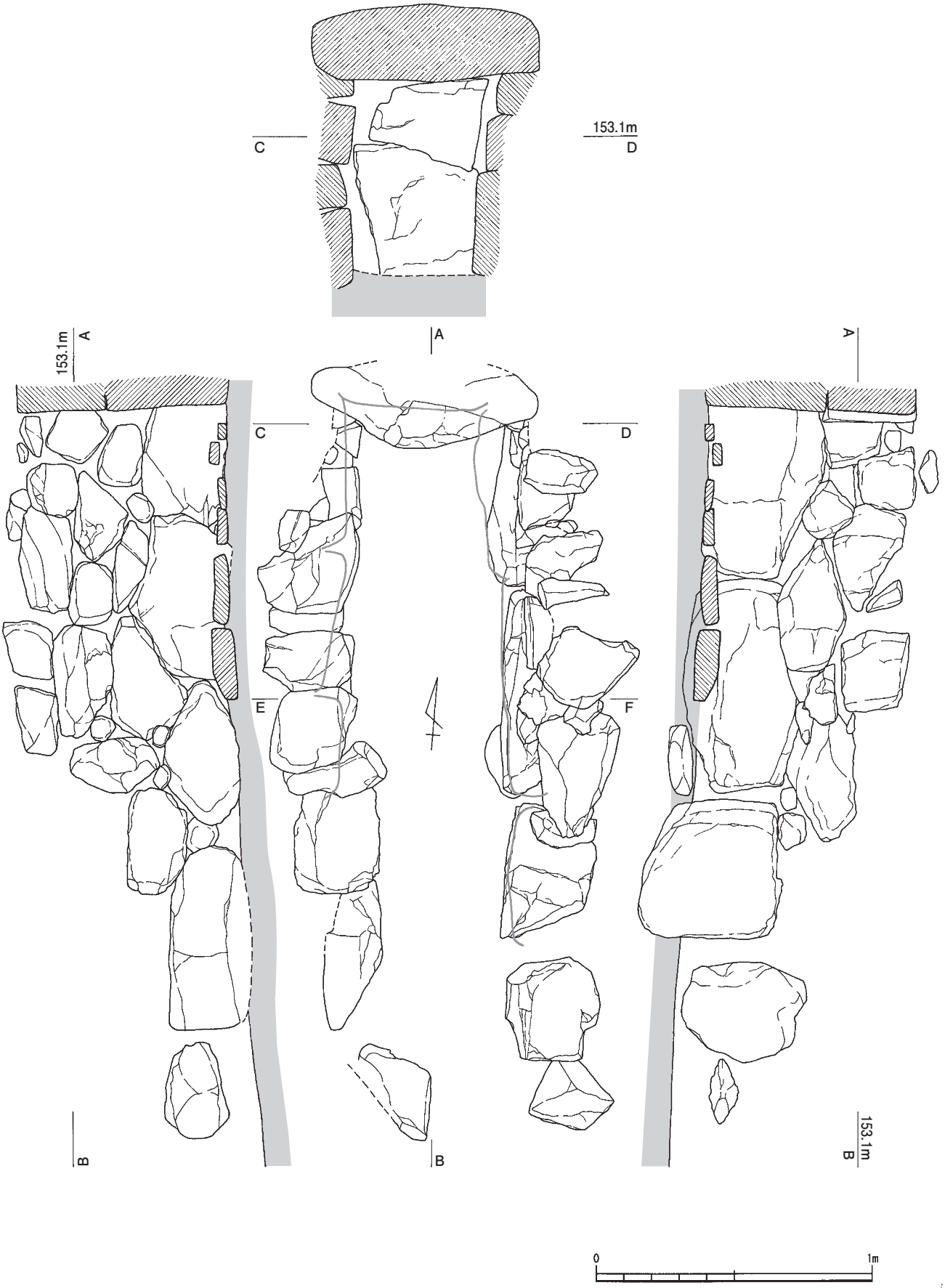
調査した結果、３号墳の墳裾で小形の横穴式石室が確認されたものである。調査区西端に位置しており、西側墳裾は調査区外になっている。３号墳の推定される墳裾内に位置しており、３号墳の後に構築されたことは明らかである。調査の結果も３号墳の墳裾が明瞭で２号墳の墳丘は最小限であることが理解される。152.00m・152.50mの等高線だけが変化して墳丘を示しているものと思われ、それから計測すると、径７m前後の小さい規模になる。外護列石や貼石の外部施設はなく、墳丘から判断せざるを得ない。墳形は明瞭ではないが、一応円墳であろうか。西側が用地外になっていることから、調査していない。調査していれば、西側墳裾は山側であることから明瞭であったろうと思われる。東側には３号墳が存在することから、規制を受けており３号墳奥壁裏に墳丘を被せている程度である。

墳丘は細かく版築状に積むのではなく、大きく積んでいる。主に４層から成っており、地形の高い西側は１層だけである。地山を掘り込んで埋葬施設墓壙掘り方を築く。標高の高い西側は0.55m地山を掘り下げ、東側の低い方は0.15m掘り込んでいる。東側の低い方は地山上に④暗褐シルト質極細砂があるが、墳丘土ではなく、堆積層の可能性もある。上の３層は墳丘築成土である。墓壙裏込めには④層と地山土の混ざった層を入れている。東側は大形の石材の根元だけで、西側は下から３石までの埋土となっている。東側は④層の上に③褐シルト質極細砂を積んでいる。比較的なだらかに積み、地形に平行にほぼ置いている。さらに②明褐シルト質極細砂を積んでいるが、この層は側石の上端まで積んでいることから、ここまでが１つの作業の区切りと思われる。墳丘築成下層土が②～④層である。左（東）側壁は大形の石材が並んでおりその上面までを築いた層と言える。この部分で大きく目地が通っており、下半築成の根拠になる。東側の②層の上と西側の地山上に、にぶい黄褐シルト質極細砂が墳丘築成上層土として盛られている。東側の２石目（基底石が小さいところは３石目）上面まで及んでおり、その上は腐植土混じりの堆積土になっていた。天井石が残存していないことから、さらに上部まで①層は及んでいたものと思われる。少なくとも西側墳丘部分までは墳丘が存在したであろう。現状で墳丘の高さは石室床面から1.2m、東側墳裾と思われる部分から1.6mを測る。

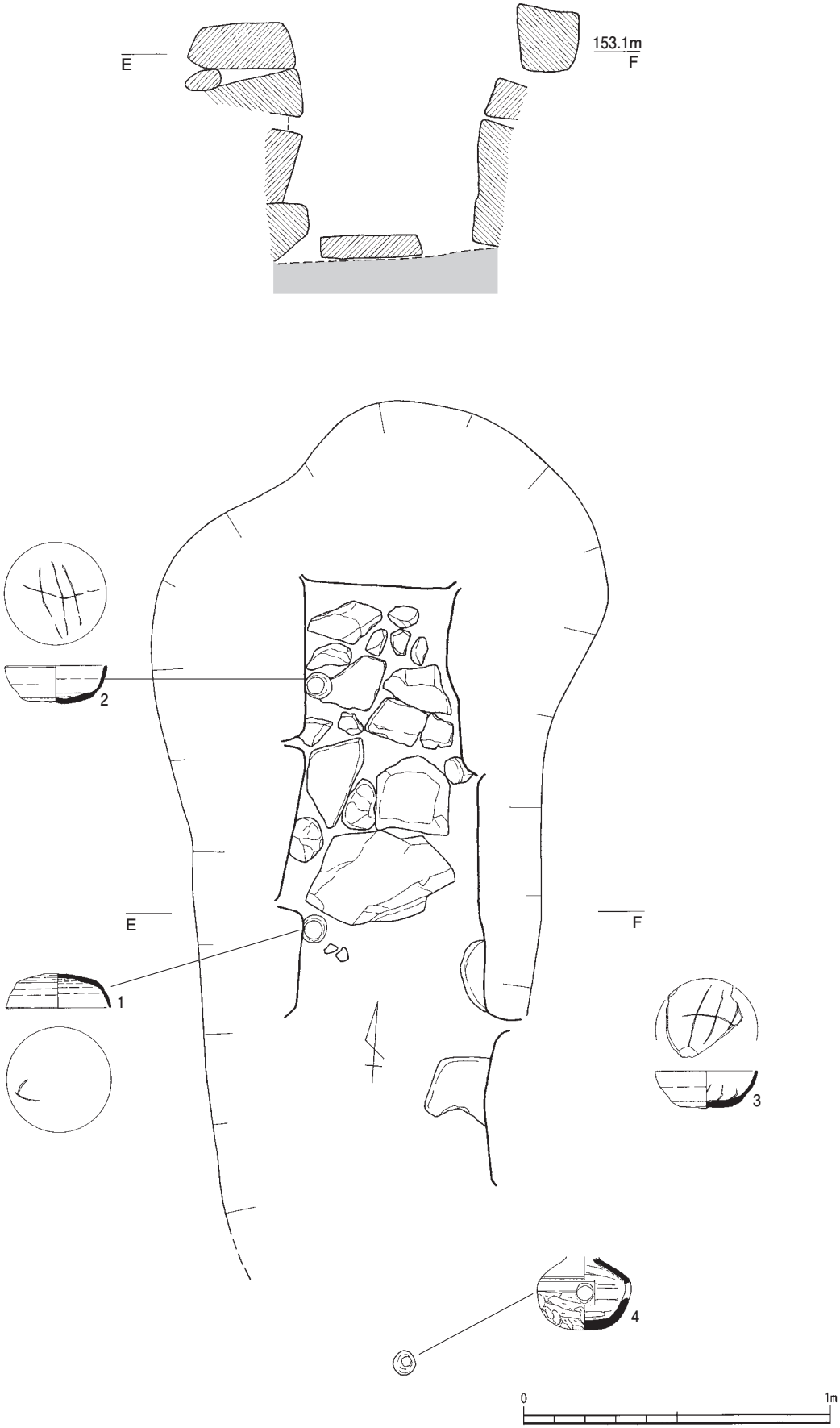
主体部

小形の横穴式石室を埋葬主体としている。主軸方向はほぼ南北を採っている。まず不定形に大きめの掘り方を設定している。最大幅1.5m、長さ3.0mを掘り込むが、標高の高い西側は0.55mと深さがあるが東側は浅く、南側開口部に向かって消滅している。東側壁を据えるように溝状に掘り込んでおり、西側壁も床面は一段高く設置している。墳丘を構築しながら側壁を積むが裏込め石は最小限しか使用されていない。墓壙埋土も埋めているだけの感が強い。

石室は無袖式の横穴式石室で奥壁幅0.5m、開口部幅0.4mで、中央の袖状にも見える広がっているところ（奥壁から1.15m）で0.6mを測る。長さは2.7mと短い。奥壁部分だけ天井石が残っており、高さ0.7mを測る。奥壁は２段で構築され、側壁も基底石は大形の石材を使っている。東側壁の奥から３石目は深く掘り込んで据えている。奥の２石より低くなっており、斜めに目地を通したか、この石を深く安定する意図があったようである。各々５石から成っており、石材は地元山塊のものを使用している。



第13図　上エ山古墳群 C支群 2 号墳横穴式石室実測図

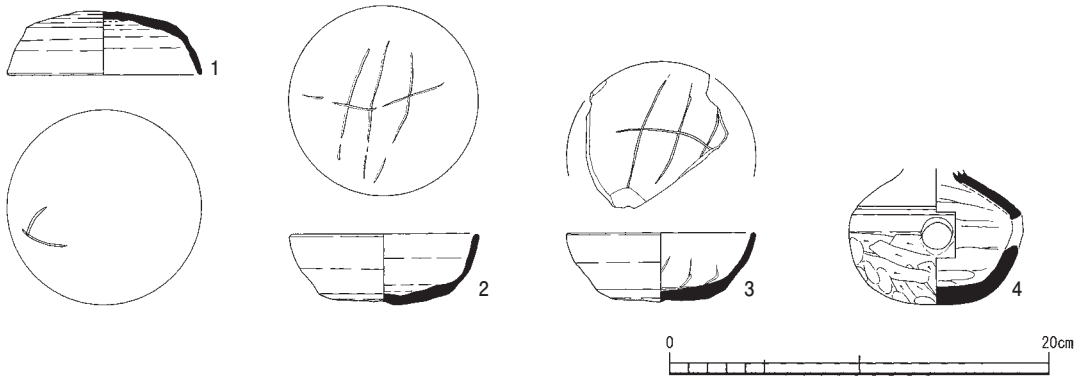


第14図　上エ山古墳群 C支群 2号墳横穴式石室堀り方実測図・遺物出土状態図

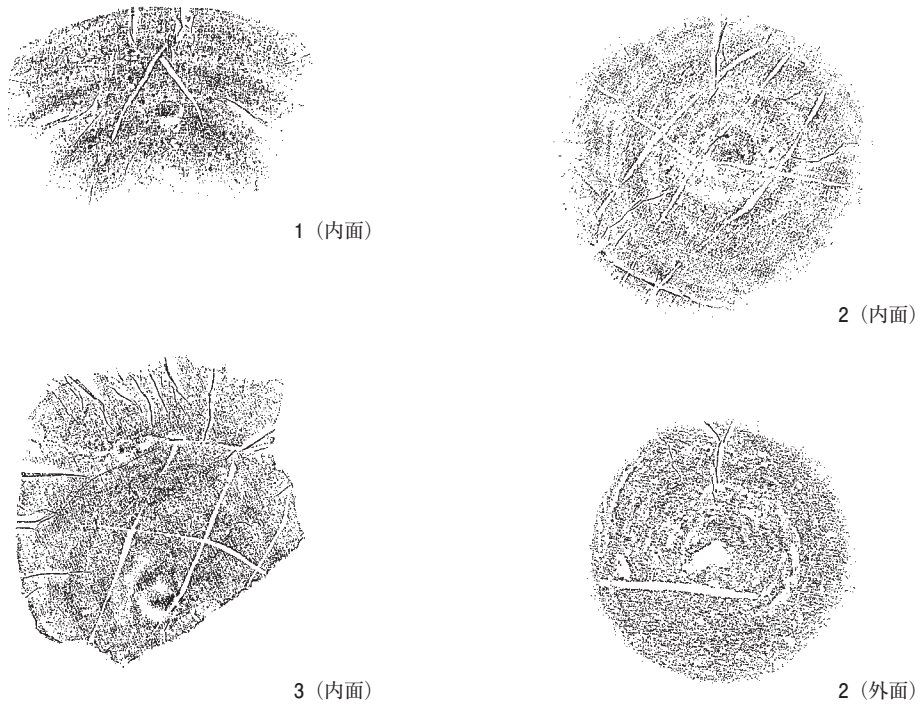
床面は奥半だけ石敷きを施している。石敷き端部の西側壁が広がっていることから、袖を意識し棺配置部分のみ石を敷いたと思われる。石材は石室と同じものである。

出土遺物

石室床面から４点の須恵器が出土している。（１）は杯蓋で内面にＶ字状のヘラ記号が見られる。杯Ｇと杯Ｈか微妙なところである。天井部は丸く口縁部外傾し外側に尖る。（２）（３）は杯身でともに内面にヘラ記号が施される。３本の縦線と交差する１本の横線で構成されており、同じ記号である。ロクロナデで底部はロクロケズリである。（２）は外面にも１条線が見られる。（４）は蹠で中央側面に円孔があり、底はケズリののちユビ調整を加える。円孔を抜いた粘土板も出土しており、栓などの意識があったのかもしれない。



第15図　上エ山古墳群 C支群 ２号墳出土土器実測図



第16図　上エ山古墳群 C支群 ２号墳出土土器拓本

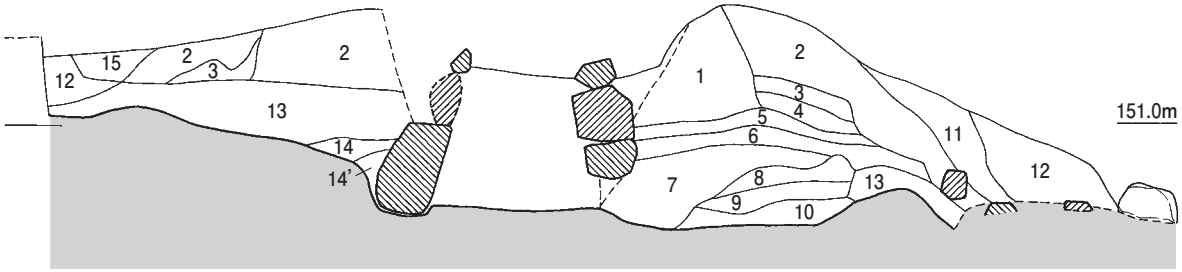
3号墳

外形

調査区西側に位置し、調査区外の１号墳とは墳裾と墳裾で８ｍ離れている。西側裾は調査区外になっている。４号墳とは裾を接しており、そこに掘り割り状の窪みを掘り込んでいる。きれいな円形ではなく不定円形から前面は隅円方形に近い形状を呈している。約８ｍ位の小さめの墳丘となる。掘り割り部には石材が散乱しているが、明確な外部施設ではない。調査前の測量では北東部でかろうじて墳裾が確認された程度で主体部の落ち込みが目立った。西側の地形の高い方が墳丘１層の厚みがある。墓壙は0.3m掘り下げその上に墳丘を盛るが、上層は手が加えられ本来の墳丘土ではない。東側は細かい盛土が確認され、２号墳よりは丁寧な墳丘である。墳丘の築成方法は下層では墓壙を掘り下げ基底石を据え、そこまでを盛っている。東側は墓壙大きめになっており、石材を置き易くしている。上層墳丘は石室近くだけを盛ってから、改めて周囲の墳丘を築く方法を採っている。石室前面は緩やかに下がり、明瞭な遺構はない、墳裾に石材が散布しているが、同様に明確な外部施設とは思われない。墳丘は最大で1.3mを測る。

主体部

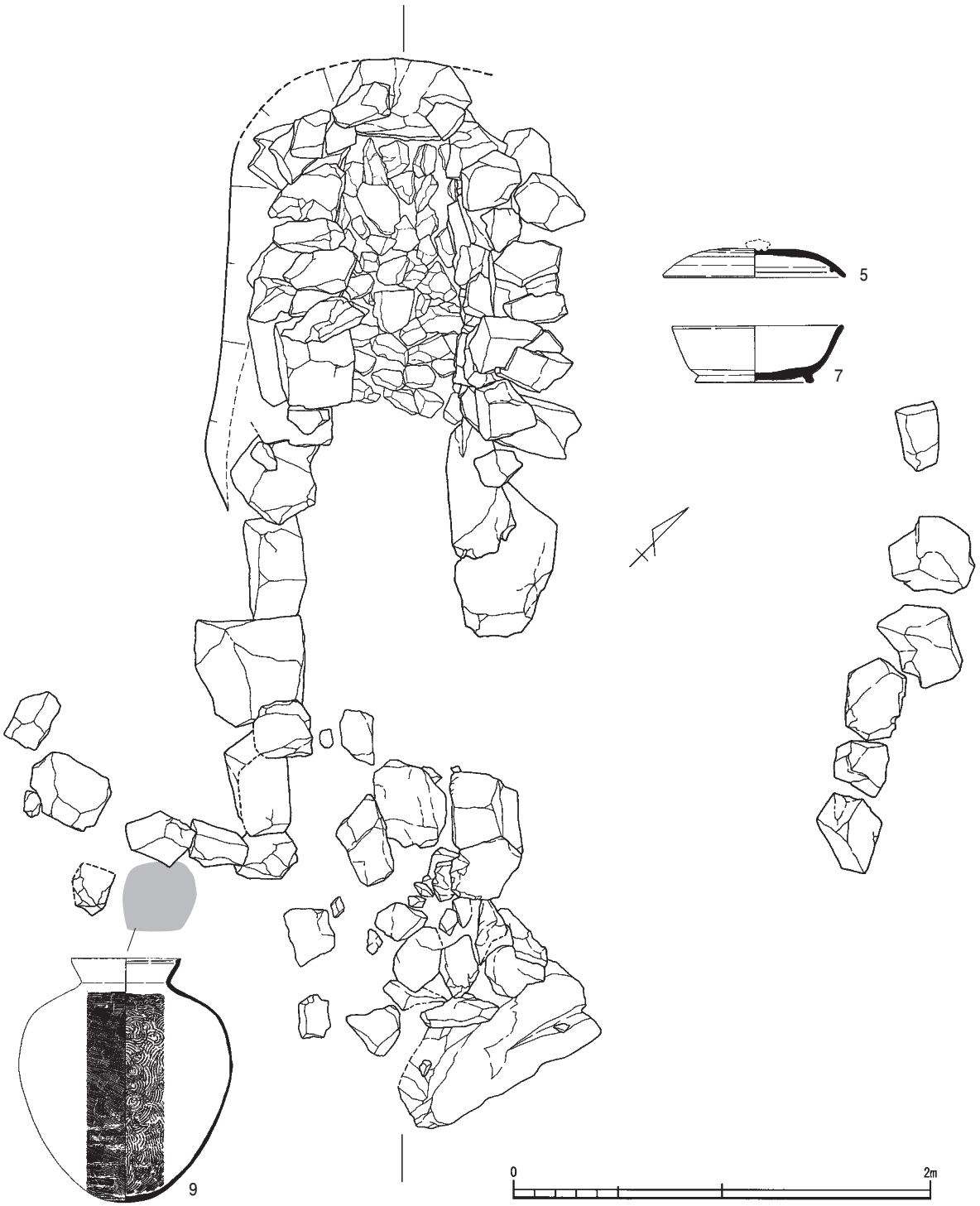
横穴式石室で主軸はＮ45°Ｗと２・４号墳とは異なっている。４号墳と墓道が枝分かれし、効率的に墳丘を営むための手段であろうか。もしくは１・４号墳に規制されたかもしれない。奥壁で幅0.7m、開口部で0.9m、全長3.55m、残存する高さ1.2mを測る。基底石は大きめの石材を使用し横積みにしている。裏込めはほとんど使われていない。地山面（墓壙底）は水平でなく開口部の方が低く斜面になっている。側壁も開口部の方は低くなっている。当然、基底石の上端も斜めになっている。奥壁は上下２段の２石から成っており、天井部の間に数石詰めたようである。奥壁は縦積みし両側壁と接する程度に据え、挟み込むなどの平面的な重複を避けた最小限の石材使用を図っている。奥壁から1.3mのところに敷石が見られ、棺部分を意識している。石材は地元山塊の石材である。



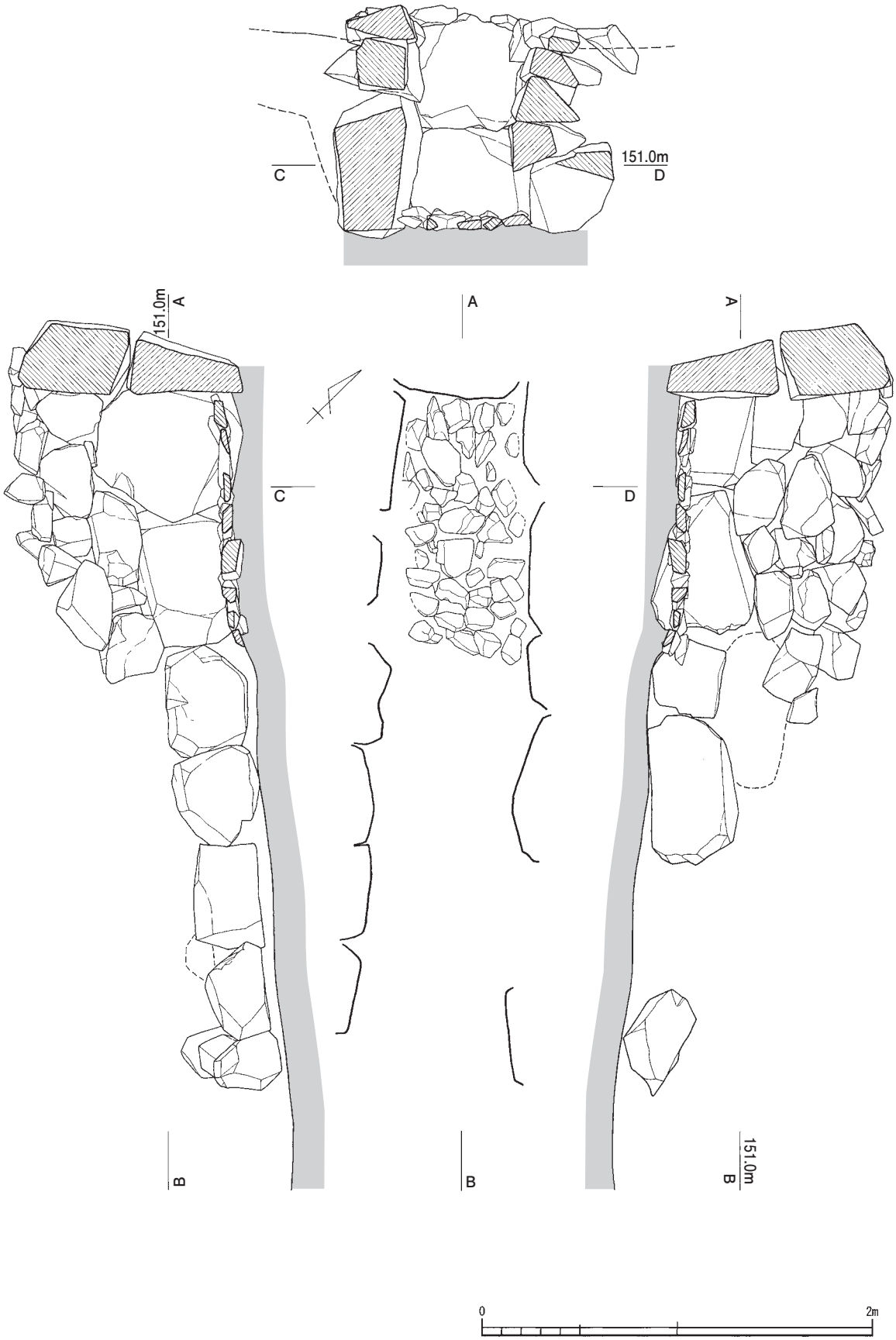
1．10YR５/６　黄褐　シルト質極細砂（有機物・地山ブロック含む）
2．10YR/６/６　明黄褐　シルト質極細砂
3．10YR４/３　にぶい黄褐　シルト質極細砂（10YR３/２黒褐ブロック含む）
4．５YR４/４　にぶい赤褐　シルト質極細砂（地山土～八鹿累層）
5．10YR５/３　にぶい黄褐　シルト質極細砂（10YR３/２黒褐ブロック含む）
6．10YR３/２　黒褐　シルト質極細砂（10YR５/３黄褐ブロック含む）
} 墳丘上層
7．10YR５/６　黄褐　シルト質極細砂（地山ブロック多く含む）**墓壙埋土**
8．10YR５/３　にぶい黄褐　シルト質極細砂（10YR３/２黒褐ブロック含む）
9．10YR５/４　にぶい黄褐　シルト質極細砂
10．10YR４/３　にぶい黄褐　シルト質極細砂
11．10YR５/６　黄褐　シルト質極細砂
12．7.5YR４/４　褐　シルト質極細砂（古墳以降堆積土）
13．10YR３/１　黄褐　シルト質極細砂
14．10YR４/３　にぶい黄褐　シルト質極細砂
14'．10YR４/３　にぶい黄褐　シルト質極細砂（黒褐極細砂含む）
15．10YR４/３　にぶい黄褐　シルト質極細砂

0　2m

第17図　上エ山古墳群 C支群 ３号墳土層断面図



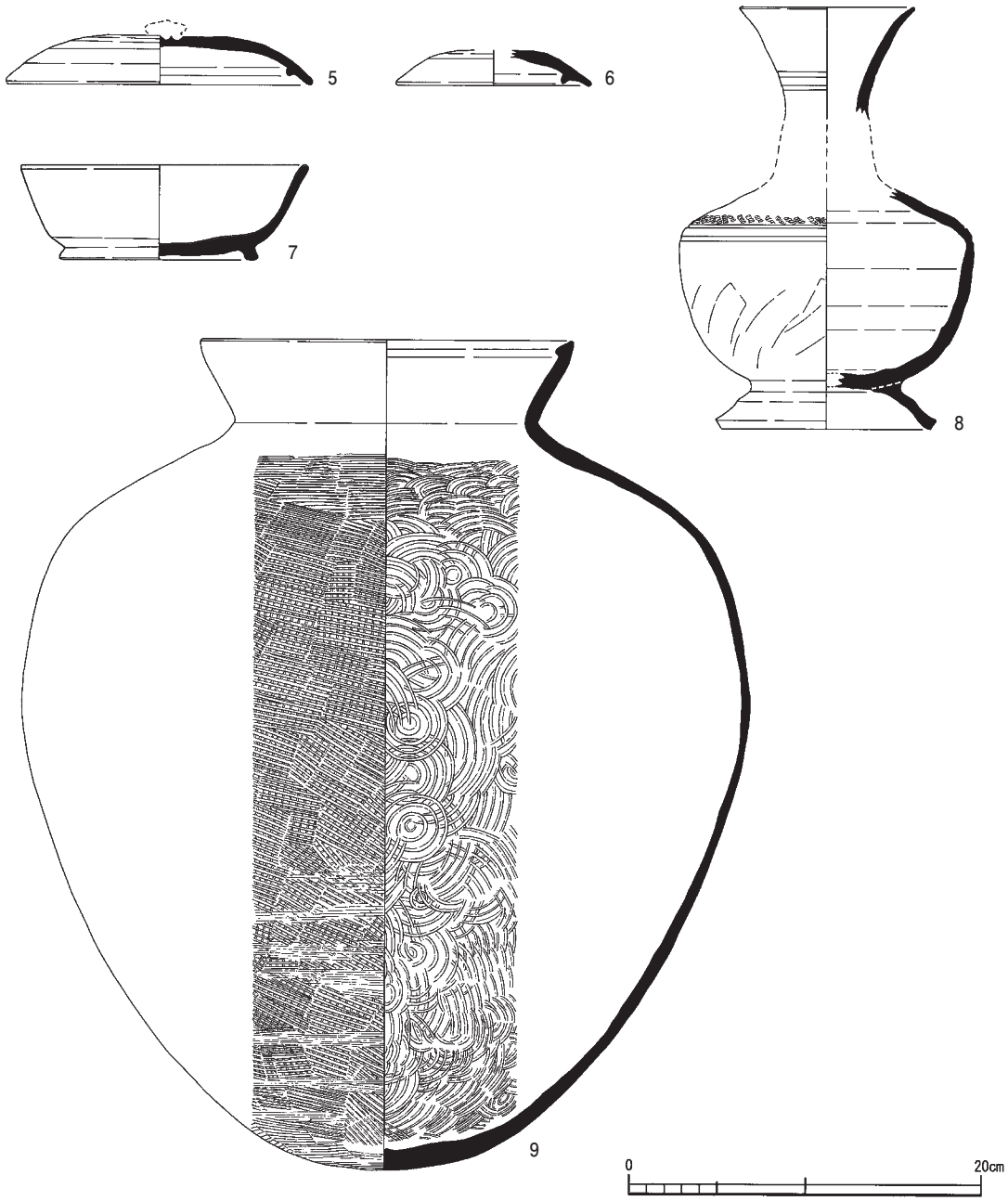
第18図　上エ山古墳群 C支群 3号墳石室平面図



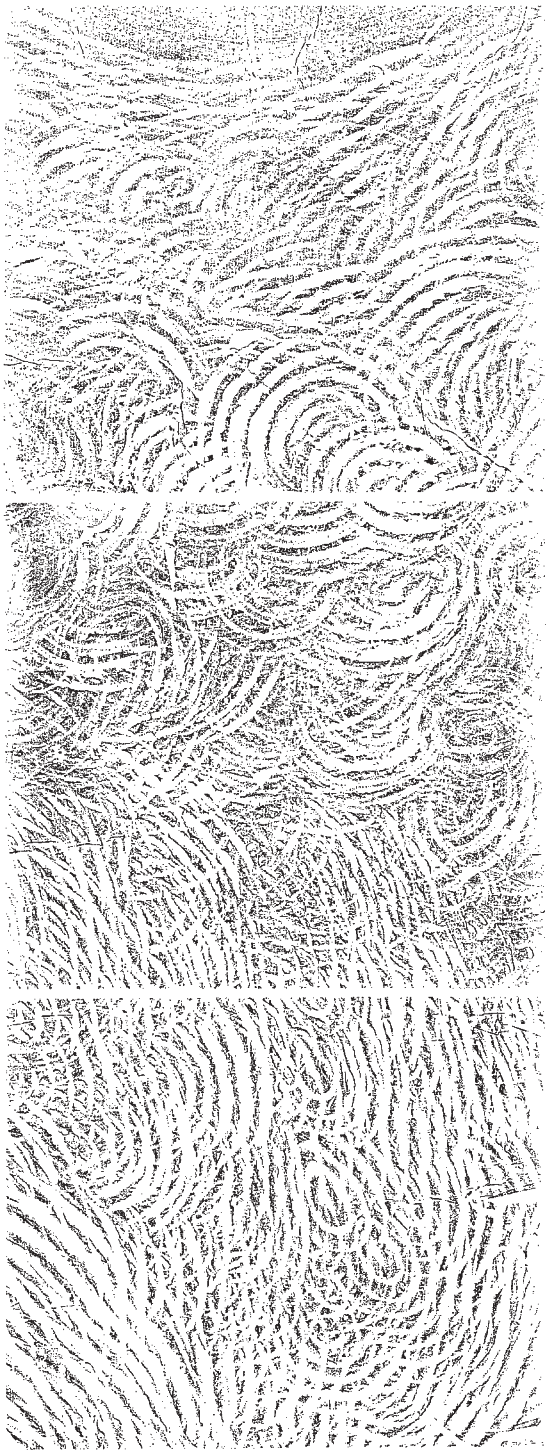
第19図　上エ山古墳群 C支群 3号墳石室実測図

出土遺物

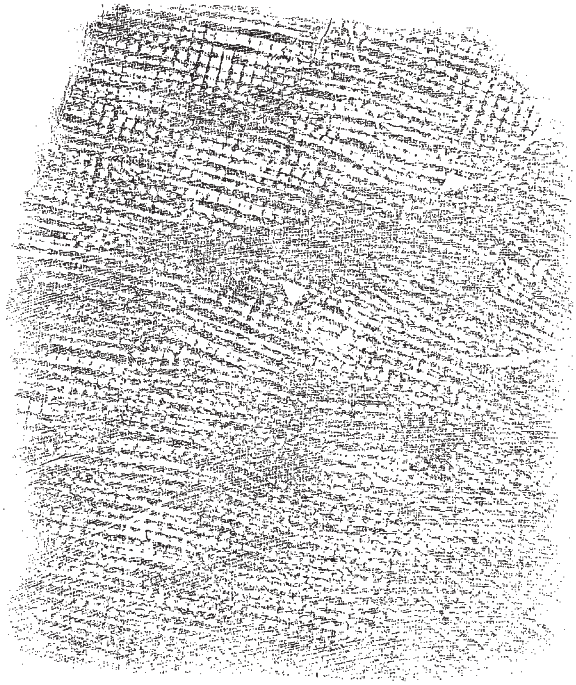
須恵器５点が出土している。杯蓋２点はともに内湾し端部丸くなり、小さな反りを残している。大きさの大小がある。（７）は（５）とセットになる杯身で外傾する方形の高台を有する。端部は丸く反る。ロクロナデで口径は16.2㎝と大形であり新相を示し平城期まで下るものと思われ、他の土器より新しくなる。（８）は細かく分かれて出土している。内湾し角張る脚台で体部の肩に稜線は持たない。（８）と開口部に置かれた壺（９）は古くなり、出土土器は少数ながら３時期に分けられる。（５）（７）のセットは敷石上から出土しており、最終埋葬時の遺物で８世紀に入ろうかと思われる。調査で確実に追葬や片付けは確認できなかったので、新しい時期としておく。



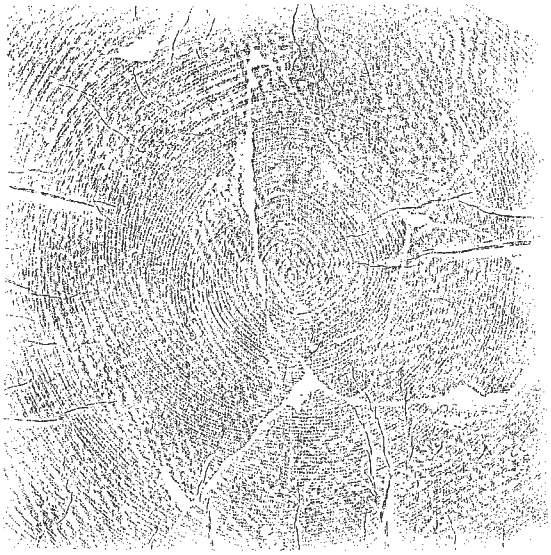
第20図　上エ山古墳群 C支群 ３号墳出土土器実測図



内面



外面



外面（底部）

第21図　上工山古墳群 C支群 3号墳出土土器（9）拓本

４号墳

外形

調査区中央に位置し、調査前から墳丘は明瞭であった。今回調査した中で最も大きな古墳である。３号墳とは裾を接しており、そこに掘り割り状の窪みを掘り込んでいる。調査前でも天井石が露出しており東西の裾部は読み取れた。山側には明瞭な掘り割りを有さない。低い方の開口部側は前面に多少手を加え墳裾と想定される。調査の結果、西側の方がより深く掘り割りを設けている。墳丘は円形ではなく、前面が隅円方形に近い形状を呈していることから方形を意識しているような感じである。ただ、隅円となり辺とは言い難いので不定円形か隅円方形としておく。東西８ｍ、南北10ｍ位の墳丘となる。掘り割り部には石材が散乱しているが、明確な外部施設ではない。

２号墳とは異なり、主体部構築場所が斜面でないことから、東西とも同じように掘り下げている。墓壙は最大で0.9ｍ掘り下げる。基底石ならびに２石目が墓壙内に納まる。掘り方埋土を入れてから３石目を積む。北半はこの段階から墳丘築成にかかっている。３石目は掘り方肩部に置き、安定するように黒褐シルト質極細砂を積む。この層は３石目の上まで及び、その上に地山土である明赤褐シルト質極細砂を積んでいる。北側の方に行くほど厚くなる。ここまでが下層築成土で、側壁の下から３石目の目地が通る部分に相当する。あと１石で天井石になる位置で比較的高い位置となる。北側と南側の低い方は細かい層となって積んでいる。その上が上層築成土で天井石から斜めに積み、その層から墳裾に向かって幅の厚い層となっている。

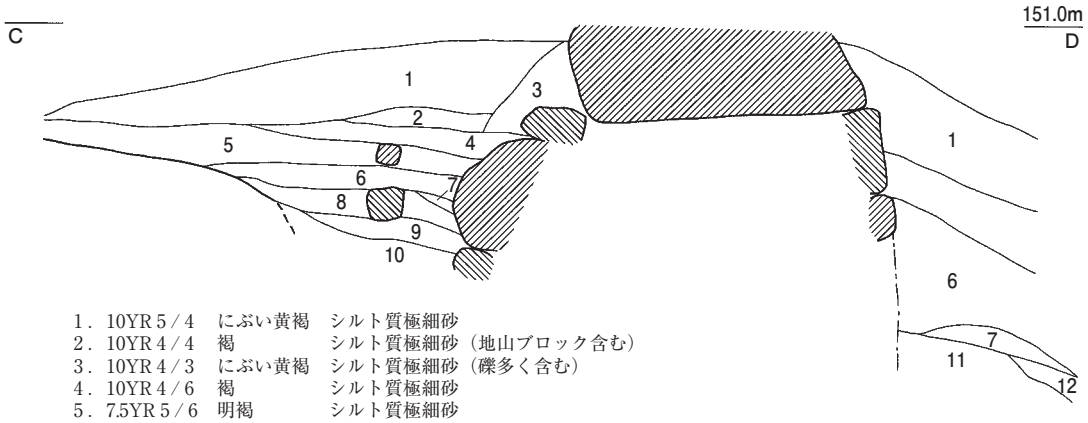
東側に当初５号墳とした高まりが存在した。古墳と思われたが礫群が堆積しており、古墳とは判断できなかった。遺物も認められなかったことから、古墳とはしなかったが、墳丘状になり径８ｍ前後である。何らかの理由で早くに手が加わった残骸であろうか。墳裾にあたる部分にも多くの礫が広がっている。

主体部

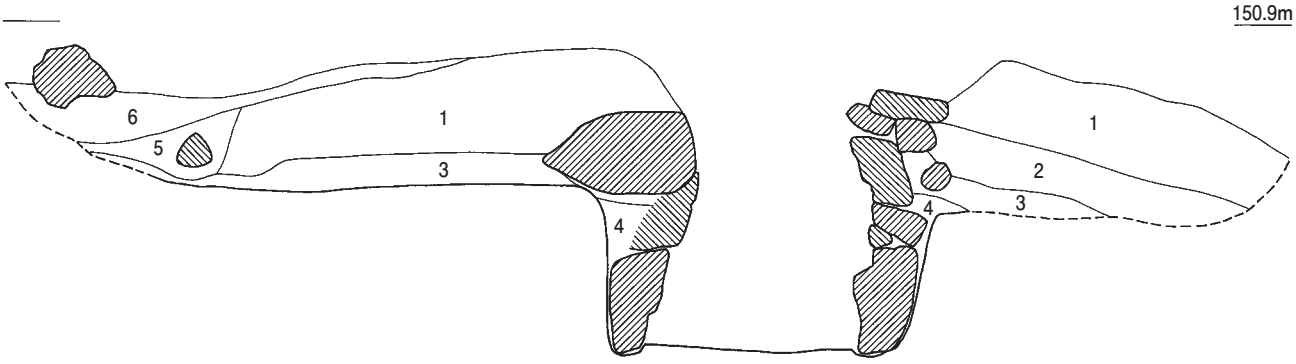
横穴式石室で天井石も奥壁部分の１石が残っている。奥壁は大形で１石の鏡石となっている。床面で幅0.9ｍ、天井石との接点で幅0.75ｍ、高さ1.25ｍを測る。床面から下に約0.2ｍ掘り込んで据えている。縦積みで最大の厚み0.5ｍである。上端は丸く左右に小形の石材を挟んでおり、この２石に天井石が架かり、奥壁には直接天井石は載っていない。天井石は奥壁上に１石だけあり厚さ0.8ｍ、幅1.5ｍを測る断面台形の大形石材である。現状では露出しており、築造時も埋設されていたか疑問である。石室はほぼ南北に主軸を有している。

石室平面プランは無袖であるが中央が幅1.1ｍとやや広くなり、開口部は1.0ｍとなる。墓壙掘り方は奥壁から開口部手前までであるが完掘していない。長さは4.8ｍであり、奥壁から1.8ｍまでの床面には敷石が見られ、棺設置した個所である。敷石は石室と同じ地元の石材を使っており、角礫で特に円礫や板状を使う意識は認められない。石室は裏込めをほとんど使用しない積み方で現状では変形している。内傾している箇所が多いが、一部外側に傾いている部分もある。側壁は基底石を横積みにして並べている。西壁奥壁前と東壁の奥から３石が大きめの石材で、それ以外はやや小さめの石材を積んでいる。西壁は通っているが、東壁は目地がずれている。手前の３石目の上が大形石材２石目と目地を合わせている。

奥壁手前に同じ角礫石材を使用した石棺が西壁沿いに西側壁を利用して築かれている。幅0.25ｍ、長さ1.05ｍ、高さ0.3ｍの規模である。床面は敷石をそのまま利用している。敷石隙間に鉄釘が存在しており、石棺東側同様敷石上にも鉄釘が出土していることから、元々木棺が置かれた後に石棺が築かれたと思われる。粗いつくりの石棺である。

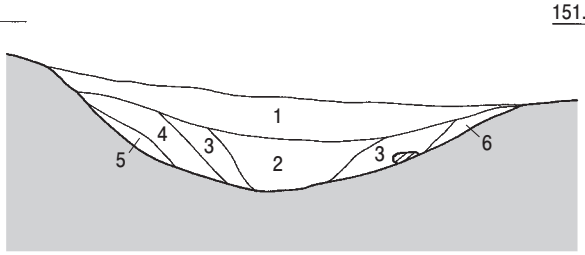


1．10YR 5／4　にぶい黄褐　シルト質極細砂
2．10YR 4／4　褐　シルト質極細砂（地山ブロック含む）
3．10YR 4／3　にぶい黄褐　シルト質極細砂（礫多く含む）
4．10YR 4／6　褐　シルト質極細砂
5．7.5YR 5／6　明褐　シルト質極細砂
6．5 YR 5／6　明赤褐　シルト質極細砂（地山客土）
7．10YR 3／1　黒褐　シルト質極細砂
8．7.5YR 5／6　明褐　シルト質極細砂
9．10YR 3／1　黒褐　シルト質極細砂
10．7.5YR 5／6　明褐　シルト質極細砂
11．10YR 6／4　にぶい黄褐　シルト質極細砂
12．10YR1.7/ 1　黒　シルト質極細砂（クロボク）



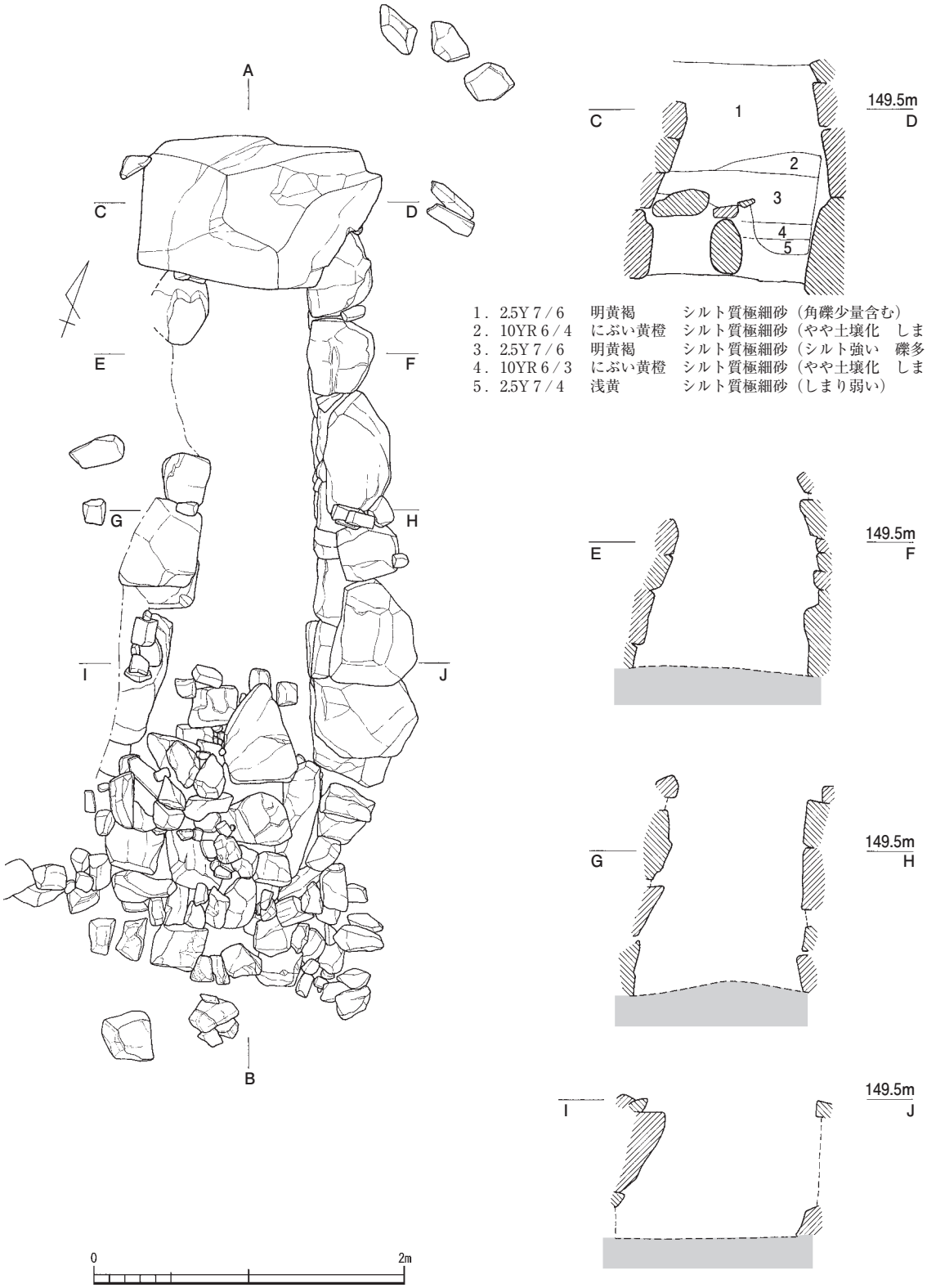
1．10YR 6／6　明黄褐　シルト質極細砂　**墳丘上層**
2．10YR 5／3　にぶい黄褐　シルト質極細砂（10YR 3／2 黒褐ブロック含む）
3．10YR 3／2　黒褐　シルト質極細砂（10YR 5／3 ブロック含む）
4．10YR 5／6　黄褐　シルト質極細砂（地山ブロック多く含む）**墓壙埋土**
5．10YR 5／6　黄褐　シルト質極細砂
6．7.5YR 4／4　褐　シルト質極細砂（古墳以降堆積土）

墳裾掘り割り



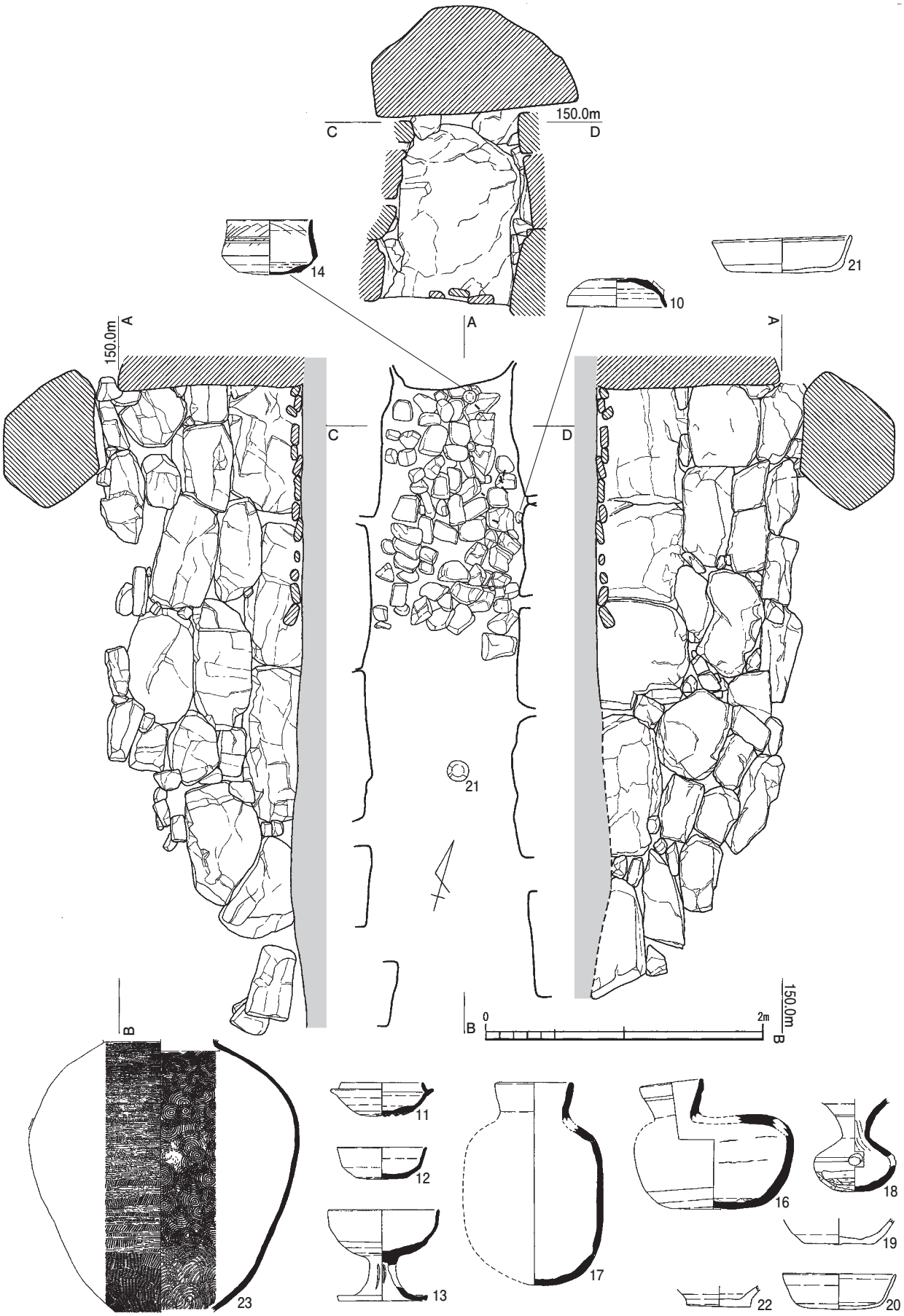
1．10YR 7／6　明黄褐　シルト質細砂
2．7.5YR 5／2　灰褐　シルト質細砂（シルト強い，細礫含む，土壌化）
3．10YR 6／3　にぶい黄橙　シルト質細砂（細礫含む，土壌化）
4．10YR 5／2　灰黄褐　シルト質細砂（礫含む）
5．2.5Y 7／4　浅黄　シルト質細砂（シルト強い，３号墳墳丘）
6．10YR 7／6　明黄褐　シルト質細砂（１よりシルト強い，４号墳墳丘）

第22図　上エ山古墳群 C支群 4 号墳土層断面図

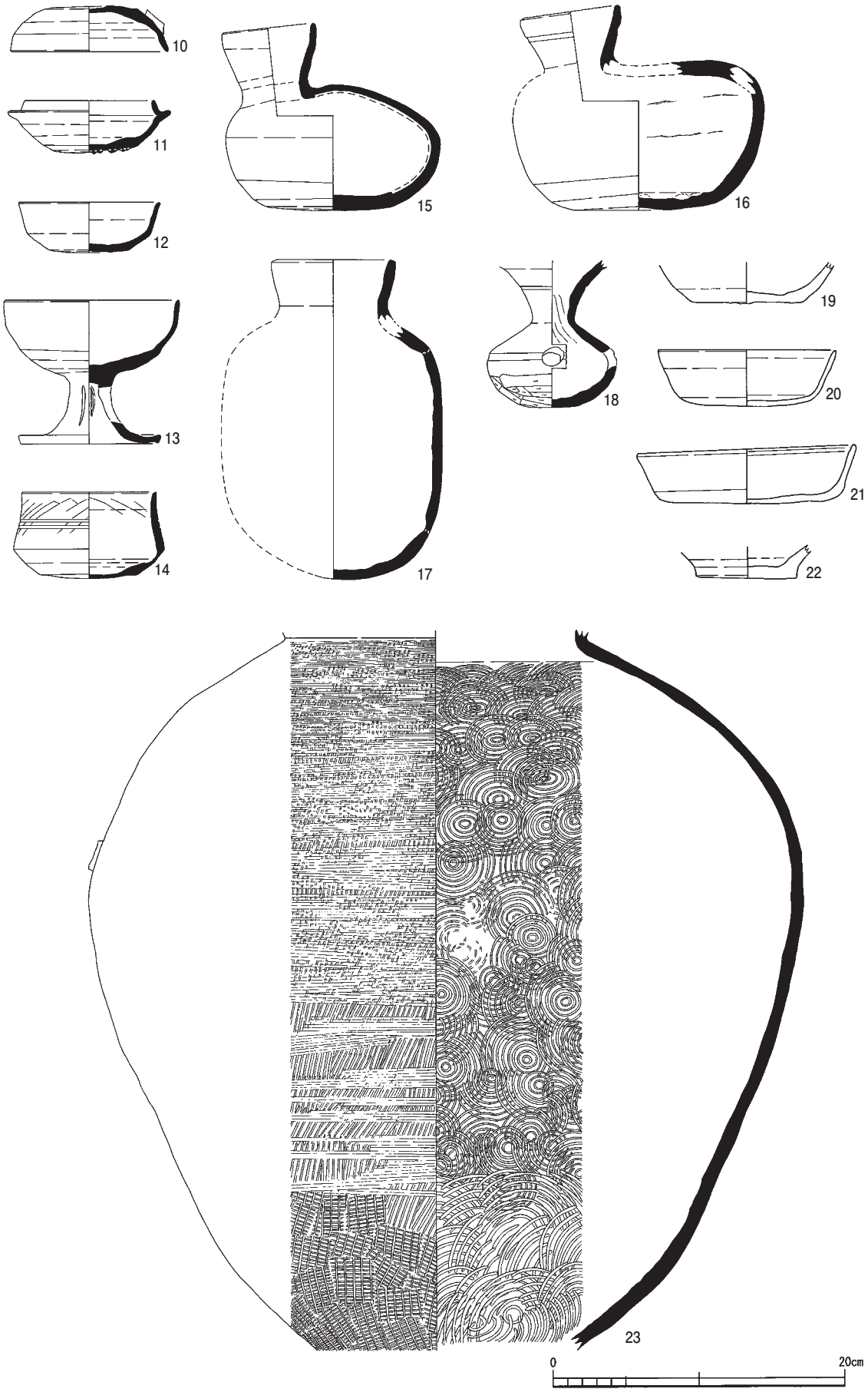


1．2.5Y 7／6　明黄褐　シルト質極細砂（角礫少量含む）
2．10YR 6／4　にぶい黄橙　シルト質極細砂（やや土壌化　しまり弱い）
3．2.5Y 7／6　明黄褐　シルト質極細砂（シルト強い　礫多く含む）
4．10YR 6／3　にぶい黄橙　シルト質極細砂（やや土壌化　しまり弱い）
5．2.5Y 7／4　浅黄　シルト質極細砂（しまり弱い）

第23図　上エ山古墳群 C支群 4 号墳石室平面図・断面図



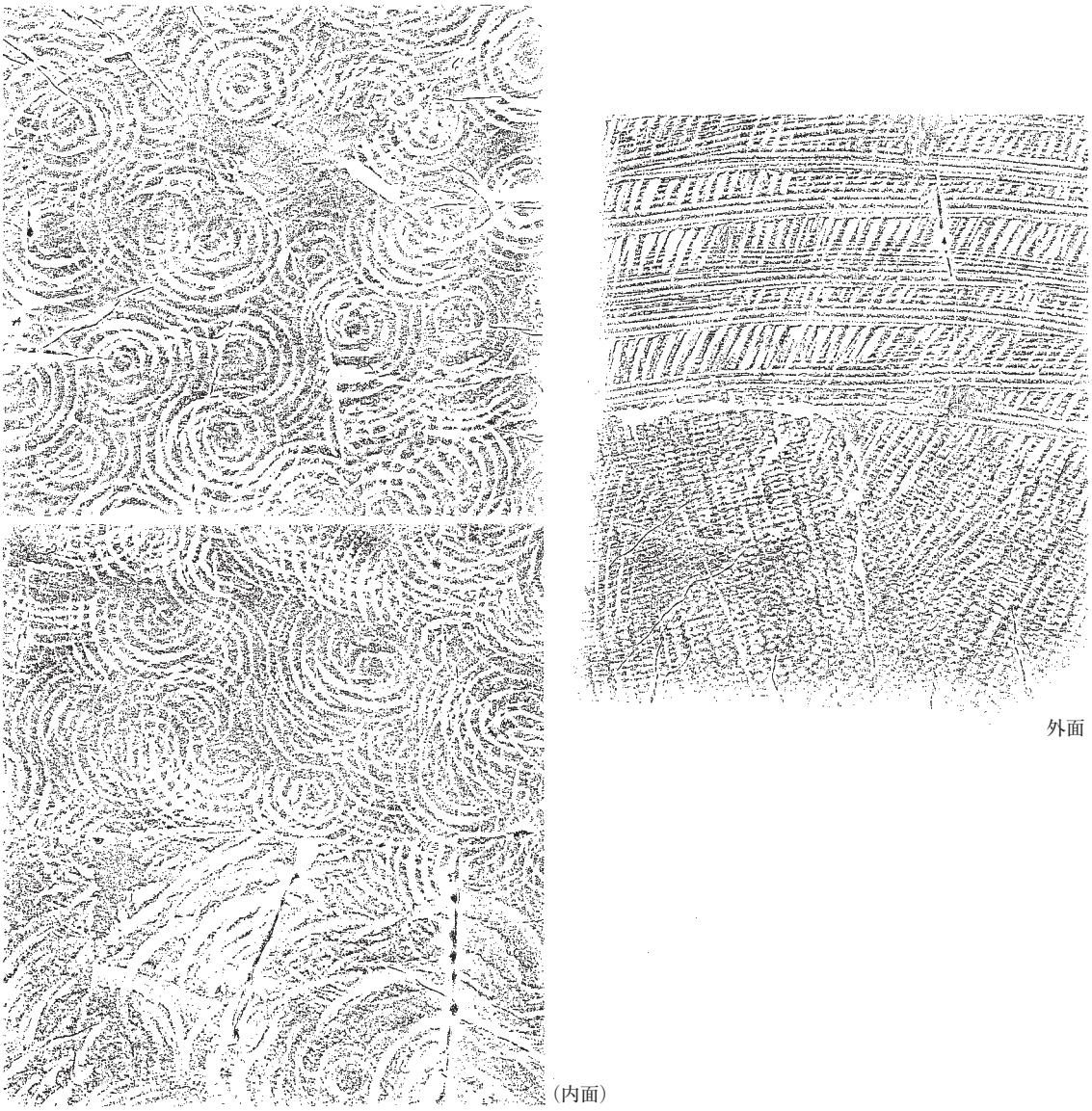
第24図　上エ山古墳群 C支群 4号墳石室実測図



第25図　上工山古墳群 C支群 4号墳出土土器実測図

出土遺物

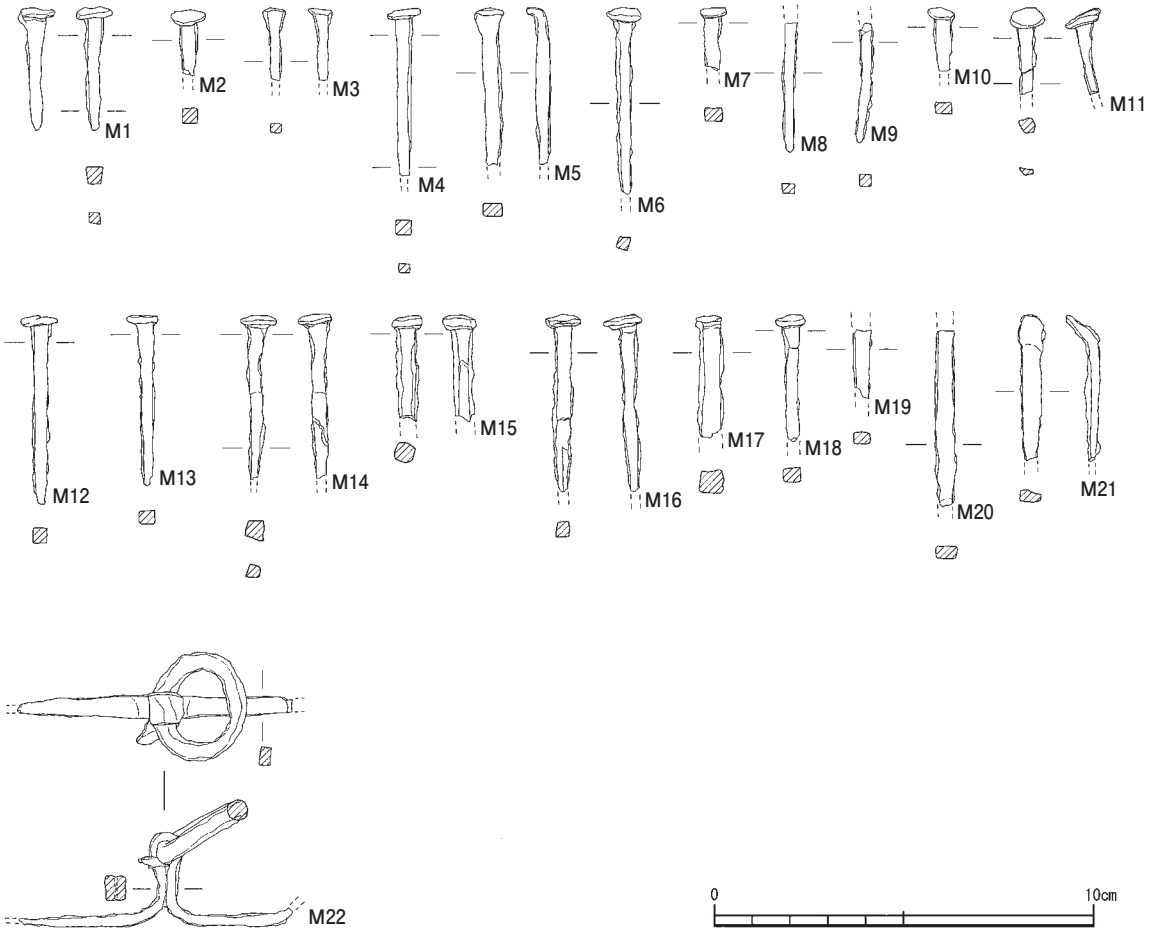
須恵器・土師器・鉄器が出土している。出土位置は敷石上、石室内、開口部から手前に分けられ、開口部周辺が最も多くの土器が出土している。３号墳同様大形甕（23）も置かれており、大きめの提瓶・平瓶（15～17）も出土している。他に須恵器杯蓋（10）・杯（11・12）・高杯（13）・碌（18）・盌（14）と土師器杯・椀が出土している。墳丘裾の破片と接合し、意図的に割られたものもある。（23）甕の当て具に２種あり（19～22）大形である。（10）は敷石上から出土し時期を示すものと思われるが、同様に床面出土の遺物に幅がある。この点は２号墳とも共通する。（14）の盌は把手があった可能性があり古相を示す。強いロクロナデで稜線が鋭い。逆に土師器杯は新しいと思われる。TK217型式（飛鳥Ⅱ）と考えるが、追葬があるのか、全体に新しいとするかは検討課題である。土師器椀は後世のものと思われる。馬具の破片と思われる鉄器（M22）は特記される。



第26図　上エ山古墳群 C支群 ４号墳出土土器（23）拓本

第４表　上エ山古墳群C支群４号墳出土鉄製品計測表

番号	種別・器種	遺構	法量（cm）				備考
			長さ	幅	厚さ	重量（g）	
M１	釘	４号墳	3.35	0.45	0.45	1.30	
M２	釘	４号墳	(1.75)	0.40	0.40	0.90	
M３	釘	４号墳	(1.90)	0.30	0.20	0.60	
M４	釘	４号墳	(4.45)	0.40	0.40	1.50	
M５	釘	４号墳	(4.15)	0.50	0.35	1.80	
M６	釘	４号墳	(4.95)	0.40	0.35	1.80	
M７	釘	４号墳	(1.65)	0.45	0.35	0.60	
M８	釘	４号墳	(3.40)	0.35	0.25	0.50	
M９	釘	４号墳	(3.15)	0.30	0.30	0.60	
M10	釘	４号墳	(1.65)	0.45	0.30	0.60	
M11	釘	４号墳	(2.30)	0.40	0.40	0.80	
M12	釘	４号墳	5.00	0.40	0.40	2.00	
M13	釘	４号墳	4.50	0.40	0.35	1.40	
M14	釘	４号墳	(4.35)	0.50	0.55	1.80	
M15	釘	４号墳	(2.80)	0.55	0.65	2.40	
M16	釘	４号墳	(4.65)	0.40	0.45	2.10	
M17	釘	４号墳	(3.20)	0.65	0.60	2.40	
M18	釘	４号墳	(3.30)	0.45	0.40	1.00	
M19	釘	４号墳	(1.80)	0.45	0.30	0.50	
M20	釘	４号墳	(4.65)	0.60	0.30	1.70	
M21	釘	４号墳	(3.85)	0.55	0.35	1.50	
M22	金具	４号墳	(7.25)	2.85	3.35	8.40	



第27図　上エ山古墳群 C支群 ４号墳出土鉄製品実測図

6号墳

外形

調査時に２区１号墳として調査していた古墳である。谷部に位置しているが、上エ山古墳群全体から見ると２～４号墳と同一支群と考えたので、Ｃ支群６号墳とした。西側に集石があり古墳ではなかったが、周辺にもう１基あった可能性はある。Ｃ支群１号墳から200m離れて谷部の最奥部に築かれている。調査前の状況でもある程度墳丘は読み取れ、調査後も余り大きな変化がなかった古墳である。コンタラインは方形に近い形状を示すが、開口部の状況からは不定円形とすべきかと思われる。コーナー部が石室主軸とずれることから方墳とは考えなかった。最大長８ｍ前後の規模になる。墳裾も掘り割りや周囲に溝を巡らすなどの明瞭な遺構は認められない。

ただ開口部から延びる石列は外護列石の可能性が非常に高い。１石しかないところがほとんどなのが恨まれる。この列石を測ると南北4.8mになり楕円形になる。構築された位置が高いのが特徴的である。南側の溝状になっている部分は掘り割りではなく、古墳が谷地形に立地していることから生じた自然地形と考えている。

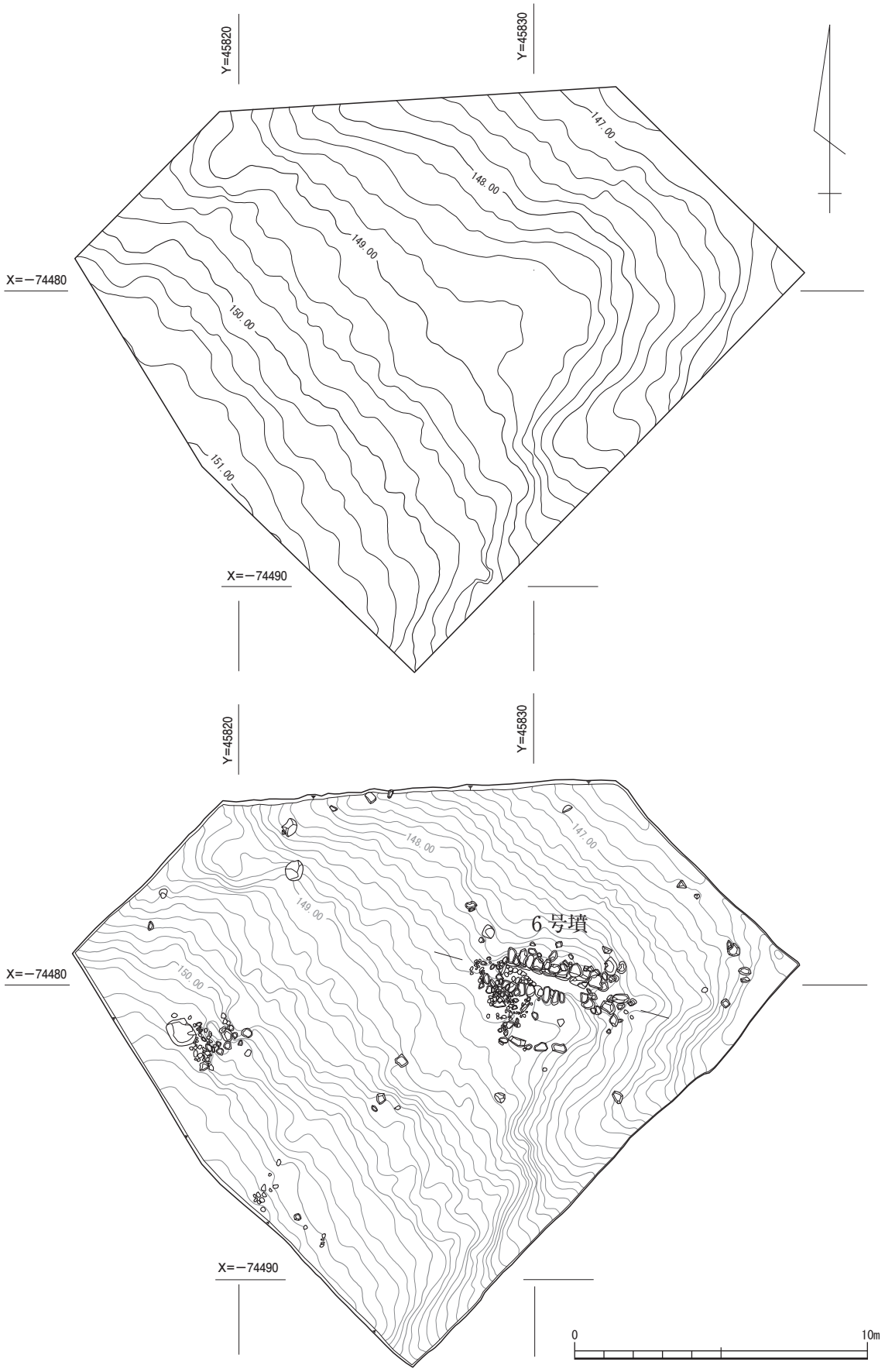
墳丘は高さ0.6m残っており、石材残存部とほぼ同じである。墓壙を掘り込んでから基底石を据え、埋土を積むものであるが、細分しにくい層であった。他の古墳と異なり、礫が多く混じった墳丘土である。墓壙肩部まで埋め、側壁２石目までをまず積んでいる。この土層の端部に外護列石と思われる石列が並んでいる。

主体部

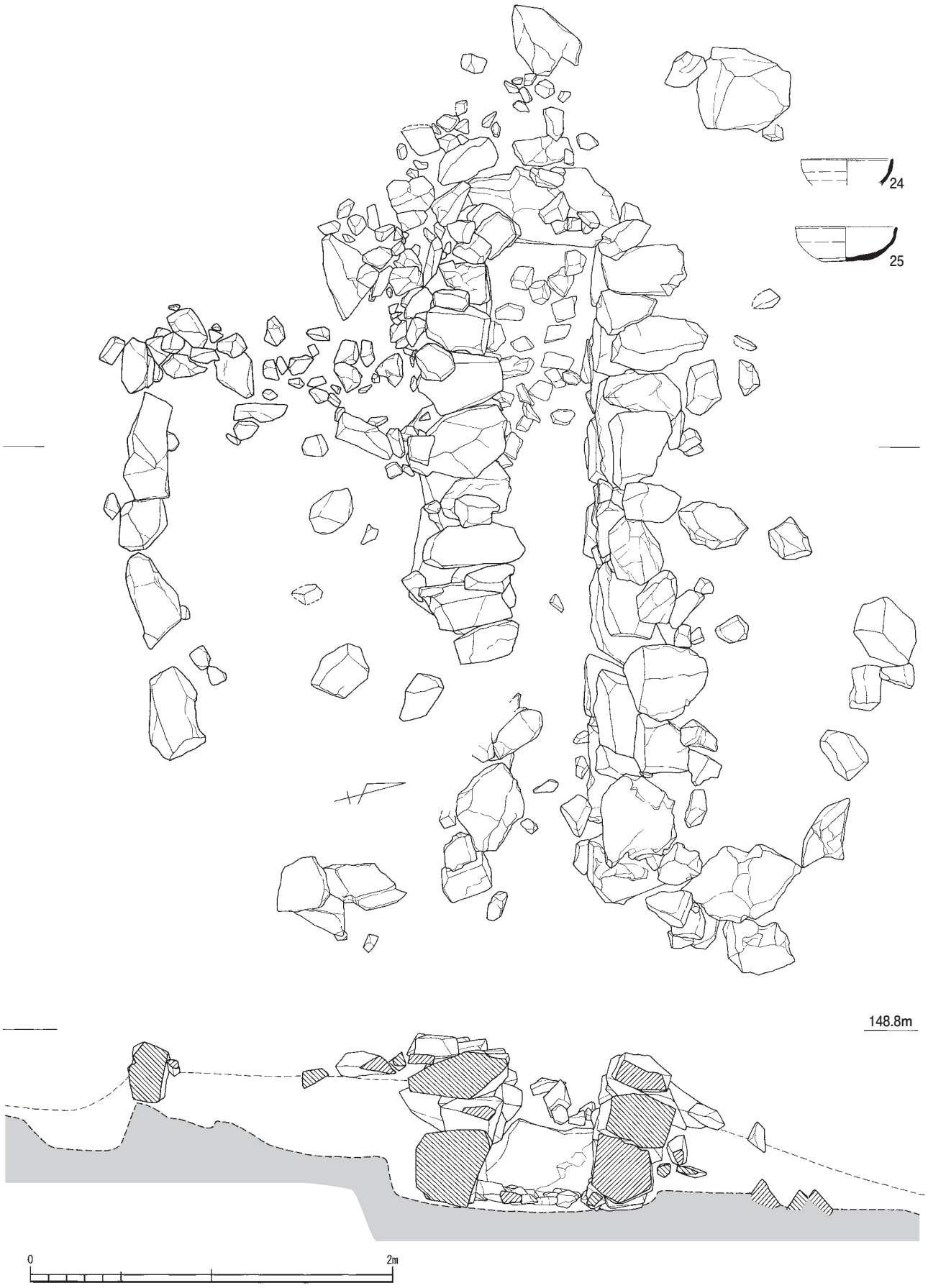
無袖の横穴式石室で狭長なタイプである。主軸はＮ75°Ｗと東西方向に近い角度を採る。隅円の長方形の掘り方を奥壁寄り約３ｍにだけ不定方形に掘り込んでいる。開口部周辺には掘り方は認められない。石材は地元山塊の石を利用している。長さ3.6m、奥壁幅0.6m、開口部幅0.5mを測る。奥壁から１ｍ付近で床面の幅を狭めているが、袖部は明らかではない。敷石手前で幅0.5mになっている。ただ、床面に敷石を配していることから、玄室の意識はなくても棺を置く意識はあったと思われる。北側壁はほぼ直線になっているが、南側壁だけ段を有しており、片袖のようになっている。天井石は全く残っていなかったので石室の高さは不明である。最もよく残っているところで0.9mを測る。高さは余り高いとは思われず天井石まで１石を欠く程度と推定する。

他の石室と異なる点は用石法にある。完全ではないが、竪穴式石室などの構築に見られる小口積みに近い積み方をしている。他の古墳が縦積みで大形の石を立てるなど最小限の使用石材で抑え、構築手間を省いているのに対して、小口積みにより石材はやや多く使っている。特に上面の方にその傾向が見られ、大形の石材は余り使用していない。大形の石材はやはり基底石に使われている。最も大きな石は袖部に該当する平面プランが変化するところに配された石である。長さ0.8m、高さ0.45mで横積みされている。基底石に裏込めが少ないのは他の古墳と共通している。この石から開口部に向けて石材は小さくなり、高さも低くなる。南壁はこの大形石の東横上にも大形の石を配し、奥壁側との高さを合わそうとしている。それに対して北壁は比較的目地が各段で通っている。ある程度石材の間に落とし込むような積み方をしている。

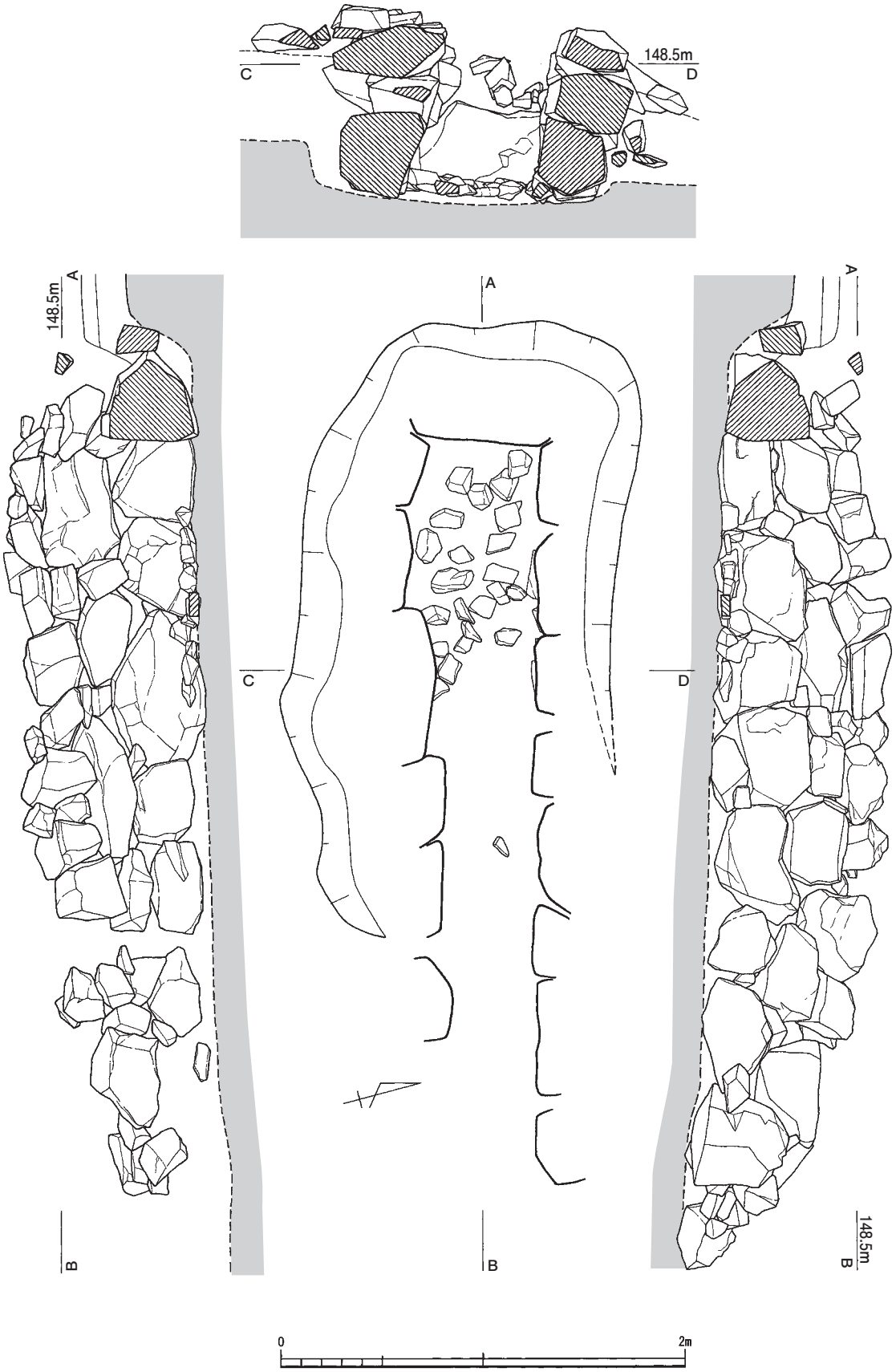
奥壁から1.2mのところまで敷石が認められる。この位置は前記した袖状の幅を変える位置より手前になっている。南壁近くだけとび出しており、意図があるのか、後世にある程度手を加えられたかであろう。北壁沿いは変化部と一致する。



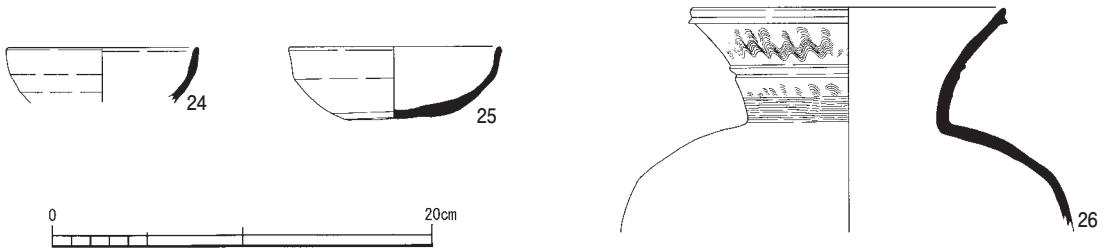
第28図　上エ山古墳群 C支群 6号墳地形測量図・配置図



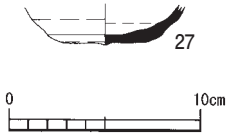
第29図　上エ山古墳群 C支群 6 号墳石室平面図・断面図



第30図　上エ山古墳群 C支群 6号墳石室実測図



第31図　上エ山古墳群 C支群 6号墳出土土器実測図



第32図　上エ山古墳群 出土土器実測図

出土遺物

石室から2点の須恵器杯身（24・25）と南側墳裾から須恵器壺（26）が出土している。(24）は開口部近くの礫下から出土した内湾し端部丸い口縁部で、ロクロナデで仕上げる。(25）は敷石上から出土している杯身で内湾し端部肥厚ぎみに丸い。ロクロナデで底部はヘラ切りからナデ、内面にも仕上げナデが見られる。この2点はＴＫ217型式であるが、もう1点南側墳裾から出土した（26）はシャープで他の古墳同様時期の遡る遺物である。扁平に近く内湾し大きく外反する。端部は内外に肥厚するようにつまみだしており、波状文帯が2帯ある。上は細かい波状文であるが、下は上半だけで施文後に下半は消されている。間に凹線があり、口縁部・外面はロクロナデである。胎土精良で褐灰～黒で古相を示す。

6号墳出土ではないが、4号墳裾で5号墳（地点）と考えた裾から1点の須恵器が出土している。(27）は丸底で内湾している杯身で口縁部を欠いている。底部はヘラ切りからナデ、内面はロクロナデから1方向の仕上げナデが見られる。外面に有機質が付着している。

（4）小結

上エ山古墳群の調査はＡ支群2基、Ｃ支群4基の古墳調査を実施した。Ａ支群は尾根上に営まれる箱式石棺を主体部とする古墳、Ｃ支群は山腹から谷部に築かれた横穴式石室を主体部とする古墳であった。時期も異なり、Ａ支群は前期、Ｃ支群は終末期というより飛鳥時代に入っている。

上エ山古墳群を4つの支群に分けたが、Ａ支群だけが前期と考えられる。未調査であるが、Ｂ・Ｄ支群はＣ支群に近いものと思われるが、墳丘規模などしっかりしているので、Ｃ支群よりは造墓活動に入ったのは早かったと考えている。

Ａ支群の箱式石棺を埋葬主体とする古墳は和田山町周辺に限らず但馬の尾根筋では普遍的に見られる古墳で、その1例を加えたことになる。他の古墳同様副葬品を保有していないことから時期を明確にはできない。Ａ支群の尾根筋にはまだ複数の古墳が続いて構築されている。

Ｃ支群の横穴式石室は小さいもので、兵庫県下でも小さい部類に入る調査例になろう。また、最も新しい時期に構築された古墳群として位置付けられる。以前なら追葬でもなく、再利用とされたような飛鳥期の終わり頃の遺物が出土している。

第５表　上エ山古墳群出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	色調		胎土	法量（cm）			備考
						内面	外面		口径	器高	底径	
1	須恵器	杯蓋	２号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ	天井部平たく、端部丸い	N４／０ 灰	N５／０灰 10Y６／１ 灰	細砂少し含む	10.1	3.4		棺内出土 内面にヘラ記号
2	須恵器	杯身	２号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ	平らな底から内湾して立ち上がる　口縁端部丸い	2.5Y８／１ 灰白		細砂少し含む	9.8	3.8	6.8	棺内出土 内外面にヘラ記号
3	須恵器	杯身	２号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ	平らな底から内湾して立ち上がる　口縁端部丸い	2.5Y８／２ 灰白		粗砂少し含む	(9.8)	3.65	(5.1)	内面にヘラ記号
4	須恵器	はそう	２号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ、内面ナデ	体部中位に沈線をめぐらし、円孔を穿つ	５Y７／１ 灰白		細砂少し含む		(7.2)		
5	須恵器	杯蓋	３号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ、仕上げナデ	平たい天井部、つまみ剥落、端部丸く、内面にかえり	2.5GY７／１ 明オリーブ 灰	2.5GY８／１ 灰白	細砂少し含む	17.2	(2.8)		
6	須恵器	杯蓋	３号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ	平たい天井部、端部丸く、内面にかえり削り出す	５Y６／１灰	2.5Y６／２ 灰黄	細砂わずかに含む	(10.8)	(2.0)		全体に灰かぶり
7	須恵器	杯	３号墳	ロクロナデ、高台貼り付けナデ	やや窪む底部から内湾して立ち上がる体部、口縁丸くやや肥厚する	2.5Y８／２ 灰白	10YR８／２ 灰白	細砂少し含む	16.2	5.4	11.2	
8	須恵器	台付壷	３号墳	ロクロナデ、高台貼り付けナデ	外反して細く伸びる口縁中位、肩の張った体部中位にそれぞれ２本の沈線、肩部に刺突文を施す	N６／０ 灰	10Y４／１ 灰	細砂わずかに含む	(9.8)	(24.0)	(11.9)	
9	須恵器	甕	３号墳	格子タタキ後カキメ、内面同心円タタキ	丸底、体部重心は上部にあり、外傾して開く口縁端部は内側に肥厚される	2.5Y６／２ 灰黄		粗砂・極粗砂少し含む	(21.0)	47.4		
10	須恵器	杯蓋	４号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ、仕上げナデ	天井部やや窪み、端部丸い	N６／０ 灰	N５／０ 灰	細砂少し含む	10.7	3.1		外面に土器片付着
11	須恵器	杯身	４号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ、仕上げナデ	口縁内傾して立ち上がる	N７／０ 灰白	2.5Y７／１ 灰白	細砂少し含む	8.8	3.6		外面に自然釉付着
12	須恵器	杯身	４号墳	ロクロナデ、底部ヘラ切りのちナデ	ほぼ平底から緩い稜を持って立ち上がり、端部丸い	2.5Y６／１ 黄灰	2.5Y７／１ 灰白	粗砂少し含む	(9.6)	3.45		
13	須恵器	高杯	４号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ、仕上げナデ	椀状の杯部、脚部外反し端部下方に肥厚２か所に透かし状の切り込み	2.5GY６／１ オリーブ灰	10Y７／１ 灰白	細砂わずかに含む	(11.9)	9.8	9.4	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	色調		胎土	法量（cm）			備考
						内面	外面		口径	器高	底径	
14	須恵器	盌	4号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ、仕上げナデ	ほぼ平底から稜を持って内傾して立ち上がる　2条の沈線めぐる　端部丸い	5Y 6／2 灰オリーブ	2.5Y 6／2 灰黄	細砂少し含む	(9.2)	6.0	(6.8)	
15	須恵器	平瓶	4号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ、底部ナデ	扁平な体部上面から内湾気味に立ち上がる口縁	N 6／0 灰		細砂少し含む	6.1	12.9	8.5	口縁部。肩部に自然釉付着
16	須恵器	平瓶	4号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ、底部ナデ	扁平な体部上面から内湾気味に立ち上がる口縁　外面に沈線めぐる	10Y 5／1 灰	10Y 6／1 灰	細砂少し含む	6.4	(14.1)	9.8	
17	須恵器	提瓶	4号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ、側面ナデ	扁平な体部短側面から内湾気味に立ち上がる口縁	2.5Y 7／2 灰黄	10Y 7／1 灰白	細砂少し含む	(7.7)	(22.0)		俵壷の可能性？
18	須恵器	はそう	4号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ、仕上げナデ　底部ヘラ切りのち板ナデ	扁平気味の体部から急激にしぼまる頸部口縁部は外反して大きく広がり、沈線がめぐる　体部中位に円孔を穿つ	10Y 5／1 灰		粗砂少し含む		(10.1)		
19	土師器	椀？	4号墳	ロクロナデ、仕上げナデ、底部ヘラ切りのちナデ	平底から内湾して立ち上がる	7.5YR 7／4 にぶい橙		粗砂・極粗砂含む		(2.85)	7.4	
20	土師器	杯	4号墳	ロクロナデ、仕上げナデ、底部ヘラ切りのちナデ	平底から外傾して立ち上がる	10YR 7／3 にぶい黄橙	10YR 7／4 にぶい黄橙	粗砂少し含む	(12.2)	3.9	(9.4)	赤色土塗布
21	土師器	杯	4号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ	平底から外傾して立ち上がる　口縁　端部内面に1条の沈線	7.5YR 7／6 橙		細砂わずかに含む	14.9	5.1	12.2	赤色土塗布
22	土師器	椀？底部	4号墳	ロクロナデ、仕上げナデ、底部糸切りのちナデ	平底	7.5YR 6／6 橙		細砂少し含む		(2.3)	6.6	
23	須恵器	甕	7号墳	格子タタキ後カキメ、内面同心円タタキ	重心は上部にある体部	10Y 5／1 灰	N 5／0 灰 ～2.5Y 3／1 黒褐	細砂わずかに含む		(49.5)		外面肩部に自然釉・土器片付着
24	須恵器	杯	4号墳	ロクロナデ	内湾する口縁部　端部丸い	7.5Y 5／1 灰		細砂少し含む	(10.0)	(2.9)		
25	須恵器	杯	7号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ、仕上げナデ　底部ヘラ切りのちナデ	平底から内湾して立ち上がる　端部丸い	5Y 7／2 灰白	2.5Y 7／3 浅黄	粗砂含む	11.05	3.85	5.0	
26	須恵器	壷	7号墳	ロクロナデ　体部内面板ナデ　頸部カキ目	外反して開く口縁部　端部外方に肥厚し、外面に沈線・波状文2帯を施す	10YR 6／1 褐灰	2.5Y 2／1 黒	精良	(16.5)	(11.8)		
27	須恵器	杯？底部		ロクロナデ、ロクロケズリ、仕上げナデ、底部ヘラ切りのちナデ	平底から内湾して立ち上がる	2.5Y 6／2 灰黄		粗砂・極粗砂少し含む		(2.1)	(4.5)	外面に付着物

Ⅳ　上エ山遺跡

１．概要

上エ山遺跡は大倉部山（標高691ｍ）の北斜面に所在する。標高147～148ｍ付近で東西約15ｍ、南北約10ｍのテラス状の緩斜面となり、この地点と谷底付近との比高差は約30ｍを測る。本遺跡に隣接する上の尾根筋には上エ山古墳群A支群、下方にはB支群が所在する。確認調査は№３地点と呼称し、平坦面上でピットおよび溝状遺構を検出し、平安時代前期の土器が出土している。

本発掘調査の結果、テラス状の緩斜面では斜面を加工し造成した平坦面を検出した。この平坦面の検出規模は、東西約12ｍ、南北約6.5ｍを測る。山側を幅約１ｍ削り込み平坦面の拡張を行っている。本来はこの際発生した土砂を谷側に盛り、さらに平坦面の拡張を行っていたと考えられる。平坦面上および谷側の傾斜変換点付近では柱穴群、土坑、溝を検出した。

２．調査結果

遺構

溝

SD01

平坦面の南辺と東辺沿いにL字状にのびる。平坦面の山側の切り面沿いに東西にのび、その端で北側に屈曲し、傾斜とともに消滅する。規模・形状は、東西方向の検出長約11ｍ、幅30㎝、深さ８㎝を測り断面形は逆台形を呈する。南北方向は検出長約4.5ｍ、幅30㎝、深さ20㎝を測り断面形はU字状を呈する。遺構の大半はこのSD01に囲まれた中に所在している。斜面の上方からの流水を受け下方に排水する性格の溝であろう。

柱穴群

SD01沿いと谷側で東西方向に分布し、列として把握できる。このうち１対は検出位置が対応するため、掘立柱建物跡とした。また谷側の列は２方向の列として把握できる。

SB01

東西３ないし４間（5.6～8.2ｍ）、南北３間（5.6ｍ）を測る東西棟の側柱建物として復元できる。ただし西側の南北列は検出していない。南北方向の偏りはN－18°Eを示し、東西方向のSD01と重複することになる。柱間は、南辺の３間は1.8～２ｍを測るが、その延長上の柱穴を含めて４間とした場合はこの柱間は約３ｍと開く。柱穴は円形を呈し、径20～40㎝、検出面からの深さ３～15㎝を測る。

SA01

東西方向に延びSB01北辺と重複する。ただし構成する柱穴に切合いはみられないため先後関係は不明である。SB01北辺とは約７°の偏りをもつ。延長上には重複するものも含めて８基の柱穴があり検出長7.4ｍ、その柱間は１～２ｍを測る。柱穴の抽出は難しいが、本来は柱間２ｍ前後で３間とするのが妥当であろうと考える。柱穴の規模は、径40～60㎝、検出面からの深さ10～20㎝である。遺構の性格は柵または平坦面の斜面下方に位置することから、土留施設ではないかと考える。

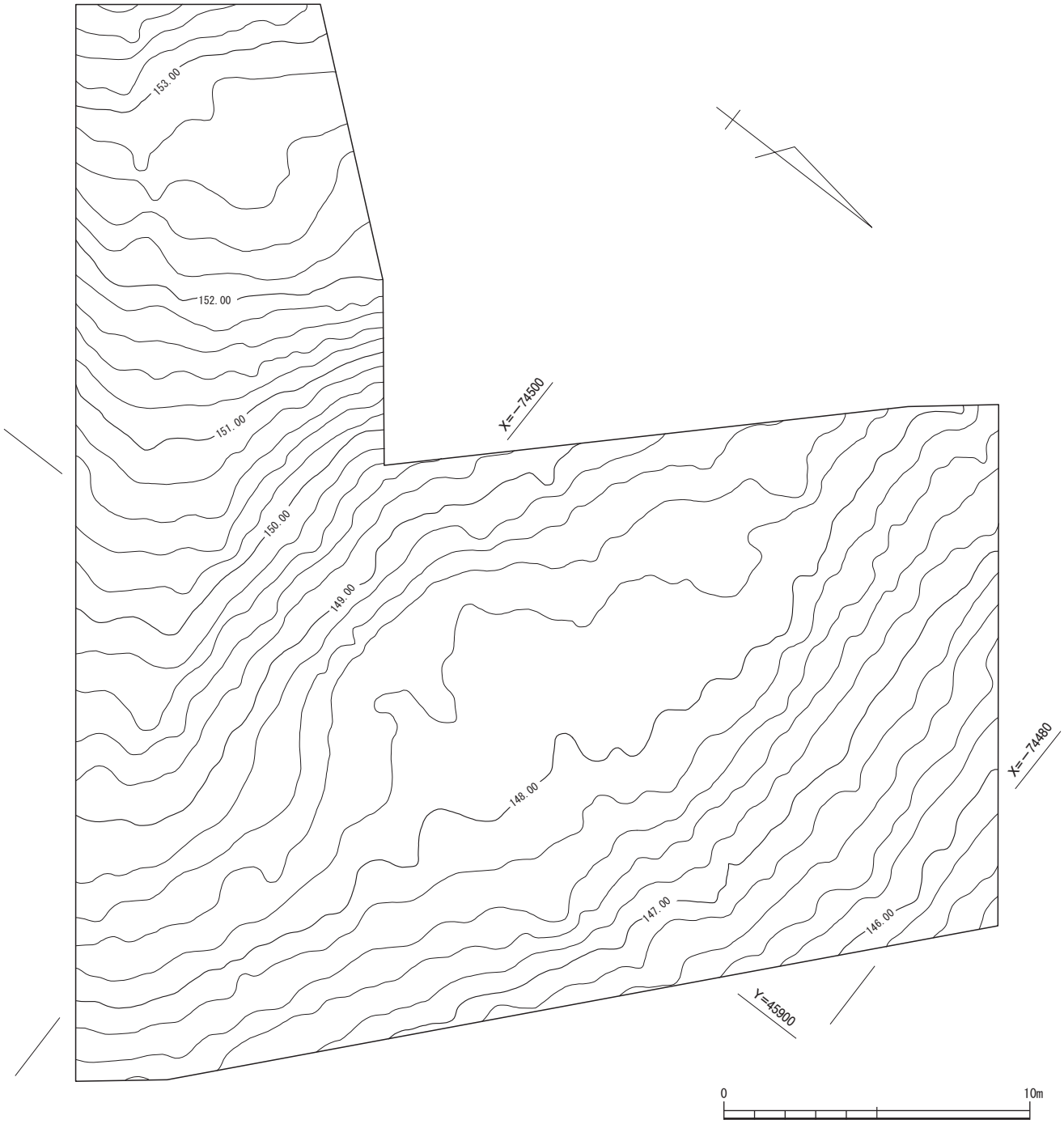
土坑

SK03

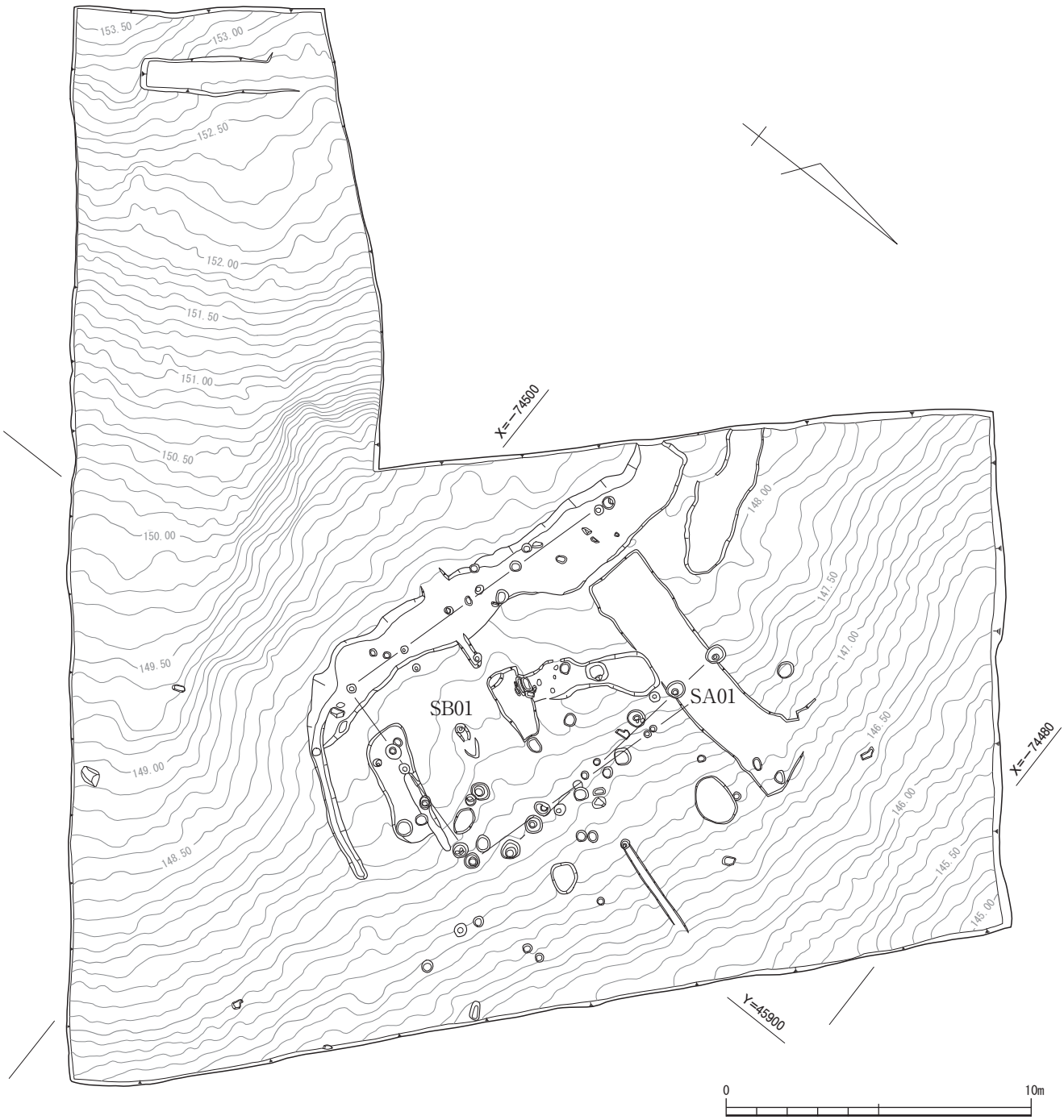
平坦面北側の斜面で検出した。平面は不整な楕円形を呈する。その主軸は南西－北東にもち等高線の方向に直交する。長径１ｍ、短径0.85ｍ、検出面からの深さは10㎝を測り、断面形は逆台形を呈する。

SK04

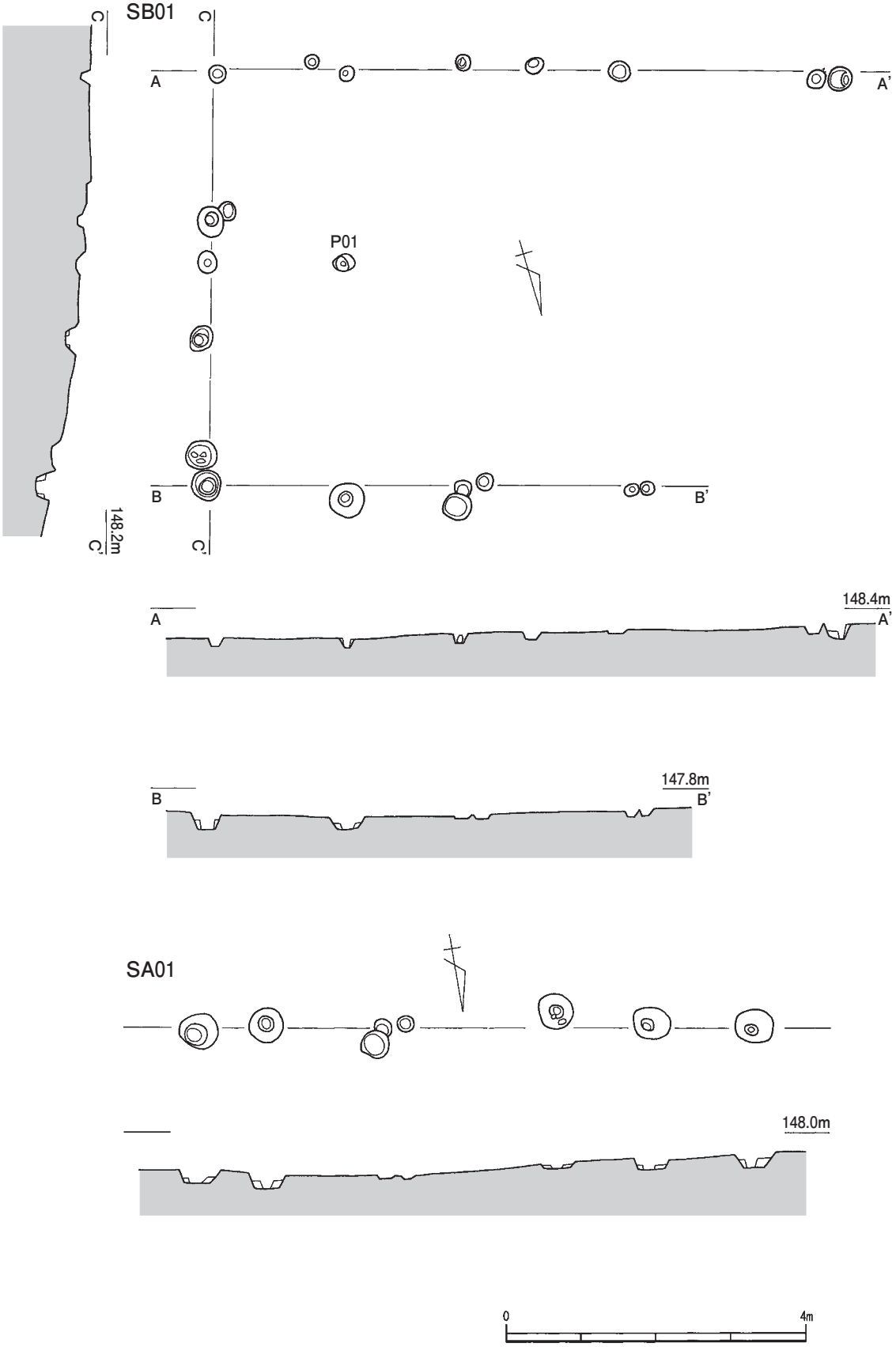
平坦面上で検出した。平面は不整な楕円形を呈し、その主軸は南東－北西にもつ。長径70㎝、短径60㎝、検出面からの深さは10㎝を測り、断面形は浅いU字状を呈し、底には地山に含まれる礫が露頭する。検出した位置からSB01を構成する柱穴の可能性はあるが柱痕は検出できなかった。



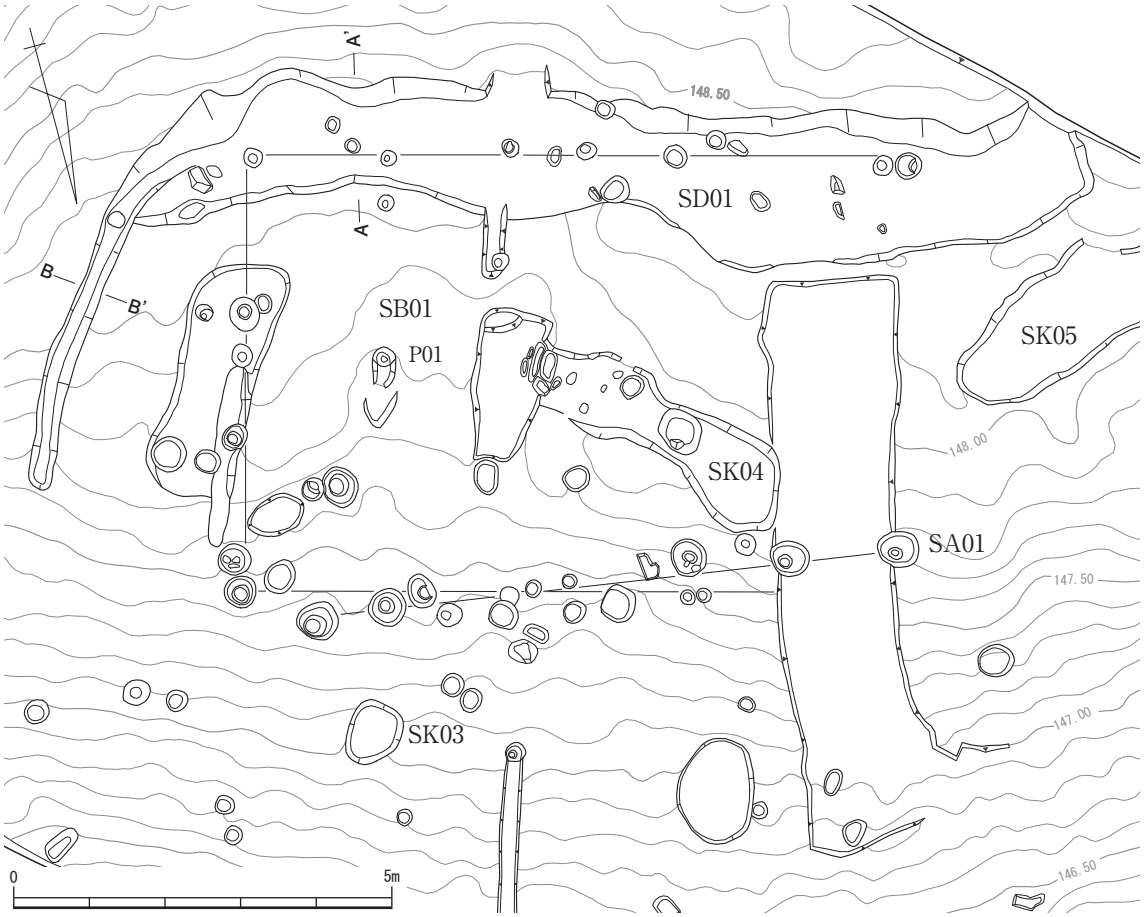
第33図　上エ山遺跡 調査前地形測量図

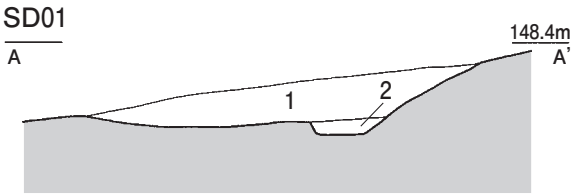


第34図　上エ山遺跡 平面図

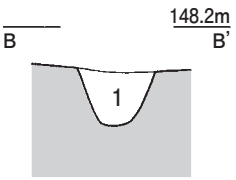


第35図　上工山遺跡 SB01・SA01実測図

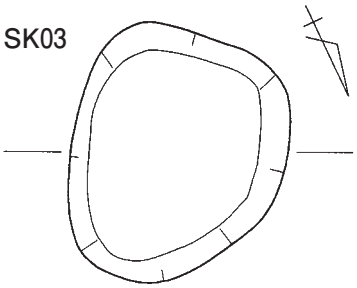


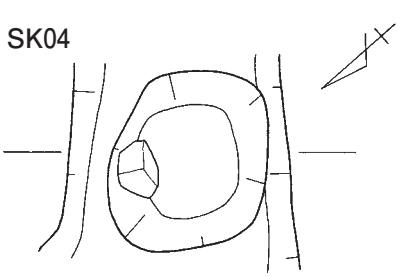


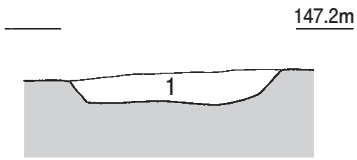
1．10YR 6／3　にぶい黄橙　シルト～シルト質極細砂（やや土壌化）
2．5YR 6／4　にぶい橙　シルト～シルト質極細砂



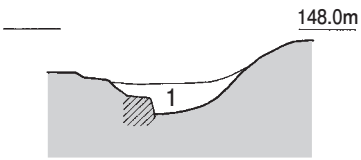
1．10YR 6／1　褐灰　シルト（径5cm以下の礫含む）







1．7.5YR 6／2　灰褐　シルト（礫少量含む）



1．7.5YR 4／1　にぶい橙　シルト（やや土壌化）

第36図　上エ山遺跡 土坑・溝実測図

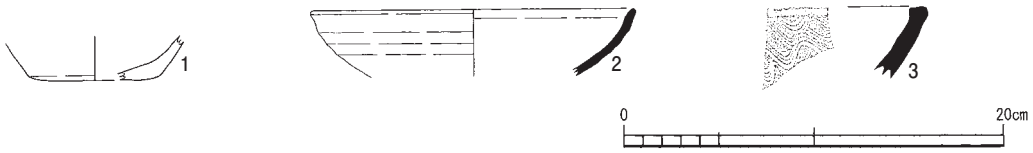
出土遺物

遺物の出土は極く少数であり、いずれも残存状況は不良であった。図化しえたのは３点のみである。

１は柱穴から出土した土師器杯。平底の底部のみ残存する。底部外面はヘラケズリの後ナデを施す。２はSD01より出土した須恵器椀。体部は丸みをもって口縁部に至る。３は包含層より出土した須恵器甕と思われる。口縁端部を内側にひき肥厚し、外面に波状文を施す。

３．小結

上エ山遺跡は検出した平坦面のみが存在するだけであり、集落としての広がりはもたないものと考える。北東側に派生する尾根上には上エ山古墳群が所在するが、調査の結果では本調査区内まで広がらないこと、出土遺物からこの遺跡は平安時代のものであり古墳とは直接関連しないことも明らかとなった。遺跡は可耕地に乏しく、積雪時には集落から途絶する。平坦面の造成にはある程度の作業は必要とするが、土器の出土が少量であり、遺跡の性格は不明だが、常時生活していた空間とは考えがたく、山での作業空間、あるいは宗教施設と考えるのが妥当であろう。



第37図　上エ山遺跡 出土土器実測図

第６表　上エ山遺跡出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	色調		胎土	法量（cm）			備考
						内面	外面		口径	器高	底径	
1	土師器	坏	P01	ロクロナデ、底部ヘラケズリのちナデ	平底　内湾して立ち上がる	7.5YR 7／6 橙		粗砂多く含む		(2.35)	(7.0)	
2	須恵器	椀	SD01	ロクロナデ	内湾する体部、口縁部わずかに外反する	2.5Y 6／1 黄灰		精良	(17.0)	(3.5)		
3	須恵器	甕		ロクロナデ、端部工具による整形のちナデ	内湾気味に立ち上がる口縁、端部を内側に肥厚する　外面に波状文	2.5Y 6／1 黄灰	2.5Y 5／2 暗灰黄	精良、細砂含む		(3.75)		端部外面に自然釉

Ⅴ．内高山東古墳群

大倉部山から東側へ円山川に向かって延びる丘陵から分岐する支尾根が幾つかある。その尾根上に多くの古墳が存在している。内高山東古墳群もその１つである。西側の尾根には内高山西古墳群が、東側から南東側にかけては上エ山古墳群が存在する。

内高山東古墳群は標高691ｍの大倉部山から北東方向に派生する支尾根上に位置している。現状では調査区外である南西側にもう１基墳丘（３号墳）が認められる。１号墳立地部分は延びてくる支尾根が僅かながら高くなった頂部にあたり、標高151.65ｍである。その地点から12ｍぐらい北側から急斜面となり、水田となっている谷部になる。水田部は標高121ｍであり、比高差30ｍを測る。尾根上は痩せ尾根で幅10ｍにも満たない。南西の尾根上も同様な痩せ尾根が続いており平坦面が認められ、２号墳のような遺構が築かれている可能性はある。ただ現状では明瞭な墳丘は確認できないので、２号墳も含めて３基から成る古墳群としておく。

内高山東１号墳

１．外形

南側から北東方向に延びる支尾根で、調査区南側まで急傾斜地でそこから緩斜面となり、古墳が立地している。緩斜面から平坦になり鞍部となる。そこから僅かに高くなり、その頂部に内高山東１号墳は位置している。尾根全体は痩せ尾根で、古墳立地部分が最も広くなっている。それでも幅は10ｍ余りの狭さで狭長な尾根部である。１号墳から北東へは比較的緩斜面であるが、谷部に向かって急斜面となり丘陵裾となる。

明瞭な墳丘は有さない。調査前では僅かな盛り上がりが見られた程度である。調査の結果でも、明らかな盛土は認められなかった。東側は流失した堆積土が確認された。尾根に直交する南北方向には盛土は認められず、墳裾も明確にはできなかった。西側墳裾のみを画する溝があっただけで、外部施設は確認されていない。東側には存在していないが、地形的に変化しているところがあり、その長さを測ると18ｍになる。全体的には楕円形になり、南北方向は10ｍ余りであろうか。

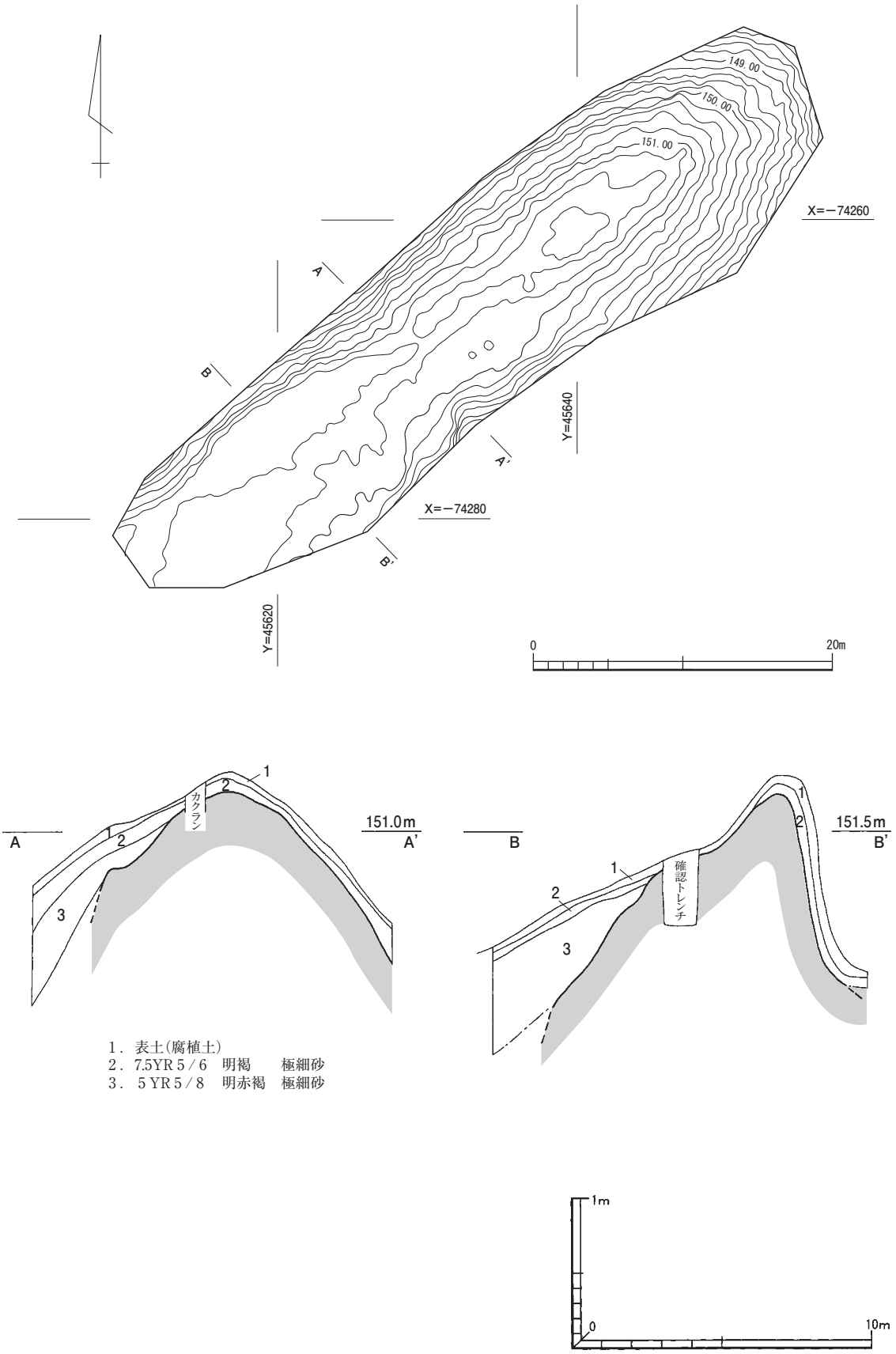
２．主体部

３基の主体部を確認している。第１・２主体は築造当初に２基が平行して同時に埋葬され、遅れて後日改めて第３主体が構築されている。すべて木棺である。

第１主体

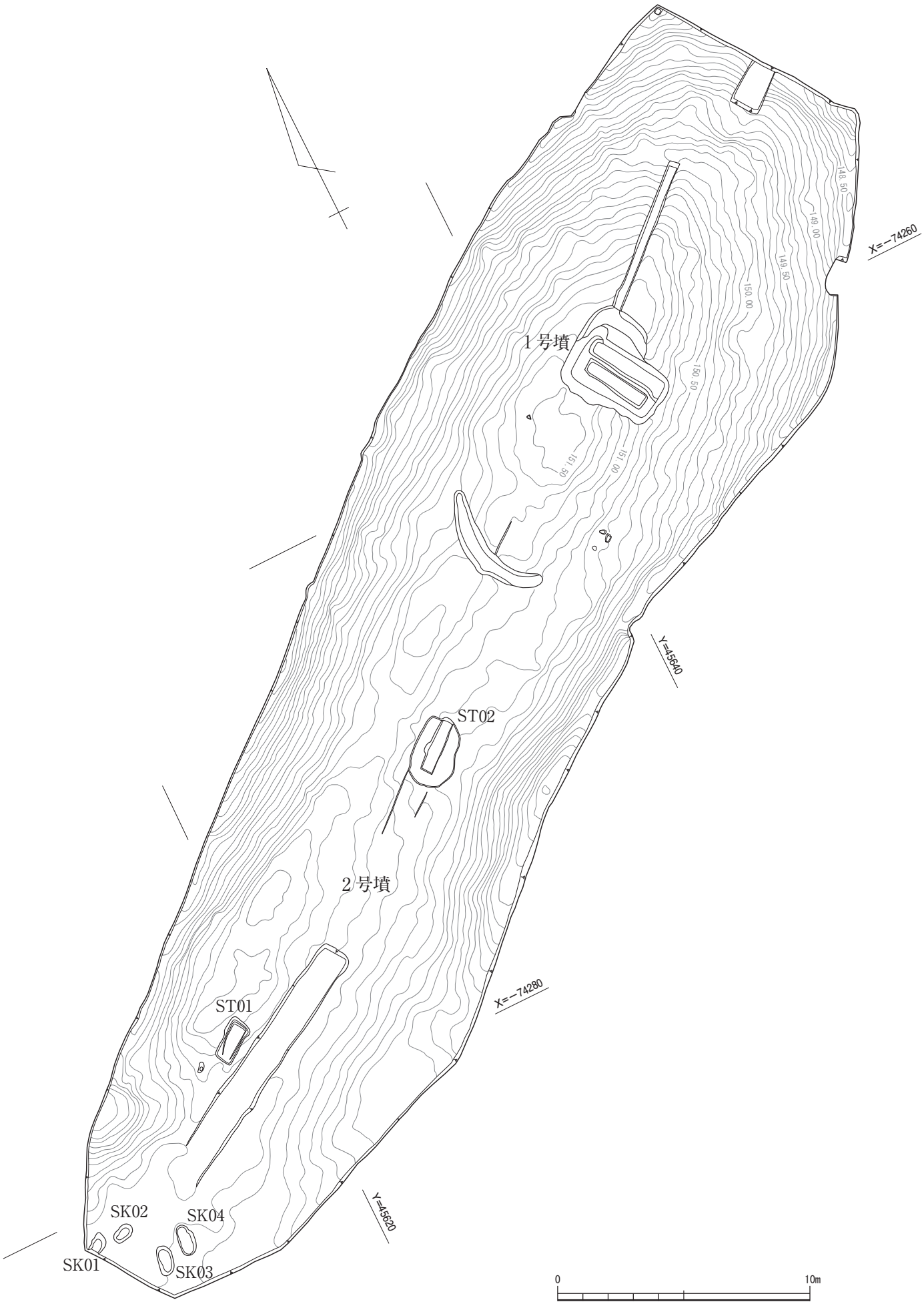
主体部は３基検出しており、その後１基が改めて埋葬されている。当初築かれた主体部は、尾根筋に直交する南北方向に主軸を持つ大型の墓壙である。南北4.0ｍ、東西2.6ｍの北側が広がる歪な隅円長方形の平面プランである。約0.8ｍ掘り下げられ、二段墓壙となって２基の主体部の墓壙を各々掘り下げている。２基の墓壙の間は10㎝余りしか開いておらず、近接して計画的に埋葬されている。改めて掘り直された第３主体は主軸を直交する東西方向に変える。

東側の第１主体は、第２主体よりも長大な木棺を採用している。幅は南側が0.4ｍで北側が0.5ｍと北側の方が広くなっている。北側の方が広いことから頭部かと思われる。長さは3.15ｍ、深さ0.1ｍを測る。

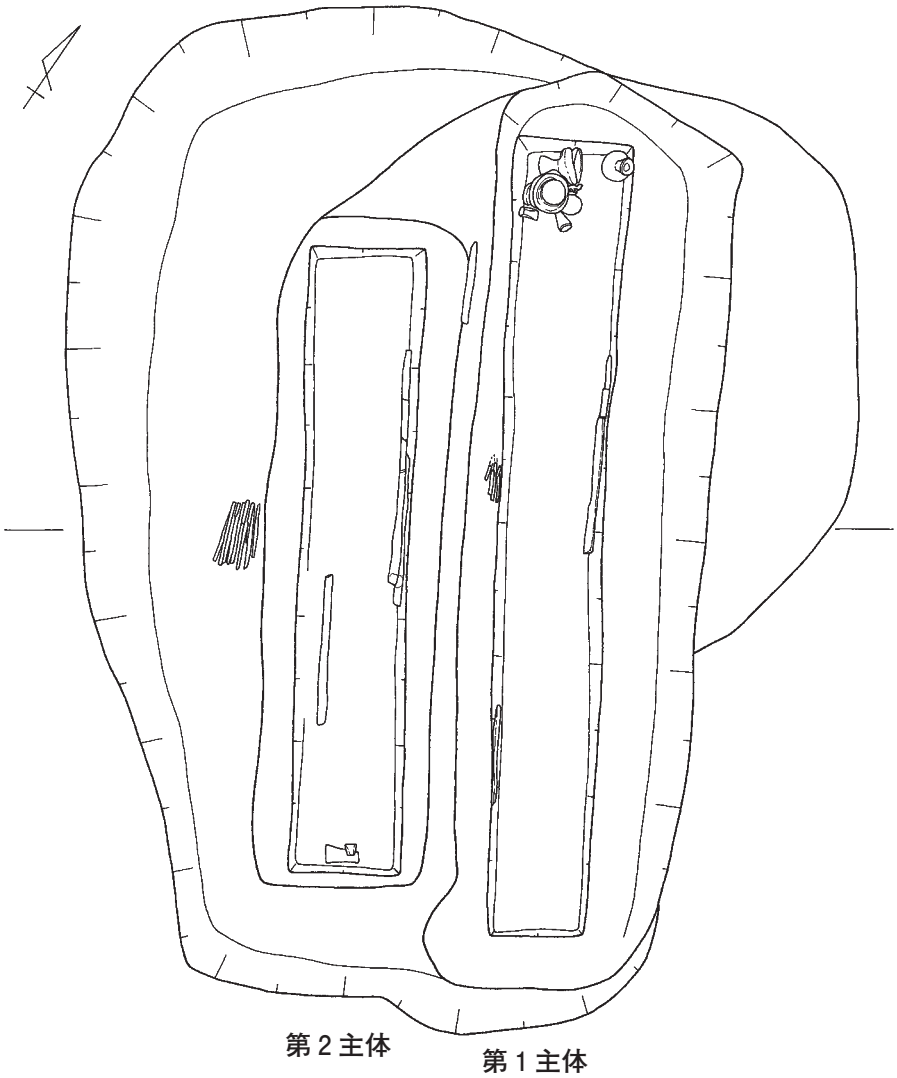


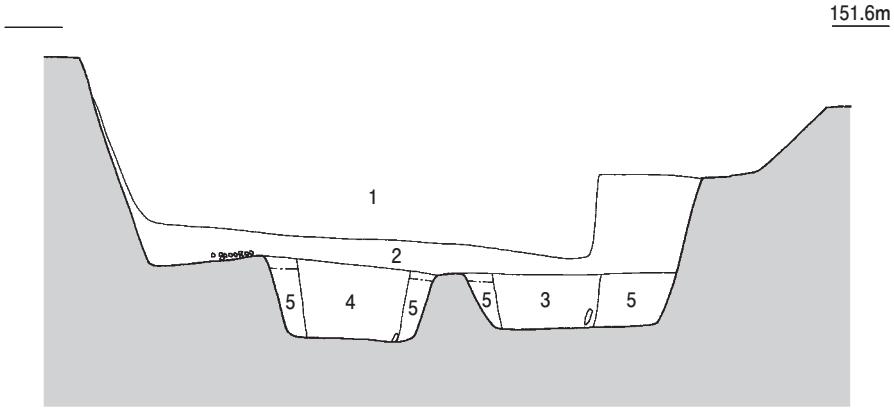
1．表土(腐植土)
2．7.5YR 5／6　明褐　　極細砂
3．5YR 5／8　明赤褐　極細砂

第38図　内高山東古墳群 調査前地形測量図・断面図



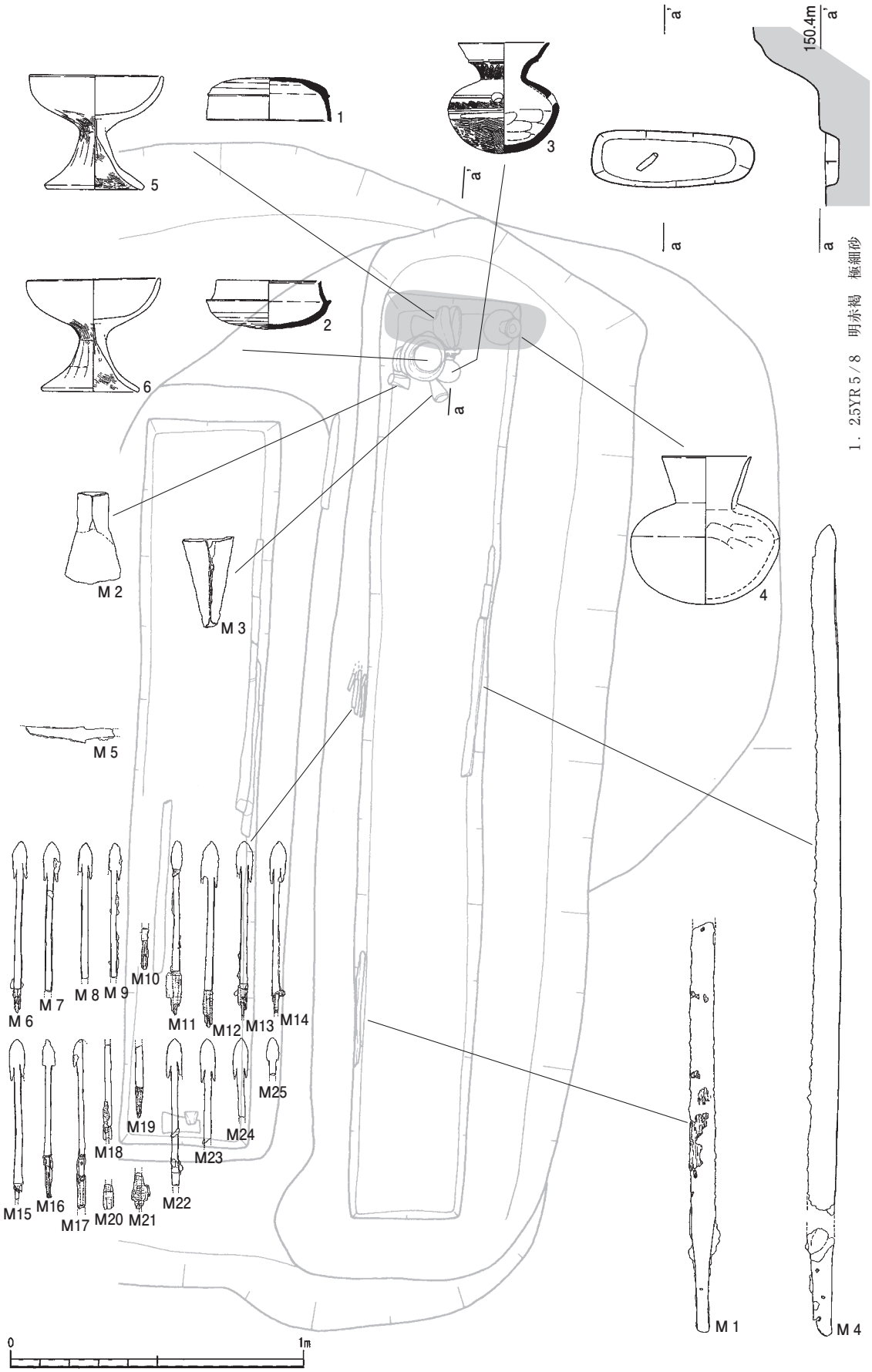
第39図　内高山東古墳群 遺構配置図



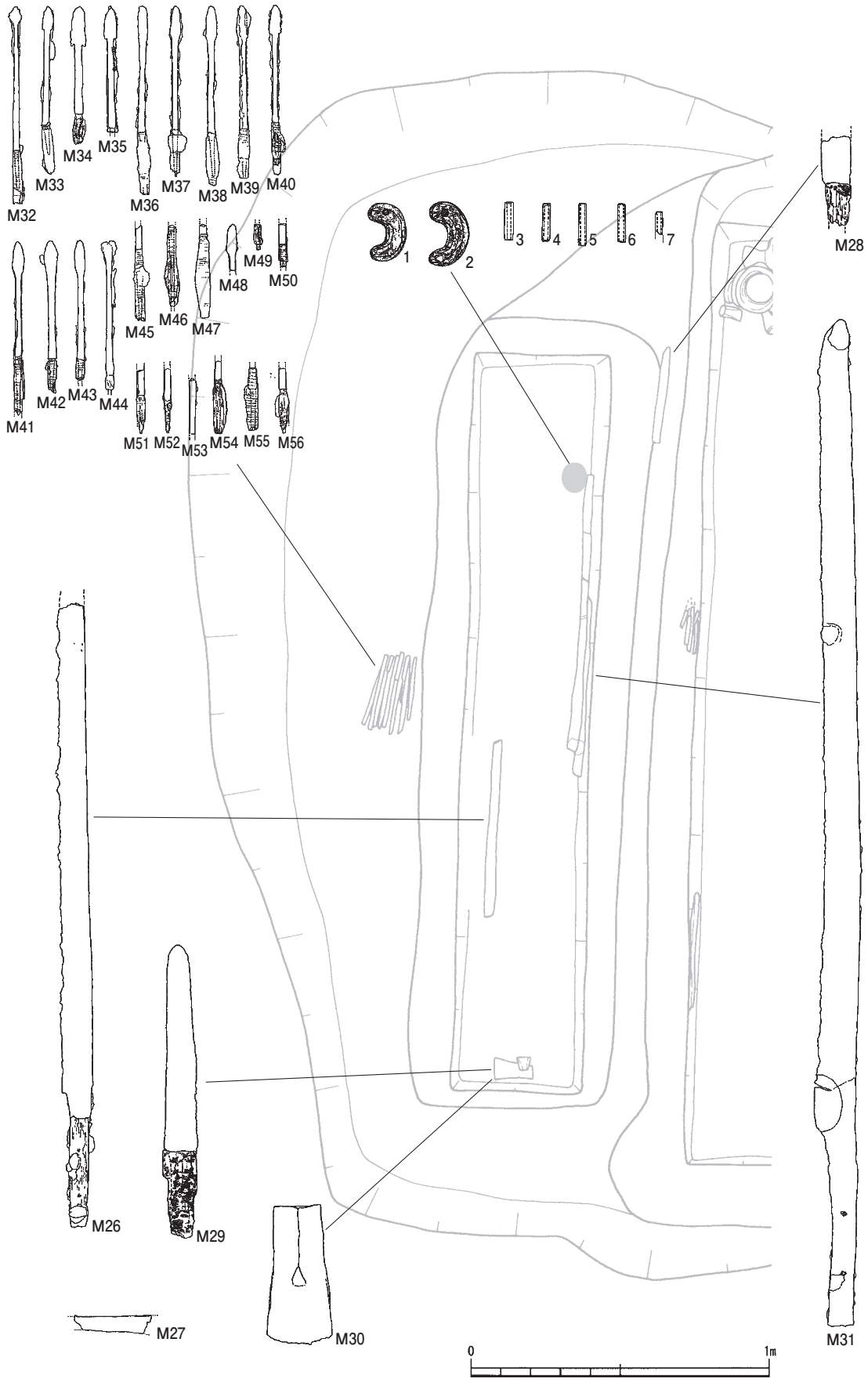


1．第３主体
2．５YR５／６　明赤褐　　極細砂（地山土含む）
3．５YR４／６　赤褐　　極細砂（礫含む　パサパサ）
4．５YR４／６　赤褐　　極細砂（礫含む　やや固い）
5．５YR４／４　にぶい赤褐　極細砂（礫・地山土含む　やや固い）

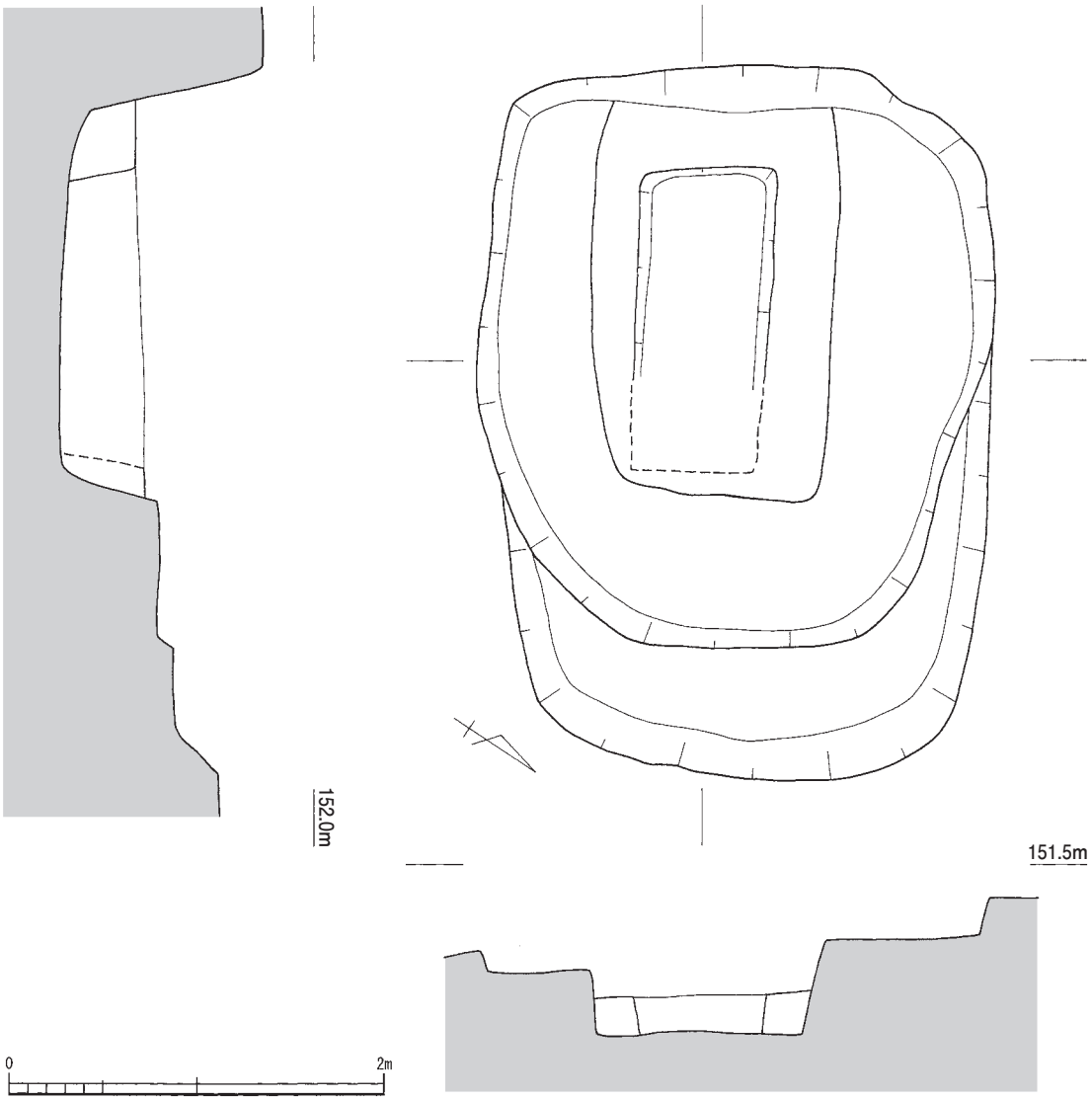
第40図　内高山東古墳群 １号墳第１・２主体実測図



第41図　内高山東古墳群 1号墳第1主体遺物出土状態図



第42図　内高山東古墳群 1 号墳第 2 主体遺物出土状態図



第43図　内高山東古墳群 1号墳第3主体実測図

北側には木口穴が確認されている。幅0.2mで長さ0.6m、深さ0.08mである。副葬品は棺内遺物がほとんどである。頭部に遺物が集中している。須恵器杯のセットと土師器高杯２点、土師器壺１点、須恵器瑞１点がかたまっており、その下から鉄斧と石突が各々１点出土している。須恵器杯のセットは別々に土師器高杯の杯部に上向きに置かれていた。高杯と杯は２組とも上向きに置かれていたと思われるが、１組は倒れていた。瑞も横向きに検出しているが正位置に置かれていたものであろうか。その東壁沿いに土師器壺が置かれていた。

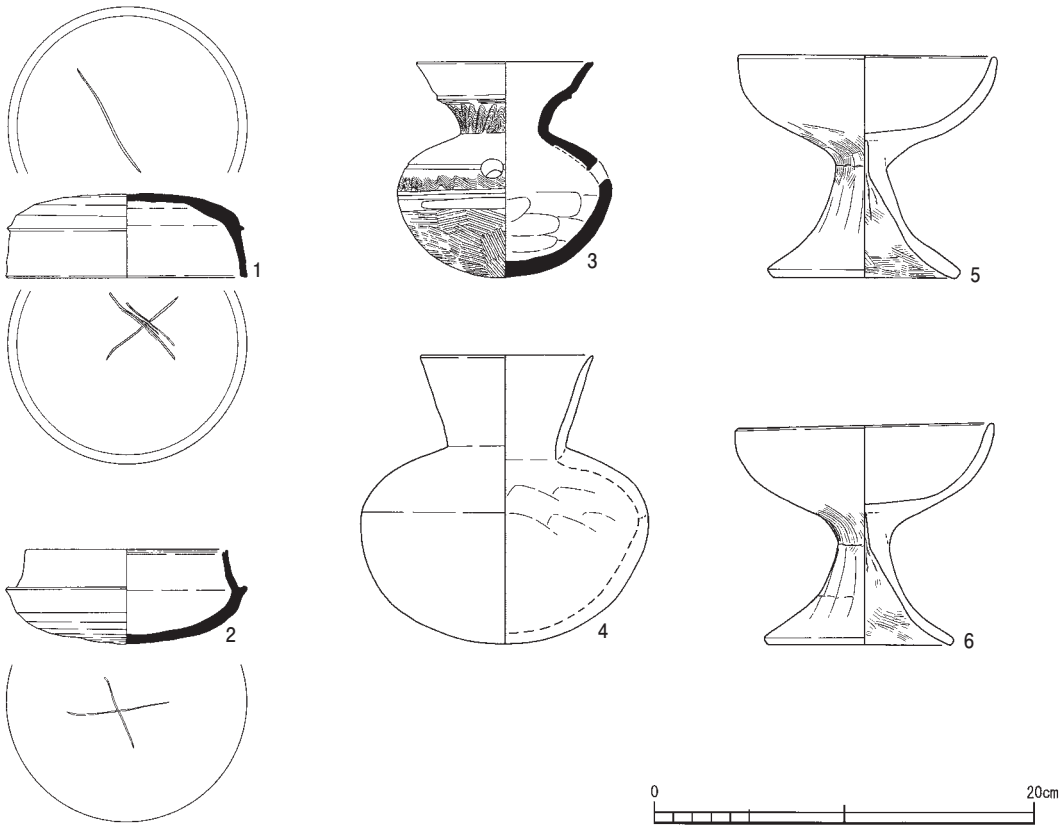
東側の脇部には１振りの刀が出土しており、西側の足元付近には鉄槍が出土している。棺外遺物として西側の棺上から鉄鏃群が出土している。10数個体あるが、細茎鏃に限られる。

西側に位置する第２主体は、幅0.45mと南北で変化がない。長さは2.45m、深さ0.1mを測る。棺内遺物は両側壁沿いに各１振りの鉄刀が置かれている。東側の刀は１mを越える立派な刀である。南側小口に鉄斧が置かれ、中央北側から玉類が出土している。玉類は非常に小さいガラス小玉が多く、水洗作業によって確認できた。水晶製勾玉２点、管玉７点、ガラス小玉（群青色・青色）36点以上である。玉類

の出土位置から考えると、北側が頭部の可能性が高い。

棺外遺物は、第１主体と同様に西側の棺上に鉄鏃が束になって置かれていた。第１主体よりも多く26点以上が置かれていた。北側木口部の東側の棺上から鉄刀が１振り出土している。

第３主体は、改めて墓壙を掘り直している。主軸方向を東西方向に変えている。東西3.4m、南北2.8mの隅円長方形で、やはり二段墓壙になっている。下段は長さ2.3m、幅1.4mで上段の西側に接して掘り下げられている。その中央に長さ1.7m、幅0.7mの棺を置いている。出土遺物は認められなかった。深さは墓壙上段から0.95mを測る。木棺に木口穴は認められなかった。

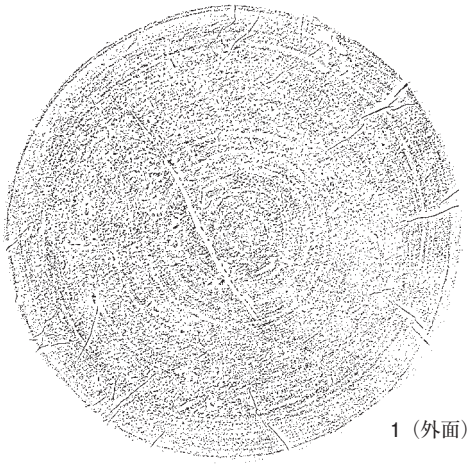


第44図　内高山東古墳群 １号墳第１主体出土土器実測図

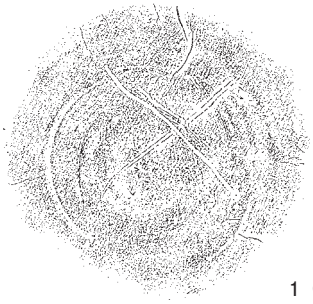
３．出土遺物

土器

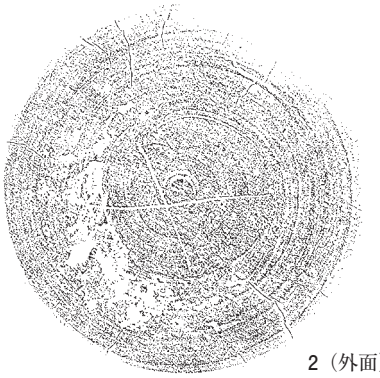
第１主体北側木口部に置かれていた６点（１～６）と墳裾から出土した土師器２点（７・８）がある。（１）（２）は須恵器杯のセットである。「十」のヘラ記号が杯蓋（１）は内面、杯身（２）は底面に記されている。（１）は天井部にもヘラ記号「一」が認められる。ともにシャープに仕上がっており、稜線も鋭く径も小さく古相を示す。（３）は須恵器瑞で肩部に円孔がある。底部は平行タタキで肩部と最大腹径部に凹線があり、その間に波状文が施される。頸部は外反し、外面に幅のある波状文が認められる。稜線を有してから僅かに外反する。端部は尖り気味で鋭く仕上げている。（４）は土師器壺で丸底の肩が張る扁平な球形である。口縁部は外傾し端部は外側に尖っている。内面はユビ成形からナデである。粗砂を胎土に含むが、器表は平滑に仕上げている。



1（外面）



1（内面）



2（外面）

第45図　内高山東古墳群 1 号墳第 1 主体出土土器拓本

第 7 表　内高山東 1 号墳出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	色調		胎土	法量（cm）			備考
						内面	外面		口径	器高	底径	
1	須恵器	杯蓋	1 号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ、仕上げナデ	平たい天井部、鋭い稜を持ってほぼ直角に屈曲する口縁部　端部に凹線	2.5Y 7 / 1 灰白	2.5Y 6 / 1 黄灰	粗砂含む	12.55	4.45		第 1 主体北小口土器群　内外面にヘラ記号
2	須恵器	杯身	1 号墳	ロクロナデ、ロクロケズリ、仕上げナデ	内傾気味に大きく立ち上がる口縁部　端部に凹線	2.5Y 6 / 1 黄灰		粗砂少し含む	10.65	4.95		第 1 主体北小口土器群　底面にヘラ記号
3	須恵器	はそう	1 号墳	ロクロナデ、ヘラケズリ、体部外面下半平行タタキ	丸底で扁平な体部から外反して大きく開く口縁は屈曲し稜をなす頸部に波状文　体部中位に円孔を穿ち 2 条の沈線・波状文を施す	10YR 5 / 1 褐灰		細砂わずかに含む	9.3	11.4		第 1 主体北小口土器群
4	土師器	壷	1 号墳	口縁ヨコナデ、体部ケズリ・ナデ	丸底で扁平な体部からわずかに外傾して立ち上がる口縁	7.5YR 6 / 6 橙		粗砂含む	9.05	15.2		第 1 主体北小口土器群
5	土師器	高杯	1 号墳	ヨコナデ、ナデ　脚部ケズリ、ハケ　脚柱部内側中心に絞り目・串状工具の抜き取り痕	椀状の杯部　脚部はハの字状に開く	7.5YR 6 / 8 橙	5 YR 6 / 8 橙	粗砂・極粗砂多く含む	13.4	11.7	9.6	第 1 主体北小口土器群
6	土師器	高杯	1 号墳	ヨコナデ、ナデ　脚部ケズリ、ハケ　脚柱部内側中心に絞り目・串状工具の抜き取り痕	椀状の杯部　脚部はハの字状に開く	7.5YR 6 / 6 橙	5 YR 6 / 8 橙	粗砂・極粗砂含む	13.4	10.75	9.5	第 1 主体北小口土器群　外面口縁部付近に黒斑
7	土師器	杯	1 号墳	ナデ	内湾する体部　口縁端部丸い	10YR 6 / 6 明黄褐	7.5YR 6 / 6 橙	粗砂・極粗砂含む	(11.0)	(4.35)		
8	土師器	甕	1 号墳	ハケ、ヨコナデ　体部内面ヘラケズリ	球形の体部　内湾気味に立ち上がる口縁　端部内側に肥厚	10YR 7 / 4 にぶい黄橙		粗砂・極粗砂多く含む	17.2	(16.9)		体部外面に黒斑

鉄器

多数の鉄器が出土している。第 1 主体からは槍（M 1 ）・石突（M 3 ）・刀（M 4 ）・刀子（M 5 ）・斧（M 2 ）・鏃（M 6 ～M25)、第 2 主体からは刀（M26・M28・M29・M31）・刀子（M27）・斧（M30）・鏃（M32～M56）が出土している。

槍（Ｍ１）の刃部両面・刀（M26・28・29・31）の基部には木質が付着しており、１～３個の目釘穴が認められる。鏃の茎部にはほぼ全て木質および樹皮巻きが残存していた。

第１主体の鏃の鏃身は一部を除き長三角形を呈し、逆刺を有する。逆刺は深いものと浅いものがあるものの、外反はしない。頸部は長く直線的で断面は長方形を呈する。関部は角関・斜関があり、一部台形状を呈するとみられるものがある。茎部は先細りし、断面方形を呈する。

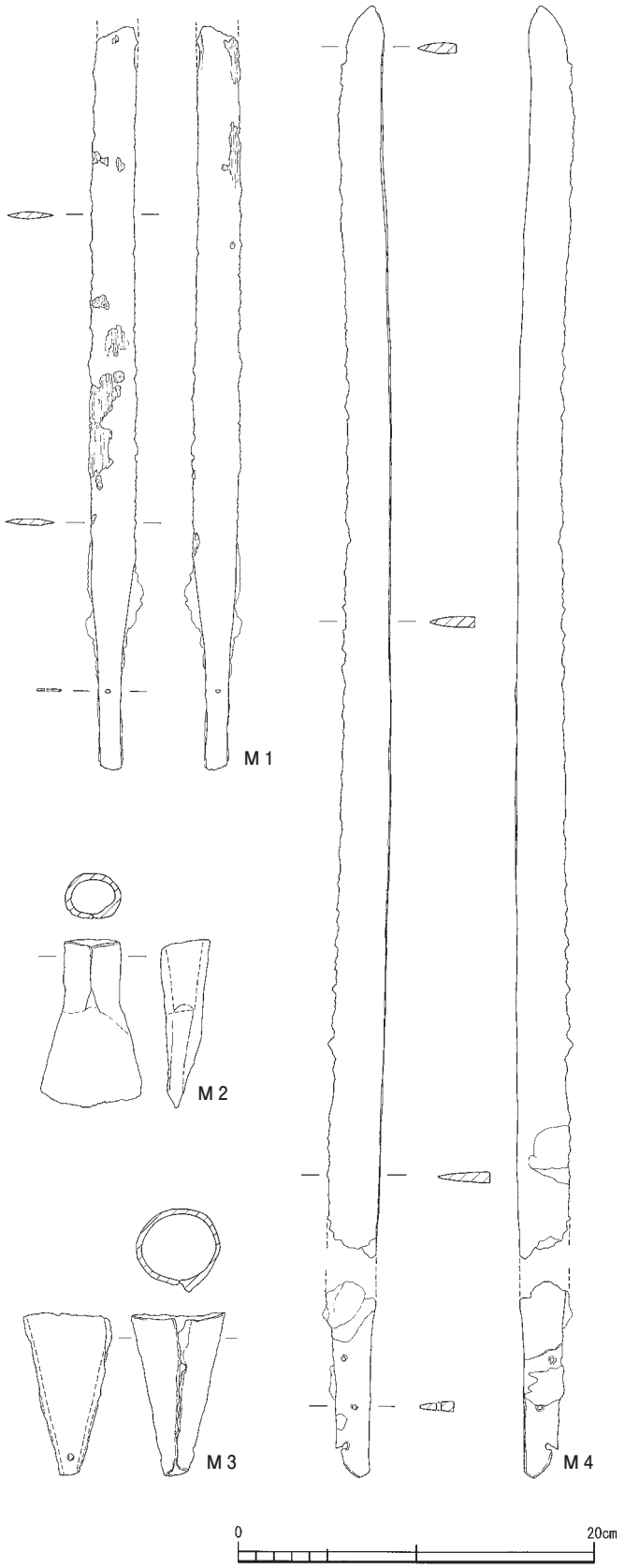
第２主体のものは長三角形または柳葉形を呈する。鏃身関部は角関･撫関･無関があり、一部浅い逆刺を持つものがある。頸部は長く直線的で断面は長方形を呈する。関部はいずれも角関である。茎部は先細りし、断面円形を呈する。

各々の法量は第８表に示す。

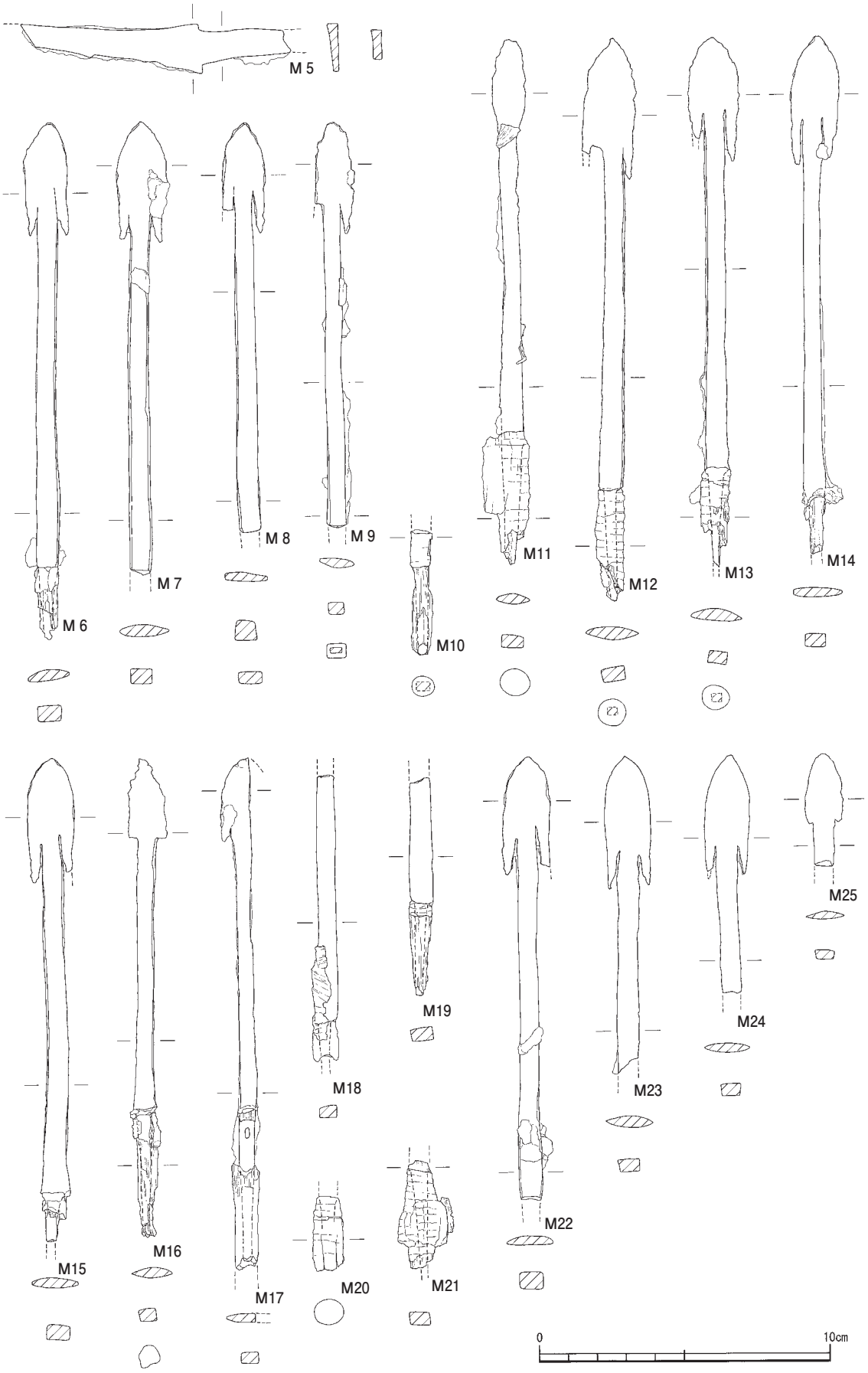
玉

第２主体の胸横から固まって出土していることから、一連になっていたと思われる。図化できたのは水晶製勾玉２個（１・２）、碧玉製管玉５個（３～７）、ガラス小玉36個（８～41）で、他に管玉・小玉の破片がある。ガラス小玉は径２㎜を下回る非常に小さな製品であり、２点以外は篩にかけて検出したものである。すべてコバルトブルーを呈する。

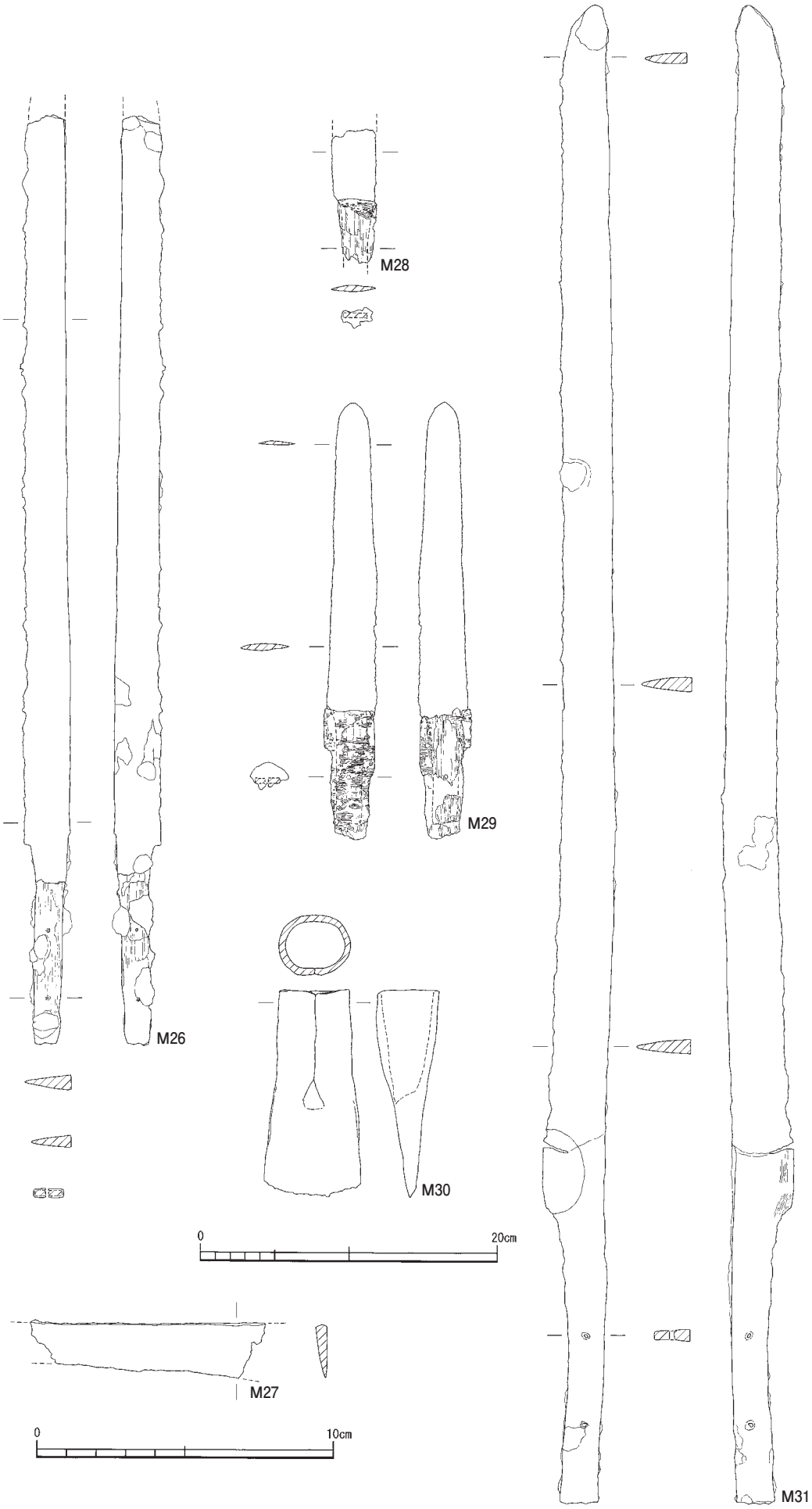
各々の法量は第９表に示す。



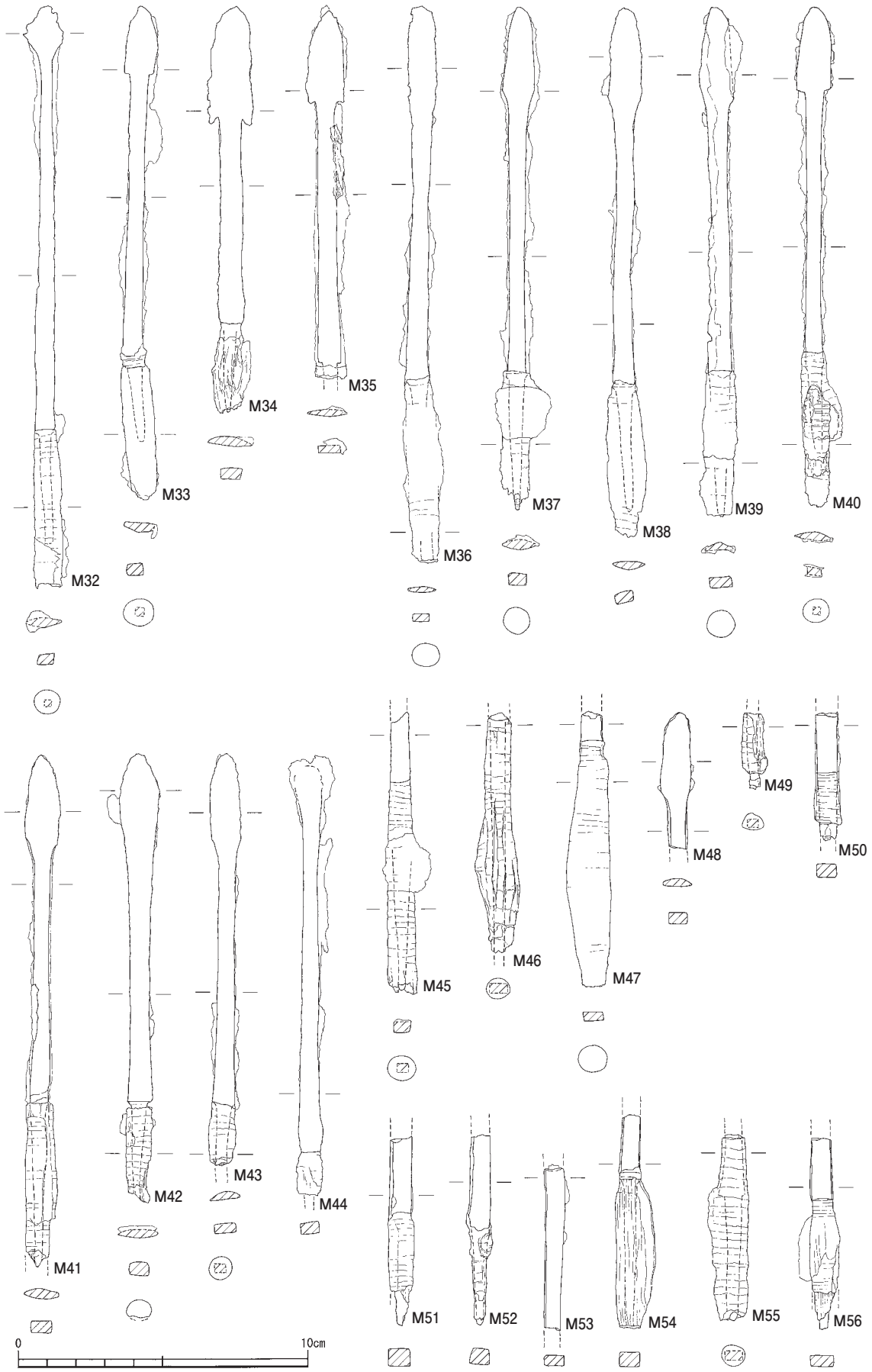
第46図　内高山東古墳群 １号墳第１主体出土鉄器実測図（１）



第47図　内高山東古墳群 1 号墳第 1 主体出土鉄器実測図（2）



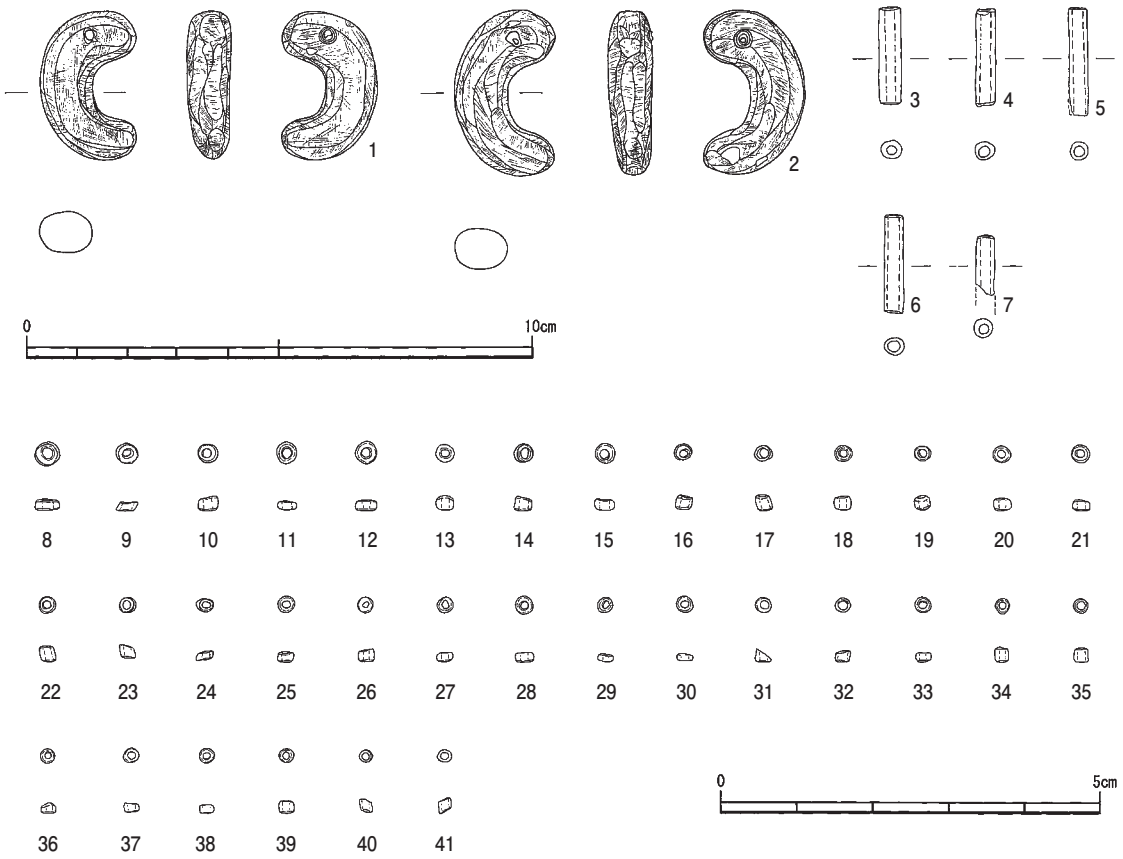
第48図　内高山東古墳群 1号墳第2主体出土鉄器実測図（1）



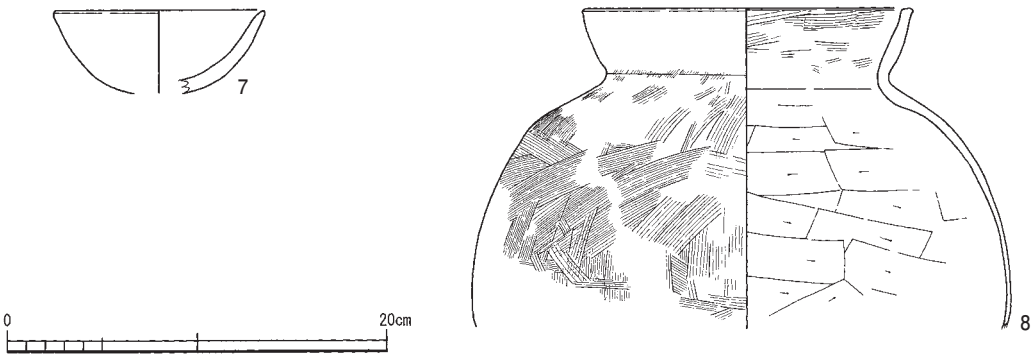
第49図　内高山東古墳群 1号墳第2主体出土鉄器実測図（2）

第８表　内高山東１号墳出土鉄器計測表

番号	種別・器種	遺構	法量（cm）				備考
			長さ	幅	厚さ	重量（g）	
M１	槍	１号墳	(41.95)	2.55	0.30	111.60	木質･目釘穴(1)
M２	斧	１号墳	9.45	5.60	2.55	146.70	
M３	石突	１号墳	9.15	5.20	5.00	68.60	下口弗に小孔(2)
M４	刀	１号墳	(81.90)	3.00	0.60	308.00	目釘穴（３）
M５	刀子	１号墳	(9.25)	1.65	0.40	7.30	
M６	鏃	１号墳	(17.80)	1.40	0.55	16.20	木質
M７	鏃	１号墳	(15.60)	1.70	0.50	14.60	
M８	鏃	１号墳	14.10	1.45	0.70	9.80	
M９	鏃	１号墳	13.90	1.20	0.50	10.50	
M10	鏃	１号墳	(4.40)	0.45	0.30	2.10	樹皮・木質
M11	鏃	１号墳	18.10	1.15	0.50	18.80	樹皮・木質
M12	鏃	１号墳	19.40	1.80	0.45	20.20	樹皮・木質
M13	鏃	１号墳	(18.15)	1.70	0.45	16.50	樹皮・木質
M14	鏃	１号墳	(17.80)	1.70	0.45	15.70	木質
M15	鏃	１号墳	(16.50)	1.60	0.55	16.50	樹皮・木質
M16	鏃	１号墳	16.50	1.30	0.45	11.40	樹皮・木質
M17	鏃	１号墳	(17.60)	(1.00)	0.40	14.40	樹皮・木質
M18	鏃	１号墳	(9.85)	0.60	0.40	8.30	樹皮・木質
M19	鏃	１号墳	(7.50)	0.75	0.45	5.80	樹皮・木質
M20	鏃	１号墳	(2.60)			1.50	樹皮・木質
M21	鏃	１号墳	(3.75)	0.70	0.45	7.60	樹皮・木質
M22	鏃	１号墳	15.20	1.60	0.60	13.70	
M23	鏃	１号墳	(10.95)	1.60	0.45	10.40	
M24	鏃	１号墳	(8.15)	1.50	0.40	7.40	
M25	鏃	１号墳	(3.85)	1.30	0.30	2.50	
M26	刀	１号墳	(62.75)	3.10	1.00	446.00	目釘穴（２）
M27	刀子	１号墳	(7.95)	1.80	0.35	8.10	
M28	刀	１号墳	(9.00)	2.90	4.50	26.70	木質
M29	刀	１号墳	29.45	3.40	0.45	98.80	目釘穴（１）
M30	斧	１号墳	14.05	6.55	4.10	484.47	
M31	刀	１号墳	101.40	3.70	1.00	878.00	目釘穴（２）
M32	鏃	１号墳	20.10	1.20	0.40	17.40	樹皮・木質
M33	鏃	１号墳	17.05	1.10	0.40	14.40	樹皮・木質
M34	鏃	１号墳	14.05	1.50	0.40	14.80	木質
M35	鏃	１号墳	(12.90)	1.30	0.30	11.90	木質
M36	鏃	１号墳	19.30	0.95	0.25	18.10	樹皮・木質
M37	鏃	１号墳	17.35	1.15	0.45	18.00	樹皮・木質
M38	鏃	１号墳	18.30	1.10	0.40	18.30	樹皮・木質
M39	鏃	１号墳	17.60	1.05	0.35	17.60	樹皮・木質
M40	鏃	１号墳	17.30	1.15	0.30	14.90	樹皮・木質
M41	鏃	１号墳	(17.70)	1.20	0.40	16.30	樹皮・木質
M42	鏃	１号墳	(15.50)	1.30	0.45	13.70	樹皮・木質
M43	鏃	１号墳	(14.25)	1.00	0.30	10.00	樹皮・木質
M44	鏃	１号墳	(15.20)	0.65	0.40	13.70	樹皮・木質
M45	鏃	１号墳	(9.75)	0.60	0.35	13.10	樹皮・木質
M46	鏃	１号墳	(8.30)	0.60	0.70	10.20	樹皮・木質
M47	鏃	１号墳	(9.60)	0.70	0.30	17.50	樹皮・木質
M48	鏃	１号墳	(4.70)	1.00	0.40	3.40	
M49	鏃	１号墳	(2.60)	0.40	0.25	1.70	樹皮・木質
M50	鏃	１号墳	(4.40)	0.70	0.45	4.00	樹皮・木質
M51	鏃	１号墳	(6.55)	0.75	0.60	6.10	樹皮・木質
M52	鏃	１号墳	(6.55)	0.70	0.55	4.80	樹皮・木質
M53	鏃	１号墳	(5.80)	0.70	0.35	3.00	
M54	鏃	１号墳	(7.40)	0.70	0.50	9.70	木質
M55	鏃	１号墳	(6.40)	0.60	0.30	9.50	樹皮・木質
M56	鏃	１号墳	(6.10)	0.80	0.40	8.20	樹皮・木質



第50図　内高山東古墳群 1号墳第2主体出土玉類実測図

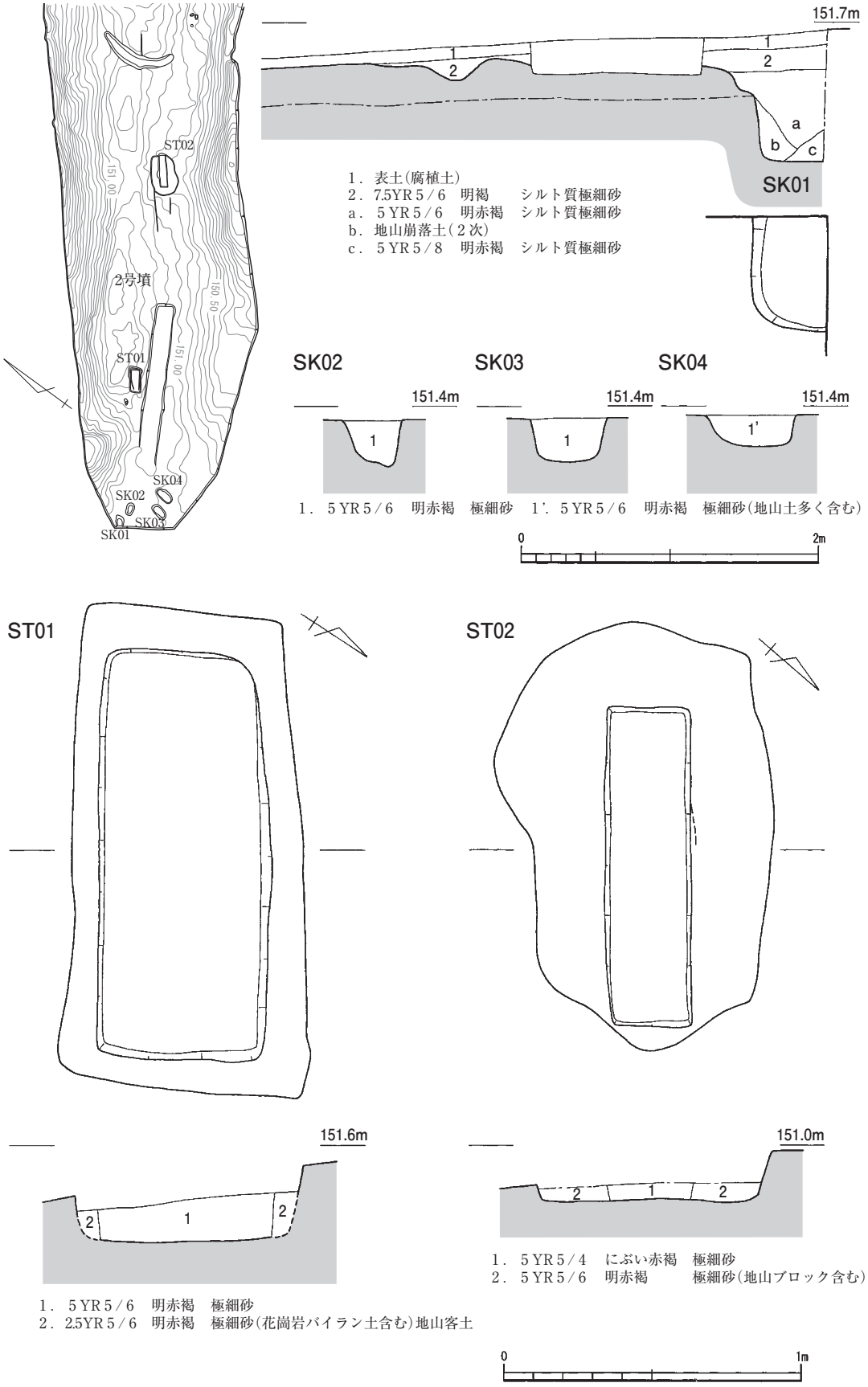


第51図　内高山東古墳群 2号墳出土土器実測図

（2）内高山東2号墳（集団墓）

西側尾根部から2基の木棺を検出している（ST01・ST02）。ともに墳丘は確認できず、遺物も出土していないことから、時期は決定しがたい。1号墳前後の時期とみる可能性が順当かもしれないが、墳丘を有さないことから、内高山西古墳群に近い古い段階（古墳時代はじめ）になる可能性が高いかと思われる。ST01は尾根筋である東西方向に主軸を持ち、長さ3.2m、幅1.5mの墓壙中央に、長さ2.7m、幅1.15m、深さ0.35mを測る木棺を置く。ST02も尾根筋に主軸方向を持つ。東西2.9m、南北1.9mの墓壙の東側に長さ2.1m、幅0.6m、深さ0.2mの木棺を置く。

調査区西端で土坑群を検出しているが性格は不明である（SK01～04）。4基検出しており0.4～1.0mの規模で深さは0.2～0.5mである。墓壙とは思われない。明瞭なプランを示さないことと左右に散らばっていることから、縄文期の落とし穴とも思われない。



第52図　内高山東古墳群 2号墳・土坑群実測図

第９表　内高山東１号墳第２主体出土玉類計測表

番号	種別・器種	遺構	法量（㎜）					備考
			長さ	幅	厚さ	孔径	重量（ｇ）	
1	勾玉	１号墳	29.5	19.0	8.50		5.90	
2	勾玉	１号墳	32.0	20.0	9.0		6.4	
3	管玉	１号墳	18.9	4.4	3.9	1.7	0.54	
4	管玉	１号墳	19.1	3.7	3.5	2.1	0.37	
5	管玉	１号墳	21.5	3.5	3.4	2.0	0.37	
6	管玉	１号墳	19.3	3.8	3.3	2.2	0.36	
7	管玉	１号墳	11.6	3.6	3.5	2.0	0.16	
8	ガラス小玉	１号墳	3.1	3.2	1.4	1.6	0.02	
9	ガラス小玉	１号墳	2.5	2.9	1.2	1.1	0.01	
10	ガラス小玉	１号墳	2.4	2.8	1.8	1.0	0.02	
11	ガラス小玉	１号墳	3.0	2.8	1.4	1.3	0.01	
12	ガラス小玉	１号墳	3.0	2.8	1.4	1.1	0.02	
13	ガラス小玉	１号墳	2.6	2.7	2.0	0.9	0.02	
14	ガラス小玉	１号墳	2.5	2.7	1.8	1.2	0.02	
15	ガラス小玉	１号墳	2.6	2.7	1.5	1.2	0.02	
16	ガラス小玉	１号墳	2.3	2.5	2.0	1.0	0.02	
17	ガラス小玉	１号墳	2.3	2.5	2.0	1.1	0.02	
18	ガラス小玉	１号墳	2.3	2.4	1.9	0.9	0.02	
19	ガラス小玉	１号墳	2.1	2.4	1.8	1.0	0.01	
20	ガラス小玉	１号墳	2.4	2.4	1.6	0.9	0.02	
21	ガラス小玉	１号墳	2.4	2.4	1.4	1.0	0.02	
22	ガラス小玉	１号墳	2.2	2.3	1.9	1.0	0.02	
23	ガラス小玉	１号墳	2.3	2.3	1.7	0.9	0.01	
24	ガラス小玉	１号墳	1.8	2.3	1.5	0.9	0.01	
25	ガラス小玉	１号墳	2.3	2.3	1.4	0.9	0.01	
26	ガラス小玉	１号墳	2.0	2.2	1.6	0.8	0.01	
27	ガラス小玉	１号墳	2.3	2.2	1.3	1.0	0.01	
28	ガラス小玉	１号墳	2.3	2.2	1.2	1.0	0.02	
29	ガラス小玉	１号墳	2.2	2.2	1.2	1.1	0.01	
30	ガラス小玉	１号墳	2.3	2.2	1.0	1.1	0.01	
31	ガラス小玉	１号墳	2.1	2.1	1.6	1.1	0.01	
32	ガラス小玉	１号墳	2.0	2.1	1.5	1.1	0.01	
33	ガラス小玉	１号墳	2.1	2.1	1.4	1.0	0.01	
34	ガラス小玉	１号墳	2.1	2.0	2.1	0.9	0.01	
35	ガラス小玉	１号墳	2.0	2.0	2.0	1.0	0.01	
36	ガラス小玉	１号墳	1.9	2.0	1.2	0.8	0.01	
37	ガラス小玉	１号墳	1.9	2.0	1.2	1.0	0.01	
38	ガラス小玉	１号墳	2.0	1.9	1.1	0.9	0.01	
39	ガラス小玉	１号墳	1.9	1.9	1.8	0.9	0.01	
40	ガラス小玉	１号墳	1.7	1.8	1.7	0.9	0.01	
41	ガラス小玉	１号墳	1.6	1.6	1.9	0.8	0.01	

（３）小結

内高山東１号墳は尾根上に構築された最大径12mを測る楕円形の墳丘である。主体部は３基あり、すべて木棺直葬である。第１主体と第２主体は意識的に並んで構築され、同一墓壙の中に規則的に配置されている。副葬品は第１主体が土器、第２主体が玉類と内容を変え、共に豊富な鉄器を副葬していた。小規模な古墳としては異例なほどの鉄器を保有している。出土須恵器はTK23型式前後で、須恵器から築造年代は５世紀後半と思われる。墳裾で出土している土師器はそれより古い時期である５世紀前半を示しており、２号墳も含めて一段階早く造墓活動に入っていたようである。

Ⅵ　内高山西古墳群

１．概要

内高山西古墳群は枚田集落の所在する谷の最深部、大倉部山（標高691m）から東へ派生する尾根の北斜面に所在する。この北斜面は標高200～220m付近で急峻な斜面から緩斜面へと変換し、この緩斜面となる尾根上に複数の古墳群が立地する。本古墳群はその中でも谷の最深部に位置し、標高は一帯の古墳群の中で最も高い。尾根上からは視界は開けないものの、谷の開口部を通し和田山の平野部を眺望できる。

古墳群は10基の古墳で構成され、うち調査区内には１～５、７～９号墳の８基の古墳が所在する。６号墳は５号墳の北側調査区外、10号墳は９号墳の南側調査区外に位置し、事業の影響を免れる。また調査区内で最高所に所在する９号墳は墳丘の北側約１/２が調査区内にかかるが、南側は現況で保存される。

確認調査は平成15年度に実施した。その調査時には本古墳群は№９地点と呼称し、延長105mのトレンチを設定して調査した。本発掘調査はその成果に基づいて実施したものである。

第10表　古墳番号対照表

本報告	兵庫県遺跡地図	調査時
１号墳	１号墳	９号墳
２号墳	２号墳	８号墳
３号墳	４号墳	７号墳第２・３主体
４号墳	３号墳	７号墳第１主体
５号墳	５号墳	６号墳
６号墳	６号墳	調査対象外
７号墳	７号墳	４号墳
８号墳	８号墳	３号墳
９号墳	９号墳	１号墳
10号墳	10号墳	調査対象外

本報告で用いる古墳番号は、『兵庫県遺跡地図』（兵庫県教育委員会　2011年）記載の番号を基にしている。本発掘調査時においては、調査前の地形観察において、墳丘あるいは古墳と想定される平坦面などにあらかじめ古墳番号をつけた。番号は高位から低位の順につけたが、調査の結果古墳でないと判明したものについては欠番とした。『兵庫県遺跡地図』の古墳番号は本発掘の調査成果をもとに番号をつけ、調査時とは逆に低位から高位へ番号をつけている。本報告は基本的に『兵庫県遺跡地図』の番号を踏襲しているが、一部新規に命名したものがある。古墳番号の新旧の対象は第10表を参照されたい。

古墳は尾根稜線に所在するもの、稜線から下降する尾根の斜面に所在するものに大別できる。なお古墳以外の遺構としては、陥し穴、土坑を検出したが、出土遺物がなく時期は不明である。

２．調査結果

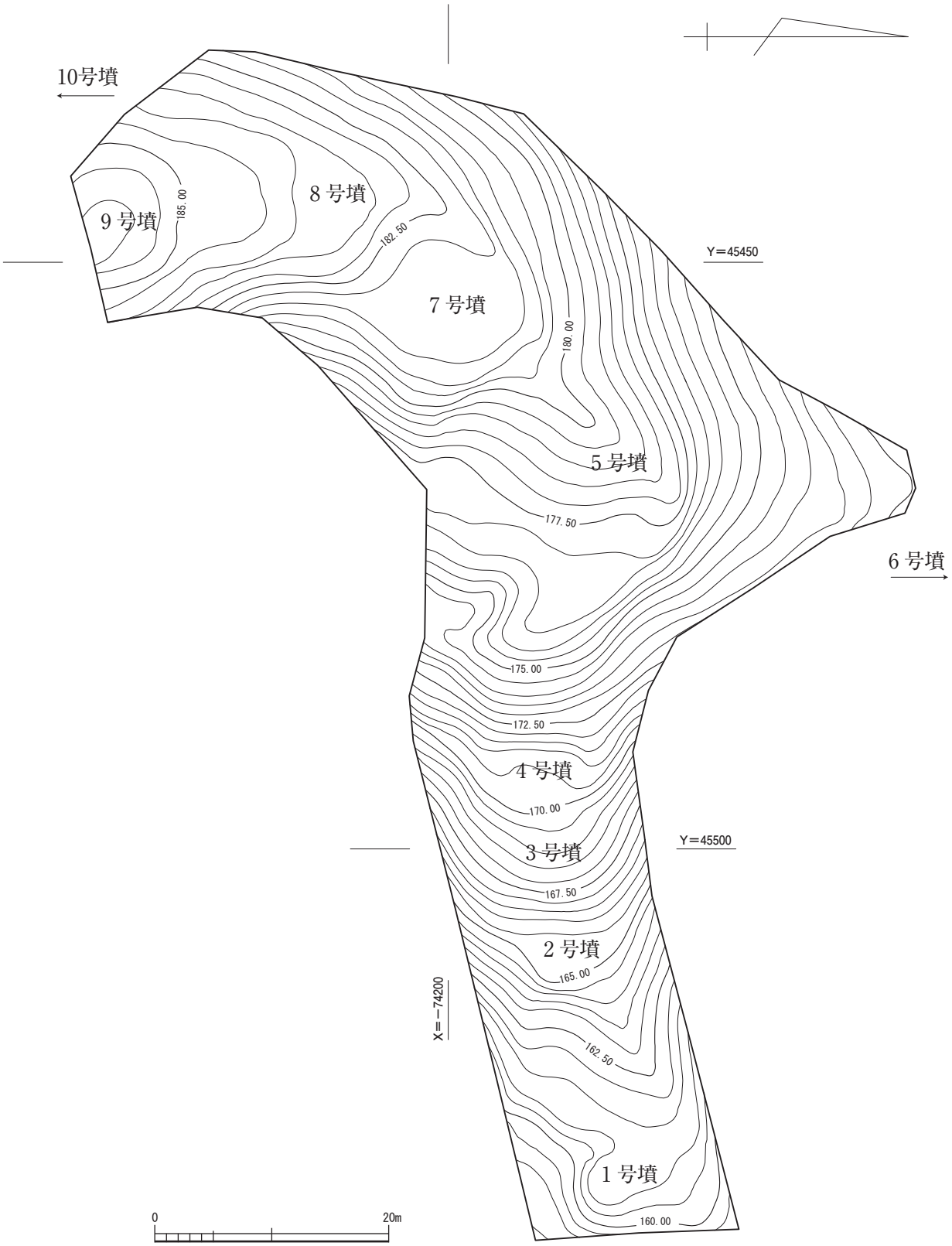
（１）古墳

１号墳

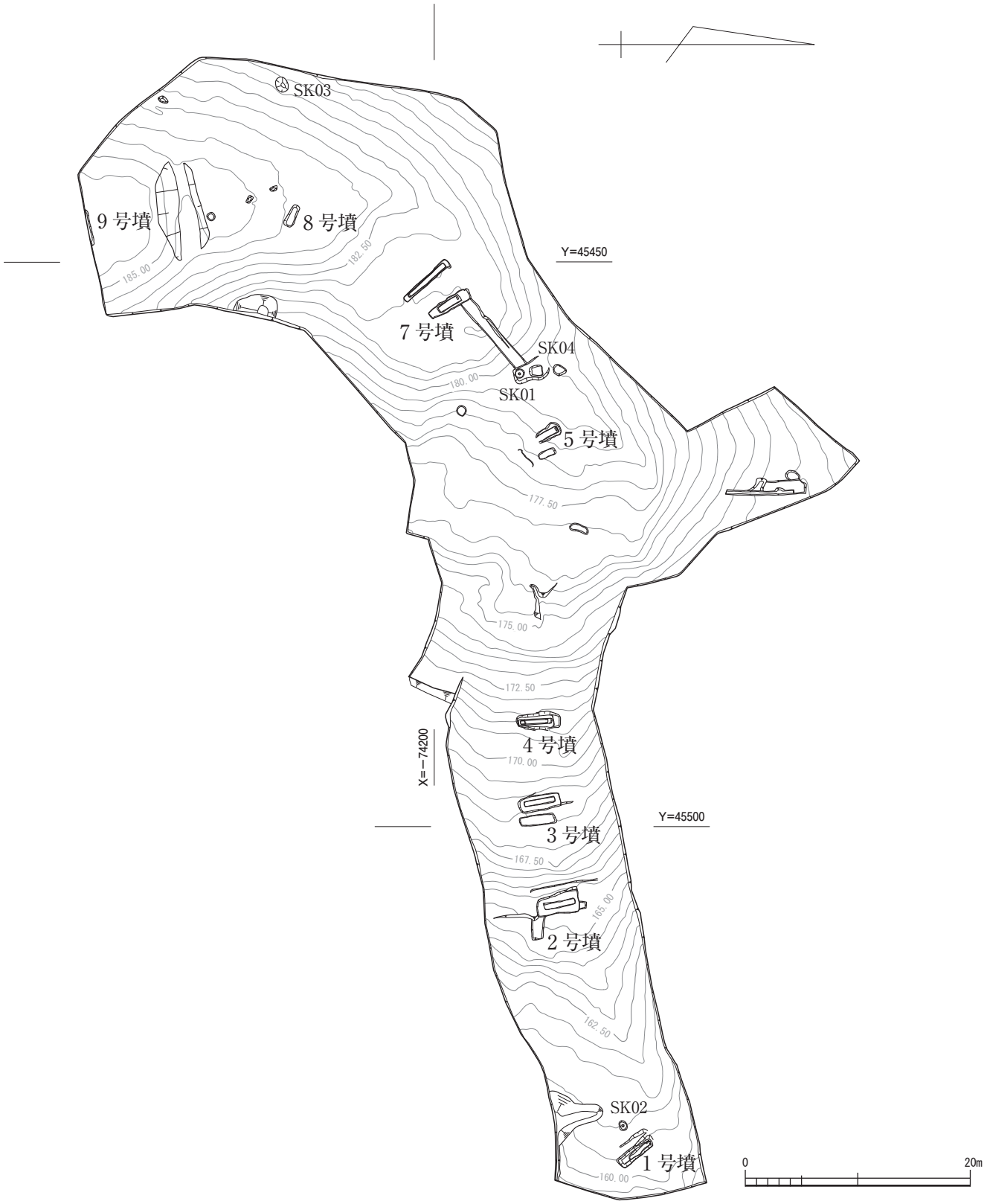
位置と検出状況

古墳群の東端に位置する。下降する尾根が平坦となる傾斜変換点付近に所在し、標高160.5m前後と古墳群中で最も低い場所に築造されている。確認調査では、当該地点にトレンチを設定しなかったため、本発掘調査において検出することとなったが、調査前の地形観察では明瞭な墳丘や外部施設は認められなかった。

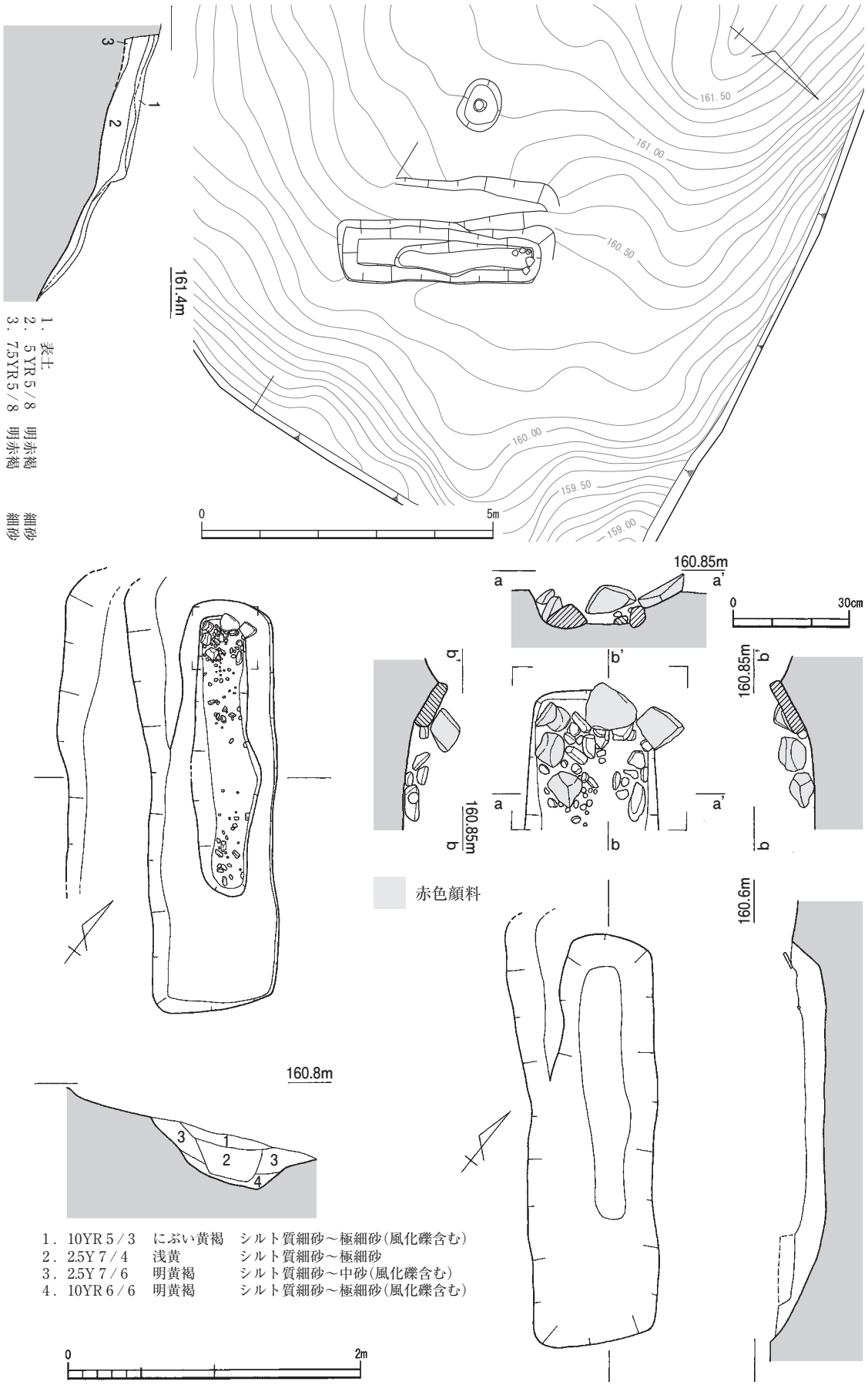
東向きに下降する尾根上に所在し、西側の上方には２号墳が所在する。２号墳とは水平距離で約22m、比高差約５m離れている。本墳付近は標高162m前後でテラス状の緩斜面となり、この地形を利用して



第53図　内高山西古墳群 調査前地形測量図



第54図　内高山西古墳群 遺構配置図



第55図　内高山西古墳群 1号墳実測図

古墳としている。

斜面上方を掘り込んで平坦面を拡張し、埋葬施設を掘り込む。検出した平坦面は、現況で東西約２ｍ、南北約４ｍを測る。埋葬施設の主軸は等高線とほぼ平行する南北にもつ。

区画溝などの施設は持たない。

形態・規模

棺

棺の痕跡は平面が不整な隅丸長方形を呈する。棺の痕跡の規模は、長さ1.9m、幅0.4m、検出面からの深さ30㎝である。主軸方向はN39°Wを示し、斜面の等高線方向にほぼ平行する。底面は南西から北東に傾斜をもっている。断面形は逆台形を呈し中央付近がややくぼんでいる。床面には両小口付近を中心に礫の散布が認められ、礫床を意識していると考えられる。

また北西側の小口付近には５～10㎝大の亜角礫を小口および側板沿いに並べている。検出位置から礫は被葬者の頭を安定させるものと考えられる。したがって被葬者の頭位は、北西方向とみられる。使用された礫は周辺で採取できるものだが、６石に赤色顔料が塗布されていた。赤色顔料については当博物館　岡本一秀が蛍光X線分析を行い、結晶構造を同定した結果、ベンガラの可能性が高いと判断した。

墓壙

墓壙は軟質の岩盤を掘り込み、その平面形は、本来は長方形を呈していたと考える。規模は長さ2.8m、幅0.85m、検出面からの深さは35㎝を測る。斜面下方となる北東半部の上面は土砂の流失により損なわれ、残存状況は良好ではない。断面形は逆台形を呈し底部は南西から北東へ傾斜をもつ。墓壙掘削後に明黄褐シルト質細砂～極細砂を５～20㎝の厚さで敷き、棺を安置する。

出土遺物

遺物は出土していない。

２号墳

位置と検出状況

東向きに下降する尾根上に所在し、斜面の上方に３号墳、下方に１号墳が所在する。本墳付近は標高165.3m前後でテラス状の緩斜面となるが、古墳はこの地形を利用し、上方を掘り込み平坦面を拡張している。検出した平坦面は東西約３ｍ、南北約５ｍを測る。西側上方に所在する３号墳とは水平距離で約６ｍ離れ、比高差は約３ｍある。東側下方に所在する１号墳とは水平距離で約22m離れ、比高差約５ｍを測る。埋葬施設の主軸は等高線とほぼ平行の南北にもつ。

本墳の埋葬施設は、確認調査時に検出し、その際に断ち割って調査した。その際に鉇が出土している。

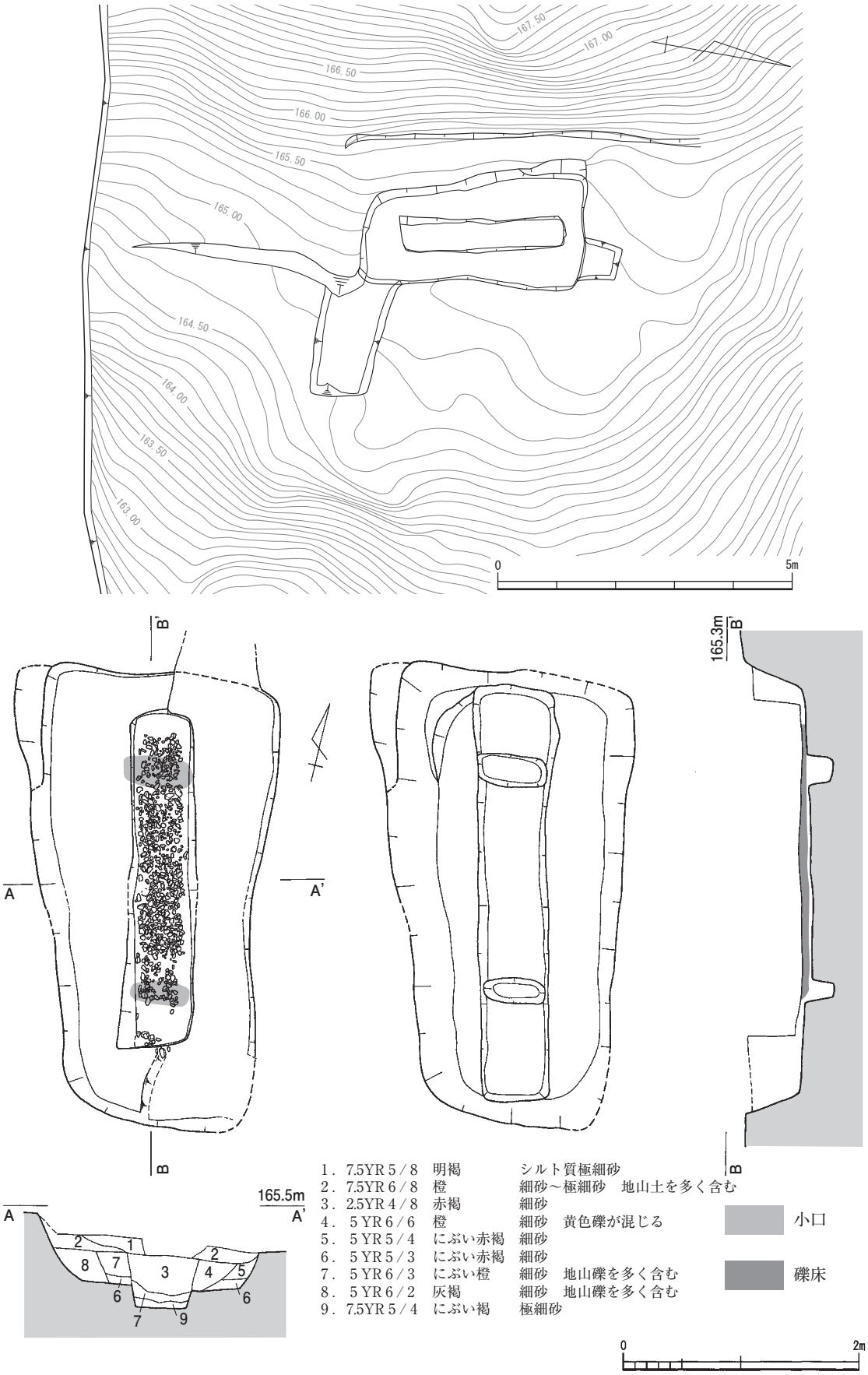
区画溝などの施設は持たない。

形態・規模

棺

棺の痕跡は平面長方形を呈し、側壁はほぼ垂直で、底面も水平に近いことから箱式木棺であったと考えられる。棺の痕跡の規模は、長さ2.9m、幅50㎝、検出面からの深さ40㎝である。棺の痕跡は北側よりも南側が若干広がる傾向にあるものの被葬者の頭位を示す痕跡はみられない。主軸方向はN14°Wを示し、斜面の等高線方向にほぼ平行する。

底は礫床となる。礫床は長さ2.3m、幅0.4mの範囲で密に礫の散布が見られる。小口穴を検出したが、



第56図　内高山西古墳群 2 号墳実測図

両小口ともこの礫床の範囲と重複している。北側は小口穴よりも広がりをもち、南側は小口穴とほぼ一致するが、その上面を覆っている。礫床は一旦南側小口穴付近で途切れるが、約20㎝程の空白部分をおいて南側で若干の礫の集積が認められる。そこでこの礫の集積までが棺の痕跡であると判断した。

墓壙

墓壙の平面形は台形状を呈し、規模は長さ3.8m、幅は北辺が2.0m、南辺が1.5mを測る。底部はほぼ平坦であり、棺の部分となる長さ3.5m、幅0.6mにわたって20㎝程掘り下げ、土を敷いた後に棺を置く。

出土遺物

確認調査時に鉇が１点出土した。出土地点は墓壙西側の平坦面最奥部、地山直上である。

鉇（Ｍ１）は、刃部を欠き、現存長19.2㎝を測る。厚さは0.3㎝である。尻部は徐々に幅が細くなる。木質などの痕跡は確認できなかった。

３号墳

位置と検出状況

東向きに下降する尾根上に所在し、上方に４号墳、下方に２号墳が所在する。標高168.5m前後で東西約４m、南北約５mのテラス状の緩斜面となるが、古墳はその地形を利用しそこに２基の埋葬施設を掘り込む。

西側上方に所在する４号墳とは水平距離で約６m離れ、比高差は約２m、東側側下方に所在する２号墳とは水平距離で約６m離れ、比高差は約３mを測る。いずれの埋葬施設も主軸は等高線とほぼ平行の南北方向にもつ。

確認調査においては本墳付近にもトレンチを設定したが、埋葬施設などは検出できなかった。

なお本墳は調査時には７号墳第２・３主体部としていたが、調査後の検討の結果、第１主体部（現４号墳）とは比高差があり、上下の関係にあることから別の古墳として扱うこととした。

平坦面や区画溝などの施設は持たない。

形態・規模

主体部１

棺

棺の痕跡は平面長方形を呈し、側壁はほぼ垂直で、底面も水平に近いことから箱式木棺であったと考えられる。棺の痕跡の規模は、長さ2.9m、幅50㎝、検出面からの深さ35㎝である。主軸方向はN11°Wを示し、斜面の等高線方向にほぼ平行する。小口穴などは確認できなかった。

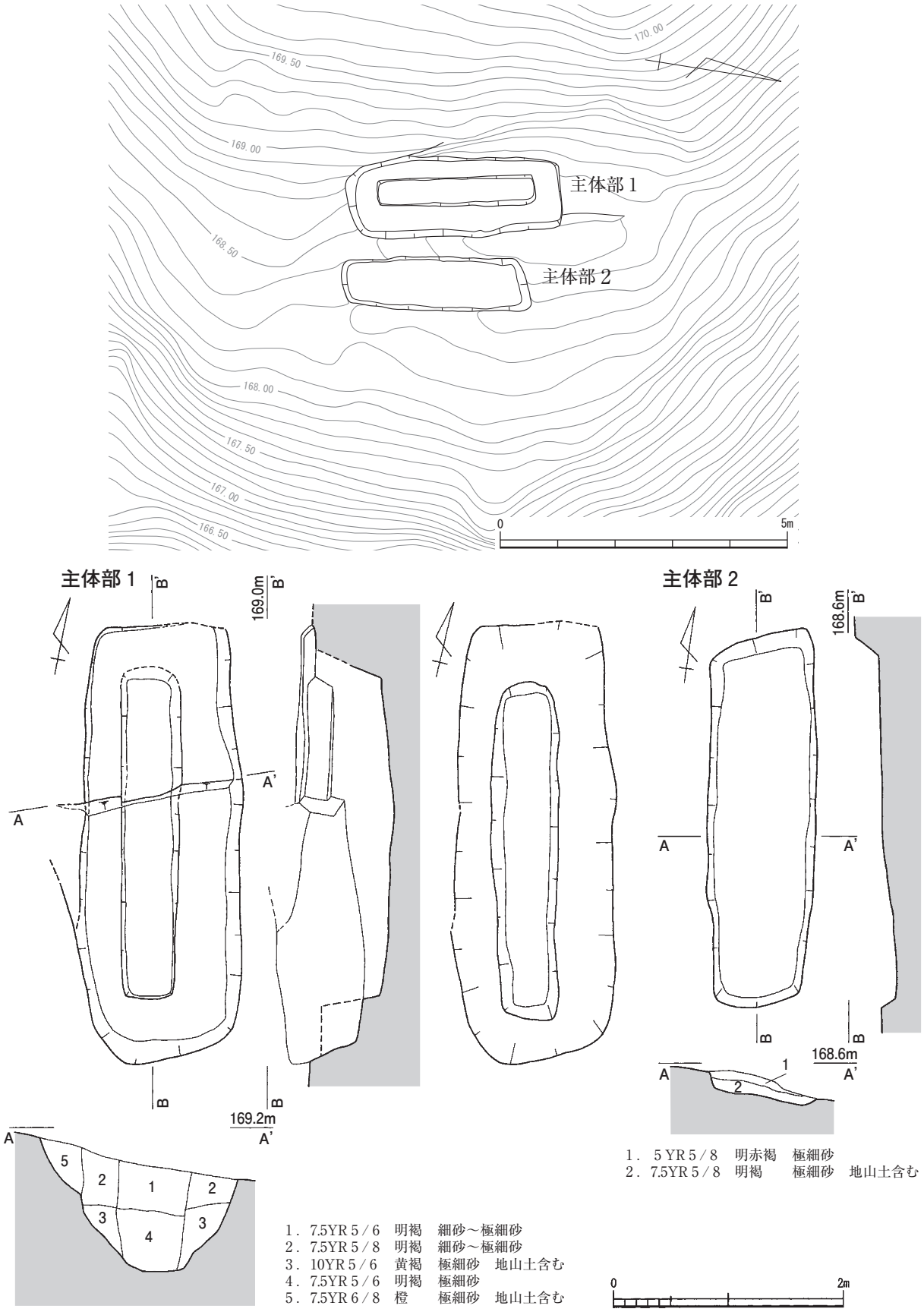
棺の底には礫床などはみられない。また石枕などもなく、被葬者の頭位方向は明らかにしえない。

墓壙

墓壙の平面形はやや不整ながら長方形を呈し、規模は長さ3.8m、幅1.3m、高位側の検出面からの深さは0.9mを測る。

出土遺物

遺物は出土していない。



第57図　内高山西古墳群 3 号墳実測図

主体部２

墓壙

流失のためか遺存状態は良好でない。主体部１との検出面の比高差は0.5m前後を測る。主軸方向はＮ９°Ｗを示し、主体部１とほぼ同じ方向をもつ。この方向は斜面の等高線にほぼ平行し、南側小口がほぼ揃っている。なお両主体部は重複関係をもたない。

墓壙の平面形はやや不整ながら長方形を呈し、規模は長さ3.2m、幅0.9m、高位側の検出面からの深さは15㎝を測る。棺の痕跡は検出できなかった。

出土遺物

遺物は出土していない。

４号墳

位置と検出状況

東向きに下降する尾根上に所在する。同一尾根上に１～３号墳が所在する中で本墳が最も高所に位置する。西側に所在する５号墳とは水平距離で約20m離れ、比高差は約７ｍある。主軸は等高線とほぼ平行の南北にもつ。

確認調査時に墓壙を検出し、その際断ち割って調査したが、調査区の制約から墓壙と判断しえず溝状遺構と報告している。

調査時には７号墳第１主体部としたが、前述したように第２・３主体部（現３号墳）とは比高差があることから別の古墳として扱うこととした。

平坦面や区画溝などの施設は持たない。

形態・規模

棺

棺の痕跡は平面長方形を呈し、側壁はほぼ垂直で、底面も水平に近いことから箱式木棺であったと考えられる。棺の痕跡の規模は、長さ2.4m、幅45㎝、検出面からの深さ35㎝である。

棺の主軸方向はＮ５°Ｗを示し、斜面の等高線方向にほぼ平行する。

南側小口付近では小口穴を検出したが、北側の小口については断ち割りの際の掘削によりその有無を確認しえなかった。

棺幅などから頭位が判断できないものの、南側小口付近に置かれた２点の礫は検出位置から石枕と考えられる。そうした場合、被葬者の頭位は南と考えることができるだろう。

墓壙

墓壙の平面形はやや不整ながら隅丸長方形を呈し、規模は長さ3.2m、幅1.2m、高位側の検出面からの深さは0.7mを測る。

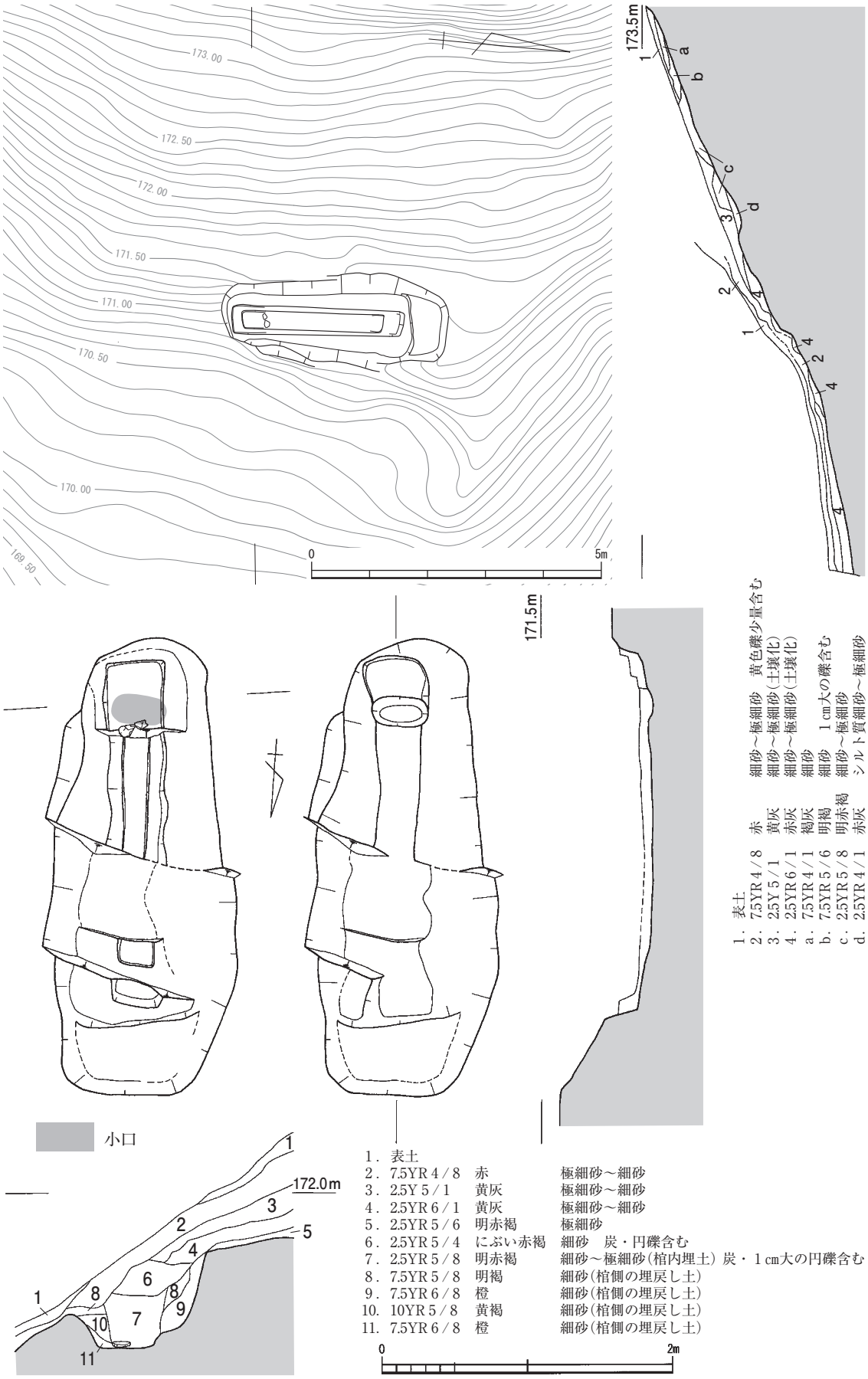
出土遺物

遺物は出土していない。

５号墳

位置と検出状況

尾根から斜面への傾斜変換点付近に所在する。調査前の地形観察では明瞭な墳丘は認められなかった。



第58図　内高山西古墳群 4号墳実測図

確認調査では、本墳付近にトレンチは設定しなかったため検出しえず、本発掘調査時に検出したものである。

形態・規模

調査前の墳頂部は平坦で標高179.5m前後を測り、南側に位置する７号墳とは約２ｍの比高差があり、本墳が下位となる。７号墳との間には浅い溝状の落ち込みがある。本墳は尾根が幅を減じ、平坦部からやや外れた緩斜面に所在する。ただしこの地形は、本来存在した尾根上の平坦部が侵食により消滅したことによる可能性がある。確認調査の際、南東側の下方斜面に設定したトレンチの調査では、埋葬施設の礫床に用いられるのと類似する小礫が若干出土している。礫の検出位置から、これらが本墳の埋葬施設から流出したものである可能性が考えられ、だとすれば本墳の平坦面のうち南東部分は流失していると考えることもできる。

本墳の原況は明らかにしえないが、築造当初は８・９号墳とともに尾根上に並列する古墳であったと考える。

主体部

緩斜面で３基の主体部を検出した。主体部３のみ等高線に平行し、残る２基は等高線に斜交する。いずれも地山の消失により遺存状況は不良である。

主体部１

棺

棺の痕跡は平面長方形を呈し、側壁は逆台形を呈するが、底面は水平に近いことから箱式木棺であったと考えられる。棺の痕跡の規模は、残存長約２ｍ、幅0.6ｍ、検出面からの深さ20㎝である。

棺の主軸方向はN30°Ｗを示し、斜面の等高線方向とは斜行する。北側小口付近に枕石が置かれる。この検出位置から被葬者の頭位は北側と考えられる。

床面の南東半部には疎らながら礫を散布しており、礫床を意識していると考える。

墓壙

地山の流失により残存する形状は不整な楕円形を呈し、南東部は消失する。規模は残存長2.3ｍ、幅1.3ｍ、検出面からの深さは30㎝を測る。岩盤を掘り込み、土で床を整地した後棺を安置している。

出土遺物

棺内西部からは鉄剣（Ｍ４）が出土した。鉄剣は切っ先を頭位方向に向けて置かれていた。

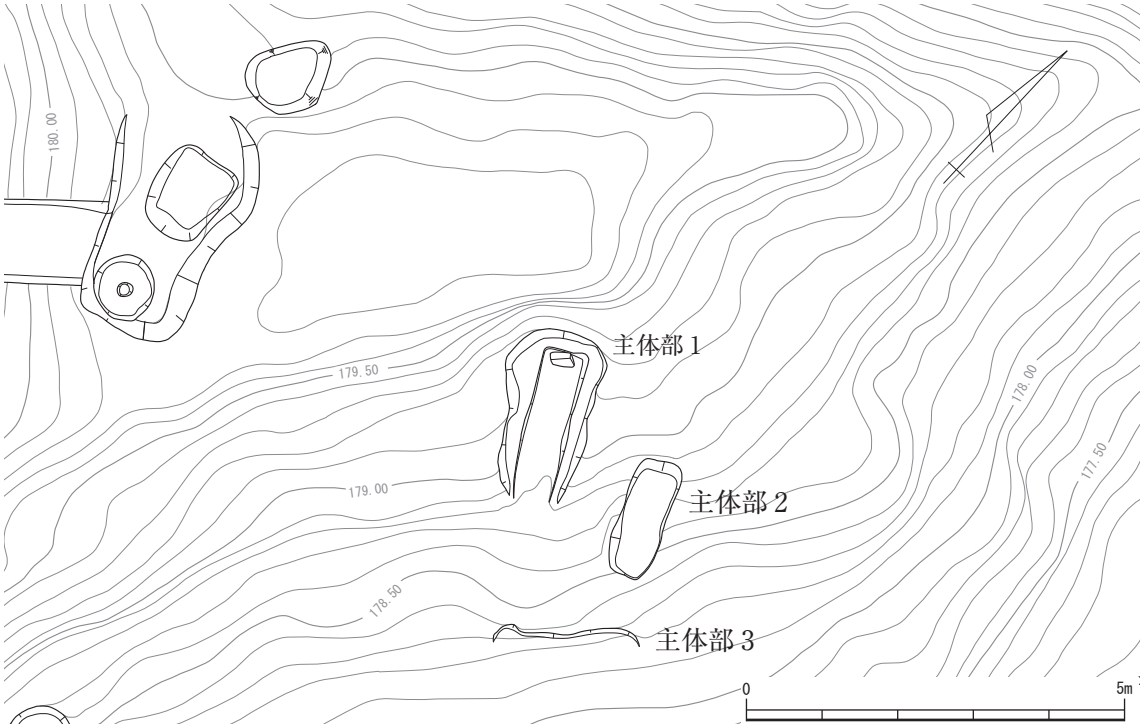
Ｍ４は全長43.2㎝を測る。刃部は長さ33.2㎝、幅3.5㎝、厚さ0.6㎝、茎部は長さ10.0㎝、幅1.6㎝、厚さ0.4㎝を測る。刃部から茎部にかけて布痕が認められる。柄部には目釘穴が２箇所確認できた。

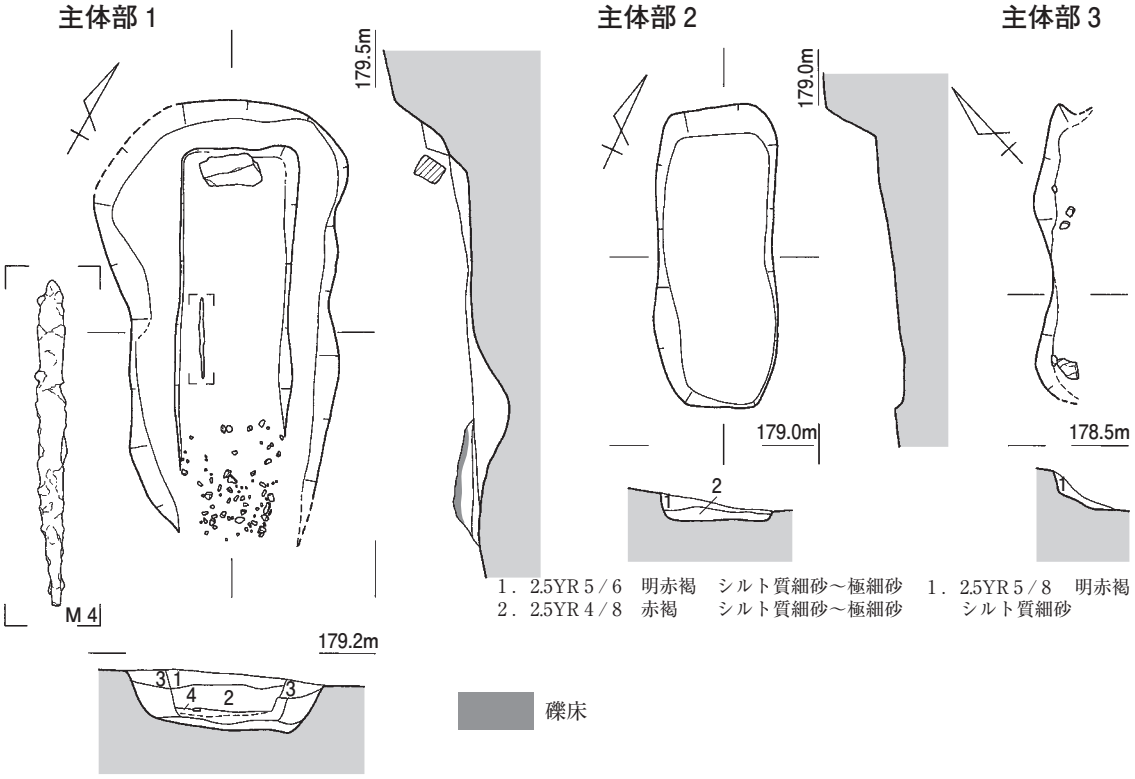
主体部２

墓壙

墓壙の平面形は長方形を呈し、主軸方向はN24°Ｗを示す。主体部１の方向に近似し斜面の等高線方向とは斜行する。底部は北西から南東にやや傾斜する。南東半部は流失によりかろうじて立ち上がりを検出した。

規模は長さ1.55ｍ、幅0.6ｍ、検出面からの深さは10㎝程度である。棺の痕跡は検出できなかったが、底部が平坦なことから箱式木棺であったと考える。





１．2.5YR５／６　明赤褐　シルト質細砂～極細砂
２．2.5YR４／８　赤褐　シルト質細砂～極細砂

１．2.5YR５／８　明赤褐　シルト質細砂

１．５YR５／３　にぶい赤褐　シルト質極細砂　風化礫含む
２．５YR５／６　明赤褐　シルト質細砂～極細砂　風化礫少量含む
３．５YR５／６　明赤褐　シルト質極細砂　風化礫含む
４．2.5YR５／８　明赤褐　シルト質細砂～極細砂

第59図　内高山西古墳群 ５号墳実測図

出土遺物

遺物は出土していない。

主体部３

墓壙

地山の岩盤の流失により残存状態は不良である。北西側の肩部分を検出したのみであり、本来の規模、形状は明らかにしえない。主軸方向はN24°Eを示す。主体部１・２とは主軸方向が異なるが、墓壙内に少量ながら礫の集積が見られたため、消極的ながら主体部と判断した。

残存した部分の規模は、検出長1.5m、検出面からの深さ15㎝を測る。

出土遺物

遺物は出土していない。

７号墳

位置と検出状況

南西から北東向きの尾根上に位置し、南西側に８号墳、北東側に５号墳が隣接する。調査前の地形観察ではテラス状の平坦面が認められた。

確認調査において墓壙２基を検出し、うち１基は断ち割って調査した。

形態・規模

調査前の墳頂部は平坦で標高181.5m前後を測り、南西側の８号墳よりも約2.2m低く、５号墳よりは約2.2m高い。裾は不明瞭である。平坦面の南北両側は傾斜変換が認められず、そのまま尾根斜面に続く。明瞭な墳丘は持たないが、主体部の深さが浅いことから、本来はある程度の高さをもつ墳丘を有していた可能性も考えられるだろう。

５号墳との境界付近には不明瞭ながら溝状の落ち込みを検出した。幅1.9m、検出面からの深さ20㎝を測る。ただし、浅く、尾根を横断せずに消滅している。８号墳との境界は段差のみで明確に区画する施設は持たない。

主体部

平坦面上で２基検出した。

主体部１

棺

棺の痕跡は平面長方形を呈し、側壁はほぼ垂直で、底面も水平に近いことから箱式木棺であったと考えられる。棺の痕跡の規模は、長さ4.3m、幅45㎝、検出面からの深さ30㎝である。

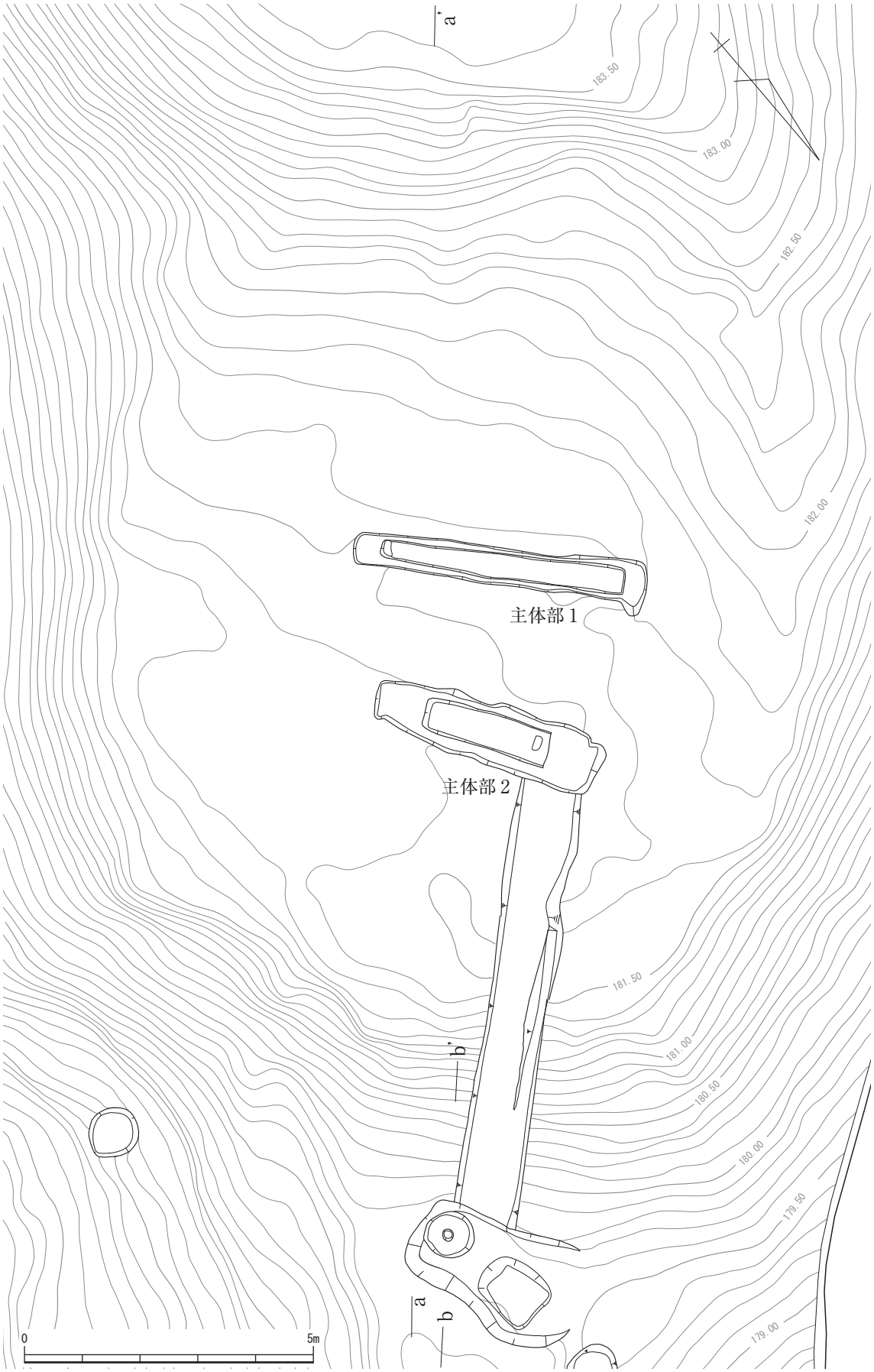
棺内は土を敷いた後、礫を散布して礫床とする。南東半部の礫は密であるが、北西半部はやや疎らな分布を見せる部分がある。

棺の主軸方向はN40°Wを示し、斜面の等高線方向とほぼ平行する。棺幅は北西側が若干広いものの南東小口付近に石枕があることから、被葬者の頭位方向は南東と判断する。

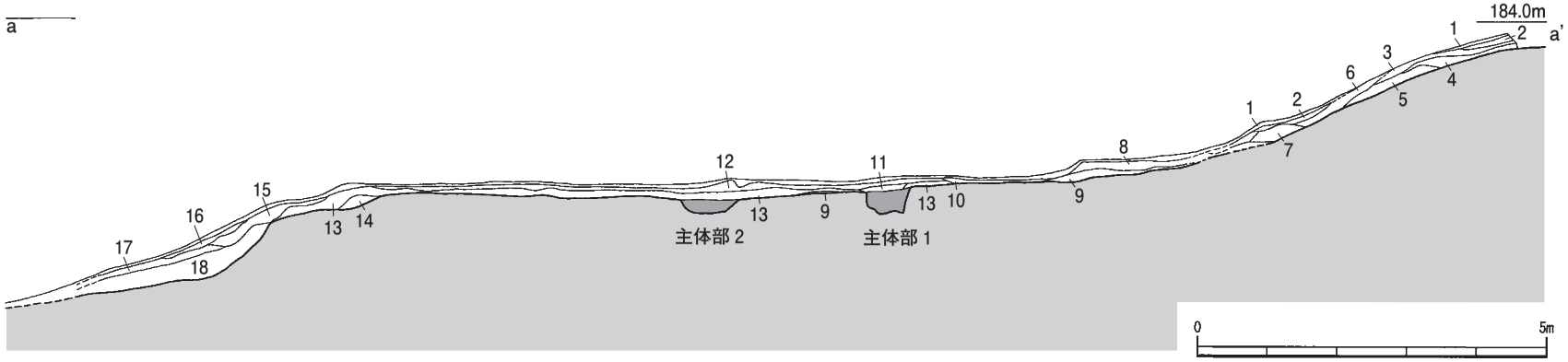
両小口付近では小口穴を検出した。ただし北西側の小口穴は礫床と重複しているため、実際には用いられなかったのかもしれない。

墓壙

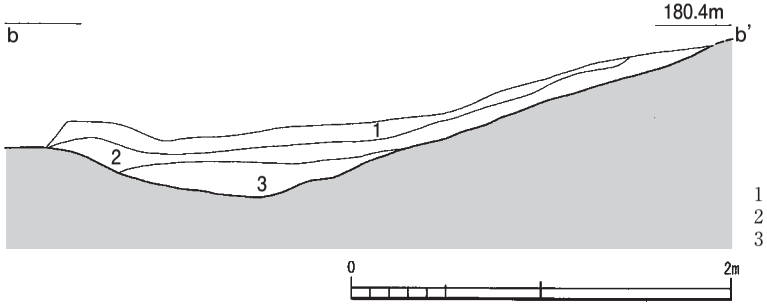
墓壙の平面形はやや隅丸の長方形を呈し、規模は長さ5.25m、幅0.7m、検出面からの深さは35㎝を測る。



第60図　内高山西古墳群 7号墳地形測量図

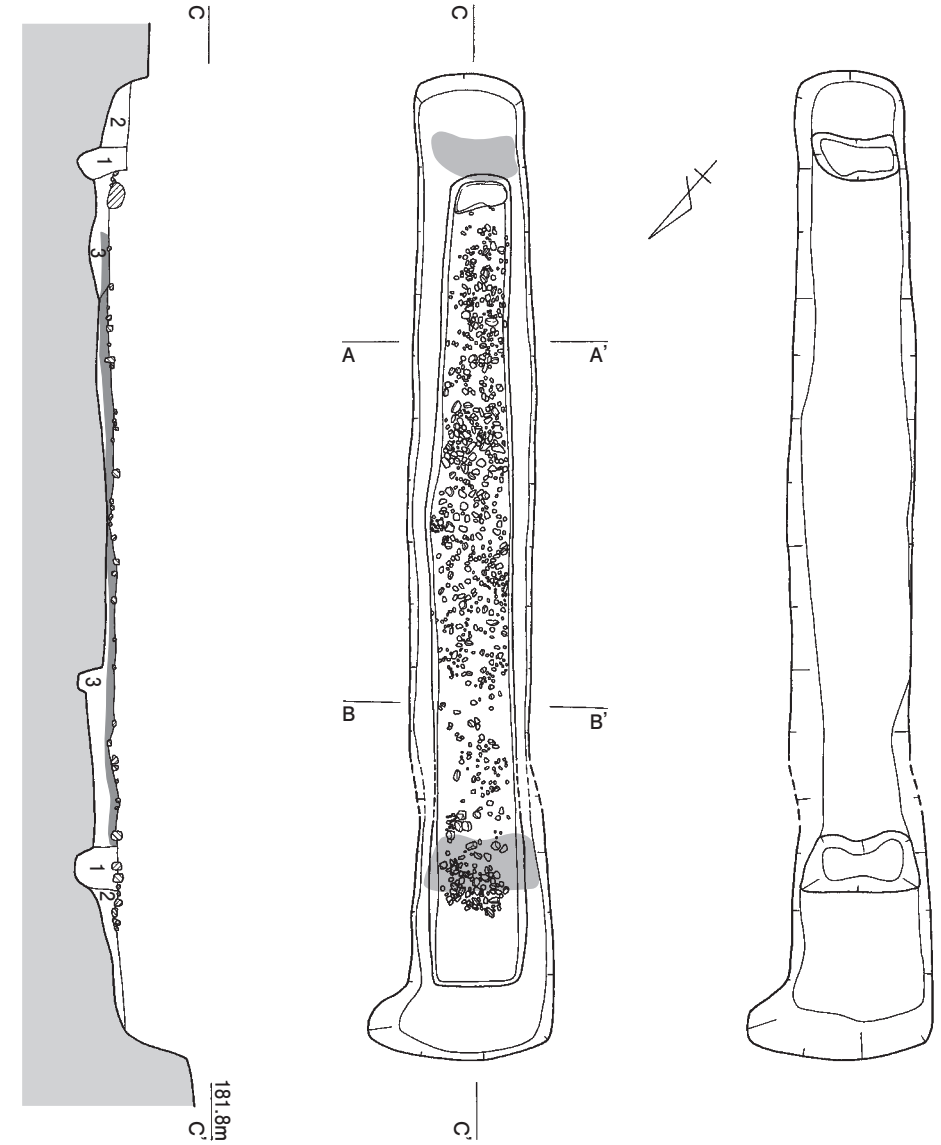


1．表土
2．10YR６／４　にぶい黄橙　シルト質極細砂　土壌化
3．10YR５／８　黄褐　シルト質極細砂　やや土壌化
4．５YR５／８　明赤褐　シルト質細砂～極細砂　やや土壌化
5．５YR６／６　橙　シルト質細砂～極細砂　風化礫含む
6．10YR５／４　にぶい黄褐　シルト質極細砂
7．10YR７／４　にぶい黄橙　シルト質細砂～極細砂　風化礫含む
8．10YR６／４　にぶい黄橙　シルト質極細砂　土壌化
9．10YR７／６　明黄褐　シルト質細砂～極細砂　やや土壌化
10．10YR６／６　明黄褐　シルト質細砂～極細砂　やや土壌化　風化礫含む
11．2.5Y６／４　にぶい黄　シルト質細砂～極細砂
12．10YR６／４　にぶい黄橙　シルト質極細砂　やや土壌化
13．7.5YR６／４　にぶい橙　シルト質細砂～極細砂　風化礫少量含む
14．7.5YR５／４　にぶい褐　シルト質極細砂
15．10YR６／４　にぶい黄橙　シルト質極細砂　土壌化
16．10YR７／８　黄橙　シルト質極細砂　やや土壌化
17．10YR６／６　明黄褐　シルト質極細砂　風化礫少量含む
18．10YR６／６　明黄褐　シルト質極細砂　やや土壌化

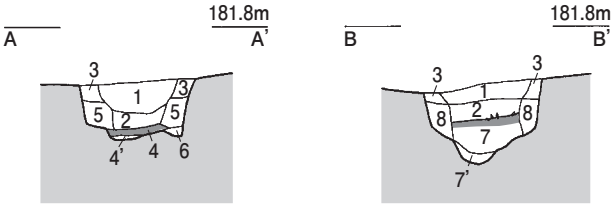


1．５YR６／６　橙　シルト質細砂　風化礫含む
2．7.5YR６／６　橙　シルト質細砂～極細砂　風化礫含む
3．５YR５／６　明赤褐　極細砂　風化礫少量含む

第61図　内高山西古墳群　７号墳土層断面図



1．5YR 5／8　明赤褐　極細砂
2．7.5YR 5／6　明褐　極細砂（地山土含む）
3．5YR 4／8　赤褐　極細砂



1．	10YR 6／6	明黄褐	シルト質細砂　風化礫含む　やや土壌化
2．	10YR 6／4	にぶい黄橙	シルト質細砂　やや土壌化
3．	10YR 7／6	明黄褐	シルト質細砂～極細砂　風化礫含む
4．	7.5YR 5／6	明褐	細砂
4'．	〃	〃	地山ブロックを含む
5．	5YR 5／6	明赤褐	細砂
6．	7.5YR 5／8	明褐	細砂
7．	5YR 4／4	にぶい赤褐	細砂
7'．	〃	〃	地山ブロックを含む
8．	7.5YR 4／6	褐	細砂

0　2m

第62図　内高山西古墳群 7号墳主体部1

出土遺物

遺物は出土していない。

主体部２

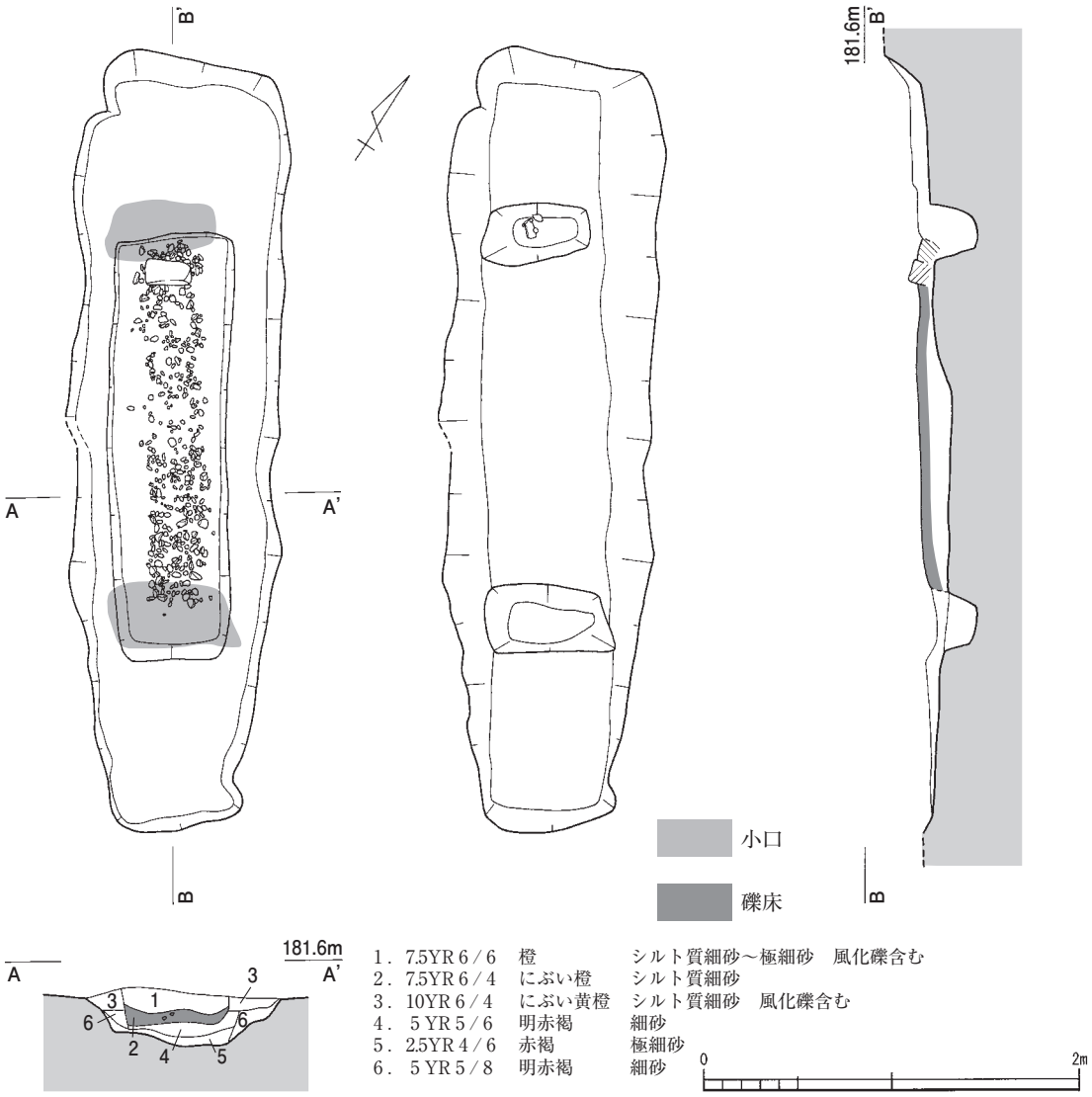
棺

棺の痕跡は平面長方形を呈し、側壁はほぼ垂直で、底面も水平に近いことから箱式木棺であったと考えられる。棺の痕跡の規模は、長さ2.3m、幅0.6m、検出面からの深さ15cmである。主軸方向はN34°Wを示し、主体部１とほぼ平行する。

棺内は土を敷いた後、礫を散布して礫床とする。礫は両小口付近に密に散布し、中央付近はやや疎らな状況をみせる。棺内西半部からは鉄鏃、鉄斧が出土した。

棺の主軸方向は頭位が判断できないものの、石枕があることから、被葬者の頭位は北西方向と考える。

棺の小口穴を検出した。棺床からの深さ30cmを測る。



第63図　内高山西古墳群 7号墳主体部２

墓壙

墓壙の平面形は長方形を呈し、規模は長さ4.2m、幅1.1m、検出面からの深さは30㎝を測る。南西側は土砂の流失により浅い。断面は縦・横断とも逆台形を呈し、岩盤を掘り込んだ後に土で整地し棺を設置する。

出土遺物

礫床上より鉄鏃（Ｍ３）、鉄斧（Ｍ４）が出土した。Ｍ３は鏃身を欠き、頸部から茎部の一部が残存する。有機物の残存は認められない。残存長6.7㎝を測る。Ｍ４は袋状鉄斧で全長10.0㎝を測る。刃部は長さ5.0㎝、幅5.6㎝を測る。刃部から袋部へは撫で肩状に続く。袋部は折り返しによって成形されており、断面形は横長の楕円形を呈する。木質は認められない。

８号墳

位置と検出状況

調査区東端に位置し、尾根上の南側に９号墳、北東側に７号墳が所在するが、９号墳とは直に隣接していない。調査前の地形観察では平坦面として認識できたが明瞭な墳丘は認められなかった。ただし確認調査では本古墳付近に設定したトレンチで墳丘を確認している。

形態・規模

調査前の墳頂部は平坦で標高183.5～184.0ｍを測り、北東側の７号墳よりも約2.2ｍ高い。東西・南北ともに約６ｍの平坦面を検出したが、墳裾や７号墳との境界は不明瞭で、区画溝などの施設も存在していない。

明瞭な墳丘は有していないが、検出した墓壙の深さが浅いことから、築造当初はある程度の高さを有する墳丘があった可能性があるものの、想定の域をでない。

主体部

平坦面の南東寄りで１基検出した。

墓壙

墓壙の平面形はやや不整な台形を呈し、主軸方向はN61°Ｗをを示す。規模は長さ2.0ｍ、幅は東辺が0.8ｍ、西辺が0.7ｍを測る。検出面からの深さは15㎝を測る。木の根の影響を受けていたため棺の痕跡は確認できなかったが底面も水平に近いことから箱式木棺であり、墓壙の幅は南東側が若干広くなることから被葬者の頭位は南東である可能性が考えられる。

出土遺物

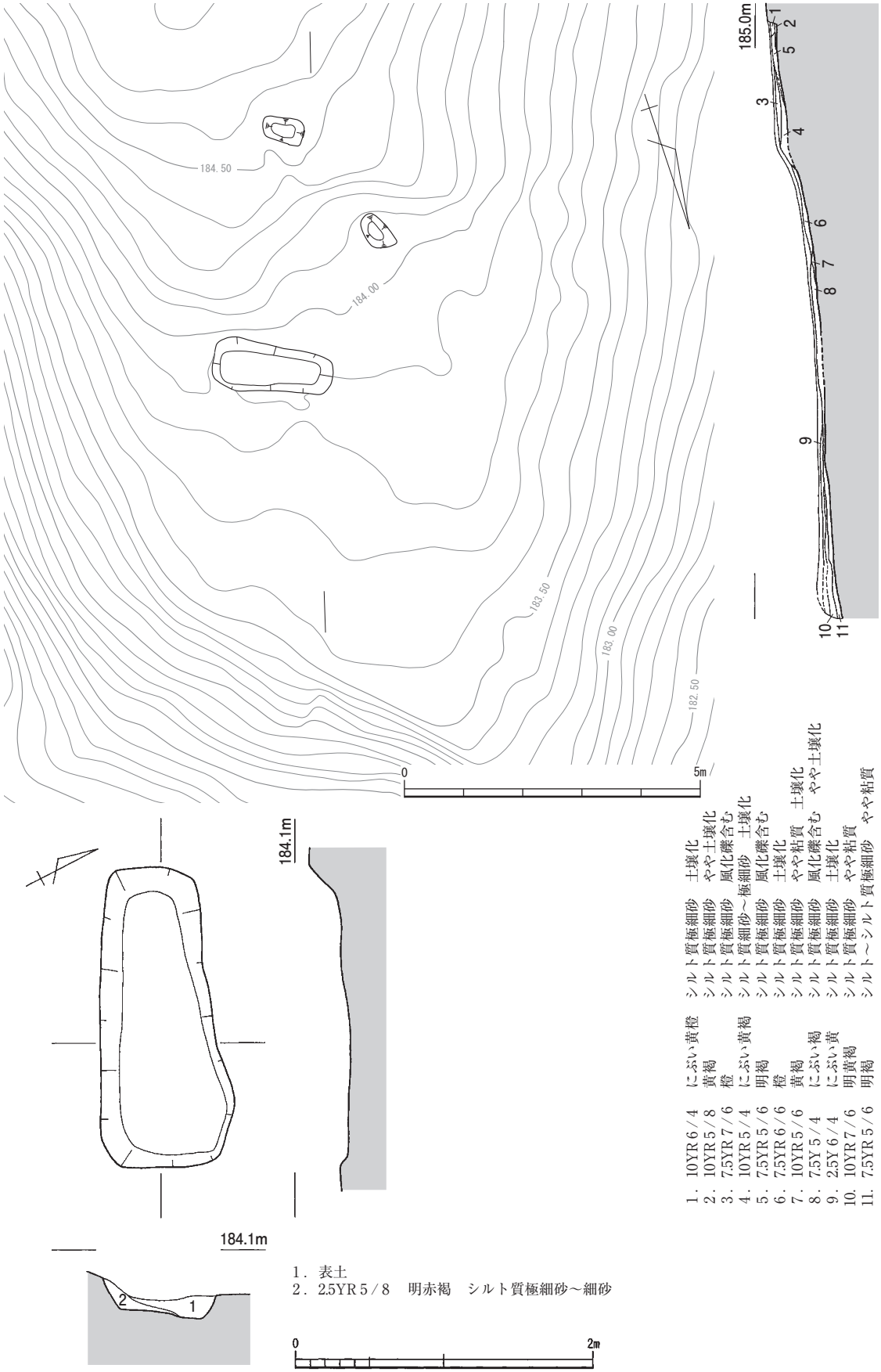
遺物は出土していない。

９号墳

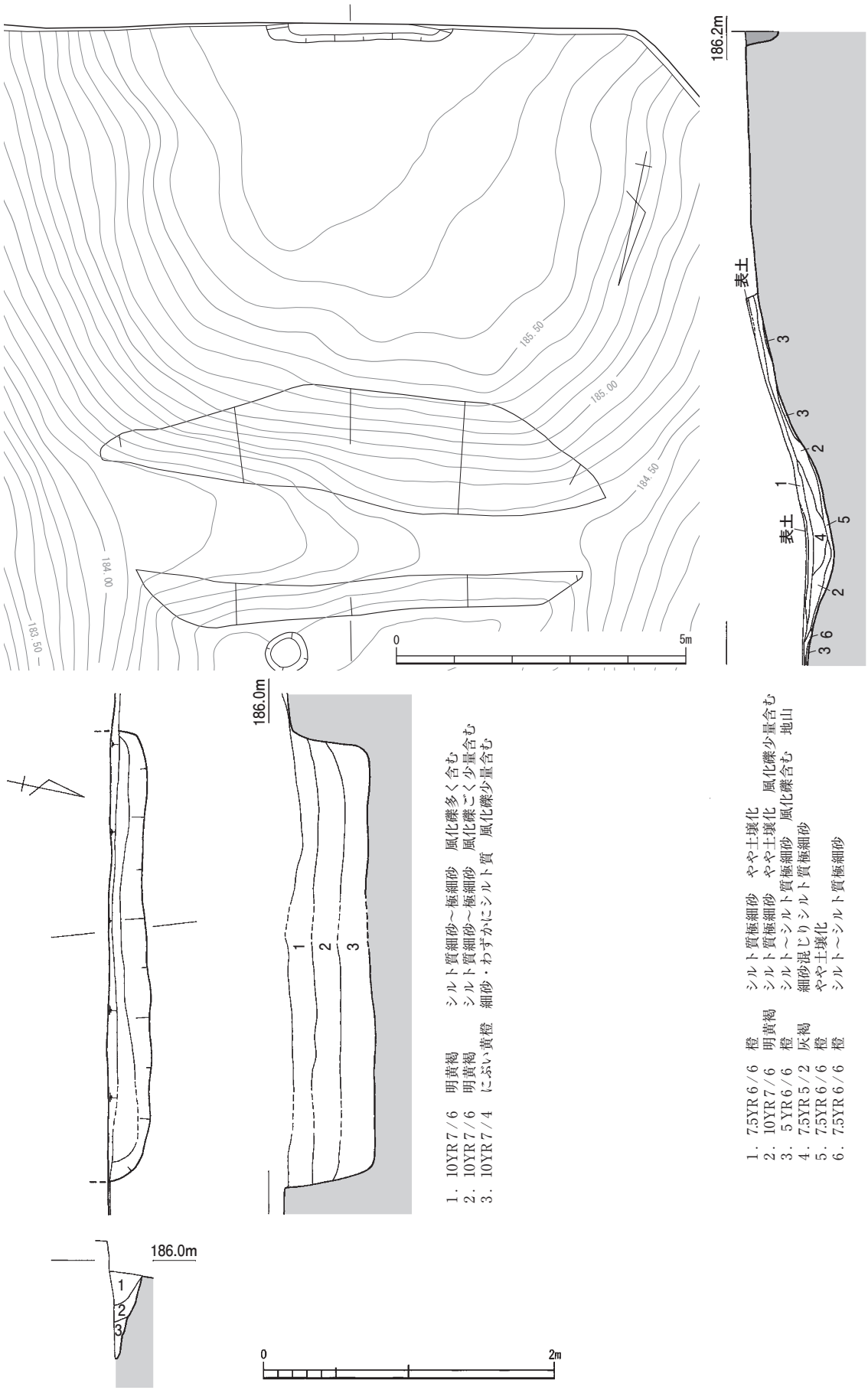
位置と検出状況

調査区南端に位置し、調査した古墳の中では最も標高の高い位置に所在する古墳である。調査前の地形観察でも明瞭な墳丘が認められた。今回の調査では唯一、明確な墳丘を有する古墳である。

確認調査では調査を行っていない。北側に８号墳、南側に10号墳が並ぶ。墳丘の南半部は事業対象地外となるため、調査は北半部のみを対象とした。



第64図　内高山西古墳群 8号墳実測図



第65図　内高山西古墳群 9号墳実測図

形態・規模

調査前の墳頂部は平坦で標高186m前後を測り、北側の８号墳よりも約1.6m高く、８号墳との境界には区画溝を有している。溝の幅は４m前後を測る。溝底からの高さは0.8mを測る。東西両側の墳裾は不明瞭で尾根斜面との傾斜変換が認められない。

主体部

調査区南壁際で１基検出した。検出位置は墳丘平坦面の中央付近であり、検出位置から主体部は１基のみと考える。

墓壙

墓壙は調査区の制約から北辺を検出したに過ぎない。平面形は東西に主軸をもつ長方形を呈するとみられる。検出した規模は長さ3.15m、検出面からの深さは0.6mを測り、地山の岩盤をほぼ垂直に掘り下げる。棺の痕跡は検出しえなかったが底面が水平に近いことから箱式木棺の可能性が考えられる。

墓壙の主軸方向はN103°Wを示す。

出土遺物

区画溝の埋土内より土師器甕の破片などが若干出土した。このうち２点を図化した。いずれも口縁部付近がわずかに残る程度である。検出位置から、これらの土器片は墳丘上にあったものが流入した可能性がある。

いずれの口縁部も直線的で、端部を丸くおさめる。１は外面に横ナデを施し黒斑が認められる。２は摩滅のため調整は不明である。

（２）その他の遺構

SK01

７号墳北東裾の溝状遺構と重複して検出した。断面観察では本遺構埋没後に溝状遺構が掘削される。平面は径0.85mの円形を呈する。検出面からの深さは最大で0.6mを測り底部は平坦である。底部中央付近に径20㎝、深さ45㎝のピットがある。遺物は出土していないが、形状から陥し穴と判断した。

SK02

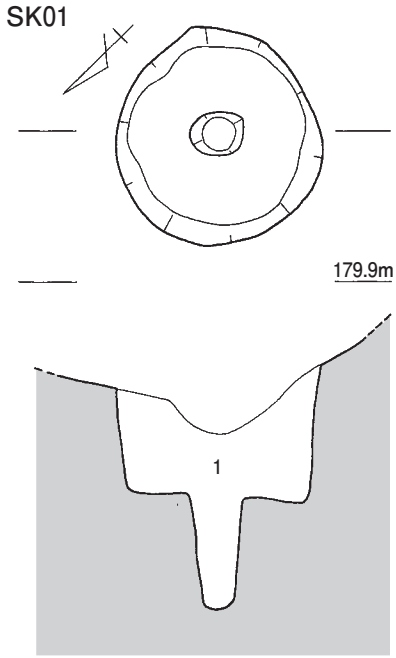
１号墳西側の傾斜変換点付近で検出した。平面は東西に主軸をもつ0.9m×0.8mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最大で35㎝を測る。底部は中央に向けやや傾斜をもつ。底部中央付近に径20㎝、深さ25㎝のピットがある。遺物は出土していないがSK01と同じ形状であり陥し穴と判断した。

SK03

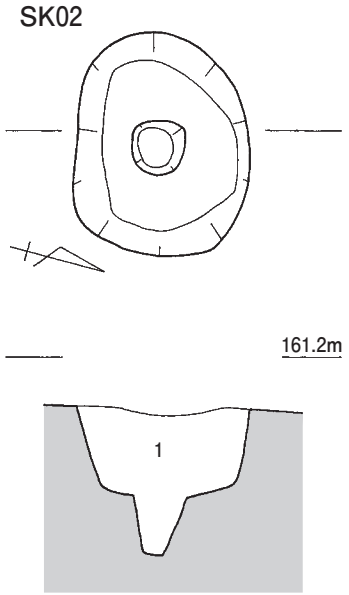
８号墳の北側斜面で検出した。東西に主軸をもつ楕円形を呈し、断面はU字状を呈する。埋土内には炭・灰が混じっている。遺構の性格や所属時期は不明である。

SK04

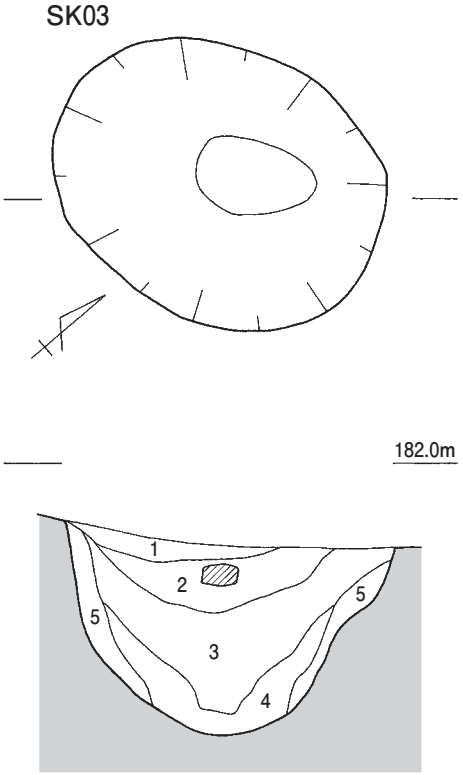
７号墳北東裾の溝状遺構と重複して検出した。SK01の北側に位置する。平面は南北に主軸をもつ隅丸長方形を呈し、長辺1.15m、短辺0.95mを測る。検出面からの深さは15㎝を測り断面は浅いU字状を呈する。底部はやや凹凸があり埋土には地山である軟質の岩盤がブロック状に混じる。遺構の性格や時期は不明である。



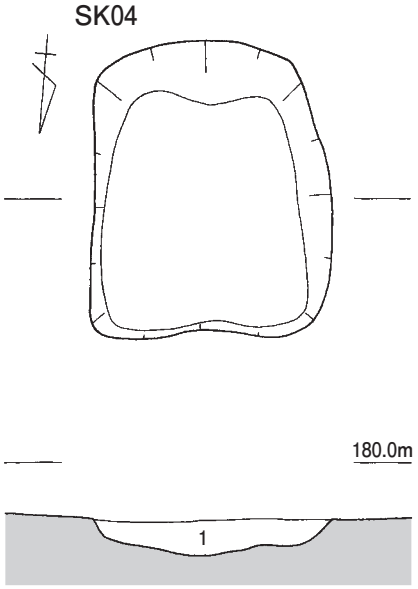
1．2.5YR 5／8　明赤褐　シルト質細砂～極細砂
風化礫少量　炭化物含む



1．7.5YR 6／6　橙　シルト質細砂～極細砂(やや土壌化)



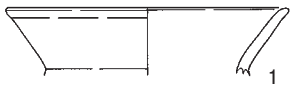
1．7.5YR 3／4　暗褐　シルト質細砂～極細砂
2．7.5YR 3／3　暗褐　シルト質極細砂　炭・灰を多く含む
3．10YR 4／4　褐　シルト質極細砂　炭多く・灰少量含む
4．5 YR 4／4　にぶい赤褐　シルト質極細砂
5．5 YR 4／8　赤褐　シルト質極細砂　地山の二次堆積

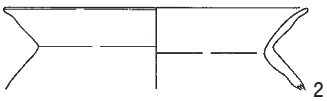


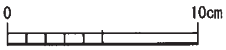
1．5 YR 4／6　赤褐　シルト質細砂(地山ブロック含む)

第66図　内高山西古墳群 その他土坑実測図

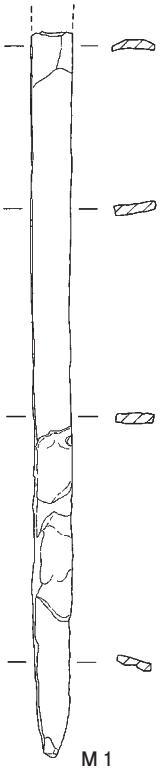
9号墳　出土土器



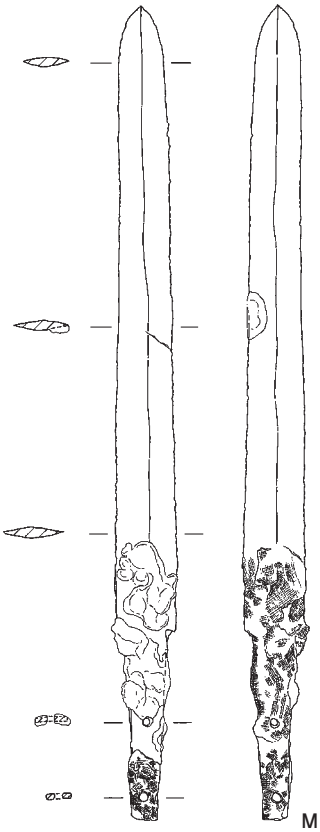




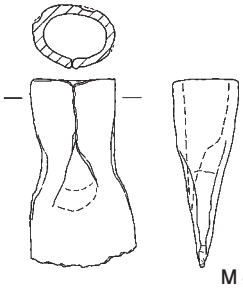
2号墳　出土鉄器

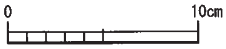


5号墳　出土鉄器



7号墳　出土鉄器





第67図　内高山西古墳群 出土遺物実測図

３．小結

内高山西古墳群は、尾根上および斜面に築造された10基の古墳から構成される。主体部は１墳丘１基ないし２基で、すべて組合式の箱式木棺であり、石室や石棺を主体部とするものはない。

出土遺物としては、土器、金属器（鉇、剣、鏃、斧）があるものの、その点数は少なく、全く遺物を検出していない古墳が半数以上ある。土器は、土師器片が９号墳から出土したのみで須恵器は全く出土していない。

本古墳群を特徴づけるものは上記の２点である。中でも遺物量の少なさは、隣接する尾根上の内高山東１号墳と対比すると顕著である。出土金属器は鉇を除いて棺内副葬品であり、高位の尾根上付近に所在する５・７号墳からである。

出土遺物の少なさから、本古墳群の所属時期を決めることは困難である。被葬者の頭位は、棺内で石枕あるいは被葬者の頭を押さえる礫に着目すると、これらを有するものは、１号墳、４号墳、５号墳第１主体部、７号墳第１・２主体部であり、尾根上、斜面の区別なくほぼ半数の古墳にみられる。和田山町付近の石枕の例をみると、本古墳群と大倉部山をはさんだ安井谷に所在する向山・市条寺古墳群では中期から後期初め、山東町域の若水古墳群では中期後半とされ、こららには須恵器の埋納がみられる。本古墳群の場合、出土土器がなく断定しがたいが、概ね中期の須恵器導入前と考えるのが妥当であろう。

９号墳は尾根を切断する直線的な区画溝を有し、方形の墳丘を意識する。それに続く８・７号墳は墓壙の深さが浅いことから、本来墳丘を持っていたとしても、かなり流失していることが考えられる。ただし明確な区画溝は有していない。

７号墳の主体部はいずれも礫床を有するが、石枕の位置が南北逆であり、主軸方向も若干異なることから、時期差をもつ可能性が考える。５号墳は流失により本来の形状は不明であるが、少なくとも山側に区画溝はもたず、７・８号墳と同様の古墳であったのだろう。特に５号墳と７号墳は金属器を棺内に副葬すること、被葬者の頭位が北であり主軸方向も近似することから、近い時期と考えられる。

尾根上に所在する古墳の中でも墳丘をもち、より高位に位置する９号墳と、５・７・８号墳との間には、同じ尾根上にあっても、時期あるいは格差が存在すると思われる。

１～４号墳は斜面に立地し、連続して造られているものの、テラス状の緩斜面を古墳に利用しているだけで明確な墳丘や区画溝を持たず、山側にわずかに棺を埋葬するための平坦面を造成する程度である。したがって外見で古墳と判断することは難しく、この地域で一般的ないわゆる階段状の古墳とはイメージを異にする。これらの古墳から出土した遺物は２号墳の鉇のみであるが、墓壙外からであり、本墳に伴うのかは一考を要する。

１号墳は眺望に劣る立地ではあるが、調査した古墳の中で唯一棺内に赤色顔料が用いられていた。出土遺物がないため時期は決めかねるが、斜面の２～４号墳とはやや距離が離れ、比較的平坦な尾根上に立地することから、尾根上や斜面の古墳とは性格を異にするかもしれない。

第11表　内高山西古墳群出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	色調		胎土	法量（cm）			備考
						内面	外面		口径	器高	底径	
1	土師器	甕	9号墳	ヨコナデ	外傾して開く口縁、端部丸い	7.5YR 6／6 橙	10YR 6／6 明黄褐	粗砂含む	(14.8)	(3.6)		外面に黒斑
2	土師器	甕	区画溝	体部内面ヘラケズリ	内湾する体部から、外傾して開く口縁、端部丸い	10YR 7／4 にぶい黄橙	7.5YR 7／6 橙	粗砂・極粗砂多く含む	(16.0)	(4.3)		

第12表　内高山西古墳群出土鉄器計測表

番号	種別・器種	遺構	法量（cm）				備考
			長さ	幅	厚さ	重量（g）	
M 1	鉇	2号墳	(19.20)	0.65	0.35	14.70	
M 2	剣	5号墳	43.20	3.50	0.65	161.00	
M 3	鏃	7号墳	(6.75)	1.00	0.40	4.20	
M 4	斧	7号墳	10.00	5.60	3.35	217.60	

Ⅶ　おわりに

内高山西古墳群は平成17年度に、上エ山古墳群・上エ山遺跡・内高山東古墳群は平成18年度に発掘調査を実施した。ともに多忙を極めた調査で前後に別の遺跡と重複するスケジュールとなった。特に内高山西古墳群は伐採作業の遅れによって着手が大幅に遅れた。当初から８基の古墳を２ヶ月で調査するという計画であった。さらにその年の豪雪によって困難を極めた。詰まった調査日程は土曜日・祝日の稼動と受託業者ならびに作業員の方々の努力によって克服したが、積雪はどうしようもなく、調査中断を余儀なくされた。調査地に行く市道が通行不能となりアクセスできなくなったことと、古墳が完全に埋まったことによる。そのため、年明けに改めて調査を終了させた。翌年の調査も前年度に比べると、多少恵まれたかもしれないが、前後に他現場との重複があり容易ではなかった。調査地が集落から離れた山塊であったことから、現地説明会を行うことは出来なかった。その代わりに朝来市教育委員会の協力を得て朝来市埋蔵文化財センター（古代あさご館）で報告会を行った。十分に公表できなかったのは惜しまれ、本報告の活用を望むものである。

４つの遺跡は時期の異なる遺跡である。古墳時代前期（弥生末の可能性もあり）から飛鳥時代までの古墳と平安時代の集落跡である。内高山西古墳群で縄文時代になる可能性のある陥し穴を２基検出している。時代順に記すと、陥し穴が古い遺構である。尾根筋であることからも首肯され、尾根頂部から下りてきた部分に当るので十分に可能性はある。が、他遺跡ではもう少し平坦な部分に築かれることが多いのではと思われる。

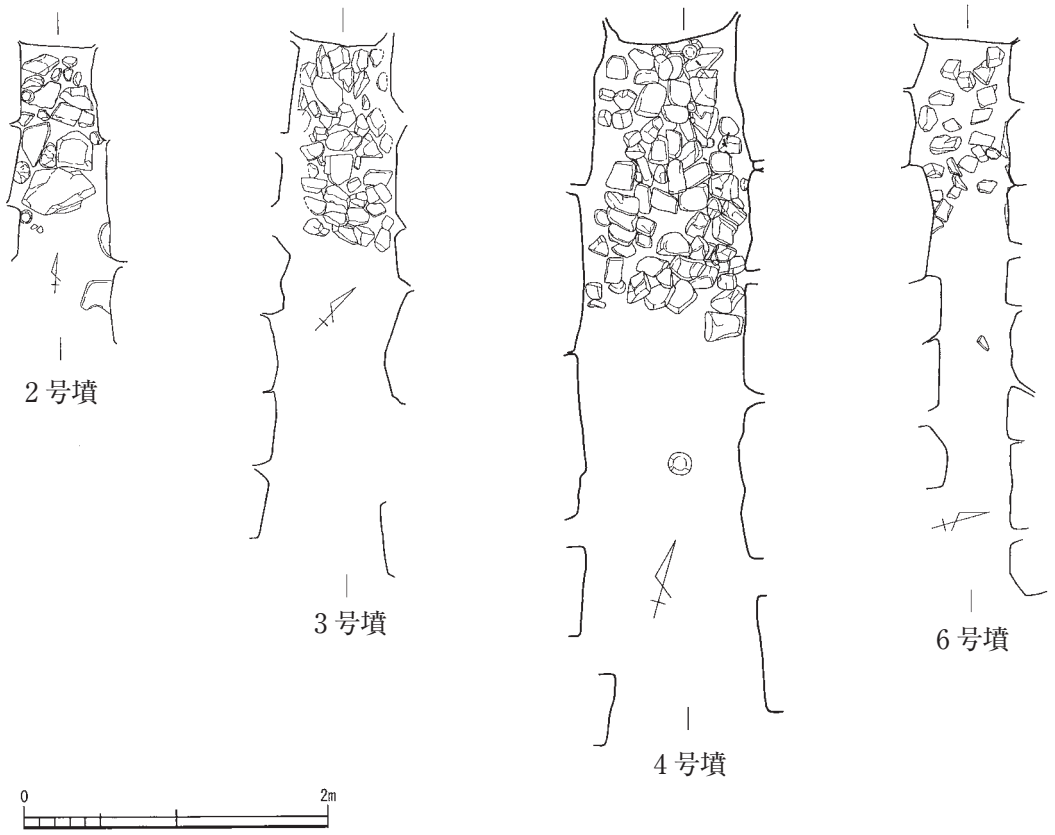
次に古墳時代前期は上エ山古墳群A支群と内高山西古墳群ならびに内高山東２号墳である。11基の古墳を調査した。但馬周辺で多く見られる裾に手を加え平坦面を築く階段状の古墳群である。副葬品がほとんどないので時期決定も難しいのは今回調査古墳も同様である。上エ山古墳群A支群は２基調査し、箱式石棺を埋葬主体としている。１号墳には２基の石棺が掘り方を共有して築かれている。未調査の古墳にも箱式石棺が露出しており、箱式石棺が主体の古墳群と思われ、複数埋葬であることも古い要素である。上エ山古墳群A支群では全く出土品はない。内高山西古墳群では８基のうち副葬品を持っているのは３基である。２号墳は鉇が、５号墳は鉄剣が、７号墳は鉄鏃と鉄斧が棺内から出土し、９号墳は墳裾から土師器甕が出土している。（２号墳は墓壙外から出土しているので副葬品とは断定出来ない）７号墳は内高山西古墳群の中で最も大きな墳丘で、内高山西古墳群の首長墓であろう。古墳の立地、墳丘規模・副葬品などから７号墳の優勢は傍証される。７号墳をはじめ３・５号墳が複数埋葬である。５号墳は３主体あり、すべて切り合い関係がない。５号墳の２基と３・７号墳の２主体は平行して築かれ、複数埋葬を意図していたようである。７号墳は平行しているが埋葬方向は逆であることは興味深い。副葬品が規模の小さな主体部２から出土していることも特徴的である。調査された主体部はすべて木棺直葬であり、上エ山古墳群とは異なっている。木棺の規模は最も大きなのは７号墳主体部１の4.3mで、最も小さいのが１号墳の1.9mである。木棺を検出していないが、５号墳主体部２の墓壙は１号墳より小さい。底面の礫敷きは７号墳の２基と２号墳に見られる。石枕を配するのは１号墳・４号墳・５号墳主体部１・７号墳主体部１・２の５基であり、木口穴を有するのは２号墳･４号墳・７号墳主体部１・２の４基である。４号墳・７号墳主体部１・２の３基が両者の条件を保有しており、木口穴を穿った木棺で底に石を敷き石枕を有する丁寧な埋葬施設である。副葬品の保有とリンクしないのは不思議であり、内高山西古墳群の特徴と言える。１号墳の主体部は赤色顔料を頭位周辺に配した板石に塗布している。

ベンガラで被葬者の地位などを示すものであろうか。頭の位置は７号墳の２基の主体部が逆向いているように２者ある。概ね北方向に配置している１号墳・２号墳・５号墳・７号墳主体部２と、南方向の４号墳・７号墳主体部１・８号墳に分かれる。２グループに分けてみると１つの特徴が表れた。それは遺物を保有していることで、北枕の方が優勢と指摘できる。主体部の大きさと副葬品の保有に関係がないのは但馬の他古墳群でも確認されていることである。

内高山西９号墳と内高山東２号墳は頂部に近い尾根筋に築かれている。ともに墳裾から土師器が出土している。布留期の範疇に入る土師器で、内高山西９号墳の方が古いもので４世紀中ごろから後半で、内高山東２号墳は４世紀末から５世紀はじめの肩の張る布留甕である。時期的に上エ山古墳群A支群・内高山西古墳群９号墳以外の古墳と余り差はないものと思われるが、この２基の方が僅かながらでも新しくなり、また多少性格が異なるのではないかと思う。

次に構築されたのが内高山東１号墳である。支尾根頂部に位置する５世紀後半の古墳である。小古墳の割に多量の鉄器を保有していることが特筆される。同一墓壙に２主体を配しているもので頭位は同じと思われる。副葬品は豊富であるが、内容が異なっている。第１主体は須恵器・土師器の土器を、第２主体は玉類を保有している。ともに鉄器を多く持ち、鉄鏃・刀・刀子・斧は両方にあるが、剣は第２主体だけにあり、第１主体は石突がある。微妙に差異があるのは注目され、最後に構築された第３主体は無遺物なのが特徴である。

古墳時代後期になって上エ山古墳群で横穴式石室を主体部とする円墳が築かれはじめるが、今回調査していないB支群からと考えている。今回調査した４基の古墳は終末期の古墳である。４基とも上エ山古墳群の他墳と同様に埋葬施設は横穴式石室である円墳である。ただ、６号墳に代表されるように石室



第68図　上エ山古墳群 C支群横穴式石室平面図

開口部は辺になっており、方墳を意識しているような感じもあるが、後方は余り手を加えていない。横穴式石室はすべて無袖であるが、奥壁寄りだけ敷石を施すことで墓室を分けている。４号墳だけ奥壁と右側壁を利用した石棺を設けているが１次埋葬ではなく追葬である。床面から釘も出土していることから、４基とも木棺が置かれていたと思われる。石室は非常に狭小である。２号墳が最も小さく、幅0.5m、長さ2.7m、高さ0.7mを測る。最も大きな４号墳で長さ4.8m、幅0.9m、高さ1.25mである。石室は無袖であるが敷石が切れたところで石室幅が広がっており、玄室との意識はあるようである。すべて右側を広げている。そして、開口部に向かって広がっている。石室の構築は粗雑でほとんど裏込めを入れていない。縦積みが基本で最小限の労力で築いている。構築だけでは６号墳が一番丁寧である。開口方向は並んで構築された２～４号墳は向きが異なるが、同一集団であることは間違いなく墓道による差と思われる。飛鳥期の須恵器が入っており、７世紀末まで下る造墓で最後は奈良時代にまでなるようである。朝来市内でも五反田１号墳は同時期の古墳で飛鳥Ⅴの杯セットが出土している。但馬ではこの時期の古墳も多数存在するようである。

上エ山遺跡は平安時代の短期間に今回調査した平坦面だけで生活している。特殊な性格を持つ遺跡と思われるが、資料が乏しく性格付けは出来ない。

４遺跡の２年度の発掘調査、３年度の整理作業の結果、上記のことが理解された。報告書に追われながら、雪かきに疲れ楽しんだことなど思い出された。周辺にはまだ多数の古墳が存在しており、新たな評価が得られることを願いたい。

写 真 図 版

上エ山古墳群他　周辺空中写真（国土地理院撮影）

写真図版 2　上エ山古墳群

A 支群

全景（南から）

1 号墳全景（南から）

C支群

1 号墳全景

2 ～ 4 号墳全景（南東から）

写真図版 4　上エ山古墳群

C 支群 2 号墳

石室堆積状況

石室床面

石室西壁

C支群 2 号墳

遺物（1）出土状態

遺物（4）出土状態

石室奥壁

写真図版 6　上工山古墳群

C 支群 3 号墳

3 ・ 4 号墳調査前

石室堆積状況

石室床面

C支群 3 号墳

石室東壁

石室西壁

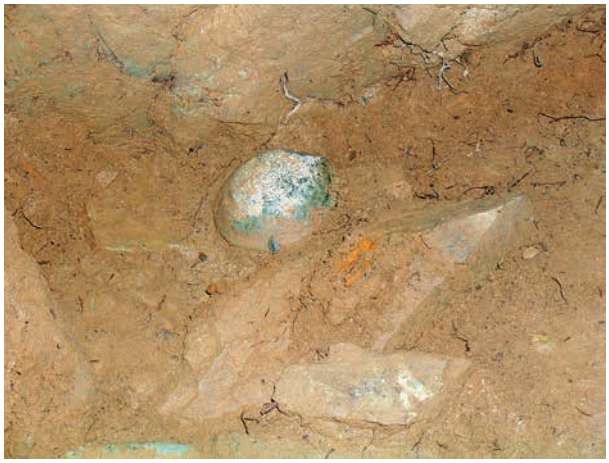
写真図版 8　上エ山古墳群

C支群 4 号墳

横穴式石室（南から）

石室床面遺物（21・10）出土状態

C支群 4 号墳



石室床面遺物（14他）出土状態

石室奥壁

石室西壁

写真図版10　上エ山古墳群

C支群４号墳

石棺蓋除去後
（南東から）

石棺蓋除去後
（東上から）

墳丘断割り

C支群６号墳

全景（南から）

全景（東から）

墳丘土層断面

写真図版12　上エ山古墳群

C支群 6 号墳

石室奥壁

石室南壁

石室南壁

1号墳

第1主体（北から）

写真図版14　内高山西古墳群

1号墳

左；全景（南西から）
右；墳頂部付近土層断面
（南から）

主体部（南東から）

主体部北半礫検出状況
左；南東から
右；北東から

左；主体部断面（南東から）
右；主体部断割断面
（南東から）

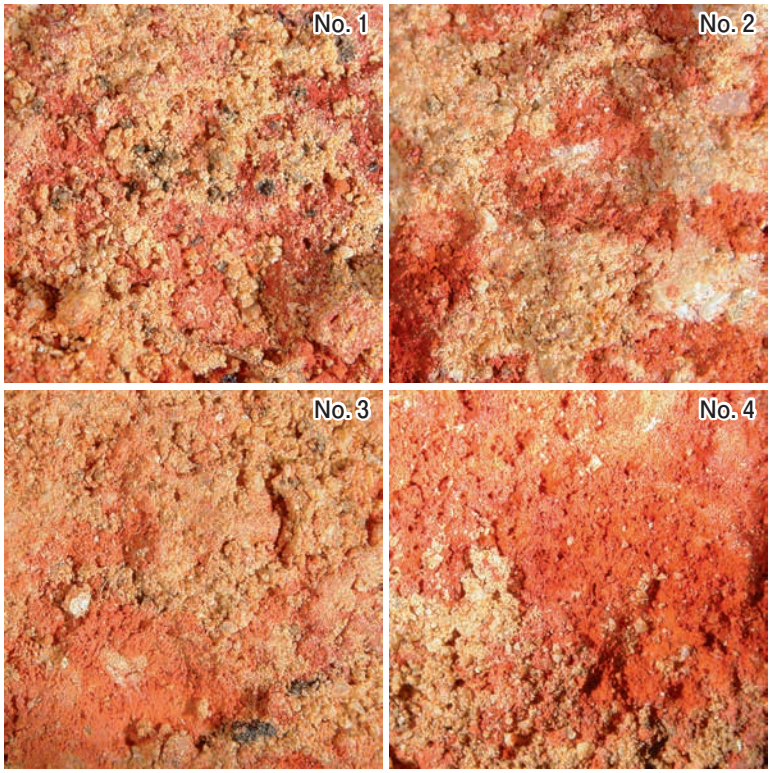
主体部完掘状況（南東から）

7号墳

主体部（南東から）

主体部１（北西から）

写真図版16　内高山西古墳群



1 号墳棺内出土角礫　顕微鏡写真（7 倍）

出土土器

1 号墳棺内出土角礫　○は顕微鏡写真撮影部分

A支群調査区全景（上空から）

C支群調査区全景（上空から）

写真図版18　上エ山古墳群

A支群１号墳

周溝断面

周溝全景

石棺検出状況（北から）

石棺断面

A支群１・２号墳

１号墳石棺
（南から）

２号墳石棺蓋
（北から）

２号墳石棺蓋
（東から）

写真図版20　上エ山古墳群

A 支群 2 号墳

石棺蓋（南から）

調査風景

石棺（西から）

石棺（東から）

A支群2・3号墳

2号墳石棺（北から）

石棺（南から）

石棺南壁

3号墳

写真図版22　上エ山古墳群

C支群２号墳

調査前（西から）

２・３号墳調査前（北東から）

石室奥壁
（南から）

C支群 3 号墳

石室床面
遺物出土状態

石室床面
遺物出土状態

石室床面遺物出土状態

C支群 3 号墳

石室開口部遺物（9）出土状態

調査風景

石室奥壁

石室奥壁

C支群3号墳

墳丘断割り

石室全景

3・4号墳間堆積状況

4号墳西側堆積状況

写真図版26　上エ山古墳群

C支群 4 号墳

全景（南から）

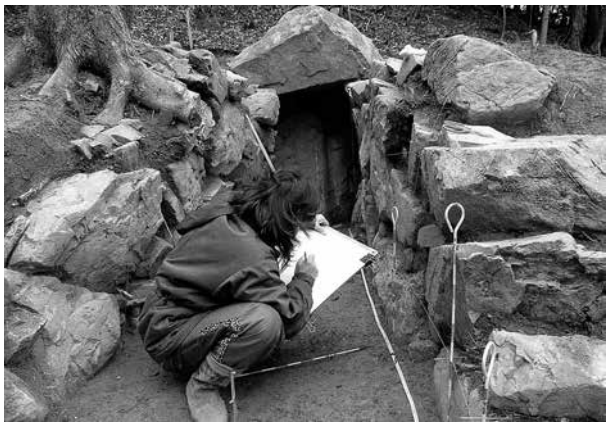
閉塞石の状況

閉塞石間遺物出土状態

墳据遺物（15）出土状態

C支群４号墳

石室東壁

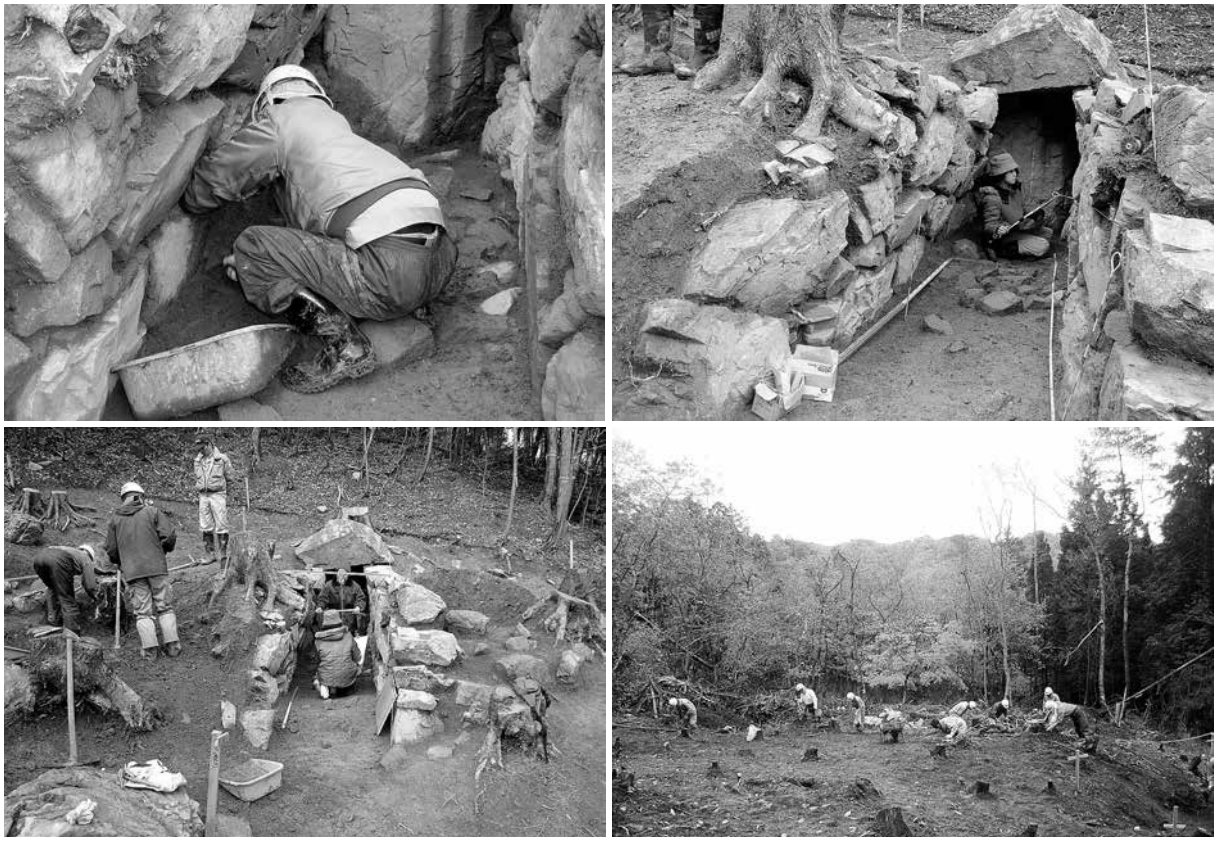


調査風景

開口部遺物（16）出土状態

石棺（南から）

写真図版28　上エ山古墳群



調査風景

礫群

5 号墳

尾根上の古墳（D支群）

C支群6号墳

閉塞状況

南側列石

東側集石

石室墓壙（北から）

石室墓壙（南から）

調査風景

C支群 2 号墳

1

2

3

5

7

6

出土土器

C支群3号墳

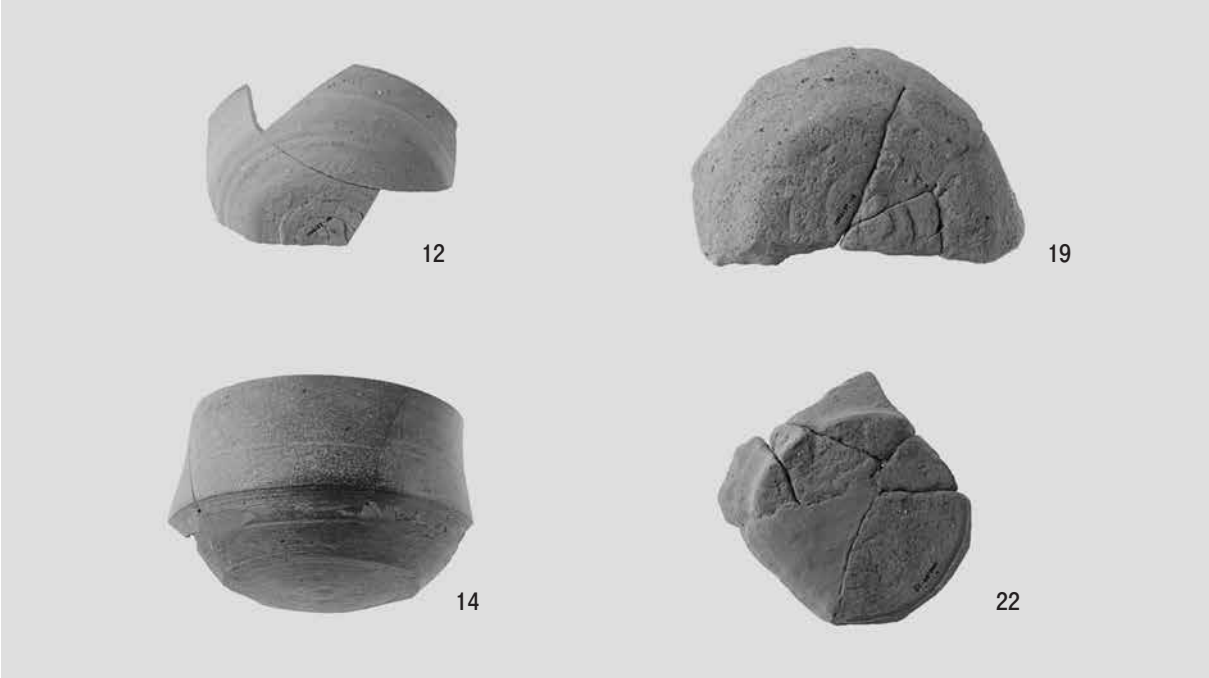
4

8

9

出土土器

C支群 4 号墳



出土土器

C支群 4 号墳

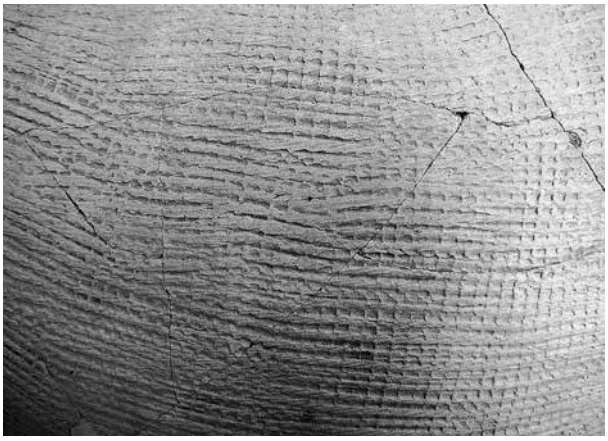
16

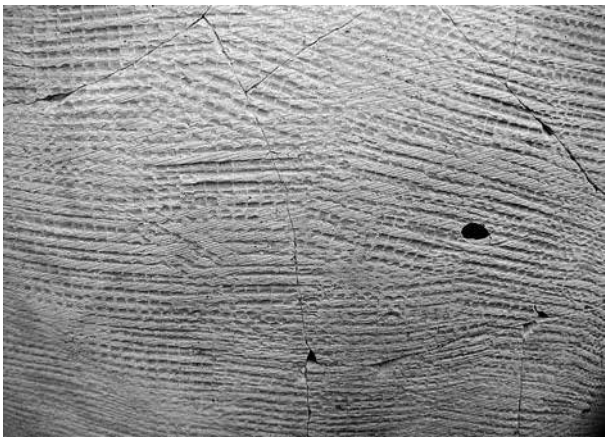
17

23

出土土器

C支群３・４号墳





須恵器大甕（９）内面　　須恵器大甕（９）外面

須恵器大甕（23）内面　　須恵器大甕（23）外面

C支群４・６号墳

20

21

18

26

24

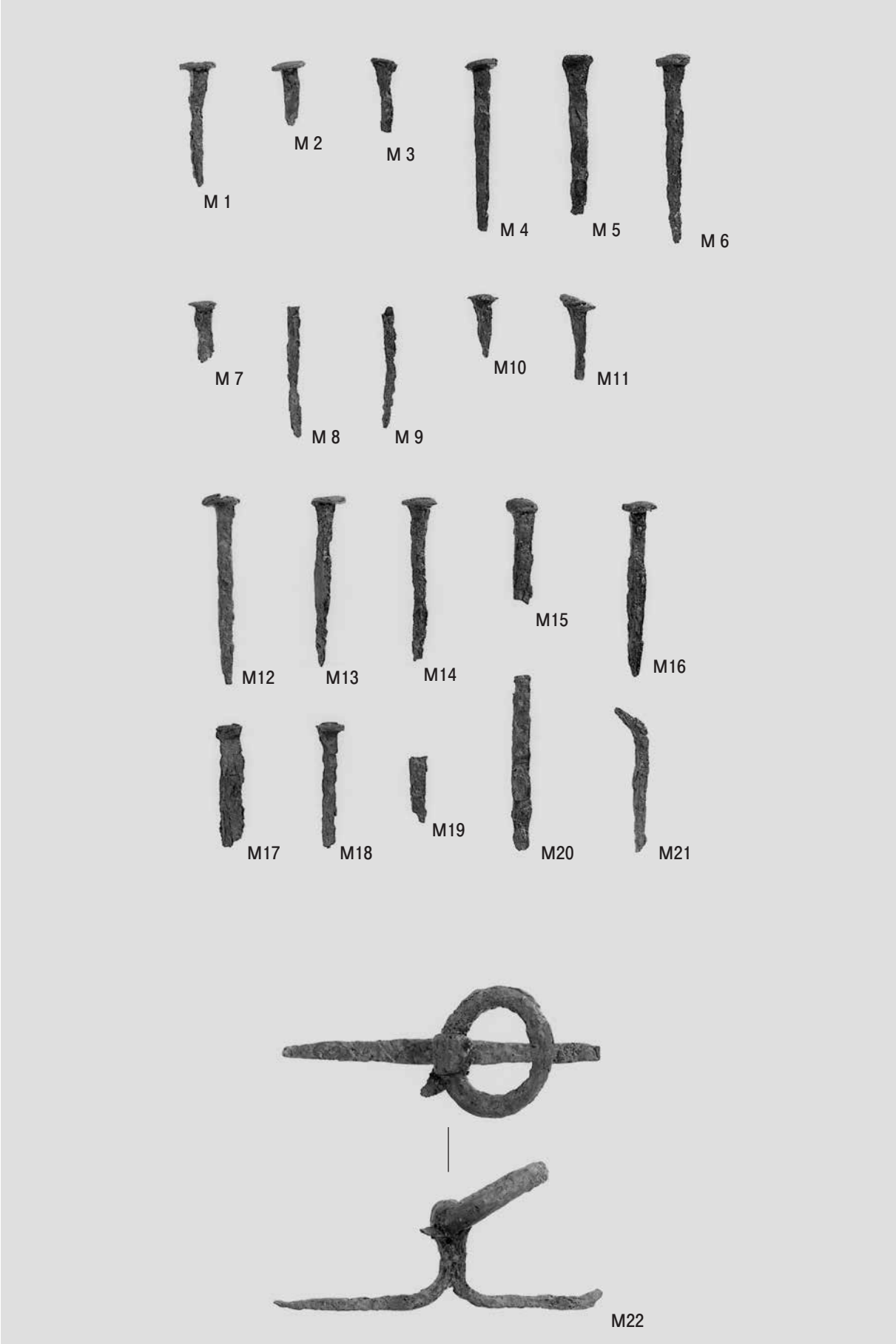
27

25

18・20・21； ４号墳
24～26； ６号墳

出土土器

C支群 4 号墳



出土鉄製品

全景（北上空から）

全景（東上空から）

写真図版38　上エ山遺跡

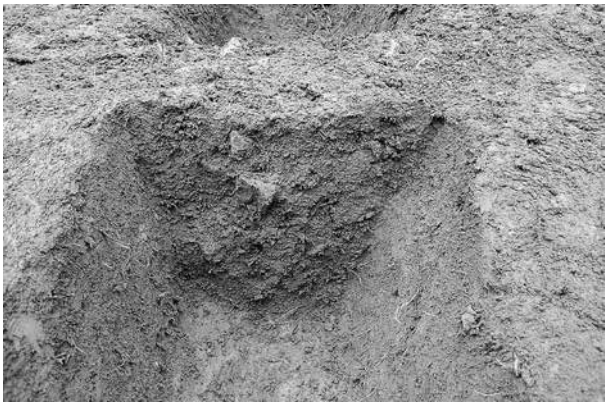
遺跡遠景（東から）

調査前（北から）

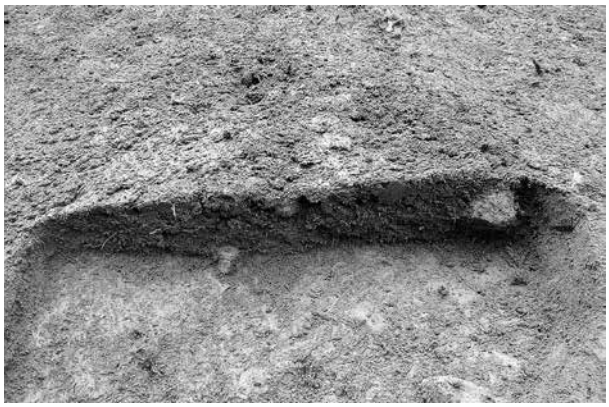
全景（南東から）

掘立柱建物跡・溝（西から）

SD01断面 A-A’（西から）



SD01断面 B-B’（北から）

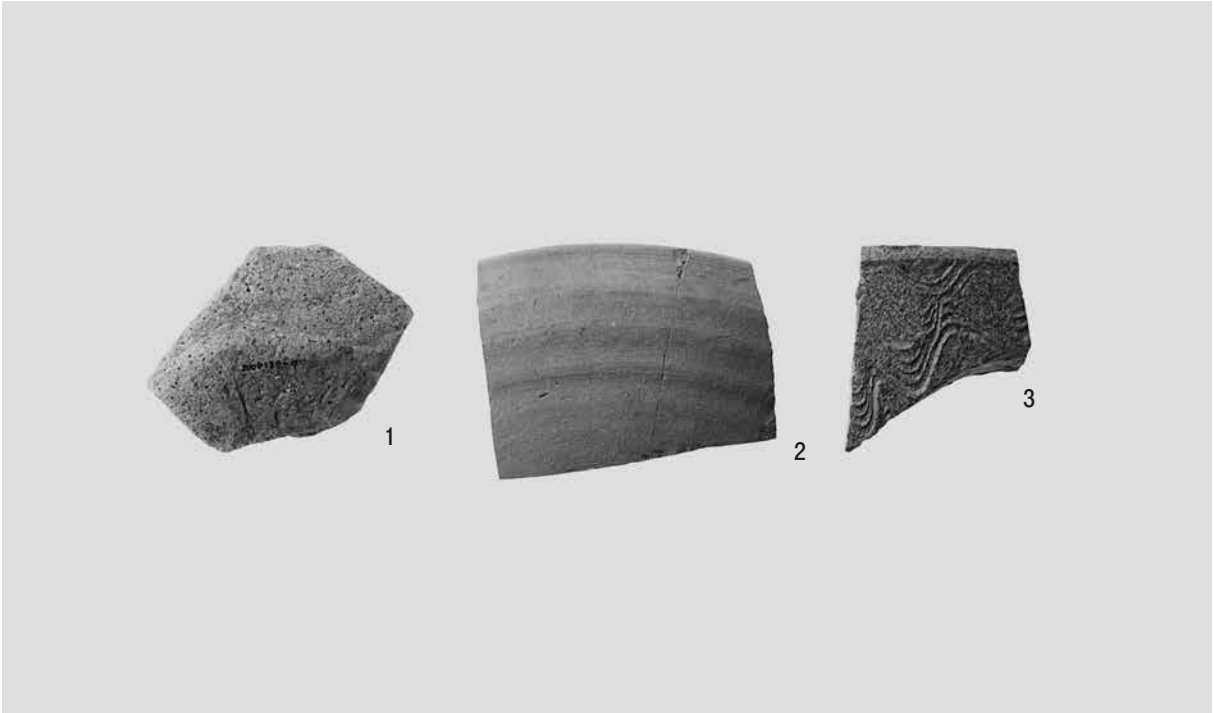


SK03断面（北から）

SK04断面（西から）

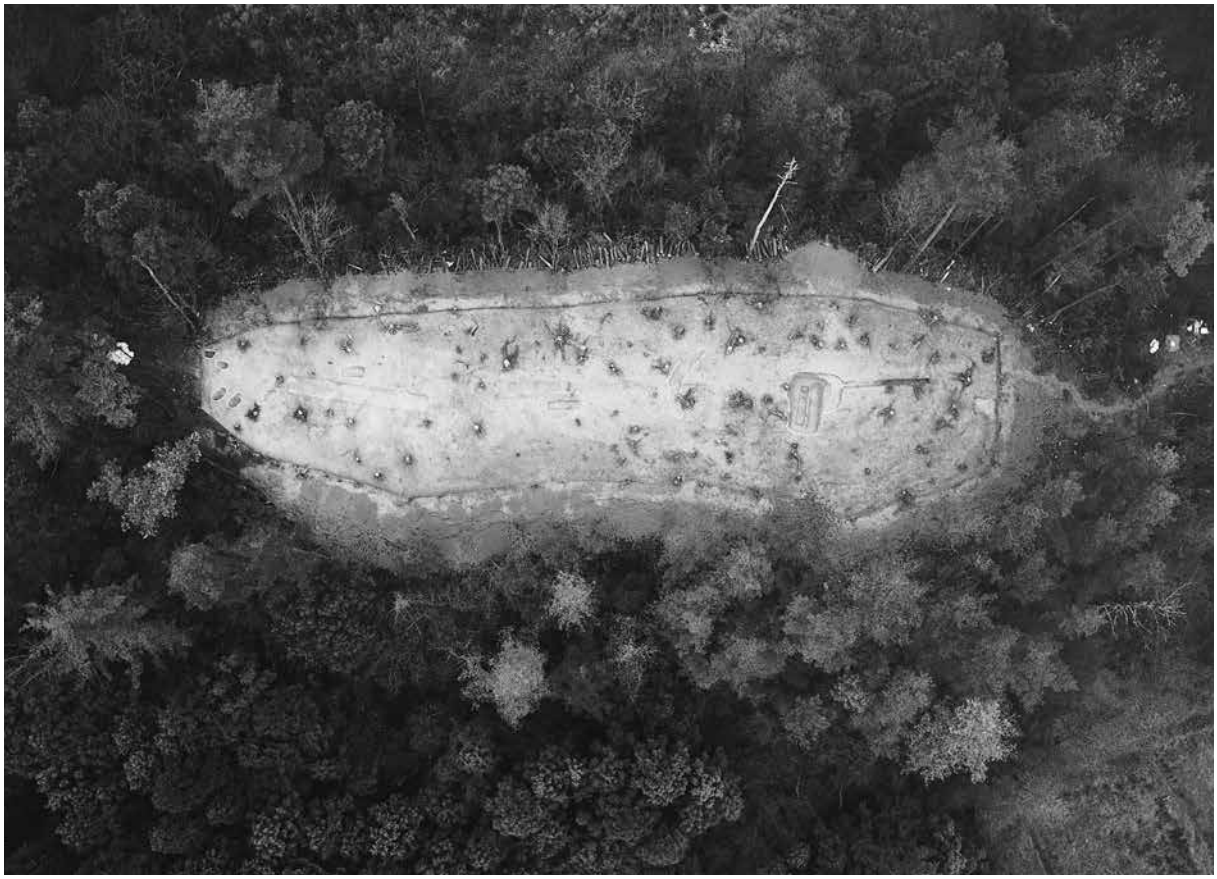
写真図版40　上工山遺跡

調査風景



出土土器

遠景（北東から）



調査区全景（上空から）

写真図版42　内高山東古墳群

調査区全景（西から）

No. 1 ・ 2 間アゼ（東から）

No. 4 アゼ（東から）

調査区西壁

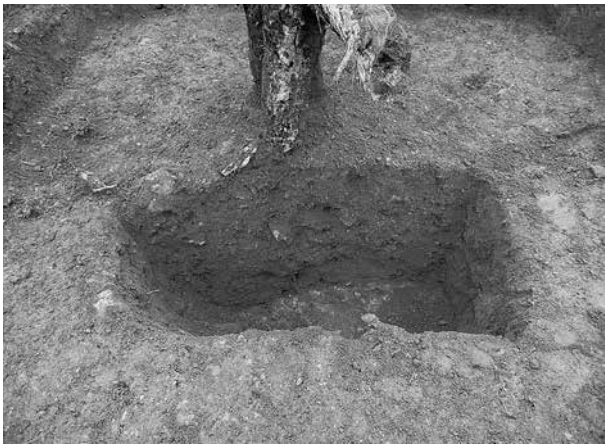
調査風景

1号墳

全景（西から）

全景（東から）

溝断面



第3主体棺断面

写真図版44　内高山東古墳群

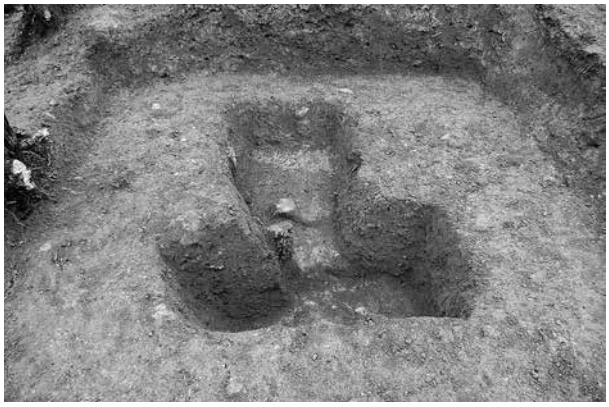
1号墳

第3主体検出状況
（西から）

第3主体（南西から）

第3主体（西から）

1号墳



第3主体（東から）

第3主体（南から）

第3主体（東から）

調査風景

写真図版46　内高山東古墳群

1号墳

第1・2主体　墓壙断面

第1・2主体　棺検出状況

第1・2主体　墓壙（北から）

第1・2主体　断面（北から）

調査風景

1号墳

第1・2主体（北から）

第1・2主体（南から）

写真図版48　内高山東古墳群

1号墳

第２主体（南から）

第２主体（北から）

第２主体西側棺上鉄鏃群（南から）

第２主体西側棺上鉄鏃群（西から）

第２主体棺内西鉄鏃出土状態（北から）

第２主体棺内鉄刀出土状態（北から）

1号墳

第2主体（北から）

第2主体棺内中央遺物出土状態（北から）

写真図版50　内高山東古墳群

1号墳

第１主体（南から）

第１主体断面（北から）

第１主体棺上遺物（北から）

第１主体北側遺物出土状態（東から）

第１主体北側遺物出土状態（北から）

第１主体北側遺物出土状態（南東から）

調査風景

1号墳・2号墳(ST01)

第1主体北側遺物出土状態（南から）

第1主体木口穴断面（東から）

第1主体鉄刀出土状態（西から）

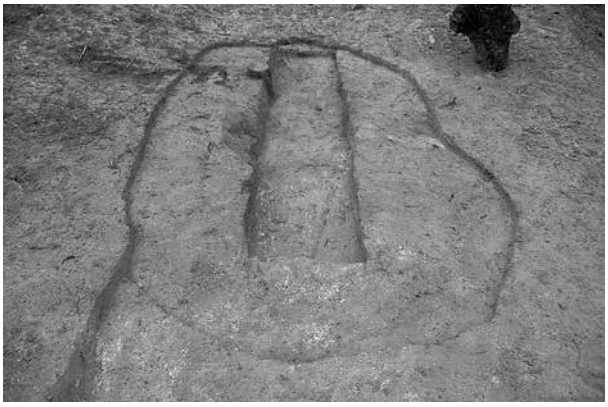
ST01断面（東から）

ST01（東から）

写真図版52　内高山東古墳群

2号墳(ST02)・土坑群

ST02（東から）



ST02（西から）

南側土坑群（南東から）

SK01（東から）

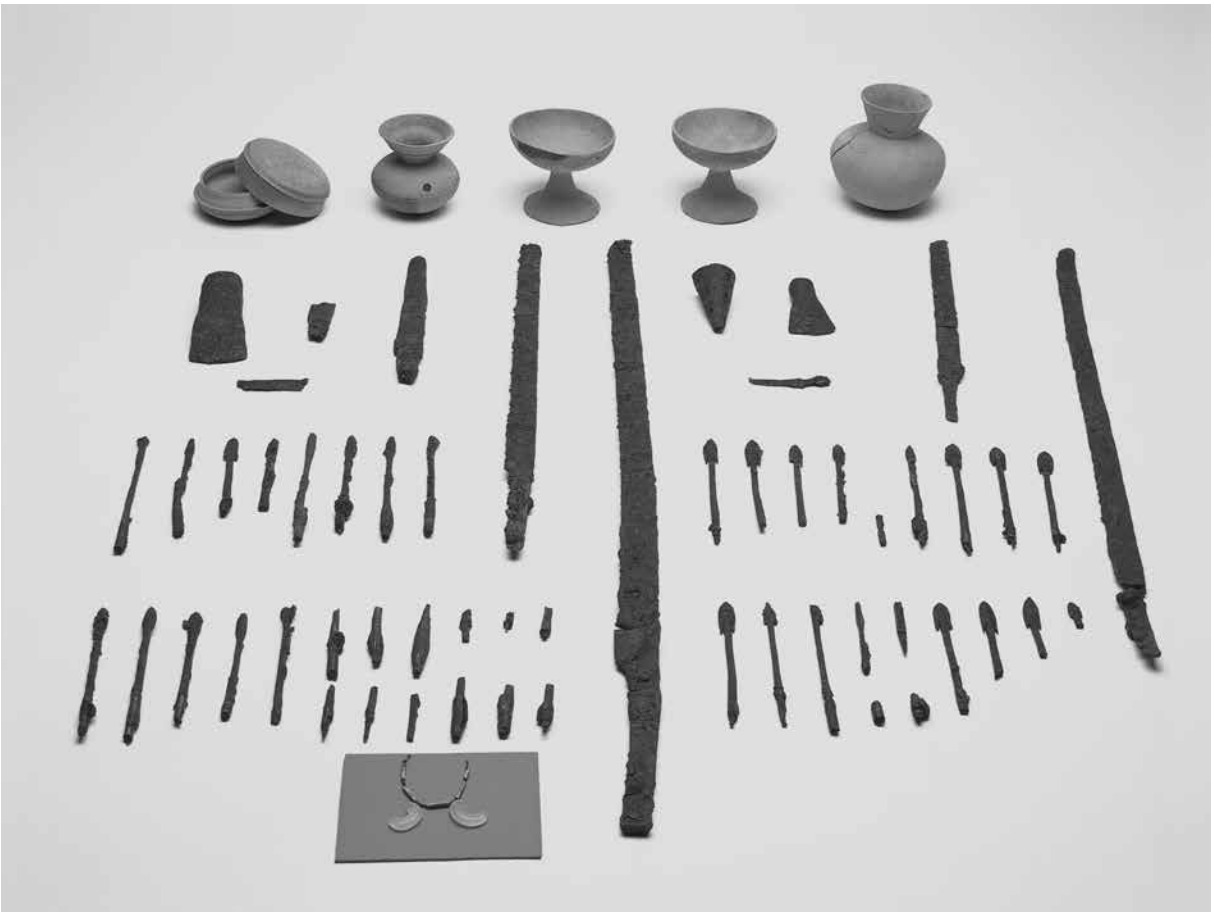
SK02断面（東から）

SK01・02（東から）

SK03・04断面（北東から）

SK03・04（北東から）

1号墳



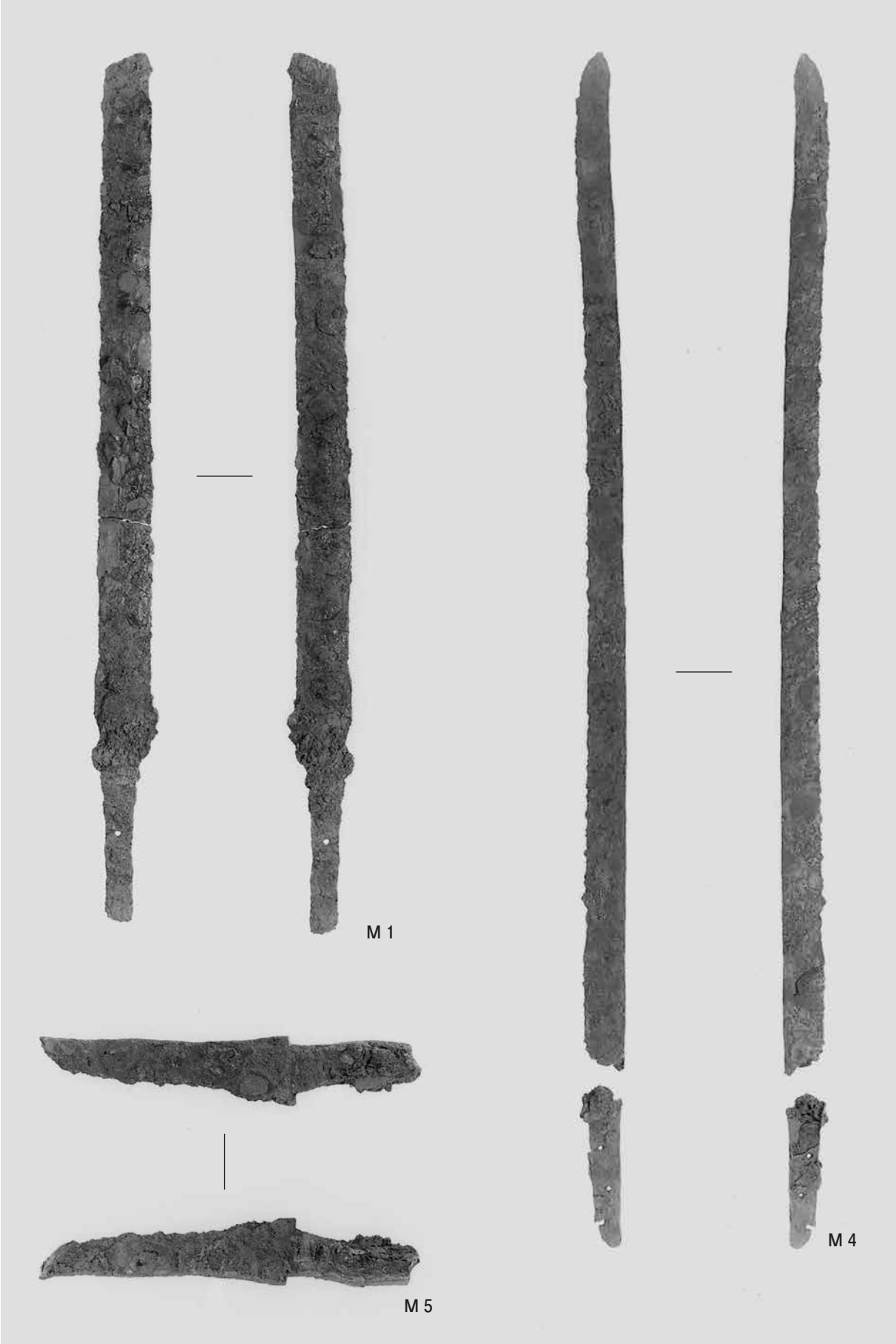
第1・2主体出土遺物集合

第1主体出土土器（1）

1号墳

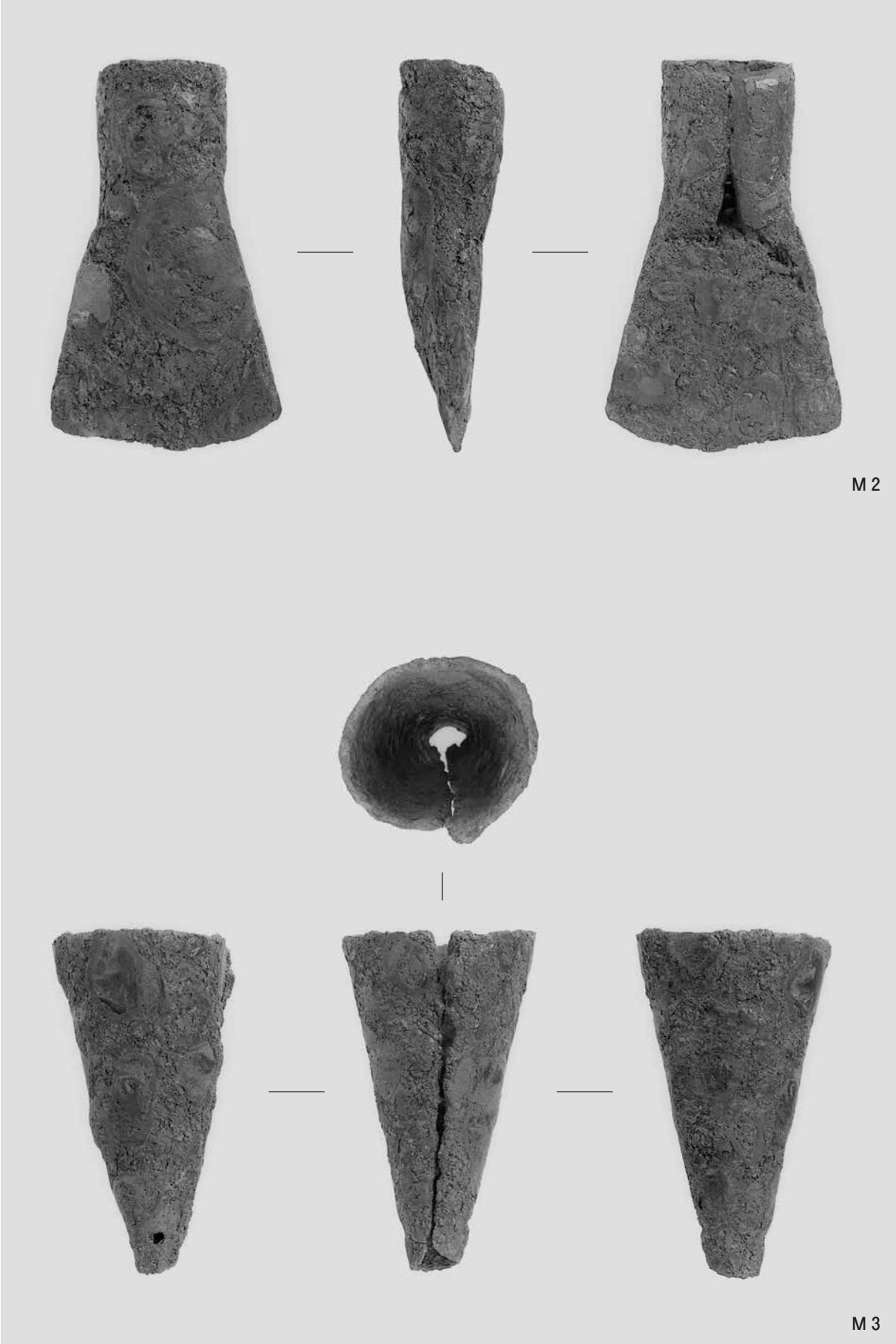
第1主体出土土器（2）

1号墳



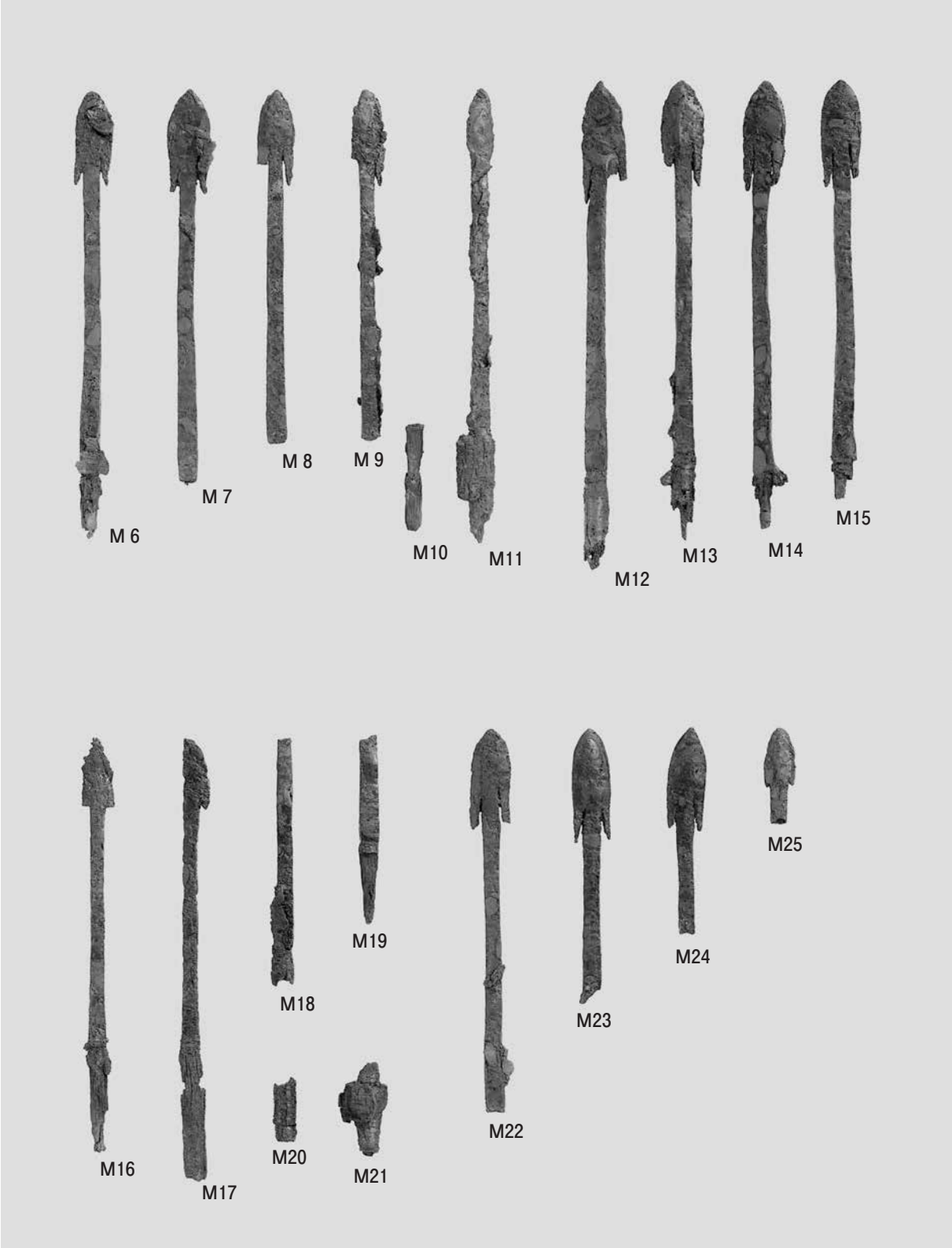
第1主体出土鉄器（1）

1号墳



第1主体出土鉄器（2）

1号墳

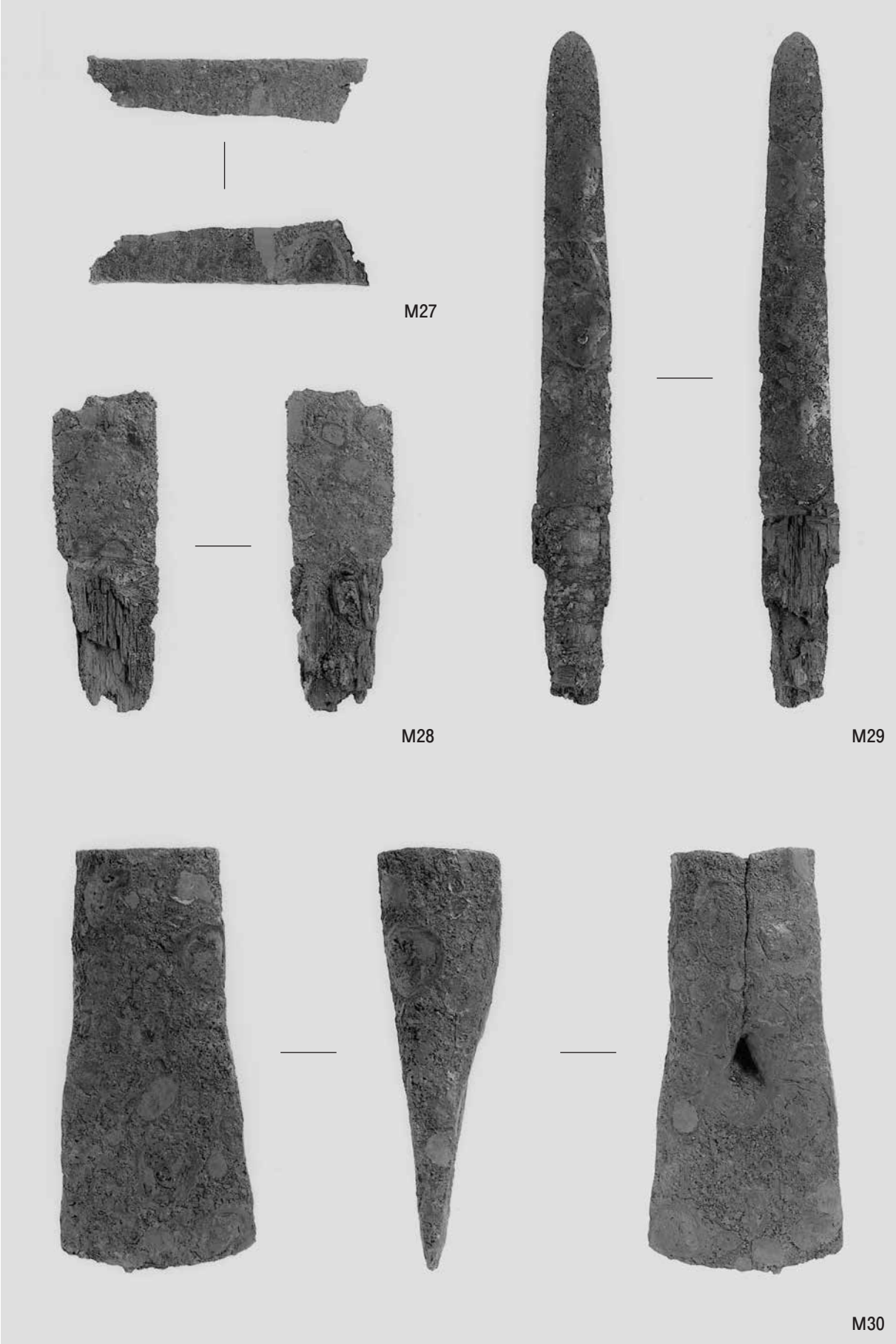


第1主体出土鉄器（3）

1 号墳

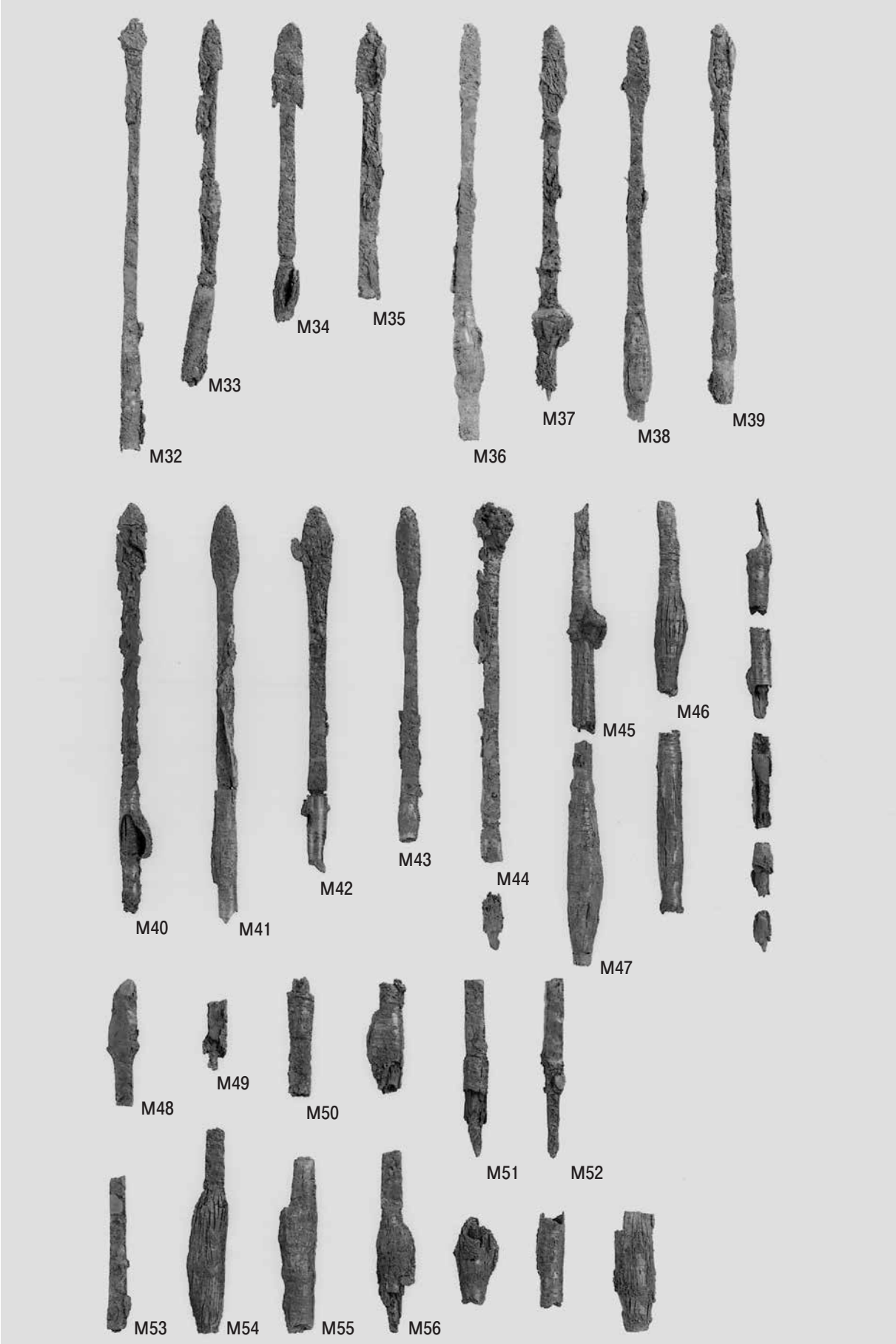
第 2 主体出土鉄器（1）

1号墳



第2主体出土鉄器（2）

1号墳



第2主体出土鉄器（3）

調査前全景（北西上空から）

調査前全景（北上空から）

写真図版62　内高山西古墳群

調査前遠景（北西から）

調査前の状況
1～3号墳（北西から）

調査前の状況　1～3号墳（東から）

調査前の状況　5～9号墳（北東から）

1～5号墳（西から）

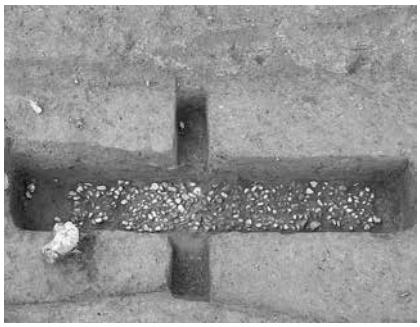
5～8号墳（南から）

7～9号墳（北から）

写真図版64　内高山西古墳群

2 号墳

主体部全景



左；主体部（東から）
右；主体部断面（南から）

主体部（南から）

3号墳

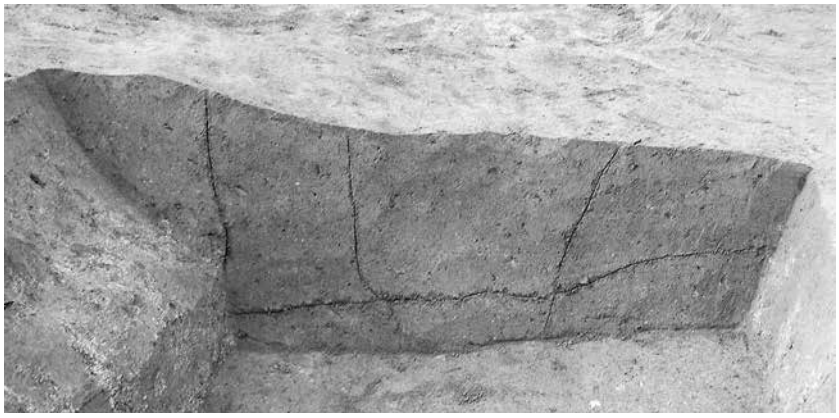
3・4号墳全景（東から）

主体部1・2（西から）

主体部1（南から）

写真図版66　内高山西古墳群

3 号墳



主体部 1 断面（南から）

主体部 2 （南から）

主体部 2 断面（南から）

4号墳

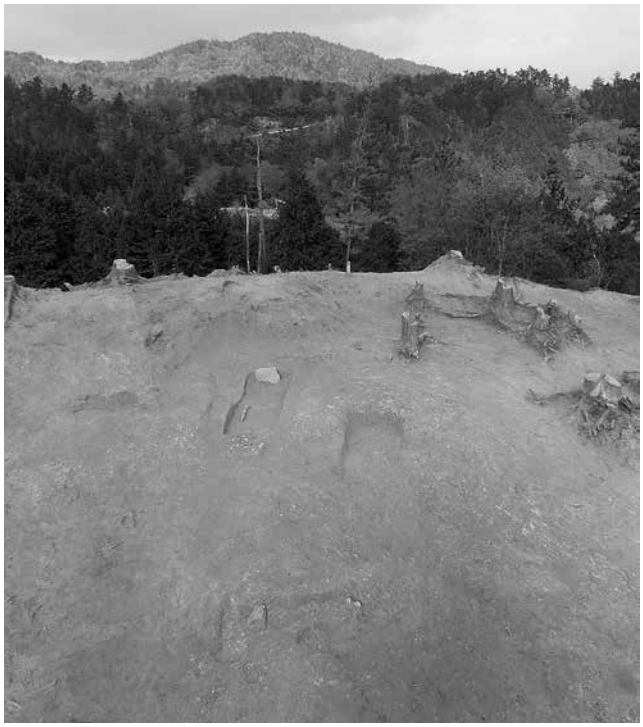
全景（西から）

主体部（北から）

主体部断面（北から）

写真図版68　内高山西古墳群

5 号墳



全景（南東から）

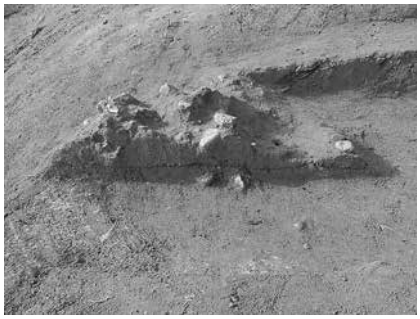
主体部 1 （南東から）

主体部 1 鉄器出土状況（南東から）

5 号墳

左；主体部 1 枕石?検出状況
（南東から）
右；主体部 1 鉄器出土状況
（西から）

主体部 1 断面（南東から）



左；主体部 1 断割断面
（南東から）
右；主体部 1 礫部分断割断面
（東から）

主体部 1 ・ 2 完掘状況
（南東から）

写真図版70　内高山西古墳群

5 号墳

主体部 2 （南西から）

主体部 3 （南東から）

左；主体部 2 断面（南東から）
右；主体部 3 断面（西から）

調査風景

7号墳

全景（南西から）

遠景（南から）

左；5～7号墳
区画溝断面
右；墳丘裾部断面

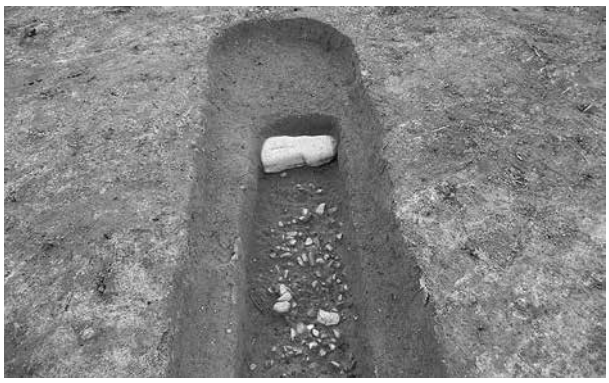
墳頂部付近土層断面
（南から）

写真図版72　内高山西古墳群

7 号墳

主体部 1 断面（東）

主体部 1 断面（西）



主体部 1 東半（北西から）

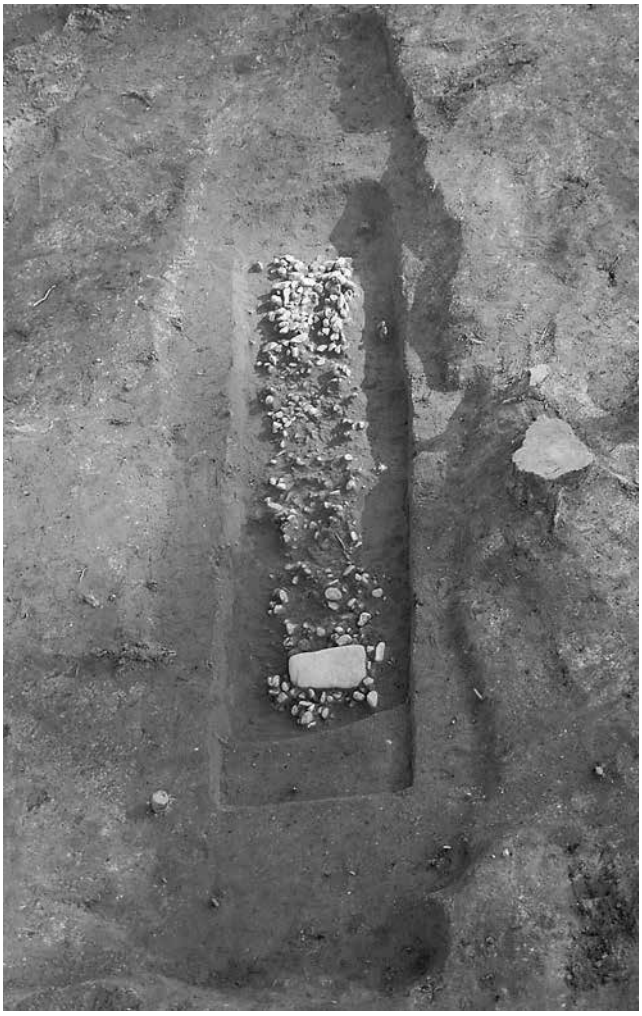
主体部 1 東側木口穴断割

主体部 1 断割断面

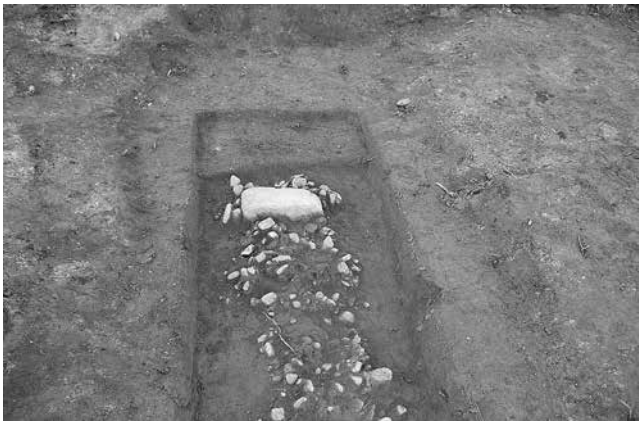
主体部 1 礫床除去後（南東から）

主体部 1 完掘状況（北西から）

7号墳

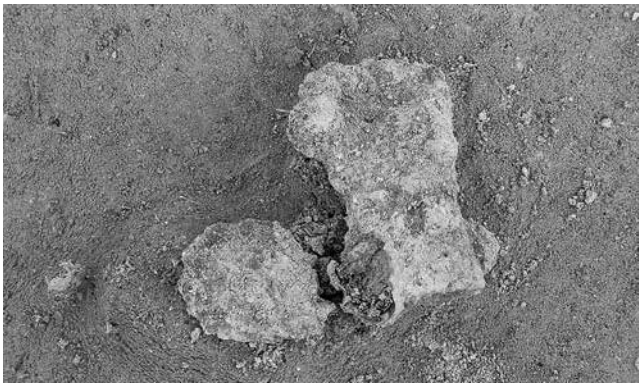


主体部2（北西から）



主体部2西半（南東から）

主体部2西側木口穴断面（西から）



主体部2鉄器出土状況（北から）

写真図版74　内高山西古墳群

7 号墳

主体部 2 断面

主体部 2 断割断面

主体部 2 完掘状況（南から）

調査風景

8 号墳

全景（北から）

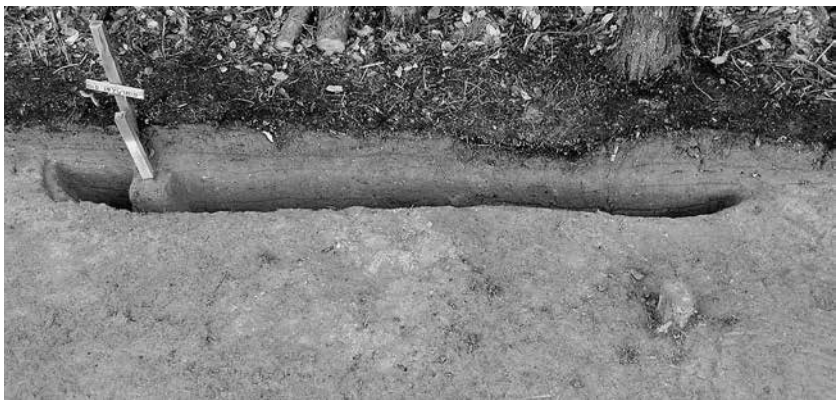
主体部（北西から）

主体部断面（南東から）

写真図版76　内高山西古墳群

9 号墳

全景（北から）

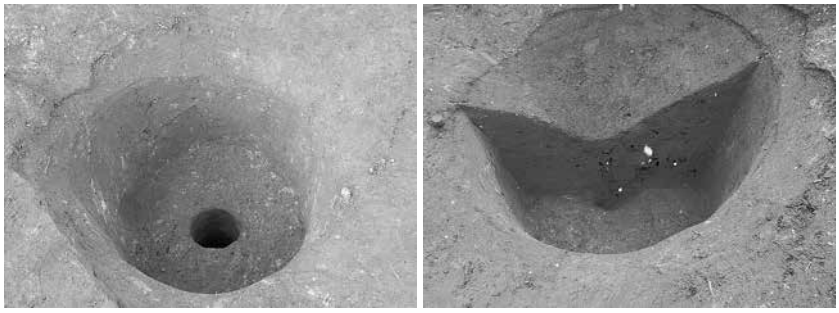


主体部（北から）

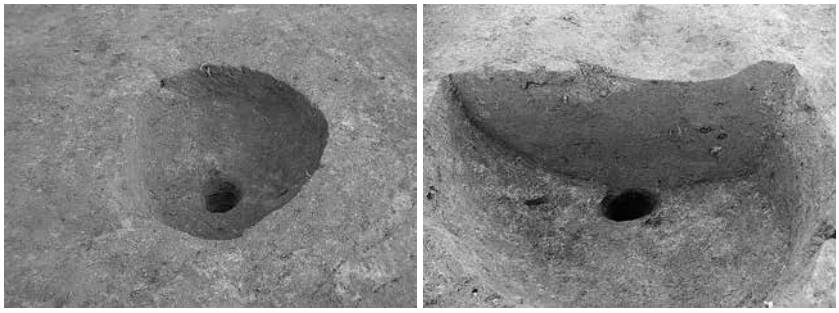
主体部断面（北東から）

区画溝断面（東から）

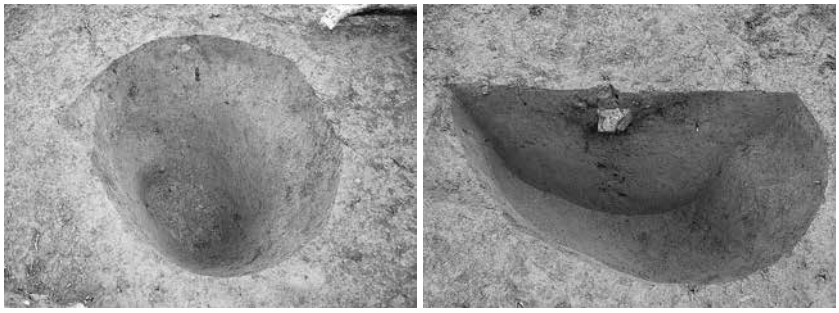
土坑



SK02平・断面（北西から）

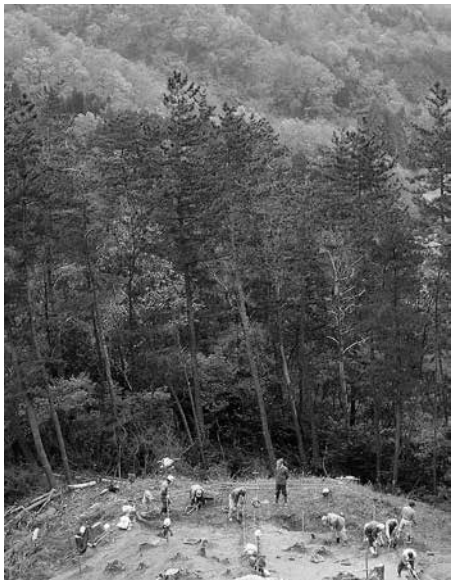


SK03平・断面（東から）

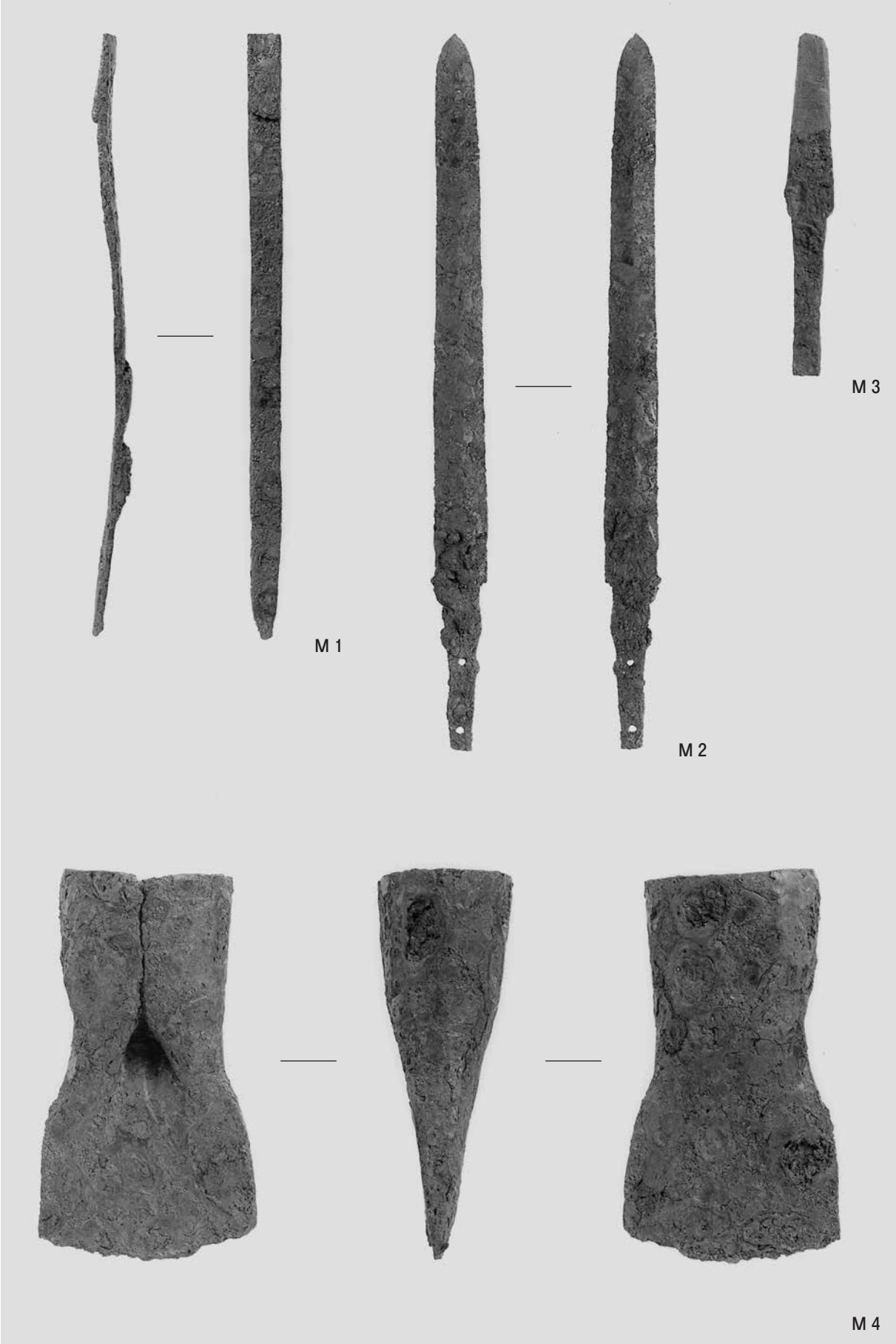


SK04平・断面（南東から）

SK05断面（北から）



調査風景



出土鉄器

報 告 書 抄 録

ふりがな	うえやまこふんぐん　うちたかやまこふんぐん
書　　名	上エ山古墳群・内高山古墳群
副 書 名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第429冊
編著者名	渡辺　昇・長濱誠司
編集機関	兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
所 在 地	〒652-0032　兵庫県加古郡播磨町大中１－１－１　　℡　078(437)5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所 在 地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10－１
発行年月日	2012年３月23日

所収遺跡名	所在地	コード	28225	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		遺跡番号	調査番号					
上エ山古墳群	兵庫県朝来市和田山町枚田	730725他	2006137	34°49′34″	134°32′56″	2006.11.27～1.26	982㎡	一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路
上エ山遺跡		730768	2006138			2006.12.7～12.26	696㎡	
内高山東古墳群		730745他	2006139			2006.11.27～12.26	641㎡	
内高山西古墳群		730748他	2005171			2005.11.9～1.10	2,183㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上エ山古墳群	古墳	古墳時代～飛鳥時代	横穴式石室	須恵器・鉄釘	
上エ山遺跡	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡・柵跡	土師器・須恵器	
内高山東古墳群	古墳	古墳時代		須恵器・土師器・鉄剣・鉄刀・鉄鏃・鉄斧・刀子・勾玉・管玉	
内高山西古墳群	狩猟場	縄文時代	陥し穴		
	古墳	古墳時代	木棺・土坑	土師器・須恵器・北宋銭	

要　約

古墳時代前期の上エ山古墳群A支群は石棺を埋葬施設にし、内高山西古墳群・内高山東２号墳は木棺直葬である。中期後半には内高山東１号墳が築かれ、多量の鉄器を保有している。古墳時代終末期に上エ山古墳群C支群が構築され、横穴式石室を主体部としている。４号墳は木棺以外に石室側壁を利用した石棺も埋葬している。平安時代には上エ山遺跡の平坦面に小規模な集落を営んでいる。

兵庫県文化財調査報告　第429冊

朝来市

上工山古墳群
内高山古墳群

―一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ―

2012年３月23日　発行

編　　集　　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
〒675－0142　加古郡播磨町大中１－１－１

発　　行　　兵庫県教育委員会
〒650－8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　　刷　　福田印刷工業株式会社
〒658－0026　神戸市東灘区魚崎西町４丁目６－３